

身近な地域資源を活かしたまちづくり活動記録

～姪浜での10年の実践活動を中心とした、建築と地域づくりへの思い～



(公財) 福岡アジア都市研究所 会員研究員 (福岡市職員)
唐津街道姪浜まちづくり協議会 初代事務局長
大塚政徳



キックオフイベントである姪浜住吉神社での「まちづくり講演会 & シンポジウム」の様子(平成 19 年9月)



姪浜の歴史的・景観的シンボルであったマイヅル味噌での「みそ蔵コンサート」の様子(平成 20 年3月)

※表紙写真:光福寺の塀の「子ども落書き消し隊」の様子(平成 26 年3月)

表紙写真を含め3つの写真は、いずれも唐津街道姪浜まちづくり協議会での活動写真

はじめに（研究の目的）

筆者は、福岡市西区姪浜で活動している「唐津街道姪浜まちづくり協議会」の初代事務局長の役を担った（平成19年3月～28年5月）。平成19年3月に協議会を立ち上げて以来、『姪浜の宝を福岡市民の宝に！』を目標に、地域固有の歴史・文化資源を活かしたまちづくりを推進してきた。

振り返ってみると、姪浜での活動を始めた頃、ある知人から「私も姪浜の事業に関わったことがあるが、行政や助成金頼みで自ら主体的に動こうとしない地域性がある。大塚さんが頑張るのなら応援はするが、まちづくりの土壌がない地域である。特に地域外の人間がまちづくりに関わることは難しい。」と言われたことがある。筆者は当時、この言葉を軽く聞き流していたが、活動を進める中で、この言葉の持つ意味を幾度も実感することとなった。

それでも、筆者は事務局長として、姪浜ならではのまちづくり推進のための企画立案、関係者との協議・調整、具体的な実践を率先して行う他、会計事務、各種申請事務など時間と労力を要する多くの業務を粘り強く推進してきた。

当初は活動が軌道に乗るまでの3年間程度は頑張ろうと考えていたが、様々な活動を展開する中でいろいろな成果も表れ、それに伴い活動も進化させていった。また、それぞれのステージの地域課題に対応したまちづくりの目標を立て、具体的な事業を展開してきた。姪浜への熱い想いを込めた10年間の活動は、「都市景観大賞（国土交通大臣賞）」や「ふるさとづくり大賞（総務大臣賞）」などとして評価され、姪浜の魅力や協議会の活動を全国に発信することができた。

このように、姪浜という地域は筆者にとって魅力的なフィールドであり、姪浜での10年間の活動はとても充実したものであった。そして、地域内外の多くの方々との出会いが、筆者の活動のエネルギーであり、精力的な活動で得たものも多かった。

筆者は、今後も「姪浜のまちづくりの次のステージ」に向けて、地域の関係団体を巻き込みながら、さらに活動をステップアップさせていく予定であったが、まちづくりへの志や協議会の運営方針などに対する当時の会員との考え方の相違から、10年という節目を機会に断腸の想いで協議会卒業を決意した。10年というのは一つの区切りであり、これまでの活動を振り返るとともに、環境を変えて、さらに自分を磨いていく絶好の機会と考えた。

また、協議会卒業を決意しかけた平成28年4月中旬に、大学時代を過ごした熊本で震度7の大規模地震が2度発生し、大きな被害をもたらした。福岡市役所で建築物の耐震化の仕事も担当している筆者にとっては、人ごとではない。案の定、市民からの問い合わせも大幅に増えた。隣県で発生した地震はさすがに福岡市民に与える影響も大きいと実感した。

ちょうど熊本地震前の3月下旬～4月上旬にかけて2回、熊本や阿蘇に出かけ、熊本城や阿蘇神社、阿蘇大橋、南阿蘇村などを見てきたばかりだった。訪問した先々の場所が大きな被害を受け、様変わりしてしまった。それはまさに『建築物の耐震化は重要な仕事である。大学時代の恩返しをしよう。まちづくりの原点に戻ろう。』と筆者に伝えているようだった。姪浜という狭いフィールド、まちづくり協議会という小さな組織を離れ、もっと大きな視点で世界を見てみようというメッセージだったのだろう。

また、筆者は事務局長という役柄、毎週末や帰宅後の多くの時間を協議会活動の企画立案やイベントに費やすなど、その関わり方は明らかにボランティアの域を超えていた。活動費も右肩上がりであり、平均活動費は助成金を含め年間約 190 万円である。これだけの活動を地域の一団体が継続して行うのは大変であり、筆者の負担は年々増していき、心身ともに疲労はピークに達していた。

このため、当分は充電期間とし、外からの視点でいろいろな地域のまちづくりを見ていくこととした。まず、始めたことは「地域づくりを巡る小さなまち旅」であり、時間を見つけて実践している。市内でもいいし、市外、県外でもいい。いろいろな地域を旅することは、地域づくりを考える上で大いに参考になるし、新たな出会いもある。特に、大学時代の思い出の多い熊本の復興過程を見に定期的に熊本を訪問することとした。

また、この充電期間を利用して、今までの事務局長としての活動を記録としてまとめ、家族やお世話になった方々に筆者の姪浜への想いを伝えていくこととした。この中では、協議会活動の 10 年間だけでなく、大学時代からの建築や地域づくりへの想いも振り返りながら、地域固有の魅力資源を活かしたまちづくりについても考えていきたい。

平成 28 年 6 月（活動記録のスタート）



活動記録を書き始めた平成 28 年 6 月、熊本地震後の熊本城を訪れた。

なお、この活動記録については、第 1 章を書き終えた頃に(公財)福岡アジア都市研究所に会員研究として認めていただいた。引き続き、執筆に励みたい。

平成 28 年 9 月（第 2 章のスタート）

身近な地域資源を活かしたまちづくり活動記録

～姪浜での10年の実践活動を中心とした、建築と地域づくりへの想い～

目次

はじめに（研究の目的）	1
【第1章】 学生時代～福岡市役所時代	
1 学生時代	10
(1) 実家の思い出	
(2) 熊本大学建築学科入学（建築との出会い）	
(3) 最初の設計	
(4) 楽しい設計課題	
(5) 建築への興味、建築巡り	
(6) 木島安史先生	
(7) 卒業論文	
(8) 卒業設計	
2 社会人時代（鴻池組時代）	22
(1) 鴻池組入社	
(2) 設計部配属と御茶ノ水	
(3) 寮生活とコンペ	
(4) 銀座の思い出	
(5) 建築巡り	
(6) 歴史的建造物への興味	
(7) 歴史的町並みへの興味	
(8) 現場配属	
(9) 荒川区町屋での生活と篠田光滋さん	
(10) 最後の現場、鴻池組退社	
(11) 東京から福岡へ	
(12) 最初の海外旅行	
3 福岡市役所時代	39
(1) 福岡市での生活スタート	
(2) 福岡市役所入庁、住宅供給公社配属	
(3) シーサイドももちクリスタージュ	

- (4) 都市景観室配属とシーサイドももち都市景観形成地区の指定
- (5) 御供所都市景観形成地区の指定
- (6) 御供所・瀧田喜代三さん
- (7) 海外派遣研修
- (8) 福岡都市科学研究所配属
- (9) 耐震や空家対策の仕事

【第2章】 唐津街道姪浜まちづくり協議会での活動

4 姪浜への関わり 7 1
(1) 最大のきっかけは福岡県西方沖地震	
(2) 姪浜をどこにでもあるようなまちにしたい	
(3) まちづくり協議会発足	
5 筆者が考える姪浜の魅力 7 5
(1) 長く住んでいると見失いがちな地域の魅力	
(2) 10年前に筆者が直感した姪浜の魅力	
(3) 筆者が考える姪浜の魅力	
6 まちづくり協議会の活動概要 7 9
(1) 活動概要	
(2) 活動内容一覧	
7 1stステージの活動（主に平成19年度～21年度） 8 1
(1) 地域課題、まちづくりの目標	
(2) 1stステージの最初の定例会	
8 平成19年度の活動 8 2
(1) 地域の魅力資源調査、魅力資源集の作成、まち歩きマップの作成	
(2) キックオフイベント	
(3) 春の町並みイベント2008	
9 平成20年度の活動 8 8
(1) トークショー	
(2) 先進都市調査	
(3) まちなみパネル展	
(4) 秋の町並みイベント2008	
(5) 唐津街道サミット	
(6) 「版画で歩く福博のまち～二川秀臣～」展	
(7) 春の町並みイベント2009	

10 平成 21 年度の活動 9 4
(1) 町家再生の実践	
(2) 灯明コンサート IN 興徳寺	
(3) 秋の町並みイベント 2009	
(4) 旧町名表示板の設置	
(5) まちの案内所の開設	
(6) 春の町並みイベント 2010	
(7) 定例会	
11 1st ステージの振り返り 1 0 3
(1) 主な活動メンバー	
(2) 活動資金	
(3) 表彰、認定	
(4) 総括	
12 2nd ステージの活動（主に平成 22 年度～25 年度） 1 0 6
(1) 地域課題、まちづくりの目標	
(2) 2nd ステージの最初の定例会	
13 平成 22 年度の活動 1 0 8
(1) まちの案内所披露式	
(2) 福岡市長との対話集会「聞きたかけん」	
(3) 九州大学アーバンデザインセミナー	
(4) かわら版の創刊	
(5) 先進都市調査	
(6) 唐津街道特産品フェア	
(7) 景観歴史発掘ガイドツアー	
(8) まちづくり計画策定ワークショップ	
(9) 広域回遊マップ作成	
(10) 唐津街道サミット IN 姪浜宿	
(11) 「元気！姪浜計画」の策定	
14 平成 23 年度の活動 1 2 2
(1) 女性部会「はまこみち」発足	
(2) 「姪浜ブランド」の認定	
(3) 灯明コンサート IN 姪浜住吉神社	
(4) 唐津街道物産展	
(5) 景観歴史発掘ガイドツアー	
(6) 景観づくり委員会、景観づくり計画 STEP 1 の策定	

- (7) 九州大学都市・建築ワークショップ
- (8) 「ふくおか地域づくり活動賞奨励賞」受賞

15 平成 24 年度の活動 132

- (1) 協議会設立 5 周年記念イベント「唐津街道姪浜ウィーク」
- (2) 協議会設立 5 周年記念交流会
- (3) 「姪浜町家」の認定
- (4) 灯明コンサート IN 興徳寺
- (5) 唐津街道を知る一週間
- (6) 全国町並みゼミ福岡大会
- (7) 「景観発見&まちづくり」体験体感ツアーIN 姪浜
- (8) 福岡県景観大会での活動 PR
- (9) 春の町家コンサート
- (10) 歴史散策と桜の名所巡り

16 平成 25 年度の活動 140

- (1) まち歩きワークショップ
- (2) 第 2 回姪浜町家認定式
- (3) まち歩きマップ改訂
- (4) 感謝状
- (5) NPO 日本都市計画家協会「日本まちづくり大賞」受賞
- (6) ふくおか共助社会づくり表彰「協働部門賞」受賞
- (7) 唐津街道姪浜ウィーク「とっておきの姪浜！」
- (8) 「あしたのまち・くらしづくり活動賞」受賞
- (9) 様々な受賞に伴う協議会活動の PR
- (10) 地域の皆さま方からの贈り物
- (11) 子どもウォークラリー
- (12) 子ども落書き消し隊
- (13) 三賞受賞記念祝賀会
- (14) まちなみフォーラム IN 唐津街道姪浜
- (15) 姪浜町家等の認定
- (16) 景観づくり計画 STEP 2 策定
- (17) 姪浜景観まちづくり宣言

17 2nd ステージの振り返り 158

- (1) 主な活動メンバー
- (2) 活動資金
- (3) 表彰、認定
- (4) 総括

18 3rdステージの活動（主に平成26年度～27年度）	…………… 161
(1) 地域課題、まちづくりの目標	
(2) 3rdステージの最初の総会	
19 平成26年度の活動	…………… 163
(1) 「ふくおか美まちチャンネル」出演	
(2) 町家談義	
(3) 阿部真也先生との再会	
(4) 福岡市職員技術研究発表会	
(5) 法被作成	
(6) 登録文化財 みそ蔵特別公開	
(7) とっておきの姪浜！	
(8) 「姪浜景観づくりの手引き」発行	
(9) 建築士会「まちづくり優秀賞」受賞	
(10) 執筆	
(11) 都市景観大賞現地審査	
(12) 姪浜ネクスト始動	
20 平成27年度の活動	…………… 176
(1) 総会	
(2) 「都市景観大賞（景観教育・普及啓発部門）」受賞	
(3) 都市景観大賞受賞祝賀会	
(4) 夏の遊覧船イベント	
(5) 都市景観大賞受賞による視察研修受け入れ	
(6) 姪浜ネクスト準備会	
(7) 灯明コンサート IN 興徳寺	
(8) 最後のみそ蔵イベント	
(9) かわら版「みそ蔵特集」	
(10) 新案内所改修	
(11) 「ふるさとづくり大賞」受賞	
(12) 春のまち旅2016	
(13) 姪浜ネクスト発足式&祝賀会	
(14) win-win-win-win方式による、まち歩きマップの改訂	
(15) 「姪浜まち旅プロジェクト計画」の策定	
21 3rdステージの振り返り	…………… 194
(1) 主な活動メンバー	
(2) 活動資金	
(3) 表彰	

(4) 総括	
22 みそ蔵（登録有形文化財・マイヅル味噌）	…………… 196
(1) みそ蔵とマイヅル味噌の歴史	
(2) みそ蔵での多彩なイベント	
(3) みそ蔵に対する筆者の思い	
(4) なぜ残せなかったのか	
(5) みそ蔵に関わる思い出	
23 協議会卒業	…………… 205
(1) 卒業決意	
(2) 最後の取材	
(3) 協議会卒業	
(4) 協議会へのお土産	
(5) まちづくりは志	
【第3章】 姪浜での多彩なまちづくり活動の成果と筆者の提案	
24 活動のポイントと継続的で多彩なまちづくり活動の成果	…………… 211
(1) 活動のポイント（事務局長として工夫したこと）	
(2) 継続的で多彩なまちづくり活動の成果	
25 新たな課題や動向を踏まえた、今後の姪浜のまちづくりの展開方策の提案	…………… 218
(1) 新たな課題や動向	
(2) 新たな課題や動向への対応	
(3) 具体的な提案	
26 公務員や建築士の地域のまちづくりへの関わり方の提案	…………… 227
(1) 地域に飛び出す公務員としての提案	
(2) 建築士としての提案	
【第4章】 唐津街道姪浜まちづくり協議会卒業後	
27 卒業後	…………… 229
(1) 地域づくりを巡る小さなまち旅	
(2) 思い出の場所再訪	
(3) 熊本地震と筆者	
(4) 姪浜での活動の振り返り（活動記録作成）	
(5) 姪浜や市役所での経験を活かせ	
おわりに	…………… 239

コラム

1	建築書との出会い	2 1
2	ベネチア再訪	3 8
3	北九州市立中央図書館再訪	7 0
4	震度6弱からの転機	7 1
5	東京駅	9 3
6	人生は二刀流、二毛作	1 4 3
7	『姪浜の宝を福岡市民の宝に！』の実現に向けて	1 4 6
8	気持ちの100倍返し	1 5 7
9	宗像剛氏との再会	1 7 1
10	課題に取り組むこと＝まちづくりの楽しさ	1 7 5
11	ピンチをチャンスに	1 9 3
12	地域に根ざしたまちづくり協議会に向けて	2 1 0

参考資料

- 1 筆者の主な年表
- 2 唐津街道姪浜まちづくり協議会と筆者の10年の歩み
- 3 姪浜プロジェクト48 (MPT48)
～筆者が唐津街道姪浜まちづくり協議会在籍中に取り組んだ多彩な活動～
- 4 進行形！景観まちづくり～歴史的資源を活かした町並みづくりと賑わいづくり～
(月刊「地方自治職員研修」2015年1月号)
- 5 地域の誇り&まちなみ育てプロジェクト～姪浜の宝を福岡市民の宝に！～
(日本建築士会連合会 会誌「建築士」2015年3月号)
- 6 内陸部のまち・横手市増田と海辺のまち・福岡市姪浜
～日本海を隔てて1100km離れた地域の新たな交流の芽生え～
(2013年 第9回 JTB 交流文化賞応募作品)
- 7 熊本地震と私～オオクワガタから始まった旅は復興へと向かう旅へ～
(2016年 第12回 JTB 交流文化賞応募作品)

第1章

学生時代～福岡市役所時代

1 学生時代

(1) 実家の思い出

この活動記録は、姪浜での活動が中心であるが、なぜこれほどまでに姪浜の活動に没頭してきたのか、子どもの頃に遡って振り返ってみよう。

筆者の実家は福岡県行橋市にある。行橋市は北九州市小倉と大分県中津市の間くらいに位置する、人口7万人程の小都市である。実家は JR 行橋駅から徒歩5分程度の便利な場所にある。ここは当時、博多町と呼ばれ、今と違い賑わっていたようだ。筆者は高校時代までここで育った。子どもの頃の家は、建材店との併用住宅で、伝統的様式の町家建築であり、五右衛門風呂もあった。庭には小さな池もあり、鯉も飼っていた。犬小屋や鶏小屋もあり、叱られた時は鶏小屋に入れられたことを覚えている。今でも鶏に触るのは苦手であるが、きっとこれが影響しているのだろう。



筆者が子どもの頃の実家

当時のお祭りの様子(自宅近く)

自宅近くにあった建材店の瓦製造工場

現在の家は、筆者が小学校6年生の時に建てられたもので、父が方眼紙に図面を描いていたことを思い出す。当時、父が「新住宅」という雑誌を定期購読しており、これに載っていた「あめりか屋」などの住宅も参考にしたようだ。この頃は祖父母、父母、兄、妹、叔母、お手伝いさんの合わせて10人が生活する大所帯であり、それを象徴するような大屋根の家である。外観は3階建てのように見える。今の呼び方で言えば、9DK+納戸+ロフト(屋根裏部屋)の大きな家である。瓦は淡路島産の濃いピンク色で、全体的に昭和モダンをイメージさせる。当時としてはハイカラな家である(今でもハイカラだと思っているが)。



現在の実家

筆者が大学の頃までは、庭を挟んで南側に建材店があり、その後、店の移転に伴い南側に広い庭を造った。池も造り替えたが、現在は枯山水風の庭である。この家では、新築当時から40年程チン（狆）やヨークシャテリアなどの小型犬を飼ってきており、ヨークシャテリアの「ポンタ」や「モモ」が縁側を伝い歩きする姿が可愛く、今でも懐かしく思う。築50年近く経っているが、水回りを中心に数回リフォームを行い、良好な形で維持されている。現在は80代の母と60代の兄の二人暮らしであり、物置や納戸として使われている部屋も多い。筆者にとっては思い出のある家であり、今後もリフォームを繰り返しながら大切に住み継がれてほしい。

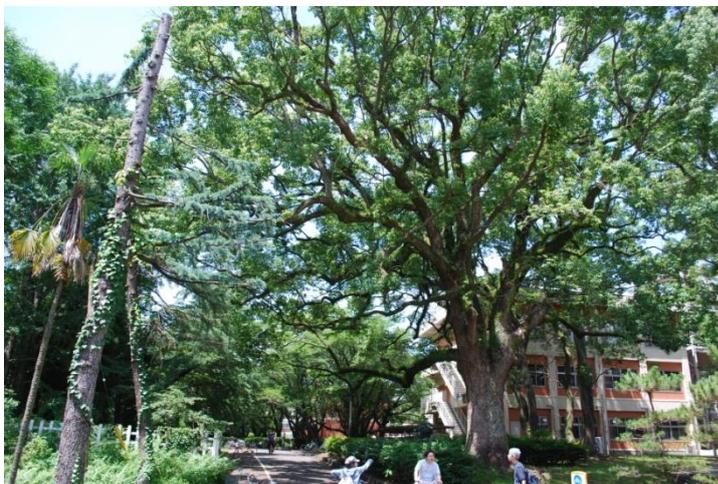
（2）熊本大学建築学科入学（建築との出会い）

筆者の長男は、建築や都市を学ぶ大学生である。長男は進路を決める時に悩んでいたようであるが、最終的には関東の大学で建築・都市・環境を学ぶようになった。筆者が建築関係の仕事をしているからなのか、浜辺での活動に刺激を受けたからなのかは定かではない。今でもこの進路を選んだことがよかったのかどうか悩んでいるようだ。高校時代に進路を決めることは難しいものだ。

長男が悩んだように、筆者も高校時代には同じような悩みを抱えていた。父が建材店を営んでいたことや、兄が建築学科を出たことが最終的には建築を志す動機になったのかも知れない。当時の建築学科は、医学部の次に偏差値が高く、丹下健三氏、黒川紀章氏、磯崎新氏など著名な建築家が活躍していた時代であり、人気の学科であった。清家清氏がコーヒー（ネスカフェゴールドブレンド）の「違いがわかる男」のCMに出ていたことも思い出す。「ダバダ〜ダバダ〜♪」と聞けば、思い出す方も多いただろう。「建築家は格好いい、女性にもてる」という印象を抱いていたのかも知れない。

筆者は、熊本大学と東京の私立大学に合格。東京に行きたかったが、学生時代に東京で苦労していた兄のアドバイスもあり、熊本大学建築学科に入学することになった。

入学して気付いたことは、当時の熊本大学の建築学科には蒼々たる先生方がいたことである。西洋建築史の堀内清治先生、プロフェッサーアーキテクトである木島安史先生、岡村幸一郎先生（共に丹下健三門下生）などの他、建築構造や建築環境の分野にも素晴らしい先生方がいた。学生の中には、こうした先生方の下で学びたいということで熊本大学建築学科に入学した者もいた。

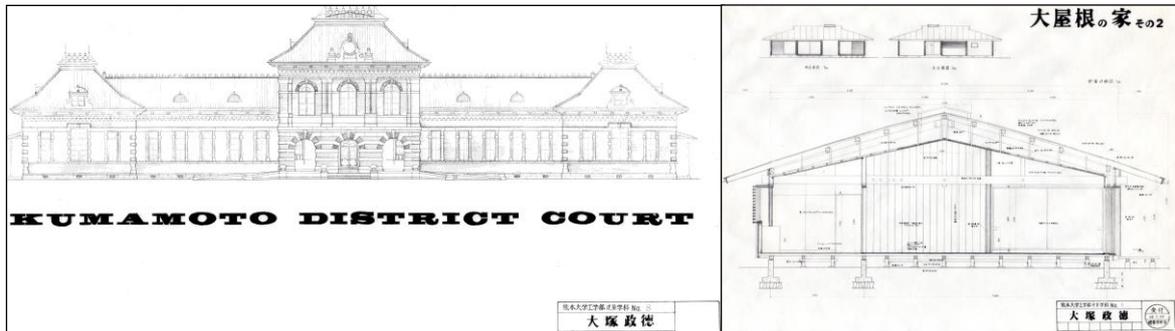


現在の熊本大学と筆者(平成28年6月)

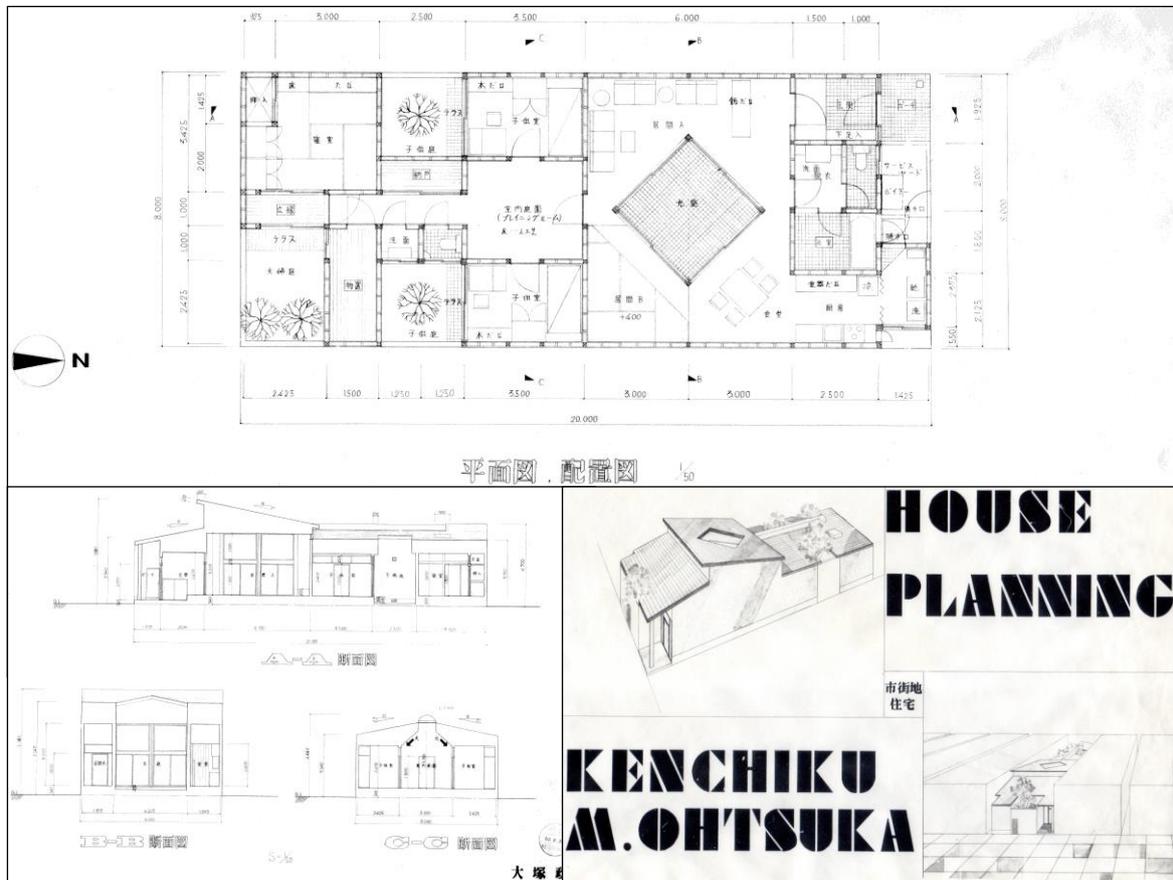
(3) 最初の設計

熊本大学の建築学科では1年次から専門科目として、西洋建築史、構造力学などがカリキュラムに組み込まれていた。2年前期で熊本地方裁判所の模写、篠原一男氏設計の「大屋根の家」の模写などを経験した後、最初の設計は2年後期の「木造住宅」であった。筆者は2つの敷地（郊外型、都市型）のうち、都市型の敷地を選択し、初めての設計に精力的に取り組んだ。間口が8m、奥行き25mのウナギの寝床状の敷地であったと記憶している。ロール型のトレーシングペーパーにスケッチを繰り返し、何度もアイデアを練り直した。

意識したのは、周辺の環境が大きく変化しても、採光や通風、プライバシーを確保できるような住宅である。そのため、平屋建の建物を敷地いっぱい配置し、広いリビングルームやダイニングルームの中央に3m角の光庭を45度の角度で大胆に配置するなど、大小いくつもの光庭を取り入れた。最初の設計としては自分でも満足いくものであった。



模写：熊本地方裁判所(左)、大屋根の家(右)

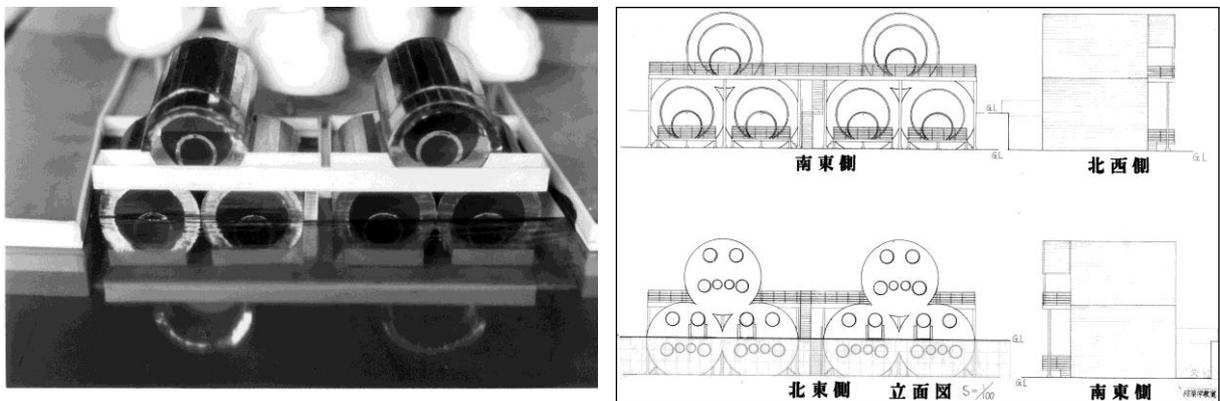


最初の設計課題(都市型住宅)

「その場所の特性を最大限に活かし、そこでしかできない設計をする」という徹底した考え方は、この住宅設計の時から身に付け始めたことであり、今でも筆者の建築やまちづくりでの哲学である。筆者は、姪浜で「地域に埋もれている身近な魅力資源の掘り起こしこそが、姪浜ならではの地域特性を活かしたまちづくり・景観づくりの土台となる」ということを常に発信してきたが、建築やまちづくりに関わり続ける限り、この哲学を譲ることはできない。

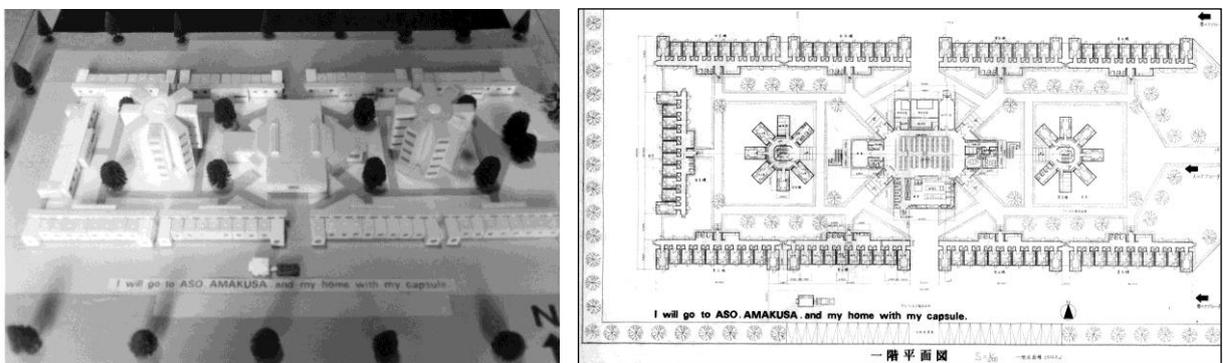
(4) 楽しい設計課題

3年生になると、いろいろな設計課題に取り組むことになる。ありきたりの設計ではなく、場所性やコンセプトにこだわることで、楽しさは倍増していった。海に面した6つの別荘である「SEASHORE WEEKEND COMPLEX」では、6つの円筒を使い、そのうち4つの円筒を海に沈め、干潮時には海に出て楽しめ、満潮時には窓越しに魚が見えるように計画した。上の2つの円筒では、満潮時に魚釣りもできる。また、海に面した南東側の大きな窓は、カメラの絞り機能をイメージし、外の明るさに合わせて光を調節できるように計画した。



SEASHORE WEEKEND COMPLEX

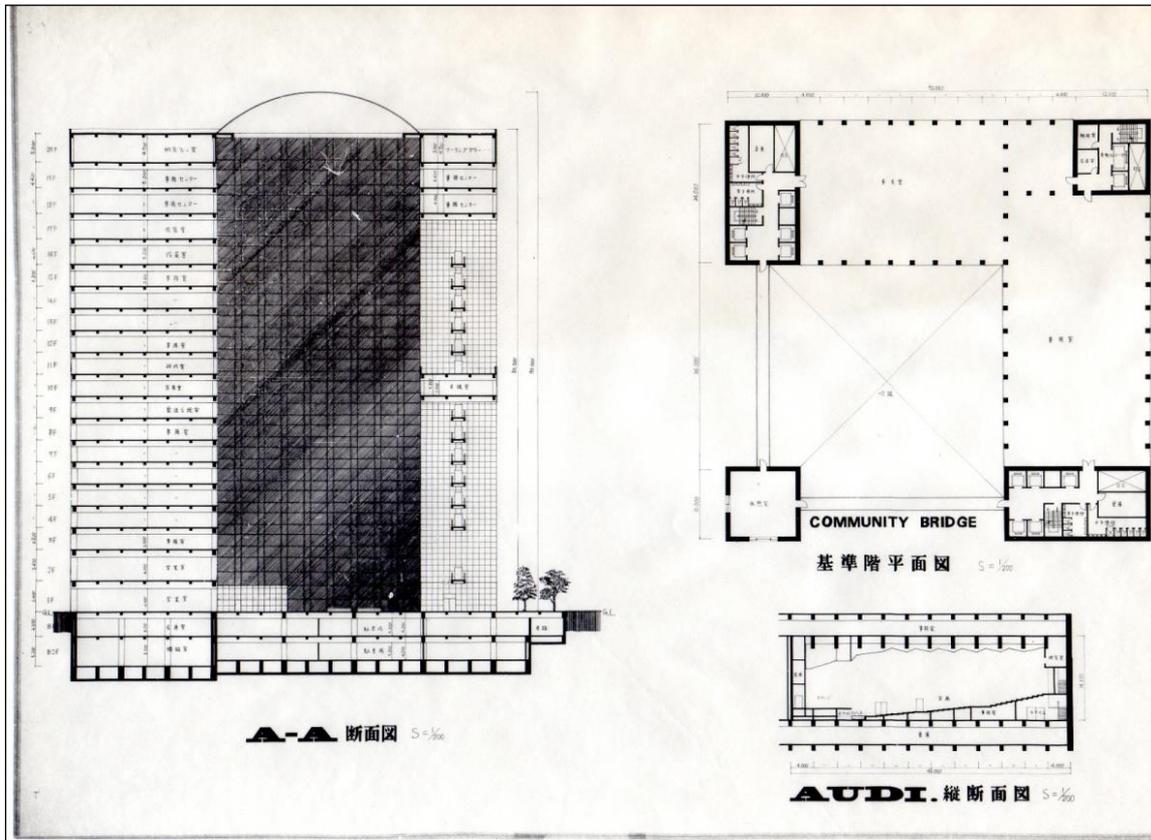
「熊本大学学生寮」の設計では、外周の1階のすべての部屋は取り外し可能なカプセル形式（タイヤ付き）とし、車で引いて移動できるモバイルハウスとした。阿蘇や天草などへの旅行の他、自宅に帰る時にも使えるように計画した。夏休みに模型を作ったが、一つひとつの部屋を粘り強く丁寧に作った。この時に模型の作り方が上達したのかも知れない。



熊本大学学生寮

また、「オフィス+オーディトリウム」の設計では、L字型のオフィスと独立したコア（休憩室

空間)にコミュニティブリッジを配するとともに、最上階に大きなガラスの屋根を架け、大規模なアトリウム空間を確保した。このブリッジを渡ることによって、同じ会社に働くという一体感が生まれることを意図したものである。



オフィス+オーデトリウム

(5) 建築への興味、建築巡り

九州には著名な建築家の作品が多く、関東や関西の学生たちも九州の建築巡りをしていた。磯崎新氏、黒川紀章氏、白井晟一氏の設計した作品などが、そのコースに入っていたようだ。当時の新聞にも「九州は現代建築の宝庫」と掲載されていた。

筆者も様々な設計課題に取り組む一方、休みを利用して建築巡りを始めた。九州にある磯崎新氏が設計した建物の大半を見て回ったと思う。福岡市内では、博多駅前の福岡相互銀行本店（※建築物の名称は当時のもの。以下共通）や3つの支店（大名、六本松、長住）、秀巧社ビルを見学した。大分市内では大分県立大分図書館、大分県医師会館、富士見カントリークラブ、北九州市内では北九州市立中央図書館、北九州市立美術館、西日本総合展示場などを見学した。大学3年生の春休みには、群馬県立近代美術館にも出かけている。

また、黒川紀章氏設計の福岡銀行本店、白井晟一氏設計の親和銀行本店、前川國男氏設計の福岡市立美術館や熊本県立美術館なども訪問した。

このように学生時代は九州の現代建築を中心にかなりエネルギーに見て回った記憶がある。ちなみにその頃使っていたカメラは、昭和51年7月発売のフジカST605で、発売当時は一眼レフとしては廉価版として販売されていた（5万円程度）。一眼レフとはいえ、当時は標準レンズ1本しか持っていなくて、広角写真を撮る場合は別の小型のコンパクトカメラを併用していた。その

後、社会人になってニコンのカメラを購入することになるが、大学時代の4年間はフジカST605を主に使っていた。愛着のあるカメラ第1号である。



福岡相互銀行本店



秀巧社ビル



北九州市立中央図書館



大分県立大分図書館



福岡銀行本店



親和銀行本店



最初のカメラ(フジカ ST605)

(6) 木島安史先生

筆者が歴史的建造物に興味を持ち始めたのは、前述の木島安史先生との出会いが影響していると思う。木島先生は、建築設計や都市計画を教える傍ら、建築評論家の長谷川堯氏といっしょに熊本の歴史的建造物の保存に取り組み、昭和49年1月～3月に熊本日日新聞の夕刊で「家は生きていた～熊本の洋館・和館めぐり」を連載されていた。筆者が熊本大学に入学したのが昭和51年であるが、熊本市内には多くの歴史的建造物が大切に残されていた。文化都市・熊本を実感で

きたのは、先生方の努力が大きかったと思う。「都市住宅 7406 (昭和 49 年 6 月号)」では、「発掘文化都市熊本」を特集しており、懐かしく読み返しているところである。



都市住宅 7406(昭和 49 年6月号)「発掘文化都市熊本」より

また、木島先生を語る時には「孤風院」は欠かせない。孤風院は、明治 41 年 (1908 年)、熊本高等工業学校の図書閲覧室 (講堂) として建てられた熊本を代表する洋風木造建築であったが、昭和 51 年 (1976 年) 老朽化による解体決定に伴い、当時熊本大学助教授であった木島先生が買い取り、現在の地 (阿蘇) へ移築し、住居として平成 3 年 (1991 年) まで利用されていた。移築後は住みながら改修を続けられ、木島先生が亡くなられてからは木島家の別荘としての利用のほか、「孤風院の会」によってメンテナンスを含めた建築教育活動の場として利用されている。

大学の講堂としての役割を終え、買い取り手も見つからなかった建物を、自ら買い取り、改修し、住居として蘇らせ、明治～大正～昭和～平成の 4 つの時代にわたり活用されていった。大学の授業で木島先生が「天井に張っていたスタイロフォームの色が変わり、友人が再度訪ねて来た時に天井を張ったのかと言われた」ことをエピソードとして嬉しそうに話されていたことを思い出す。

こうした建築への想いと行動力のある木島先生に大学時代に少しでも教わったことを今でも大変誇りに思っている。孤風院については、先生の手記「孤風院白書」として出版されている。建築に携わる方には、ぜひ読んでいただきたい名著である。熊本地震での影響が気になっていたのので、平成 28 年 8 月に阿蘇に行った時に立ち寄ってみたが、外から見る限りは大きな損傷はなかったようだ。一安心である。



孤風院白書

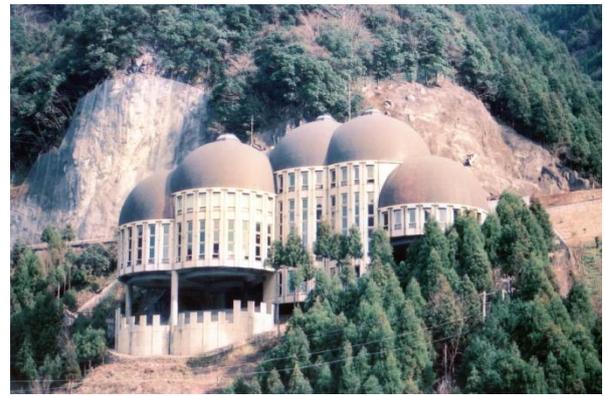


孤風院(平成 28 年8月)

また、木島先生は建築家でもあり、多くの建築を設計された。歴史性を尊重した考え方やドーム建築が印象的である。筆者は学生時代はもちろん、社会人になってからも木島先生が設計された多くの作品を見学に行った。熊本県内では上無田松尾神社、上無田公民館、球泉洞森林館、東陽村石匠館、TOTO アクアピット ASO などを訪れた。福岡市内ではシーサイドももちの世界の建築家通りの一角に木島先生設計の商業施設があり、後述するクリスタージュを訪れる度にいつも気にかけていたものだ。また、昭和 55 年の新建築会館のコンペでは二等に入選された。その時のドーム案は今でも印象に残っている。

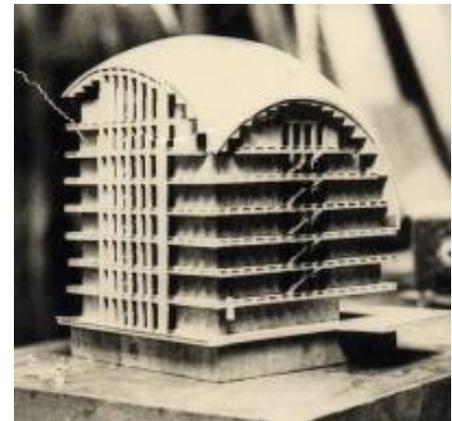


上無田松尾神社



球泉洞森林館

木島先生は、平成 3 年に千葉大学に移られたが、翌年の 4 月に 54 歳の若さで亡くなりました。あまりにも早すぎる死であった。なお、木島先生が書かれた著書としては、前述の「孤風院白書」の他、「半過去の建築から」「内なるコスモポリタン」などがある。機会があれば、ぜひ読んでいただきたい。



新建築会館のコンペで二等になった時の木島先生のドーム案

(7) 卒業論文

筆者は大学4年次、日本建築史の北野隆先生のゼミに所属していた。北野先生は、主に近世日本建築を研究されており、研究室の学生たちもそうした研究を行っていた。しかし、隣の西洋建築史の堀内清治先生からの依頼もあり、三角西港の研究は北野研究室で行うことになり、筆者が担当することになった。平成27年に世界文化遺産に登録されたが、当時は存在が知られているだけで、北野先生の指導を受け、筆者が最初に研究に取りかかることになった。

三角西港は、明治政府の殖産興業の政策に基づいて、お雇い外国人のオランダ人水理工師のローエンホルスト・ムルドルによる設計で、明治20年(1887年)に完成した。当時の最新の技術が盛り込まれた三角西港は、宮城県の野蒜(のびる)港、福井県の三国港と並び、近代国家の威信を懸けた明治三大築港の一つであった。有明海、不知火海の二つの海に面した三角町は、三角西港の整備により熊本県の海の玄関港として、人や物資が行き交う海上交通の要地として繁栄するとともに、宇土郡役所や三角裁判所の設置により宇土地域の行政や司法の中心地となった。

その後、港としての機能は三角港(東港)に移ったこともあり、756メートルにも及ぶ石積み の埠頭や水路、建造物などは築港後130年の歴史を持ちながら、当時の佇まいを見せている。当時の都市計画がほぼそのままの形で残っているのは全国的にも珍しい。文化財的にも国際的にも価値ある生きた港として、平成14年12月に国の重要文化財に指定、平成27年7月に「明治日本の産業革命遺産 製鉄・鉄鋼、造船、石炭産業」の構成資産として世界文化遺産に登録され、港町三角のシンボルとなっている。



大学時代に研究していた頃の三角西港(昭和57年2月。大学を卒業して2年後の写真)

筆者は、大学を卒業して36年後の平成28年7月3日に三角西港を訪問した(当時の写真のネ

ガを調べていたら、大学を卒業して2年程経った昭和 57 年の2月に訪れていた)。石積みの埠頭や水路は当時とほとんど変わらないが、昭和 62 年の築港 100 周年を機に、当時の建造物の復元や周辺の公園整備も行われ、観光地としても賑わいを見せていた。小説家・小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）ゆかりの旅館・浦島屋、倉庫を改修したカフェなど明治の面影を残す建物が印象的であった。大学時代にはだれ一人として観光に訪れる者はいなかったが、雨天にも関わらず多くの観光客が訪れていた。エピソードになるが、20 年近く使っている腕時計の針が、三角西港を訪れた時に突然止まった。まるで大学時代にタイムスリップしたかのように。



現在の三角西港(平成 28 年7月)

大学の研究で筆者が行ったのは、資料収集や現地調査が中心であったが、この研究が一つのきっかけとなり、国の重要文化財や世界文化遺産に登録され、多くの観光客も訪れる港町になったことは本当に嬉しい。後に福岡市役所の仕事に関わることになる御供所や、まちづくり活動に関わることになる姪浜、どちらも筆者が関わった時には無名の地域であったが、粘り強い取り組みにより、それらの名が知られる一つのきっかけを作ったことは、三角西港と共通点があるのかも知れない。

(8) 卒業設計

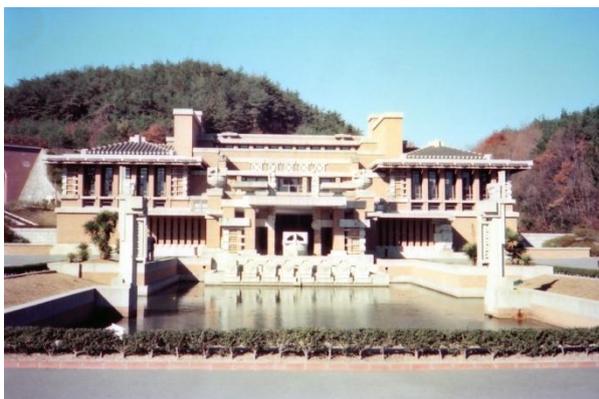
卒業研究が終わり、次は卒業設計に取り組むことになった。多くの大学の建築学科では、卒業研究か卒業設計のいずれかの選択であるが、熊本大学では「卒業設計は建築の総合的な力を身につけるのに最適である」との理由で、両方とも必修科目になっている。

卒業設計では、建物の建つ地域や場所、用途などは自由であり、各学生に委ねられている。設計に当たり、地域を取り巻く現状や問題点、課題を踏まえることは当然であるが、何よりも大切なことは設計に取り組む背景と動機、コンセプトである。多くの学生は「〇〇地域の〇〇施設」など施設ありきで考えていたようであるが、筆者は違う視点で取り組んだ。

筆者は、当時話題になっていた建築会館の建て替えを参考として、建築に携わる方々が利用する複合施設「Architectural Complex」を計画した。まず考えたことは、『4年間建築を学んで、筆者が最も体験したい建築空間は何か』ということであった。いろいろな建築巡りをする中で、素晴らしい建築空間を体験することの重要性を痛感していたからである。

国内のいろいろな建築の中から、筆者はフランク・ロイド・ライトが設計した旧帝国ホテルの活用を考えた。旧帝国ホテルは既に解体され、一部は愛知県の明治村に移築されており、現実性はなかったが、旧帝国ホテルを博物館として活用しながら、会議室、オーディトリウムなどの機能を新たに付加させていったものである。卒業設計は大学4年間の総まとめであり、現実的である必要はないと思う。いかに自分の想いを設計に込めるかである。

残念ながら当時の図面は手元には残っていない。提出に追われてマイクロ写真で保存する余裕すらなかった。ボリューム模型の写真だけが残っていた。



明治村にある旧帝国ホテル(左)と筆者の卒業設計時のボリューム模型(右)

後に、木島先生が新建築会館のコンペで二等になった時のドーム案(前述)は有名であるが、木島先生は日本を代表する建築として香川県庁舎(丹下健三氏設計)を評価しており、それを新

建築会館の案にイメージとして取り入れたということを決めた記憶がある（日本の伝統的な小梁や格子をコンクリートによって再現?）。何か筆者の卒業設計の考え方が先生に届いていたとしたら嬉しい。

筆者の長男も早くも大学4年生になり、卒業設計に追われている。「〇〇地域の〇〇施設」といったテーマで小ぢんまりとまとめるのではなく、大きな視点に立ち、今まで都市や建築について感じてきたことを卒業設計に反映してほしい。

コラム1 建築書との出会い

大学に入り、建築の専門図書を多く読むようになった。木島先生がお薦めの本をリストアップされていたことを思い出す。『空間 時間 建築（ジークフリート・ギーディオン著）』、『輝く都市（ル・コルビュジェ著）』、『空間へ（磯崎新著）』、『宇宙船地球号（バックミンスター・フラー著）』、『神殿か獄舎か（長谷川堯著）』などが挙げられていたと思う。鹿島出版のSD選書もたくさん読んだ記憶がある。

鴻池組に入ってから、給与の多くを本の購入に充て建築の専門書や雑誌を購入した。通勤途中の電車の中でも何回も読み返した本も多い。「新建築」や「A&U」などの雑誌の大半は処分したが、思い出の多い書籍は今でも大切に保管している。建築や都市を志す長男にも読んでもらえるとは想像もしていなかった。じっくりと読みたい名著もたくさんある。建築を志した頃の初心に戻り、改めて読み返してみたい。



「参考資料1 筆者の主な年表」

2 社会人時代（鴻池組時代）

（1）鴻池組入社

次に就職の件に触れよう。今と違い、民間企業への就職の準備は大学4年生の秋からであった。大学の推薦を受けて各企業の試験に臨むことになるが、筆者は大手建設会社の設計部にチャレンジした。熊本大学の先輩である九州支店の部長の面接を経て、東京の本社での試験に臨む。学生時代の設計課題の図面も持参したが、残念ながら採用されなかった。

その後、ゼミの北野先生の紹介により、準大手の鴻池組を受験。九州支店での面接を経て、大阪本社での試験に臨む。無事内定をもらい、鴻池組に就職することになった。鴻池組は大阪に本社を置く建築工事中心の堅実なゼネコンである。

（2）設計部配属と御茶ノ水

大阪での1週間程度の研修を経て、筆者は東京本店の設計部に配属された。昭和55年4月のことである。東京本店設計部には筆者を含めて4名が配属された。

東京本店は御茶ノ水にあった。大阪の御堂筋にあった本社ビルはトラパーチンの外壁が印象的であったが、東京本店ビルはあまり印象には残っていない。御茶ノ水界隈は、学生街でもあり、明治大学、日本大学、順天堂大学などがあつた。また、ニコライ堂や吉阪隆正氏設計のアテネ・フランセもあつた。神田にも近く、土曜日の仕事が終わった後はみんなで神田に繰り出し、食事に行ったものだ。その後は、建築図書専門店の「南洋堂」に行くことも多かつた。



鴻池組本社ビル



東京本店ビル



同期の仲間（東京本店）。筆者は3列目中央



御茶ノ水界隈の思い出の建築物：ニコライ堂（左）、アテネ・フランセ（右） ※平成29年3月撮影

設計部に所属したのは2年半程度。先輩方についていろいろな実務を教わつた。ゼネコンの設計部ということで自由度は少なく、印象に残つた仕事はほとんど無い。住居系地域に建築するあ

る銀行の支店で、緩衝地帯としての役割を持たせるため、道路と建築本体の間にフレームと植栽帯を提案したことがあったが、費用がかかることとゼネコンの設計に馴染まないということで却下された。2年目に筆者が最初に任せられたのは、浜松町の事務所兼住居であった。大手不動産が土地を買収したことに伴う代替ビルである。10メートル四方の敷地に建つ5階建てのビルで、後述するが、現場に配属された時はここが最初の現場となった。

ところで、平成29年3月に東京に行く機会を利用して、御茶ノ水界隈に寄ってみたが、東京本店ビルは既になく、通りの雰囲気も随分と変わっていた。これも30年の時の流れだろうか。



御茶ノ水駅前の風景(昭和55年頃)



御茶ノ水駅前の風景(平成29年3月)

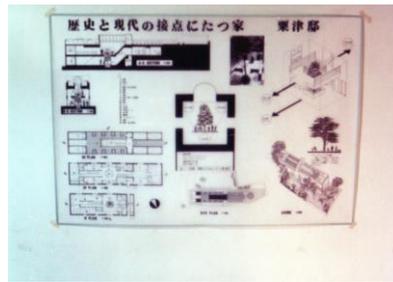
(3) 寮生活とコンペ

鴻池組の大和田鴻和寮は、千葉県八千代市にあり、御茶ノ水までは船橋乗り換えで1時間半程度かかっていた。往復3時間の満員電車は、田舎から出てきた者には苦痛であった。

寮の部屋については、最初は同期の西岡君と相部屋であったが、筆者はドラフターや書籍などの荷物が多かったことから、3ヶ月後に一人部屋(6畳。トイレ、洗面所、浴室は共用)にしてもらった。部屋にはテレビも無く、就寝や読書が中心の生活であったが、寮にいる間に建築のコンペに何回もチャレンジした。入賞することはなかったが、自分の想いを組み立てていく作業は無駄にはならなかったと思う。ぎりぎりまで時間をかけて図面を作り、その日の消印が取れる東京駅の中央郵便局まで提出しに行ったものだ。その後は、きまって船橋の居酒屋で一人で打ち上げをした。若い頃の思い出である。



大和田鴻和寮の外観(左)と筆者の部屋(右)



コンペへの参加

仕事が終わってからの作業で、よく頑張っていたと思う。姪浜の活動のエネルギーもこうした経験から生み出されたのかも知れない。提出した作品は審査後に受け取りに行ったが、引っ越しの際にどこかに紛れ込んで残念ながら手元には残っていない。

(4) 銀座の思い出

会社の飲み会は、御茶ノ水や神田界隈が中心であったが、二次会で銀座に行くことも多かった。鴻池組東京本店は、御茶ノ水に移転する前は銀座にあったこともあり、先輩方は銀座に行きつけのお店も多かったようだ。終電もなくなり、相乗りタクシーで寮まで帰ることもよくあった。みんな東京生活のいい思い出である。今でも銀座が懐かしいのは、こうした経験からかも知れない。とは言っても、筆者の銀座と言えば、銀座交差点の風景や有楽町マリオン、銀座ライオン（ピアホール）、伊東屋（文房具・画材専門店）、内井昭蔵氏設計の銀座対鶴館ビル、巴裡小川軒（新橋のレーズンサンドの老舗）などである。



筆者の思い出の銀座(写真は平成 26 年~28 年に撮影)

(5) 建築巡り

大学在学中から建築廻りをしていたが、建築を志す者にとって東京は憧れの都市であり、東京にいる間にいろいろな建物を見に行こうと思った。社会人になったこともあり、新しいカメラを購入。ボディはニコンの FE という中級機であるが、レンズは建築撮影用のあおり止め（ゆがみ補正）機能のある 28mm の PC レンズをまずは購入した。その後も 16mm の魚眼レンズと 80～200mm の望遠レンズを購入し、3つのレンズを 20 年以上愛用してきた(今でも使用可能である)。自称「セミプロ建築写真家」でもある。写真の構図にこだわることは、建築の設計でも大変役に立った。



ニコン FE と3つのレンズ



愛用のカメラで国内外の建築巡り

このカメラでいろいろな建築巡りをした。当時、村野藤吾氏の作品に興味があり、高輪プリンスホテル貴賓館、小山敬三美術館（長野県小諸市）、八ヶ岳美術館（長野県原村）、谷村美術館（新潟県糸魚川市）などを見て回ったが、ディテールの写真をこれ程まで撮ることはなかった。村野氏は「建築らしいものを創り出したのは 60 歳を過ぎてから」と言われており、亡くなる直前まで仕事に情熱を傾けられていた。素材とディテールにこだわった職人的な手法から生み出された陰影に富む自在な造形は、独自の世界を生み出してきた。



小山敬三美術館



八ヶ岳美術館

また、「健康な家」をテーマに設計をしていた内井昭蔵氏の作品にも興味があった。銀座対鶴館ビル、桜台コートビレッジ（横浜市青葉区）、清澄寺祖師堂（千葉県鴨川市）、身延山久遠寺宝蔵（山梨県身延町）、東京 YMCA 野辺山青少年センター（長野県野辺山）など、ニコンの愛用カメ

ラを持参し見て回った。35年程前のことであるが、今でも記憶に新しい。本当に遠くまで見学に行ったものだ。建築への好奇心旺盛の時期であった。

この他、白井晟一氏設計の芹沢銈介美術館（静岡市）や渋谷区立松濤美術館、山下和正氏設計のフロム・ファースト・ビル（表参道）、槇文彦氏設計の代官山プロジェクト、磯崎新氏設計の群馬県立近代美術館などが印象に残る。この時期は、素材とディテールにこだわった建物や、空間構成に人間味の感じられる建物に興味があったと思う。ちなみに建築巡りをする時は一人で行くことにしている。空間を体験して、自分で考えることが大切だと考えているからだ。自分の空間体験を大事にしたい。



清澄寺祖師堂



身延山久遠寺宝蔵



東京 YMCA 野辺山青少年センター



桜台コートビレッジ



芹沢銈介美術館



フロム・ファースト・ビル



代官山ヒルサイドテラス



群馬県立近代美術館

(6) 歴史的建造物への興味

歴史的建造物への興味もこの頃から増してきたように思う。社会人になって2年目の5月だったと思うが、先輩方と奈良と京都に古建築巡りをした。奈良では法隆寺や薬師寺、斑鳩の里に行った記憶が鮮やかに蘇ってきた。薬師寺は西塔が再建されたばかりであり、東塔と比較すると、壁や格子の色、屋根の反りが違うのが印象的であった。200年経つと、同じような色や形になるという。とてもロマンを感じさせる話であり、薬師寺にはこの後、愛用のPCレンズと望遠レンズを持って何回も通うことになった。



薬師寺

京都では桂離宮、修学院離宮の他、円通寺、苔寺、詩仙堂、曼殊院などに行った記憶がある。何れの建物も古い歴史があり、庭もきれいである。茶室や風景、ランドスケープにも興味が出てきたのはこの頃だろうか。いっしょに行った先輩の篠田光滋さんが嵐山の渡月橋を渡る時に、来場記念にもらった「(財)有識者文化協会」と書かれたパンフレットを誇らしげに自慢していたことを昨日のここのように思い出す。自分が有識者になったつもりだったのだろう。この後、京都には週末の休みを利用してJRの夜間バス「ドリーム号」で何度も通ったものだ。いつの季節も素晴らしい印象がある。



桂離宮



修学院離宮



曼殊院

(7) 歴史的町並みへの興味

歴史的町並みへの興味が出てきたのもこの頃だろうか。大学時代は日本建築史のゼミに所属していたが、町並みへの興味はそれほどではなかった。社会人になり、現実的な仕事をする中で、本来自分やりたいことは何なのかを考えていたのだろう。歴史的町並み保存の実務的な手引書である「歴史的町並み事典（西山卯三氏監修）」を購入したのもこの頃である。

思い起こすと、歴史的町並みの価値が見直されてきたのは、昭和45年頃であろうか。筆者が中学生の頃である。当時の国鉄のキャンペーン「ディスカバー・ジャパン」は、大阪万博終了直後に「日本を発見し、自分自身を再発見する」ことをコンセプトに個人旅行拡大キャンペーンとして全国的に進められた。美しい日本の再発見をテーマにしたものである。

また、同じ時期に永六輔氏出演のテレビ紀行番組「遠くへ行きたい」も始まった。各地域の名所紹介や住民との触れ合いをテーマにした番組であり、国民の旅行への憧憬を誘った。大学時代に山口百恵さんが歌っていた「いい日旅立ち」も思い出す。高度成長時代に多くの歴史的建造物や町並みが失われてきた反省もあるのだろう。

さて、東京時代に筆者が訪れた町並みは、栃木県栃木市や埼玉県川越市の蔵の町並みなどである。栃木市は江戸時代から例幣使（れいへいし）街道の宿場町として、また舟運で栄えた問屋町として、北関東の商都と呼ばれた。黒塗りの重厚な見世蔵や白壁の土蔵群が残り、当時の繁栄振

りを偲ばせている。福岡市役所に入り都市景観の業務に関わってから訪れたことはあるが、筆者が東京にいた頃はまだ道路が拡幅される前であり、現在より古い町並みが残っていた。



栃木市の町並み(昭和 55 年 11 月)

川越の町並みも東京時代に数度訪れた。当時は舗装整備や電線類の地中化がされる前であり、今のように観光客は多くなかった。何回もの大火の末に防火性を考慮して導入された土蔵づくりや重厚な開き扉、堅牢な瓦屋根の町並みが印象的であった。古き良き物を大切にしようとした先人の知恵が詰まった建物や町並みである。関係者の方々の努力に頭が下がる思いである。

福岡に帰ってからも姪浜の活動の関係などで数度訪れているが、いつ行っても観光客が大変多い。町並みを楽しみながら、じっくりと歩いてみたい。



川越の町並み(昭和 55 年 10 月)



川越の町並み(平成 27 年 8 月)

この他、石川県金沢市の武家屋敷街や茶屋街、奈良県今井町、宮崎県飫肥町の町並みも印象に残っている。



金沢武家屋敷の町並み(昭和 56 年)



奈良今井町の町並み(昭和 56 年)

(8) 現場配属

仕事の話に戻ろう。設計部での2年半の業務を終え、今度は現場に配属されることになった。当時の藤沢設計課長に「現場に出るのなら会社を辞める」とまで言い切った。説得され、今後の勉強も兼ねて現場配属になることを了承した。多分、この頃から退社に向けた意思を固めていったと思う。

最初の現場は、筆者が設計した浜松町の事務所兼住宅であった。設計と現場の違いに戸惑いを感じることも多く、現場所長の明石さんからも厳しく鍛えられた。所長と2人の現場であり、何でもしないといけなかった。コンクリート打設前には鉄筋を組んだり、被りを確保するためのスペーサーやサイコロを取り付けたこともある。

また、現場の帰りに明石さんや同期の事務の空井君と新橋の牛タン屋によく行ったことを覚えている。その牛タン屋で工務監督の位寄さんとお酒を飲んだこともあるが、息子さん(位寄和久さん)が早稲田大学の建築学科で学んでいるという話も聞いた。その息子さんが平成4年から熊本大学で教鞭を執ることになるのも何かの縁であろうか。

浜松町の現場のコンクリートが打ち上がった頃に、次の現場の話が来た。今度は、神奈川県住宅供給公社の分譲マンション(横浜若葉台団地)で、施工図担当として行くことになった。14階建ての塔状のマンションである。比較的大きな現場で、スタッフも筆者を含めて10名程度いたと思う。この現場では、外観が単調にならないように建物の分節化を図るため色を使い分けたが、その頃から「環境色彩」という概念が取り入れられたようだ。環境色彩の草分け的存在である吉田愼悟氏の本を購入し勉強したことを覚えている。この現場で仕事をした時期は、お昼休みにNHKのドラマ「おしん」を放送していた時期でもある。懐かしい。月日の経つのは早いものだ。

この頃は、さすがに千葉県八千代市の寮から横浜市の現場まで通うのは難しいということで、東京都荒川区の町屋に日当たりの悪い低家賃のアパートを借りることになった。地下鉄千代田線を利用し、表参道で東急田園都市線に乗り換え、青葉台からバスで若葉台の現場に通った。電車もバスもたいてい座ることができ、週末に神田の三省堂で買い込んだ建築の本をひたすら読んだものだ。



開発が始まった昭和 50 年代の若葉台団地(若葉台まちづくりセンターのホームページより)



最近の若葉台団地(若葉台まちづくりセンターのホームページより)

この現場の施工図の作成も終わり、再び浜松町に戻り、今度は不動産会社の事務所ビルの現場の施工図を描くことになった。ここも比較的規模の大きな現場でスタッフも 10 名程度いた。杭打ちや地下工事を行っている間に図面を仕上げていくことになるが、オーナーの意向もあり 1 階部分のエントランスやホールなどの共用部のデザインがなかなか決まらず、修正を繰り返していた。ここでは、2つの小規模な代替ビルの施工図も担当し、忙しい日々を過ごした。



浜松町の現場(不動産会社の事務所ビル)

後述するが、この現場事務所で宗像剛氏と知り合うことになった。宗像氏は筆者と同じ年であるが、最高裁判所を設計した岡田信一設計事務所で設計業務を経験した後に鴻池組に入社した。父親が福島県郡山市で建設会社を営んでいるということで、鴻池組にも経験を積むために来ていたのだと思う。宗像氏とは28年後に再会することになるが、再会については後で触れよう。

(9) 荒川区町屋での生活と篠田光滋さん

ここで随分お世話になった篠田光滋さんについて触れたい。篠田さんは設計部で建築構造を担当されていた。とても勉強家であり、いつも構造の本を手にしていた。篠田さんは、筆者が田舎から出てきており頼りないと感じたのだろうか、入社時からよく面倒を見てくれた。生まれも育ちも埼玉県でありながら、大の阪神ファンで「巨人、大鵬、卵焼き」に対抗していた。後輩の榊原君が大の巨人ファンで、毎朝、巨人びいきの報知新聞を買ってきて、朝から野球の話で盛り上がっていた。また、山登りが趣味でいろいろな山に登っていた。筆者も奥多摩や丹沢山地の蛭ヶ岳に連れて行ってもらったことがあるが、山の上で食べるラーメンの味は格別であった。



奥多摩登山(中央が筆者。右が篠田さん)



丹沢登山

篠田さんとの付き合いは、筆者が現場配属になってから加速した。篠田さんが荒川区町屋に住んでいたこともあり、筆者も比較的交通の便の良い町屋に住むことになった。六畳一間の居室の他に、トイレや洗面、小さな流し台があった。北向きに大きな窓があったが、隣の建物の影響でほとんど日が入らず、東側の洗面所を通して入ってくる光が頼りであった。六畳の部屋は、ドラフターや書籍を置くと、布団を敷くのが精一杯であった。良い居住環境とはいえなかったが、家賃2万数千円程度だからやむを得なかった。

町屋は下町であり、古いコミュニティが息づく地域で、昔ながらの銭湯やお店もあった。もんじゃ焼きのお店も多かった。毎日の夕食は町屋駅周辺で外食。駅前の定食屋さんや高架下のラーメン屋さん、住宅街にある中華料理屋さんによく通ったものだ。また、仕事が休みの日曜日は、駅近くの喫茶店でモーニングを食べた後、神田の三省堂に出かけ、建築の専門書を購入した。三省堂では3年間で100万円以上使ったのではないだろうか。がむしゃらに本を読んだ記憶がある。

ところで篠田さんかというと、2Kのアパートに奥さんといっしょに暮していた。筆者の一人暮らしを気にかけてくれていたのか、よく食事に招待してくれた。埼玉県吉川市に新居を建ててからも、週末にはよく出かけて行ったものだ。

筆者が鴻池組を退社し福岡市役所に入った後も、東京出張の際にはよく会って食事をした。筆者の結婚式の時にも夫婦で来ていただいた。残念ながら平成 19 年 3 月に病気のために亡くなられた。訃報が届いたのは、筆者が都市景観室の仕事で韓国の金海（きめ）に行っていた時である。ちょうどこの時から姪浜でのまちづくり活動をスタートすることになった。これも何かの縁なのだろうか。

さて、この活動記録を書いている時に久しぶりに町屋を訪問したくなった。そのため、平成 28 年 10 月末に南千住に行く機会を利用して町屋にも 30 年振りに寄ってみた。都電や高架下のある風景はあまり変わっていなかったが、駅周辺や幹線道路沿道には高層のマンションが建ち、様変わりしていた。

一步路地に入ると昔の名残は感じられたが、筆者がよく利用したお店や銭湯などは大半がなくなっていた。土曜日の昼過ぎであったが、人通りもほとんどなく、寂しい印象を受けた。90 歳近いご老人に話しかけてみたが、「町屋も随分変わったよ。昔のお店や銭湯もなくなり、知っている人も減ってきた。」と話していた。その後、地下鉄町屋駅に戻ろうとしたが、どこを歩いているのか分からなくなった。路地の多い町屋は、姪浜と似ていると改めて感じた。筆者は昔からこういう場所が好きだったのかも知れない。



都電や高架下のある風景



幹線道路から一步入った路地のある町並み

30 年振りの町屋(平成 28 年 10 月)

(10) 最後の現場、鴻池組退社

現場の話に戻ろう。浜松町の現場の施工図も描き終え、次は埼玉県川口市にあるマンションの現場に行くことになった。昭和 60 年の 6 月頃である。ここは筆者を含めてスタッフ 5 人の現場であった。筆者はここで設計監理をされていた設計事務所の牧野さんと知り合った。牧野さんは構造に詳しかった。昔は鉄筋の職人さんもしていた時期もあったという。最初は厳しい印象があったが、懐に飛び込んでいくと何でも教えてくれた。「現場は大変だけど、今、図面を描く人間が踏ん張れば、全体の工期やコストの縮減につながる」という言葉を今でも覚えている。遅れていた図面の作成を例に挙げて発した言葉だったのであろう。

この頃、親に内緒で福岡市役所の試験を受けた。第一次試験は昭和 60 年の 7 月であった。福岡大学の高宮校舎で受験したのを覚えている。第一次試験に無事合格し、8 月 12 日に第二次試験を受験。試験を終えて、東京に戻る新幹線の中で日航機の墜落事故を知った。町屋のアパートに帰りテレビをつけると、そのニュースばかりであった。

お盆明けに最後の試験として健康診断があったこともあり、それに合わせて再度帰省。この時に初めて親に福岡市役所受験のことを報告した。鴻池組にずっと勤めると思っていた両親は、この時どう思ったのだろうか。数年後、「福岡市役所に入ってよかったね」と言ってくれた。

現場の岡橋所長に「この現場を最後に退社したい」と伝えたのは、その年の暮れだったと思う。現場も一段落する翌 2 月中旬で退社。同期社員や現場関係者で退職祝いをしてくれた。その時にいただいた色紙は今でも大事に保管している。こうして 6 年間の鴻池組生活を終了。ちなみに退職金は 30 万円。鴻池組の皆さま、大変お世話になりました。

なお、この活動記録を書いている最中に写真の整理をしていたら、福岡へ帰る直前に高崎市にある群馬県立近代美術館を訪問しているようだ。磯崎新氏の代表作の一つである。大学時代と鴻池組に就職した直後に見に行った記憶があるが、東京を離れる前に再訪したくなったのだろうか。四角のキューブの中の縮小されたキューブが今でも印象に残っている。この手法は、福岡にあった秀巧社ビルでも見ることができた。



思い出の群馬県立近代美術館

(11) 東京から福岡へ

鴻池組を退社後、福岡へ帰ることになるが、新幹線で途中下車しながら実家のある行橋へと向

かった。最初に途中下車したのは名古屋で、まだ見ていなかった伊勢神宮を見学した。この頃は、昭和 48 年に第 60 回の式年遷宮が行われてから 13 年の時であり、次の遷宮に向けての準備が始められていた頃であろうか。式年遷宮は 20 年に一度宮地を改め、社殿や神宝をはじめ全てを新しくして、大御神に神殿へ遷ってもらうお祭りであり、持統天皇 4 年（690 年）以来 1300 年以上にわたり続けられている。20 年に一度行うことで、建築技術の継承の役目も果たしていると言われている。最近では平成 25 年 10 月の第 62 回目の遷宮が記憶に新しい。荘厳な雰囲気とともに、建築の原点に返ったような気がした。結界などは日本らしい空間である。

次は京都で下車し、奈良の室生寺に向かった。自然豊かな山中に位置する、気品のあるお寺である。鴻池組の先輩である大隅さんが大好きだったお寺で、寮の大隅さんの部屋で五重塔の写真を見たことがある。五重塔とシャクナゲの組み合わせが印象に残っていた。五重塔は、法隆寺に次いで日本で二番目に古い塔である。前から見ておきたかった建物であるが、ようやく対面することができた。高さは 16m 程度の小さな塔であるが、通常は上に行くに従い小さくなる屋根の出が、1 重目と 5 重目であまり変わらないため、重厚感を感じさせる。

その後、平成 10 年 9 月に奈良地方を襲った台風 7 号の強風により、高さ 50m ほどの杉の巨木が倒壊し、室生寺のシンボルである五重塔に著しい損傷を与えた。しかし、翌年から復旧工事を行い平成 12 年に無事終了し、今までの姿に蘇った。また機会を見つけて見に行きたい。全国の五重塔巡りもいいかも知れない。

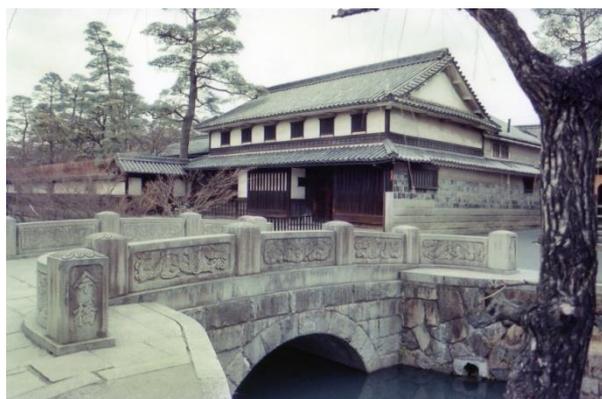


室生寺の五重塔

最後の下車地は倉敷で、伝統的な町並みと大原美術館を見学した。当時は今のように道路や町並みも整備されておらず、まだ素朴な町並みであったと思う。観光客も今ほど多くなかった。後で行くことになるが、ドイツのローテンブルクに似たような印象を持っている。多分、倉敷の町並み保存の提唱者である大原総一郎氏が「倉敷を日本のローテンブルクにしよう」と言っていた言葉が記憶に残っていたのだろう。また、倉敷は建築家の浦辺鎮太郎氏が愛した町並みでもある。

倉敷には 27 年後の平成 25 年の 9 月の「全国町並みゼミ」で再度訪れることになるが、長い間、地域や行政が一体となって守り、育ててきた町並みである。みんなが共通の想いを持っているの

は羨ましい。



倉敷の町並み(昭和 61 年3月)



倉敷の町並み(平成 25 年9月)

(12) 最初の海外旅行

福岡市役所に入るまでの1ヶ月を利用して、海外旅行を考えていた。最初はガウディの作品を見るためにバルセロナに行く予定で建築ツアーに応募したが、最小催行人数が集まらずに中止。急遽、他のツアーを探し、ギリシャ、イタリア、エジプトなどの古建築を見て回るようになった。この頃の海外の出来事としては、フィリピンで女性のコラソン・アキノ氏が大統領になったことが挙げられる。もう30年以上も前のことである。エジプトではカイロで何かの事件が起こり、筆者がエジプトに行くことに対して両親が少し心配していたことを思い出す。

さて、28歳にして初めての海外旅行であるが、今では懐かしい南回りルートで行くことになった。経由地は正確には覚えていないが、香港、バンコク、バーレーン経由でアテネに降り立たと記憶している。経由地では燃料補給のため、機内から降りることになるが、荷物は機内に置いていくよう言われ、大事な荷物がなくならないか不安であった。北回りルートもアンカレッジ経由の時代である。若い方々は知らないかも知れない。

アテネでは、やはりパルテノン神殿が強烈な印象として残っている。これはドーリア式（ドリス式）の神殿であるが、ドーリア式は古代ギリシャ建築における建築様式（オーダー）のひとつであり、イオニア式、コリント式と並ぶ3つの主要なオーダーに位置付けられている。大学で学んだことを実際に現地で見ることになるが、感激したことを今でも覚えている。また、エーゲ海に浮かぶ島々の統一された集落景観も印象的であった。ユーロが導入される前のギリシャの通貨

単位であるドラクマも懐かしい。



パルテノン神殿



エーゲ海に浮かぶ島の集落景観

イタリアではミラノのガレリア、ベネチアの運河、サン・マルコ広場、リアルト橋、フィレンツェの街並み、ローマのコロッセオ、パンテオンなどが印象に残っている。ポンペイの遺跡にも足を伸ばした。イタリアも北部の都市と南部の都市で印象が大きく異なっていた。ミラノで買ったバッグは10年以上使っていた。ベネチアで買った赤いベネチアングラスは、暫くリビングルームに飾っていたが、今は実家の倉庫にしまっている。いつ日の目を見るのだろうか。この時にベネチアの建物の立面図を並べた街並みポスターを購入したが、街並みへの興味を深めるきっかけになったと思う。



ガレリア(ミラノ)



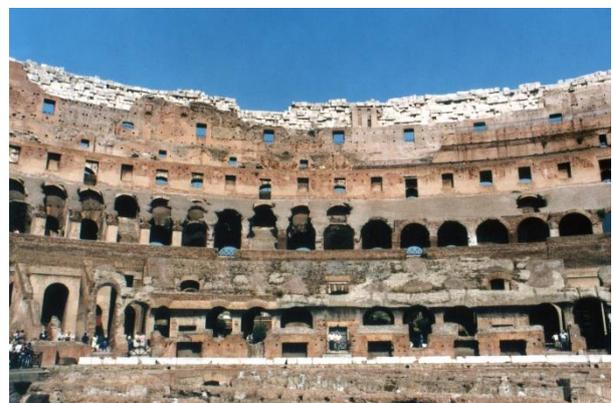
運河とゴンドラ(ベネチア)



フィレンツェの街並み



街並みポスター(ベネチア)



コロッセオ(ローマ)

エジプトは、車とラクダが共存する不思議な国であった。ピラミッドは「いつ頃」「どのような労働力によって」造られたかと言う点についてはおおむね解明されているようであるが、「なんのために」「どのような建築方法で」造られたかについては定説が無い。「王墓説」「日時計説」「穀物倉庫説」「宗教儀式神殿説」「天体観測施設説」など様々な説があるが、王墓説が強い。ということで、最初の海外旅行は古典建築を巡る旅であった。



ピラミッド



コラム2 ベネチア再訪

最初のヨーロッパ旅行から2年も経たない昭和62年10月に、都市形成史に興味のあったベネチアを再度訪問した。今回はウィーンからの寝台列車で到着後、博物館見学などの観光を済ませ、サン・マルコ広場で自由時間を楽しんだ。今回も特産のベネチアングラスと刺繍、街並みのポスターを購入し、夕食前にゴンドラ船に乗船した。何度来てもイタリアらしい場所だと感じた。ベネチアに憧れたのは、歴史作家の塩野七生氏が執筆したイタリアの古代の歴史小説や法政大学の陣内秀信先生の著書を読んでいたことが影響しているのかも知れない。ベネチアの歴史は興味深い。



サン・マルコ広場

3 福岡市役所時代

(1) 福岡市での生活スタート

福岡市役所に入る前に住まい探しのため、福岡市を訪れた。地下鉄沿線の西新か唐人町周辺で検討したが、いくつかの候補の中から、唐人町駅から徒歩1分の1Kのワンルームマンションに決定した。ここに1年間住むことになるが、天神や大濠公園からも近く、商店街もすぐ近くがあり便利で住みやすかった。週末の夕食や買物、調髪は商店街で済ませることが多かった。

また、唐人町はお寺も多く、とても庶民的なまちである。毎年11月の大相撲の九州場所では、近くのお寺が支度部屋として使われていた。ここも唐津街道沿線のまちである。その後、姪浜のまちづくり活動でお世話になる版画家の二川秀臣氏のご先祖が住んでいたまちでもある。活動記録を書いている現在、いろいろな地域や人とのつながりを感じるの、今まで精力的に活動してきた証であろうか。



現在の唐人町(平成 28 年 12 月)

さて、東京での6年間の生活を終え、福岡市に来た時の印象について触れよう。大学時代までは入院していた祖父の見舞いや買い物などで時々来ていたが、筆者にとっての第一印象は、博多駅前の福岡相互銀行本店の赤い砂岩の外壁とシンボリックな外観であり、天神の福岡銀行本店の巨大な吹き抜け空間であった。あくまで建築的な視点での印象であった。実際に住み始めて気が付いたことは、「海や山に近く、都市がコンパクトにまとまっていること」「通勤時間が東京時代の1/3程度であること」「食べ物が美味しいこと」などであった。



筆者にとっての福岡の第一印象: 福岡相互銀行本店(左)、福岡銀行本店(右)

(2) 福岡市役所入庁、住宅供給公社配属

福岡市役所に入庁したのは、昭和 61 年（1986 年）4 月である。筆者が 28 歳の時である。職員研修所での約 1 ヶ月間の研修を終え、4 月下旬に外郭団体の福岡市住宅供給公社建築課に配属された。

当時の住宅公社は、住宅の分譲が業務の中心であったが、かなりの数の在庫を抱えていた。マンションでは香椎浜ハイツ、若久ハイツ、小戸ハイツ、戸建住宅では美和台、香椎宮の台などである。そうしたこともあり、建築課に在籍した 3 ヶ月間は、売れるような住宅プランの検討をしていた。その後、すぐに営業課へ配属されることになったが、同じ営業部ということで当時の岡部営業課長が声をかけてくれたのだと思う。

営業課で主に担当したのは、まだ在庫のあった若久ハイツ、小戸ハイツ、香椎浜ハイツの販売である。在庫住宅には、価格設定や建築プランなどの問題があったと思う。3 年程で人事異動のある役所では、民間事業者と張り合うのは難しく、経験とセンスが必要と感じていた。筆者はいろいろな顧客と接する中で、顧客のニーズを把握し、次の住宅の企画や設計に活かすことになった。岡部課長はそこを狙っていたのだと思う。岡部課長の住宅を販売する情熱は素晴らしく、早朝のランニングを兼ねて販売用のちらしを各住宅の郵便受けに投函されていた。まさに民間の営業マン並みというか、それを超えていたのではないだろうか。

筆者はこの頃、結婚が決まり、新しい住まいを探すことになった。公社で在庫のあったマンションや戸建住宅を薦められ見学に行き、いろいろ検討したが、購入を見送った。その後、住宅情報誌で見ていた姪浜駅から徒歩 6 分程度の民間のマンションを見学。利便性や眺望も良く、12 階の 3LDK の部屋を購入することになった。当時は営業課に在籍したこともあり、民間のマンションを購入したことについては、しばらくの間黙っていた。ただ、これが姪浜のまちづくりに関わることになる最初のきっかけになったのかも知れない。

9 ヶ月間の営業課での業務を終え、再び建設課（組織変更で建築課⇒建設課）に戻り、主に美和台の分譲住宅を担当した。美和台は土地を売って、顧客に住宅会社を決めていただき、顧客の希望に沿って住宅を建てる「売り建て形式」であった。土日には、営業課の職員といっしょに現地の販売センターに行くことも多かった。図面や書類の審査、建築確認申請の手続き、現場監督など業務量としては結構多かったと思う。



昭和 62 年～平成 11 年まで筆者が住んでいた姪浜のマンション(平成 28 年 12 月)

(3) シーサイドももちクリスタージュ

住宅公社の3年目は、美和台だけでなく、新たな住宅地として泉けやき台を担当。泉けやき台は公社が予め決めた住宅会社と協議して住宅を建て、販売する「建て売り形式」で、全住宅のプランを配置図に貼って、全体の配置や窓の位置を調整したり、道路側の立面図を張って全体的にどのような街並みになるのかを検討しながら進めていった。また、外構を統一したイメージとしたり、通りごとにシンボルツリーを決めたりした。公社としては今までにない取り組みであり、販売も順調であった。多くの在庫を抱え経営状況が悪化していた公社としては、香椎浜ハイフレックスがマンションの再起第一戦であったのに対し、戸建住宅では泉けやき台が再起第一戦であった。

3年目の終盤からは、シーサイドももちの住宅地開発の仕事にも関わった。戸建住宅とマンションがあったが、筆者はマンションを担当することになった。筆者の市役所での思い出の仕事の一つである「シーサイドももちクリスタージュ」である。

筆者が関わり始めたのは、基本計画が終わり、基本設計が始まる頃である。基本計画では全体のコンセプト、戸数、階数、配置イメージなどが大まかに検討されており、基本設計では配置計画、建築計画、構造計画、設備計画、外構計画、景観計画などを詰めていくことになった。設計のパートナーは福岡では著名な三浦紀之建築工房であり、担当者は高嶋義文氏であった。工事監理も含め、三浦さんや高嶋さんとの付き合いは3年以上に及ぶことになる。ちなみに三浦紀之氏は、磯崎新氏の設計事務所に勤め、在籍中は北九州市立中央図書館や福岡相互銀行本店などを担当されていた。

基本設計では、全体のイメージや景観計画を大切にしながら、配置計画や住宅のプランなどを公社全体で検討していった。今までの福岡のまちづくりは博多湾に背を向けてきたが、シーサイドももちでは博多湾への眺望など博多湾に近いという特性を最大限に活かすことが求められた。例えば、建築計画においては、エレベーターや階段を二戸一形式にすることで、北側の居室からの眺望の確保が可能となった。また、冬は日当たりの良い南側の居室をリビングルームとして使い、夏は眺望の良い北側の居室（寝室）をリビングルームとして使う「リバーシブルリビング（ダブルリビング）」も採用し、これを積極的にPRしていくことになった。



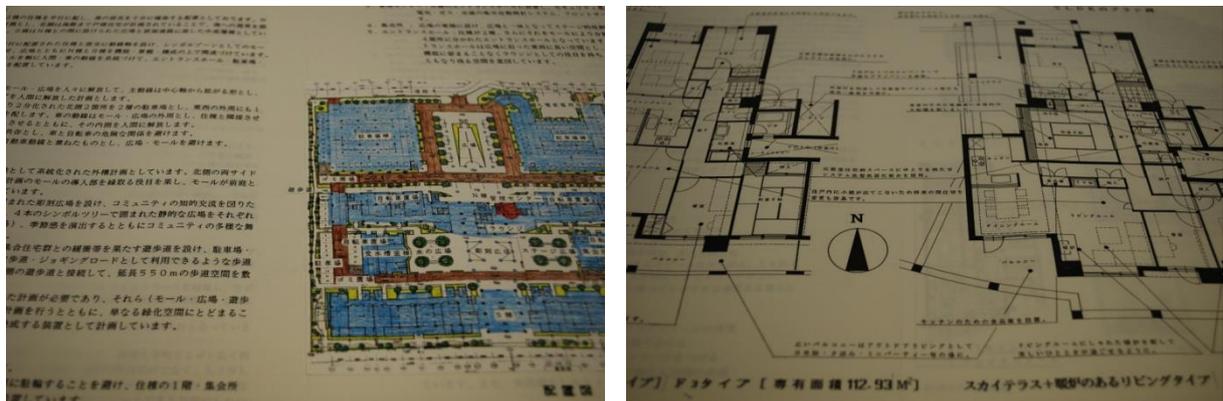
基本設計の模型写真

クリスタージュでは、建築計画はもちろん、景観や外構計画など、あらゆる面で今までの公社住宅にはないグレードやきめ細やかさが求められており、筆者は建設課の担当者として情熱を持って仕事に取り組んだ。

基本設計が終わり、実施設計途中で「構造」と「高規格住宅」の2つの建築評定の申請も行った。構造評定は高さが45mを超えたため、低層部の吹き抜けにバツレスを数箇所入れるなどの対応を求められた。かなりのコストアップにつながったと記憶している。

また、高規格住宅は住宅金融公庫（現住宅金融支援機構）の制度であり、顧客が金融公庫の融資を受ける際にかかなりの割り増しがあった。高規格住宅では建築全般にわたり質の高さが求められたが、クリスタージュでは当初から高規格住宅の基準に近い内容で設計を進めており、暖房設備以外に新たに付加するようなものはほとんどなかった。250戸を超える住宅全体を提案型の高規格住宅にした住宅は、全国的にもほとんど例がなかったのではないだろうか。

構造評定、高規格住宅評定とも平成元年の秋に日本建築センターの評定を受け、次のステップにつなげていくことになった。



「高規格住宅」の建築評定の資料

その後、各種の申請手続きも終わり、実施設計も佳境に入っていた。当初は、先行して建築・販売していた住宅・都市整備公団（現UR都市再生機構）のマンション「イーストステージ」を参考にして、販売価格を120万円/坪で考えていたが、全戸提案型の高規格住宅としたこと、構造評定への対応、建築資材（特に鉄骨や鉄筋）の高騰、設備関係のグレードアップなどにより、積算すると販売価格は160万円/坪程度になっていた。この価格だと販売は難しいということで、コストダウンを図るため、工事発注まで厳しい調整が続いた。

まずは、仕上げや設備関係のグレードダウンを中心に減額項目を検討。外観のデザインを特徴付けているフレームも一部減額対象とした。見積もりについても、役所単価ではなく、業者見積もりを参考にしながら見直しを進めていった。入札用の設計書（積算書）を作成する前は、三浦建築工房の高嶋さんと3日間連続で徹夜したこともある。一度家に帰り、夕食と入浴を済ませ、仕事に戻ったことも数回ある。ストレスで昼食をほとんど食べることができなかったこともある。若い頃で無理が効いた時であるが、役所生活で一番辛い時期だったかも知れない。

その後入札を経て、鴻池組を中心とした共同事業体が施工業者として決定した。鴻池組は筆者が以前勤めていた会社であり、これも何かの縁なのだろうか。工期は平成2年2月から平成4年4月の26ヶ月である。壱番館は16階建のSRC造で156戸、弐番館は7階建のRC造で98戸、

全体で 254 戸である。工事費は最終的には 70 億円を超えていた。



実施設計の模型写真

工事は、杭打ち工事から基礎工事、鉄骨工事、鉄筋工事、コンクリート工事など順調に進んでいった。この間、営業課では販売価格、募集時期の検討や広告会社の選定などを進めていったが、建設課も同じ営業部ということもあり、いっしょに検討に加わった。営業課の担当は上野孝雄さんで、筆者も上野さんとペアを組み建設課の枠を超えて業務に取り組んだ。一番苦勞したのは、まだ工事用の図面が確定していない段階で、販売用パンフレットの図面をチェックしないといけないことだった。設計図そのものも見直す余地があり、スケール 1/50 の図面と 1/100 の図面を相互に見直しながらパンフレットのチェックも進めていった。特に、ドアの開き勝手、コンセントやエアコンの位置などを入念にチェックし、施工図に反映させていった。



販売用パンフレット

モデルルームがオープンし、販売が始まったのは、平成 2 年の夏である。来場者が殺到し、冷房を入れていたモデルルームでも汗だくになって案内したことを思い出す。設計から工事発注まで苦勞したが、多くの方々に来場いただき、その苦勞も吹き飛んだ。クリスタージュのコンセプトやプランについてアドバイスしていただいたフランソワーズ・モレシャンさんを案内したこともある。よかトピア通りに面した工事現場の仮囲いにクリスタージュのロゴマークが描かれていたが、自家用車でこの前を通ったり、パンフレットを見たりする度に、2 歳になったばかりの長女が「パパの家」と叫んでいたことを思い出す。



モデルルーム



モレシヤンさんを案内(左が筆者)

クリスタージュの募集には筆者も分不相応ながら申し込んだ。壱番館の7階の東側の角部屋だった。倍率は70倍程だった。一番倍率が高かったのはモデルルームと同じタイプでちょうど700倍。全体的には平均35倍。東京ではバブルが弾けていたが、福岡ではまだバブルが続いていたのかわからないが、信じられないほどの人気だった。担当者としては、嬉しい限りである。

募集も終わり、工事も順調に進んでいった。製品検査などにも何回も行った。外壁タイルの検査では愛知県へ、ステンレスドアの検査では福島県へ、ガラスブロックの検査では滋賀県へ、樹木の検査では熊本県や鹿児島県へ行った。いろいろな業者さんの協力があつて建物がつくられていくことを改めて感じた。

躯体工事も終わり、仕上げ工事に入っていくと、筆者も現場に行く回数が増えていった。顧客に選んでいただいた内装の色彩やオプションの確認も入念に行った。現場では細かい部分までチェックしたが、すべては顧客のためである。現場の竹内所長や中島副所長には、いろいろと無理を聞いていただいた。設計監理の高嶋さんには現場と公社の調整をしていただいた。



韓国からの視察(右から2番目が筆者)



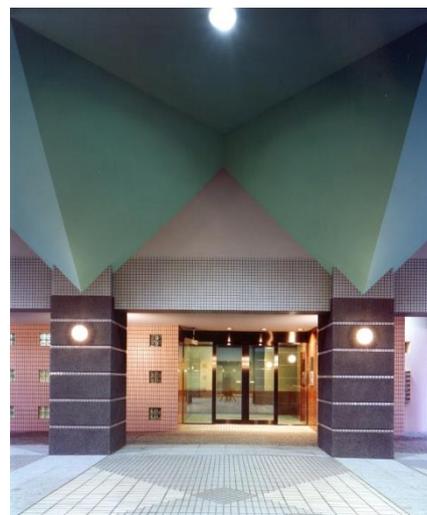
平成3年頃の筆者

工期は平成4年4月までであったが、終盤の2月から3月にかけては雨天の日も多く外部の仕上げ工事が思うように進まず、少し遅れ気味であった。足場が外れ、クリスタージュがその美しいフォルムを現し始めたのは、その年の3月である。よかトピア通りから見た時の感動は忘れられない。すべての足場が外れた時の印象は、クリスタージュの名の通りまさに「水晶」であった。その後も外構工事や植栽工事は続いていった。筆者は4月に別の職場に異動することになり、そ

の後の入居者の内覧会や手直しの対応については、後任の増永さんと樗木さんに任せることになったが、随分と迷惑をかけたことと思う。

福岡市役所に入って初めての職場となる会社に6年間在籍したが、クリスタージュを担当させていただいて感謝している。市役所生活の中でも、筆者の思い出の仕事の一つである。お世話になったすべての関係者の皆さまに厚く御礼申し上げたい。

工事が終わり竣工写真をもらったが、自分でも愛用のPCレンズと魚眼レンズ、望遠レンズで撮影した。一枚一枚の写真が思い出である。筆者が家族を連れて完成したクリスタージュを案内したのは、5月であった。家族に筆者の想いを伝えることができた。こうして、家族の支えがあってこそ「パパの家」は無事竣工を迎えた。



竣工直後(平成4年6月)

クリスタージュはその後、「住宅月間建設大臣賞」や「福岡県建築住宅文化賞」を受賞した。担当者としてとても光栄に思う。また、管理組合に引き継がれてからも、まちづくりや住宅についての当初の考え方を継承し、とても大事に使っていただいていることを嬉しく思う。筆者は隣の

愛宕浜に住んでいることもあり、西鉄バスや対岸の愛宕浜海浜公園、室見川など、いろいろなアングルからクリスタージュを見ることができる。筆者にとっては、いつまでも気になる建物であり、家族に誇れる建物である。



よかトピア通りから見る



北側の戸建住宅地区から見る



福岡タワーから見る



愛宕神社から見る



西福岡マリナタウンから見る

(いずれも平成 28 年 11 月～12 月)

(4) 都市景観室配属とシーサイドももち都市景観形成地区の指定

住宅公社での6年間の仕事を終え、地下鉄3号線沿線のまちづくりを1年間担当した後、都市景観室に配属された。平成5年4月のことである。都市景観室に異動になる直前、組織変更で交通局に20日間ほど在籍したが、当時の係長に交通局の施設を案内してもらった時に、博多部御供所の聖福寺にも連れて行ってもらった。都心部にこれほど歴史と静寂のあるお寺があるとは知らなかった。それも住宅公社の近くではないか。仕事に夢中になり、地域のいいところを見過ごしてきたのだろう。よくある話である。その時には、ここが次の仕事のフィールド、そしてクリスタージュに続く筆者の思い出の場所になるとは夢にも思わなかった。



御供所の聖福寺(平成5年頃)

さて、都市景観の話に入ろう。都市景観には大学時代から興味はあった。鹿島出版発行のSD選書「都市の魅力」を読んで、大学1年の春休みに小倉中心部の都市景観を調査・分析したことがあった。これは大学の課題ではなく、自分でテーマを決めて自主的に行ったものである。その頃から都市景観に興味を持ち始めていたと思う。また、社会人になってからは、歴史的町並みへの興味も出てきた。新しい街並みとしては、槇文彦氏の代官山プロジェクトや宮脇壇氏コーディネートの六甲アイランドプロジェクトなどに興味があった。

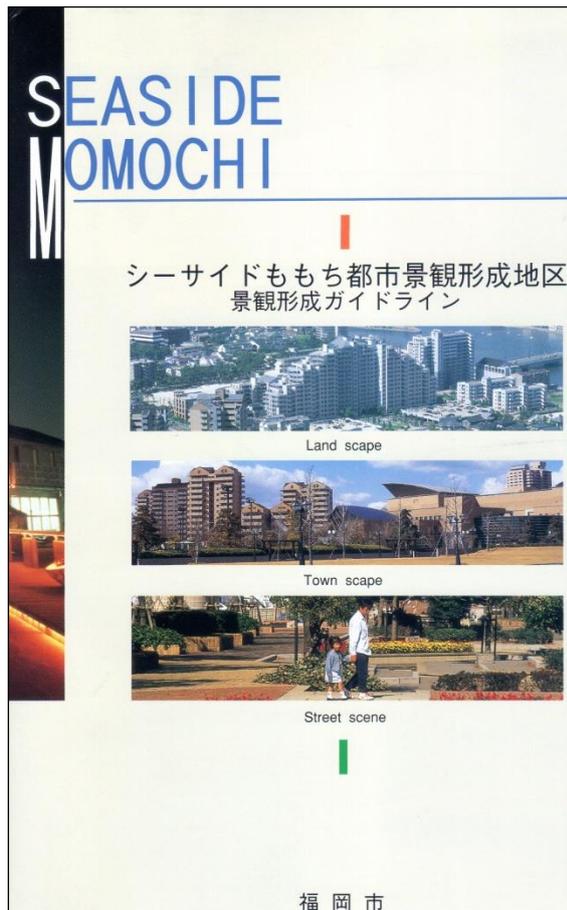
都市景観室で筆者が業務として担当したのは、都市景観条例に基づく「都市景観形成地区の指定」である。これは地域が主体となって、それぞれの地域の特性を活かした景観まちづくりを進めていく手法である。当時は「シーサイドももち地区」「御供所地区」「天神地区」「空港西側エアフロント地区」の4地区がその候補に挙げられていたが、この中で筆者の思い出に残るのがシーサイドももち地区と御供所地区である。

シーサイドももち地区は、まちづくりの指針であるアーバンデザインマニュアルに沿ってまちづくりが進められている埋立地だけでなく、よかトピア通り沿道の市街地を含めたエリアを対象として、土地利用ごとにゾーニングを行い、それぞれの景観形成方針と基準を作成し地元協議を進めた。上司の一ノ宮係長や屋外広告物担当の藤原係長と3人で毎日のように地元に行き、「福岡空港周辺にあるような大型広告物が、よかトピア通り沿道にも乱立する可能性が高い」ことなどをシミュレーション画像で説明し、景観形成地区指定への理解を深めていただいた。

どの地域も景観形成地区指定には賛成であったが、難航したのは百道浜戸建住宅地区である。ここは当初から建築協定や緑地協定によるまちづくりが進められ、地元も熱心に取り組んでいた

が、協定の細かな運用を巡り景観形成地区指定の合意がなかなか得られなかった。しかし、粘り強い協議の末、合意を得て、福岡市内で初めて景観形成地区として指定した。平成8年4月のことである。筆者が都市景観室に配属になってから3年の月日が流れていた。

また、この年の秋には都市景観大賞（国土交通大臣賞）を受賞した。受賞理由はアーバンデザインマニュアルに基づくこれまでの取り組みと、それを将来にわたり維持・育成していくため景観形成地区に指定したことである。筆者も当時の都市整備局長に随行して表彰式に行かせていただいた。担当者としてクリスタージュに続き、2回目の国土交通大臣賞に貢献したことになり、嬉しく思う。



シーサイドももち都市景観形成地区 景観形成ガイドライン

なお、シーサイドももちのエピソードとしては、景観形成地区指定の地元説明を進めている最中に、よかトピア通りに面した建物の屋上に大型看板が無許可で設置されたり、福岡ドームの正面階段にビール会社の広告が設置され、話題になったことなどであろうか。今となっては、いい思い出である。

筆者は隣の愛宕浜に住んでいることもあり、福岡市総合図書館や福岡市博物館などシーサイドももちに行く機会が多い。また、能古島に行くフェリーや愛宕神社からシーサイドももちの街並みを見る機会も多い。いつも街並みの状況は気になっているが、概ね良好な形で維持されていると思う。



シーサイドももちの現在の街並み(平成 28 年 11 月～12 月)

(5) 御供所都市景観形成地区の指定

次に御供所のことに触れよう。前述のとおり、筆者が御供所の存在を知ったのは、交通局の上司に案内された平成5年4月中旬である。都市景観室に異動になる直前であった。

最初に御供所を歩いた時の印象は、「お寺が多い」「都心部にこれほどの歴史的環境が残っている地域は珍しい」ということである。歩けば歩くほど新しい発見があった。何よりも昔ながらの地域コミュニティが現在も息づいていることが素晴らしい。最初の思い出は、その年の山笠の時に御供所まちづくり協議会の瀧田会長の自宅にお酒を持って行き、大きな器で日本酒をいただいたことである。料理はすき焼きだった。とても美味しかった。その後、秋山副会長の自宅にも行き、お酒をいただいた。普段は静かなまちであるが、山笠の時はとても賑わっていた。

また、御供所まちづくり協議会の役員との最初の打ち合わせ(顔合わせ)は、その年の9月であった。場所は御供所の老舗割烹「たぬき」である。まちづくり協議会からは瀧田会長、秋山副会長、富田副会長、船越事務局長の4人、都市景観室からは大和室長、一ノ宮係長、森係長、筆者の4人が出席し、それぞれ御供所への想いを語り合った。この活動記録を書いている時に昔の打ち合わせ録を読み返してみた。その中に協議会の意見として「御供所の最大の課題は、人が定住し、まちが活性化することであり、地域の特徴である歴史性を活かして定住、活性化につなげていきたい」「景観だけでなく、地域のまちづくりやライフスタイルに踏み込んで考えてほしい」などと記されている。懐かしい。もう24年前のことである。



聖福寺と幻住庵の間の路地



伝統的町家建築と聖福寺



普賢堂の町並み



聖福寺の前を走る山笠

(※写真はいずれも平成5年頃撮影)

御供所については、まちづくり協議会を平成6年10月に都市景観条例に基づく「景観づくり地域団体」に認定し（福岡市では第1号）、地域との協働のまちづくりをスタートした。当時はまだ「住民参加のまちづくり」が叫ばれ始めた時であり、福岡市でも博多部が先駆的な事例となった。御供所も他の地域と同様、地域の方々が住み慣れた場所に対して魅力を感じていないことが一番の課題であった。このため、住民アンケート調査、ワークショップ、講演会、先進都市視察などを行い、少しずつ地域の関心を高めていった。

この中で特に印象に残るのは、平成8年3月に御供所小学校で実施したワークショップである。当初は50名程度の参加を予定していたが、地域内外から150名以上の市民に参加していただいた。内容も講演会、まち歩き、ワークショップ、シンポジウムと盛りだくさんであった。



景観づくり地域団体の認定(平成6年10月)



御供所小学校でのワークショップ(平成8年3月)

また、先進事例を調査するため、いろいろな地域に視察に行った。筆者がまちづくり協議会の会員といっしょに調査に行ったのは、京都、奈良、富田林、出石、長浜、金沢などである。どこも歴史的な環境を活かしたまちづくりの先進地である。最初に京都に視察に行った時には、京都市の当時の景観担当係長の荻谷勇雅氏に説明していただいた。荻谷氏は後に文化庁に行かれ、全国町並み保存連盟でも活躍されている。その後、筆者は何回も荻谷氏の話をお聴きする機会に恵まれた。御供所の取り持つ縁であろう。

富田林では、前日にお酒をたくさん飲み、当日も吐き気が続き最悪の体調であった。しかし、現地に到着し、冒頭の挨拶をする時には何とか回復。瀧田会長が「挨拶する時はしっかりしとった。さすがやねー」。昼食にお寿司を用意してもらっており、お腹の具合が少し気になったが、しっかりごちそうになった。富田林の代表が「まちづくりは焦るな、怒るな、根気よく」と言っていたことが印象に残っている。姪浜でも筆者がよく使った言葉である。

出石は土色の町並みが特徴で、蕎麦やお酒も美味しかった。雪もかなり積もっていたことが記憶に残る。金沢でも雪を体験することができた。金沢は雪国の印象があるが、雪が積もることは少ないようだ。雪の兼六園や茶屋街、武家屋敷も風情があった。それぞれの視察は、まちづくり協議会のメンバー数名と筆者が参加し、コミュニケーションや信頼関係を築いていった。



京都市西陣大黒町の視察



視察を終えて懇親会(京都)



雪の兼六園(金沢)



雪の武家屋敷(金沢)

その後も、まちづくり講演会、ワークショップなどを重ねながら、景観づくりへの関心を高めていったが、苦労したのは、どういう景観を目指すのか、どうしたらいい景観になるのかを地域の方々にわかりやすく伝えることだった。そのため、できるだけ図やイラストを使い、場合によ

ってはパースや模型を作成することもあった。

こうして御供所まちづくり協議会のメンバーと協議を重ね、景観形成地区の区域、方針、基準の案を作成し、平成10年5月から地元説明会を始めた。地域の方々は概ね前向きだったが、別の場所に住んでいる地権者の中には「なぜ聖福寺が中心なのか。博多の中心は櫛田神社だ。」と市役所に怒鳴り込んで来る方もいた。また、御供所は山笠の流れは大半が東流であるが、一部恵比寿流の地域があり、地域コミュニティの難しさを痛感することが何度もあった。



まちづくり講演会やワークショップの開催(平成8年)

いろいろなことはあったが、この年の秋にシーサイドももち地区に続く景観形成地区の第2号として指定した。地元に入って5年半かかったが、それだけ思い入れも多い。

2.都市景観形成地区指定について

御供所地区固有の歴史・文化を活かし、地域と行政の協働によるまちづくりを推進していくために、福岡市は同地区を平成11年1月18日に「都市景観形成地区」に指定しました。また、区域内のそれぞれの特性を活かしたまちづくりを進めていくため、下図のようなゾーニングを行いました。

2-1地区全体の景観形成方針

- ・聖福寺、承天寺、東長寺などの歴史的寺社群、境内の豊かな緑、地域コミュニティを育んできた路地や木塀・割りなどを活かし、歴史と文化の中に生活と祭りが息づく都心居住地区としての魅力あるまちなみの形成及び保全を図る。
- ・歴史的環境地区にふさわしい街路、散策路、オープンスペースなどの整備を進め、歴史的建造物やまちなみなどを軸に歴史回遊ネットワークの形成を図る。

2-2区域とゾーニング

寺社境内地区
寺社境内をその範囲とします。

寺社隣接地区
寺社境内地区に隣接した地区をその範囲とします。

首賢堂地区
旧町名の上音賀町、下音賀町及び北船町の一部にあたる地域です。

西門通り地区
西門通りに面する敷地をその範囲とします。旧町名の西門町、中小路上魚町、中魚町、下魚町にあたります。

御供所通り地区
御供所通り及び隣接路地街路沿いの地区をその範囲とします。旧町名の上小山町、御供所町、下東雲町、金屋小路、北船町などにあたります。

国体道路・承天寺周辺地区
国体道路沿い及び承天寺などの周辺をその範囲とします。御供所通りに面した東長寺以南の高層建物群がこの地区に含まれます。

櫛田町地区
大博通り沿いの高層建物群の裏手に位置する部分をその範囲とします。旧町名の上櫛屋町、下櫛屋町にあたります。

3.まちなみをつくるための工夫

ここでは、御供所地区のまちなみをつくるための工夫について、イメージ図や各都市の事例を通して説明します。それぞれの地区の景観形成基準を理解して、以下に述べるような工夫をする必要があります。

3-1建物の配置と高さ

ここでは、今までの町家が継承してきた約束事についてふれます。これは、御供所地区のまちなみをつつてきた重要な要素ですので、今後とも十分配慮されることが望まれます。

Aまちなみ壁面線
1階の庇を道路境界線にそろえた場合、建物の壁面は道路境界線から1m程度の位置にあり軒下空間が確保されています。この壁面の位置を「まちなみ壁面線」とします。

Bまちなみ斜線
建物による道路空間の囲み具合を示すもので、軒先空間と道路に面した部分の軒先の高さが1:1程度の比率にあるのが特徴です。これによりヒューマンスケールのまちなみが確保されています。道路中心線から1:2で立ち上がる斜線を「まちなみ斜線」とします。

① A.Bともに適用した場合
まちなみの連続性に優れ、かつ御供所地区の各通りで見られたまちなみに近いものです。

② Aのみ適用した場合
突出した高い建物により、まちなみの連続性が損なわれます。

③ Bのみ適用した場合
建物が後退したため壁面の凸凹ができ、まちなみの連続性が損なわれます。また、仕上げをしていない隣家の側壁が見えてきます。

④ A.Bどちらも適用しない場合
何も基準を定めないと、まちなみが乱雑になります。

御供所都市景観形成地区 景観形成ガイドライン

景観形成地区指定後、街路整備やお寺の塀・門の修景は進んでいる。また、筆者が御供所に関わり始めた平成5年頃は福岡市民にほとんど知られていなかった御供所であるが、景観づくりの取り組みを通して「寺町・御供所」として知られるようになったことは本当に嬉しい。



東長寺五重塔(左)と聖福寺境内(右)



博多千年門



承天寺前の道路



聖福寺



普賢堂の町並み

最近の御供所(平成28年12月)

(6) 御供所・瀧田喜代三さん

御供所を語る時に、御供所まちづくり協議会の初代会長の瀧田喜代三氏を抜きには語れない。御供所まちづくり協議会が発足したのは、平成5年3月である。瀧田さんは当時、現役の会社員で忙しい時期であったと思われるが、地域の重鎮の方から推され初代会長に就任した。筆者が都市景観室に配属されたのは、その年の4月である。それ以来の付き合いである。

瀧田さんは40代後半の頃、勤務先から東京転勤の話があったが、「わしゃ博多の人間ですけん」と断ったそうだ。半世紀以上、山笠を昇ってきたが、その間、祭りの伝わる博多部の人口が減少し、瀧田さんの所属していた櫛田流が消滅し、東流に移る悲哀も味わったそうだ。それだけに、山笠の伝統を継承し、後世に残す責任を重く受け止められた。平成20年～25年に第9代博多山笠振興会の会長もされ、「山笠を世界に発信したい」という大きな目標を持ちつつ、一方で祭りの齋行には細心の注意を払われた。

また、筆者は瀧田さんほどリーダーシップのある方を知らない。それを強く感じたのは、景観形成地区指定や道路整備の説明会の時である。総論賛成で各論反対はよくあることであるが、いろいろな意見が出て、地域のために前向きにまとめていく姿勢は素晴らしい。先輩に敬意を表し、後輩を育てることも大いに見習いたい。筆者の長男も就職する前には、ぜひ瀧田さんに会わせたいと考えている。

瀧田さんとはよく飲みにも行ったものだ。協議会の定例会やイベント後の飲み会はもちろん、山笠期間中の直会（なおりい）には毎年のようにお酒を持参した。直会にはいろいろな方々が来られており、瀧田さんの人柄や顔の広さがよくわかった。山笠だけでなく、いろいろな面で人とのつながりをもたれている方である。また、瀧田さんとは、奈良、富田林、京都、出石、八女などの先進都市視察にも行き、視察後は各地域の美味しいお酒を飲みながら、御供所のまちづくりについて語り合ったものである。奈良の視察が終わり、みんなでお酒を飲みに行ったが飲み過ぎたのだろうか、翌日の富田林に行くまでは吐き気が続き最悪の体調であったことも、今ではいい思い出である。出石では、名物の出石蕎麦を食べながら美味しいお酒を楽しんだ。



景観づくり地域団体の認定(左から四番目が瀧田さん)



ワークショップ(左が瀧田さん)

御供所まちづくり協議会会長時代の瀧田さん

筆者は平成12年3月まで都市景観室に在籍したが、その後も瀧田さんとの付き合いは続いている。山笠での陣中見舞いにはできるだけ行くようにしている。政令市の会議がある時などには、瀧田さんに山笠の講演をしてもらったことも数回ある。唐津街道姪浜まちづくり協議会でも平成

27年5月に講演してもらったが、そのリーダーシップは見習うものがある。参加者全員が感じたことだと思う。その時の懇親会は姪浜の名店・御園（みその）。美味しい魚料理とお酒、楽しい会話で盛り上がったことは言うまでもない。姪浜で獲れるトンマという魚が特に美味しかったと言っていた。



瀧田さんの講演会



瀧田さんを囲んでの懇親会

その数週間後、親類の方がアメリカから来られるということで、瀧田さんに代わって御園を予約した。トンマを食べたいと言っていた。また、その年の山笠の直会でも御園を使っていた。こうして人のネットワークがまちのネットワークにつながっていくのだろう。瀧田さん、また御園にトンマを食べに行きましょう。



瀧田さんの本場の博多手一本

(7) 海外派遣研修

平成7年の海外派遣研修も市役所生活の思い出である。これは、「欧州における都市デザインの潮流」をテーマにロンドン、フランクフルト、ベルリン、シュトゥットガルト、バルセロナ、パリの6都市の都市景観施策について約3週間にわたり調査を行ったものである。目的は、福岡市の今後の各地域固有の歴史や魅力資源を活かしたまちづくりや景観づくりの参考にすることであった。

当時は、御供所やシーサイドももちの景観形成地区指定の地元協議などを進めている最中であったが、上司や同僚の理解と協力を得て行かせていただいた。

各都市の調査テーマ

○ロンドン

- ・ 歴史・伝統を尊重したシティの街並み景観コントロール制度について
- ・ 歴史的文脈を現代建築に取り入れているドックランドの都市デザインについて

○フランクフルト

- ・ 国際コンペの導入による公共建築の先導的役割について
- ・ 都市空間の質的改善を目的とした都市デザイン事業について

○ベルリン

- ・ 都心居住をテーマにした、マスターアーキテクト方式及び住民参加方式によるまちづくり・都市デザインについて……IBA（国際建築展ベルリン）
- ・ ベルリンの壁崩壊後の首都移転計画及び新都市計画について

○シュトゥットガルト

- ・ Bプランによる街並み形成状況について
- ・ 環境共生型の都市デザインについて
- ・ 人にやさしい公共交通と、回遊性の高い歩行者空間について
- ・ 歴史的建造物群の保全と都心居住への一体的取り組みについて

○バルセロナ

- ・ ロマネスク、カタロニアゴシック、そしてアントニオ・ガウディに代表されるカタロニアモデルニスモの建築と現代建築が調和し、歴史的継続性・重層性を感じさせるバルセロナの都市デザインについて
- ・ 近年の都市再建プロジェクトについて

○パリ

- ・ 主要軸線、シンボル広場及びそれらのネットワークについて
- ・ 歴史都市と先端建築が融合したグラン・プロジェクトのまちづくりについて





ロンドンの街並み



フランクフルトの街並み



ベルリンの街並み



シュトゥツガルトの街並み





バルセロナの街並み



パリの街並み

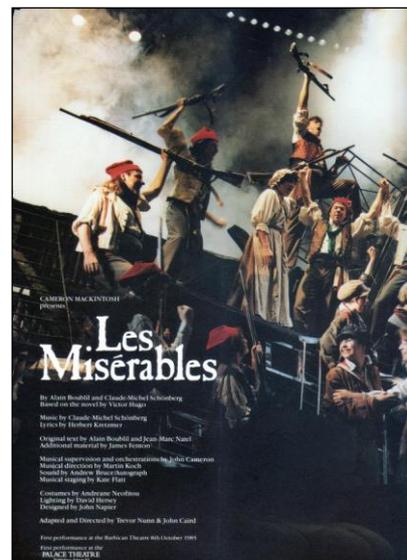
海外派遣研修を終えての当時の感想

今回調査した6都市は、どこに行っても画一化・均質化した日本の都市空間とは全く異なり、素晴らしい刺激を与えてくれた。フランクフルトのムゼウム・ウファープロジェクト（公共建築の先導性）、ベルリンの首都移転計画と IBA（国際建築展ベルリン）、シュトゥットガルトの環境共生型の都市デザイン、歴史的な重層性・継続性を感じさせるバルセロナの都市デザイン、度肝を抜くパリのグラン・プロジェは、どれも個性的で魅力あるプロジェクトであった。

特に感動したのが、シュトゥットガルトの徹底的に人にやさしく、エコロジーに配慮された都市空間である。今後の日本のまちづくりの素晴らしい参考例となるだろう。また、ベルリンの首都移転計画をはじめとする各種のプロジェクトはとても感動的であった。東西冷戦後のベルリンの変容は驚くべきスピードで進んでおり、国際的な建築家による大胆なプロジェクトは未来の輝かしいベルリンを約束しているように思える。こうした取り組みは、すぐ福岡市のまちづくりに役立つものではないが、歴史的な文脈を現代に大胆に取り入れていくというスケールの大きな発想や、徹底した環境共生型の都市デザインなどは、大いに参考にしていきたい。

真面目な報告書は興味のある方に見ていただくとして、この研修期間中のエピソードを紹介しよう。ロンドンでは日本で予約済みのミュージカル「レ・ミゼラブル」をパレス・シアターで観たが、日中かなりの時間をかけて歩き回っていたので、その疲れもありほとんど寝ていた。しかし、本場のミュージカルは迫力があつたことだけは覚えている。イスラエルのラビン首相が暗殺されたニュースを見たのは、ロンドンのホテルだった。

また、どうしても見ておきたい場所があつたため、フランクフルトへの移動の直前までロンドンのまちを歩き回っていた。そのため、タクシーで空港まで移動することになったが、持ち合わせの英国ポンドが少し不足、持っている限りのポンドで勘弁していただいた記憶がある。



ロンドンでは「レ・ミゼラブル」を鑑賞

フランクフルトには3泊したが、一人の夕食は不安であり、ビールとソーセージ、パンを中央駅で買い込み、その日の反省と翌日のスケジュールの確認をしながら夕食を取った。ちなみにドイツでは、朝食はホテルのバイキングをしっかりと食べ、昼食は軽食で済ませ、夕食は現地で買った食材とビールで済ませることが多かった。多分、朝食が一番充実していた。

ベルリンでは、やはり「ベルリンの壁」が印象的であつた。1989年11月にベルリンの壁が崩壊するまで約30年の間に、境界沿いの建物から飛び降りる子どもや、地下通路を掘ったり、気球や車でこの壁を乗り越えようとした人々の涙ぐましい努力を「ベルリンの壁博物館」で見ることができた。中には、監視兵に見つかって射殺された人もいる。そうした悲劇の歴史をぜひ見てほしい。ここで購入した絵葉書で家族に手紙を出したが、その手紙が現在も手元に残っている。懐かしい。

また、せっかくの機会であつたので、ベルリンフィルハーモニーや国立歌劇場でコンサートを聴いたり、オペラを鑑賞したりして有意義な時間を過ごした。フィルハーモニーでは最前列の席、歌劇場ではバルコニー席だったと記憶している。

シュトゥットガルトは、世界に誇る自動車メーカーのベンツとポルシェのまちでもある。筆者はベンツ本社にある博物館を見学した際、ミニチュア模型を購入しようとしたが、夕方の5時を少し過ぎており、レジを閉めたということで、購入できなかった。いかにも几帳面な国ドイツらしいなと思った。模型は、その5年後の平成12年に再度シュトゥットガルトを訪問する機会があり、そこで2台を購入。こんなに早く再訪できるとは思っていなかった。



ベンツのミニチュア模型

シュトゥットガルトからバルセロナには小さなプロペラ機で向かったが、上空からシュトゥッ

ツガルトの地形の構造が一望できた。東側にネッカー川が流れ、北、西、南はすべて丘陵地で、それに囲まれた盆地に市の中心部が広がっていた。周辺の黒い森（シュヴァルツヴァルト）が印象的だった。

次はバルセロナ。海の向きは違うが、都市の規模や気候、環境が福岡に似ていると思った。ここで、私費で調査に来ていた福岡市役所の森俊彦さん、古賀有子さんと合流。今まで一人で不安な面もあったが、ほっとしたことを覚えている。彫刻家の外尾悦郎さんには多くの時間を割いていただき、現地案内や食事につき合っていた。サグラダ・ファミリア教会では、普段入れない場所にも案内していただいた。ガウディ研究家のパセゴダ教授にもお会いすることができた。

福岡市役所に入る前にガウディの建築を見る予定であったが行けなかったため、9年越しの希望がかなったことになる。お土産としてガウディの作品集を集めた翌年のカレンダーを買って帰り、みんなに喜ばれた。



ガウディの作品集のカレンダー



ガウディ研究家のパセゴダ教授を囲んで(右が筆者)

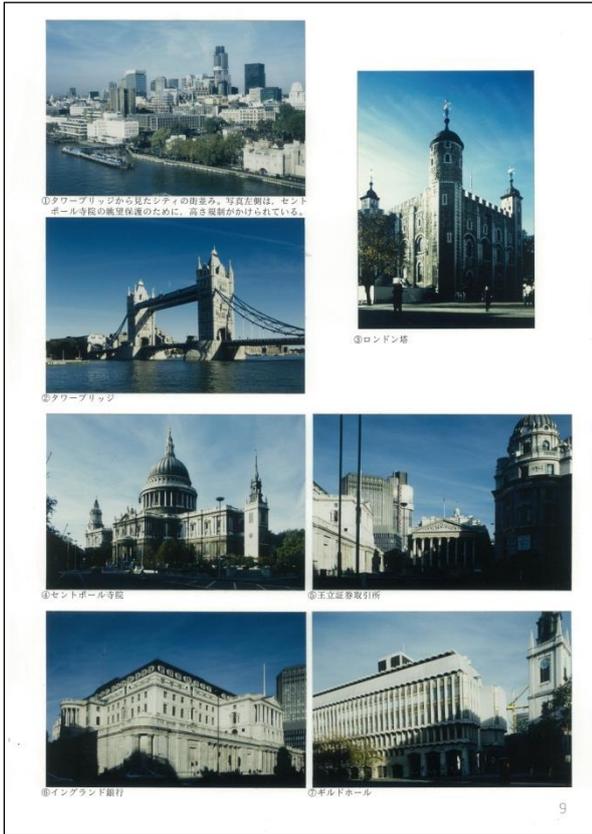


彫刻家の外尾悦郎さんと記念撮影(左が筆者)

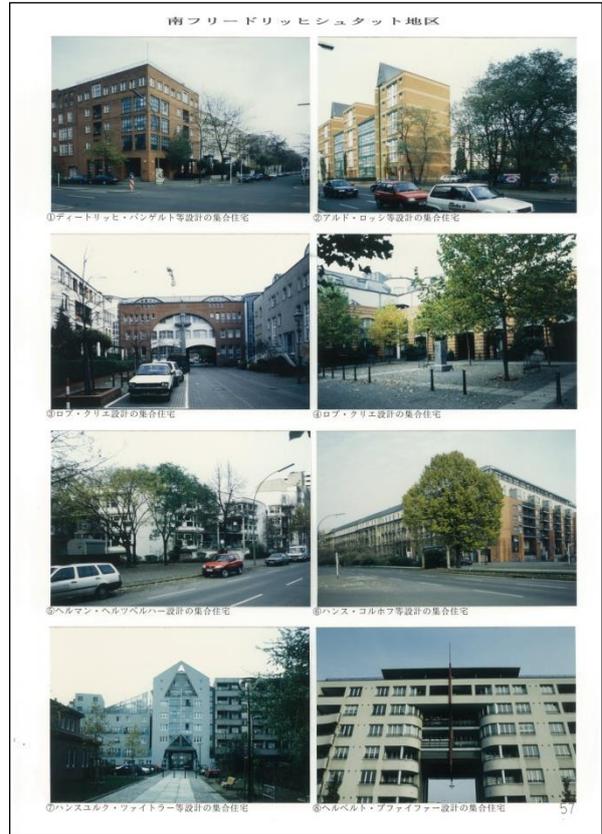
最後はパリ。パリでは西南学院大学の後藤新治先生に案内していただいた。先生が住んでいた「イロ（中庭）」のあるアパートも訪問。都市型高密度住宅が広場の発達につながったことがよく理解できた。クレイジーホースではナイトショーも見学。日本とは違い、健康的なキャバレーである。いっしょに行った古賀さんも楽しんでいただいたようだ。また、ルーブル美術館ではモナリザをゆっくり観賞することができた。ストライキの影響でエールフランス機の運航が心配されたが、無事に出国することができた。

こうして3週間以上にわたる海外研修は無事に終了。この研修では多くの方々にお世話になった。ドイツの各市役所の皆さまには下手な英語で迷惑をかけた上、貴重な資料まで提供していただいた。また、バルセロナでは外尾さん、パセゴダ教授、パリでは後藤先生に貴重な時間を割いていただき案内をしていただいた。また、バルセロナとパリで行動を共にした福岡市役所の森さんや古賀さんには、楽しい時間を過ごさせていただいた。この場をお借りして皆さま方に改めて感謝の意を表したい。

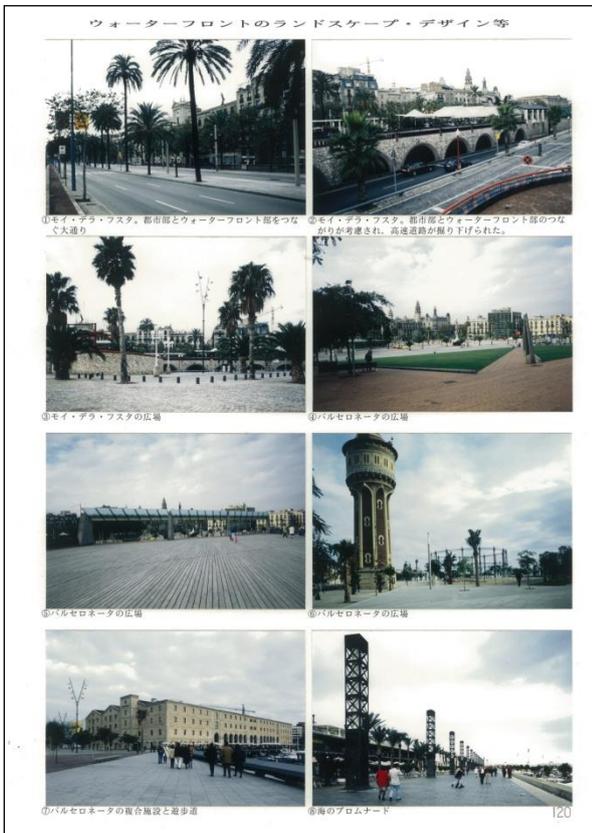
【海外派遣報告書の抜粋】



ロンドン:シティの街並み



ベルリン:IBA(国際建築展ベルリン)

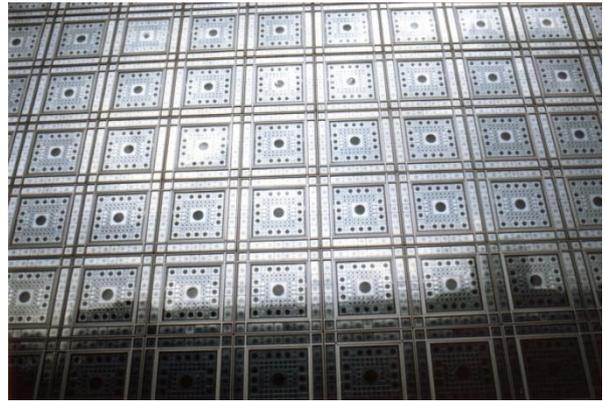


バルセロナ:ウォーターフロントのランドスケープ・デザイン



パリ:グラン・プロジェ

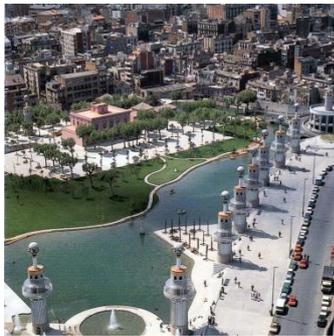
【今回の研修で思い出に残った建築物や都市空間】



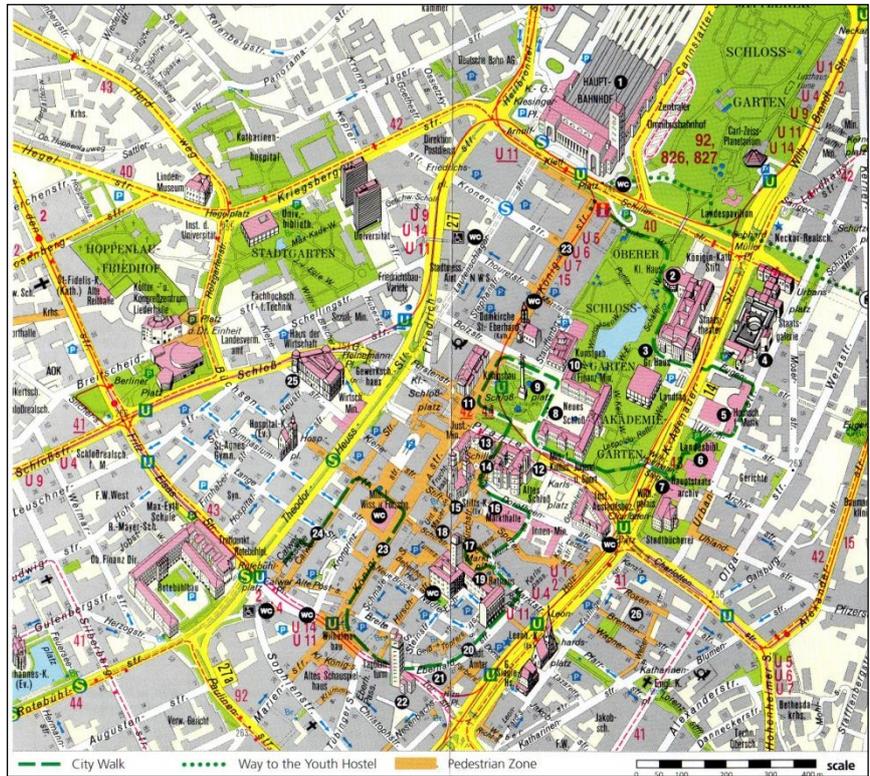
アラブ世界研究所(パリ)



オルセー美術館(パリ)



バルセロナ:ランドスケープ・デザイン



シュトゥットガルト:徹底的に人に優しい公共空間

(8) 福岡都市科学研究所配属

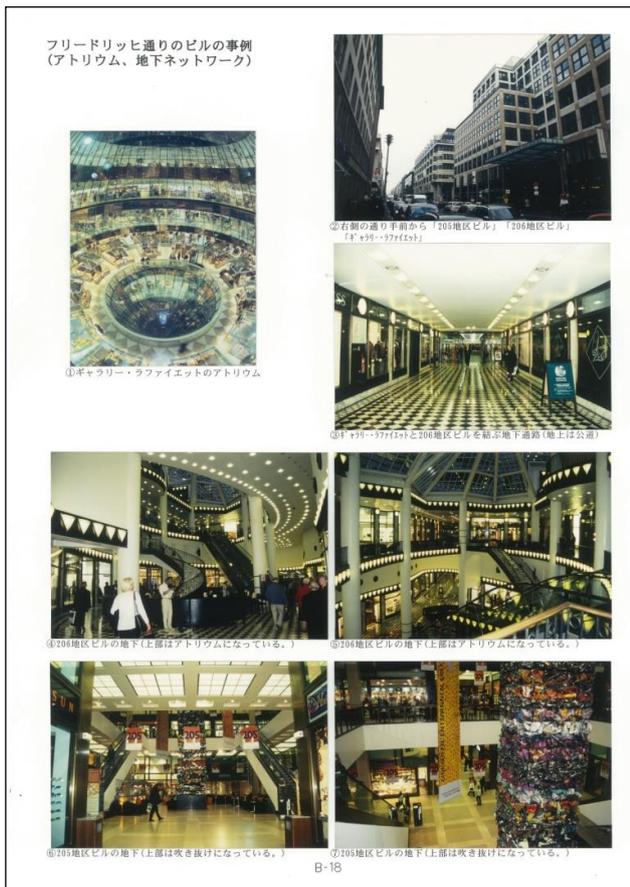
平成12年4月から研究主査として福岡都市科学研究所(通称 URC。現福岡アジア都市研究所)に配属された。1年目は「福岡の地下空間の利用に関する研究」を担当。ドイツのベルリンやシュトゥットガルト、オランダのアムステルダム、ユトレヒトなどに調査に行かせていただいた。また、研究成果を早稲田大学で開催された土木学会で話したこともある。責任者の樗木武先生の紹介もあり、建築学会にも所属していないのに、いきなり土木学会で話すことになった。あまり専門の分野ではなかったこともあり、かなり緊張していたことを覚えている。



ベルリンでのヒアリング



アムステルダムでのヒアリング



ベルリンの事例



アムステルダムの事例

「福岡の地下空間の利用に関する研究」での海外都市調査

2年目と3年目は「福岡大都市圏における広域連携のあり方に関する研究」を担当した。責任者は福岡大学の阿部真也先生であり、筆者は阿部先生といっしょにイギリスのコッツウォルズ、エジンバラ、ドイツのハノーバーなどに調査に行かせていただいた。

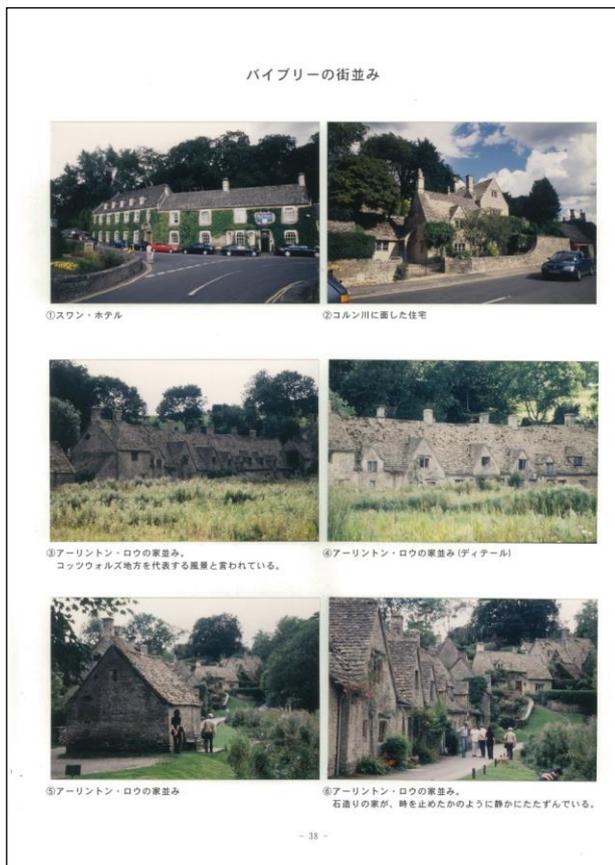
この研究では、広域連携のメリットをいかにわかりやすく伝えていくかが大きな課題であった。そのため、研究論文だけでなく、地域デザイナーの高山美佳氏に依頼して研究の成果を「ひろがる つながる」というわかりやすい絵本にさせていただいた。筆者の長男が田主丸に遊びに行った時のことが印象に残り、長男をモデルにしたそう。研究には専門家だけでなく、市民にわかりやすく伝えていく視点が大切である。これは地域のまちづくりにも同じことが言えるのである。



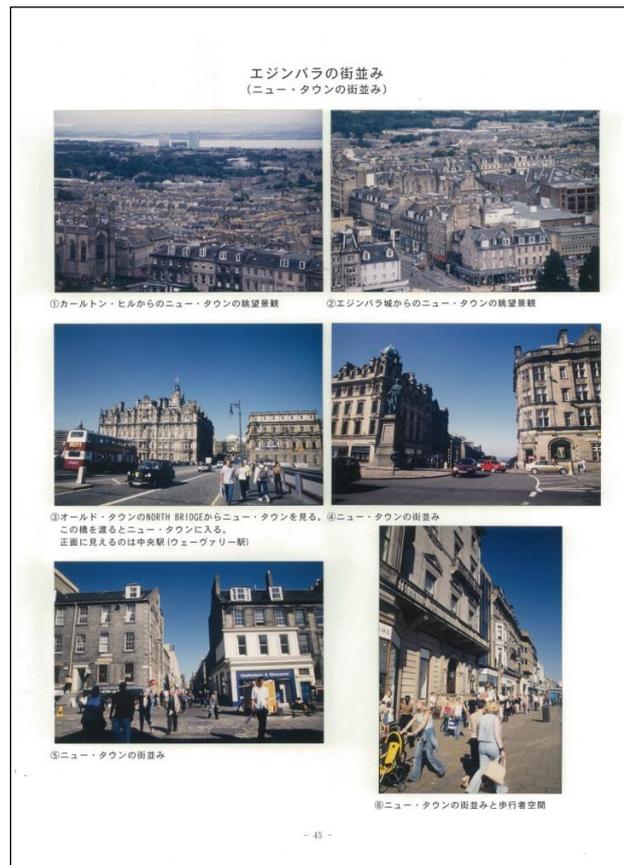
バーミンガムでのヒアリング



ハノーバーでのヒアリング

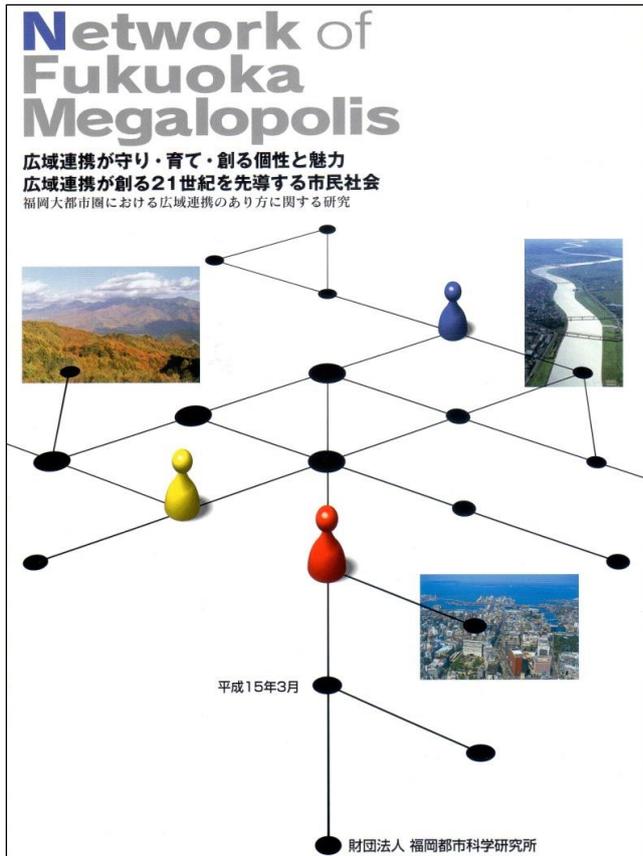


コッツウォルズ(パイプリー)の街並み



エジンバラ(ニュー・タウン)の街並み

「福岡大都市圏における広域連携のあり方に関する研究」での海外都市調査

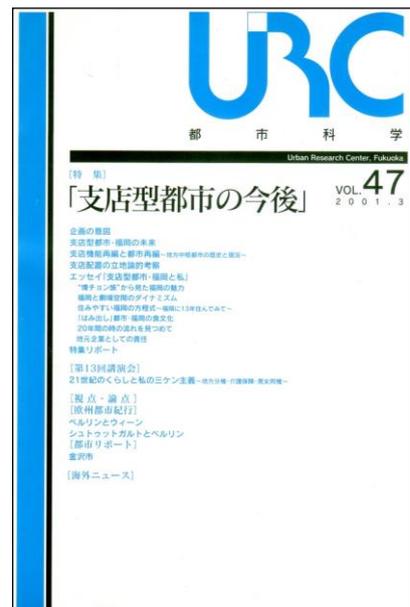


「福岡大都市圏における広域連携のあり方に関する研究」報告書概要版(抜粋)

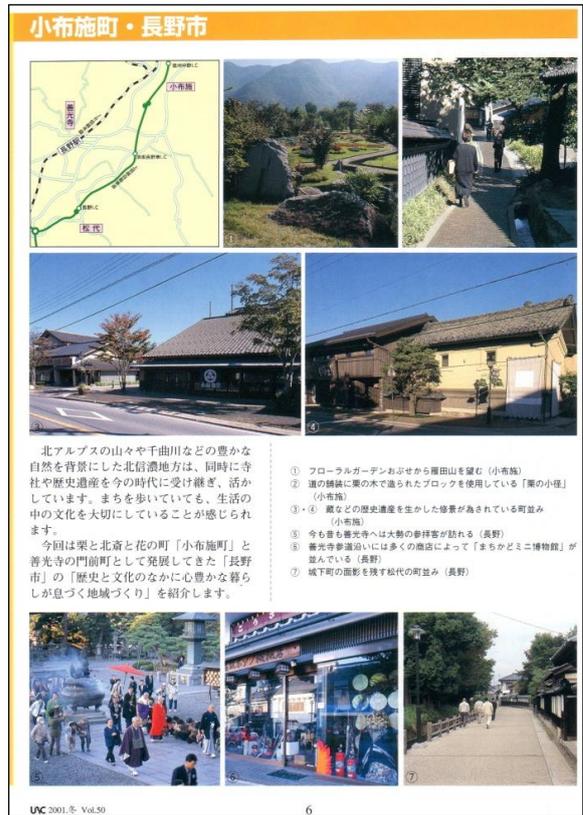
また、阿部先生とは縁があって、平成26年の夏に姪浜のまちづくりの取材を受けることになった。高山さんには唐津街道姪浜まちづくり協議会のアドバイザーとして毎年のように来ていただくことになる。URCで構築した人的ネットワークは、その後もいろいろな場面で活かされることになる。これが、URCでの一番の成果ではないかと思う。

この他、雑誌「URC都市科学」の企画・編集や執筆も担当したことがある。企画・編集では第47号の「支店型都市の今後」を担当。執筆者への依頼や文章の校正も行い、責任をもって1冊の本に仕上げた。自分でも高松市の取り組みを取材し執筆した他、ベルリンとシュトゥットガルトの都市紀行も執筆した。かなり忙しかったが、充実していた。

他都市調査に行く機会にも恵まれた。特に思い出に残るのは、長野県小布施町である。都市景観室時代に2回訪れていたが、何度訪れても面白いまちである。半径2kmの範囲にいろいろな見どころが満載であり、1年間の観光客(約120万人)は人口(約1万2千人)の100倍にもなる。「小布施流」のこだわりのまちづくりは、景観づくりや地域活性化などの様々な面で御供所や姪浜の参考になる。筆者が「姪浜流」のまちづくりを言い出したのは、小布施流から借りてきた言葉である。



「URC都市科学」第47号の企画・編集



筆者による執筆事例



福岡都市科学研究所在籍中の筆者



当時の上司や同僚(前列左が筆者)

(9) 耐震や空家対策の仕事

福岡都市科学研究所の次は、UR（都市基盤整備公団⇒都市再生機構）に2年、住宅管理課に1年、都市景観室に3年、都市計画課に1年在籍した。

UR（平成15年度～16年度）では、住宅供給公社時代にクリスタージュでお世話になった西部ガスの津村さんと再会。津村さんも同じ時期にURに出向し、2年間同じ部署で仕事をするようになった。これも何かの縁であろう。

また、6年振りに戻ってきた都市景観室では、都心部の景観形成や広告付きバスシェルターなどを担当（平成18年度～20年度）。広告付きバスシェルターについては、エムシードウコー、西鉄、県警、福岡市の関係課などとの協議や調整に苦労したが、平成18年11月に天神日銀前バス

停にモデルを導入した。最初の広告が、シャネルの5番（香水）であり、女優のニコール・キッドマンさんの印象が今でも強く残っている。各バスシェルターに周辺の案内地図を付けたことや広告のデザイン審査を導入したことも、福岡市独自の取り組みであった。



広告付きバスシェルターの導入(天神日銀前バス停) ©MCDcaux

建築物の耐震の仕事は、平成 22 年度～24 年度の 3 年間。その後 2 年間の市営住宅の建替の仕事を経て、平成 27 年度～現在まで再度携わり、通算 5 年になる。姪浜の活動への関わりが平成 17 年の福岡県西方沖地震であることから、耐震の仕事とは無縁ではない。

筆者が耐震の仕事に関わり始めた平成 22 年度は、西方沖地震から 5 年後であり、異動になる直前に西日本新聞の記事で「震度 6 弱から 5 年」という見出しで、まちづくり協議会の案内所がマイズル味噌のみそ蔵の中に開設されたことが紹介された。そういう意味では、タイムリーな異動だったのかも知れない。平成 23 年 3 月には東日本大震災があり、「建築物の耐震」が改めて注目を浴びた時期でもあった。

筆者は、耐震の出前講座で約 50 回、「民間建築物の耐震化への取り組み」について話した。いきなり地震や耐震の話をしてはわかりにくいので、導入部としていつも「私と西方沖地震との関わり」ということで、姪浜の取り組みを 10 数枚の写真で紹介した。例えば、活動のきっかけとして、西方沖地震で姪浜住吉神社の鳥居や門が倒壊したり、伝統的な町家が半壊した写真を紹介した。

姪浜住吉神社の説明では、宮司がみのもんたのクイズ・ミリオネアに出て、見事全問正解し 1,000 万円を獲得し、鳥居や門の再建資金の一部に充てたことを紹介すると会場は大いに盛り上がった。「縁起のいい神社であり、姪浜にお越しの際にはぜひお立ち寄りください」と宣伝も忘れなかつ

た。この他、西方沖地震前に屋根を軽くして被害を軽減できたマイヅル味噌の建物も紹介。市役所の業務ではあるが、姪浜の宣伝もしっかりさせていただいた。まちづくり協議会の初代事務局長は、地域の宣伝部長でもあった。

また、2回目となる耐震の業務で印象に残るのは、平成28年4月の熊本地震により、市民からの問い合わせが殺到したことである。隣県で発生した地震は福岡市民に与える影響も大きく、耐震診断の相談や耐震改修助成の申請も大幅に増えた。ちょうど福岡市耐震改修促進計画の改定を進めている時期であり、熊本地震の知見をどう盛り込むかが課題であった。大学時代を熊本で過ごし、卒業後も熊本や阿蘇などによく遊びに行っていた筆者にとっては、大きなショックであった。仕事に専念する意味でも、まちづくり協議会の卒業を決意した。



出前講座でよく紹介する福岡県西方沖地震での姪浜での被害例



耐震改修セミナーでの熊本支援のメッセージ

西方沖地震から5年後の西日本新聞の記事

空家対策の仕事は、平成27年度からである。空家の中でも適正に管理されていない放置空家対策に関する業務である。放置空家対策の課題としては、「相続による権利者の複数化や遠隔地居住による責任意識の欠如や希薄さ」「所有者や相続人の所在不明や所有者死亡後の権利関係の未整理などによる指導の困難さ」「解体費の工面や解体による固定資産税のアップなど経済的な事情」などがある。平成27年5月に「空家等対策の推進に関する特別措置法」が完全施行され、マスコミ

に大きく取り上げられると、市民からの相談や苦情が大幅に増加し、対応に苦慮した。

姪浜でも地域から相談や苦情を受けている物件が数件ある。解体や修繕など是正がされた物件もあるが、いろいろな事情で是正が進んでいない物件もある。一方、まちづくり協議会においては、空家の改修の相談を受け、伝統的な町家が再生されたものもあるし、まちづくり協議会の事務所兼まちの案内所として自ら改修・活用したものもある。また、筆者が活動をする中で、古い町家が活用され、カフェや飲食店、美容室などとして再生された事例も増えつつある。こういう意味でも空家対策の仕事も何らかの縁があるのであろう。

平成 28 年 11 月には、前宮崎県知事の東国原さんらと空家についてのシンポジウムに登壇する機会に恵まれ、福岡市の放置空家対策の紹介とともに、姪浜で筆者が主体的に取り組んだきた空家活用の事例も紹介させていただいた。シンポジウムの話題提供ということであるが、ここでも姪浜の取り組みをしっかりと紹介させていただいた。協議会を離れても、姪浜への想いは強い。



空家についてのシンポジウム(平成 28 年 11 月)

【参考】地域のまちづくり活動として取り組んだ身近な空家活用事例

○空き店舗をまちづくり協議会の事務所として活用



改修前



会員による改修



【参考】地域のまちづくり活動として取り組んだ身近な空家活用事例

○空き店舗をまちづくり協議会の事務所として活用



改修後の活用風景



姪浜の空家の活用事例も紹介

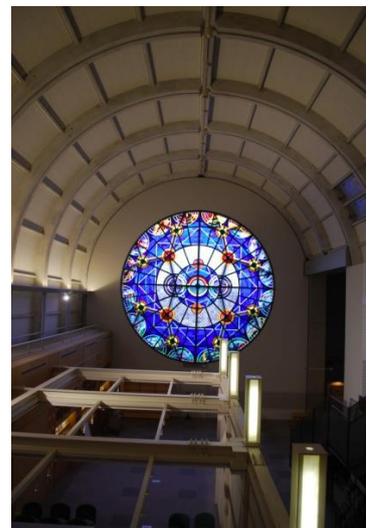
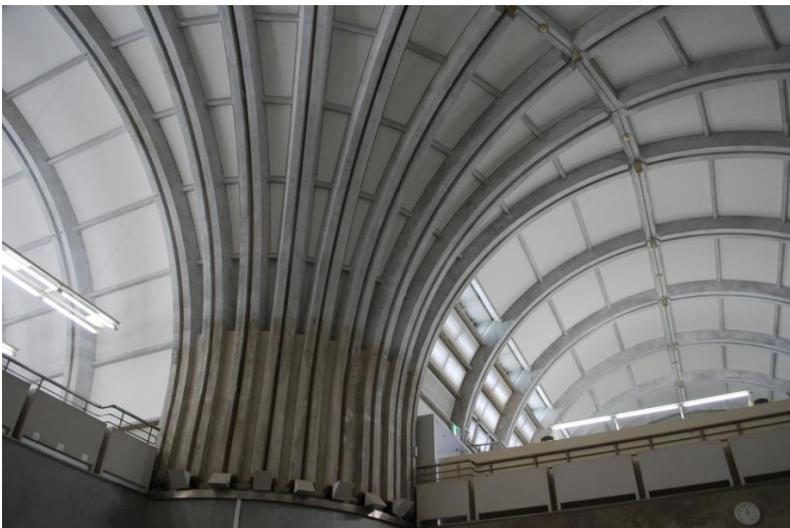
コラム3 北九州市立中央図書館再訪

大学に入り、建築を志した時に磯崎新氏が設計した建築巡りを始めた。北九州市立中央図書館は、その中でも群馬県立近代美術館と並んで筆者の印象に残る作品である。大学時代と社会人時代に数度訪れているが、今回は約30年振りの訪問となった（平成29年1月20日）。

リブヴォールトの空間が新鮮さと懐かしさを感じさせる。築40年以上経っているが、改修を続けながら大切に使われている。ガラス張りのスロープからは小倉城や北九州市役所、リバーウォーク北九州などを見ることができる。また、スロープに沿って閲覧室が分節配置され、各自が好きな居場所を確保することができる。落ち着いて本を読める空間でありながら、吹き抜けのヴォールト天井によって空間の連続性も感じることができる。レストランのガラスのモニターカーブが懐かしい。

平成24年に映画「図書館戦争」のロケが行われたこともあり、この日も図書館関係者や文学関係者など多くの団体が視察に訪れていた。併設されていた北九州市立歴史博物館が「いのちのたび博物館」に統合されたこともあり、平成18年から一部は北九州市立文学館として使われている。文学館にあるステンドグラスも久し振りに見ることができた。

なお、この建物は筆者が福岡市住宅供給公社時代にクリスタージュの設計でお世話になった三浦紀之氏が磯崎新アトリエ時代に担当されていた。これも何かの縁であろう。いつまでも大切にわれ続けしてほしい建物である。



4 姪浜への関わり

(1) 最大のきっかけは福岡県西方沖地震

このようにして 28 歳で福岡市役所に入って 30 年以上が過ぎた。月日の経つのは早いものだ。いろいろな仕事を経験させていただいたが、姪浜のまちづくりに特に関係する仕事は、通算 10 年に及ぶ都市景観の仕事のうち、御供所のまちづくりであろうか。ただ、御供所を担当している時には、住まいのすぐ近くの姪浜にはほとんど関心がなかった。

姪浜周辺に住み始めて 30 年近くになるが、姪浜で印象に残るのは、その頃に始まった姪友会の花火大会、鮮魚店が多いこと、そして西福岡マリナタウンに延びる道路の幅員が現在の 1/3 程度であったことぐらいで、歴史があり、寺社や町家が多いまちというイメージはほとんどなかった。姪浜住吉神社の河童祭りや夏越祭りに行った記憶もない。炭鉱町であったことも知らなかった。玉せせりも筥崎宮のイメージしかなく、姪浜住吉神社で行われていると知ったのは、姪浜の活動に関わってからである。魚の美味しいお店も「たつき」や「鰯っ子」に行った記憶しかない。当時は家庭や子育て、仕事に精一杯で、地域のことにはあまり関心がなかったのかも知れない。

そんな筆者が姪浜に関心を持つようになった最大のきっかけは、平成 17 年 3 月 20 日の福岡県西方沖地震である。玄界島の被害の状況が大きくクローズアップされたが、姪浜住吉神社の鳥居・門が倒壊した様子も新聞やテレビで報道された。心を痛めると同時に、「姪浜にはまだこんなに歴史的建造物が残っているのか」と前向きに考えた。これがきっかけで、都市景観室時代に見落としていた身近な姪浜のまちづくりに取り組むことになった。

コラム 4 震度 6 弱からの転機

平成 17 年 3 月の福岡県西方沖地震、それが私の人生の大きな転機となった。姪浜でも多くの町家や寺社が被害を受けた。「姪浜にはこんなに素晴らしい歴史資源が残っていたのか。まだ、遅くはない。歴史的な環境を活かしたまちづくりを進める上で、これが最初で最後のチャンスだ。」と前向きに考え、地域の関係者に声をかけ、2 年後にまちづくり協議会を立ち上げた。私が 49 歳の時だ。

それまで福岡市職員として長く景観行政に携わっていながら、自分が住む地域のことにはあまり関心がなかった。それからは今までの 20 年間を取り戻すかのように、『姪浜の宝を福岡市民の宝に！』を目標に精力的に活動を続け、地域から感謝状もいただいた。

今はやりの二刀流ではないが、公務員そして地域のまちづくりのリーダーとして、引き続き「私の人生は二刀流、二毛作」をテーマに息長く、そして仲間とともに楽しくまちづくり活動に関わっていききたい。

(平成 25 年 8 月。ある企業の募集に応募したフォト&エッセイより)

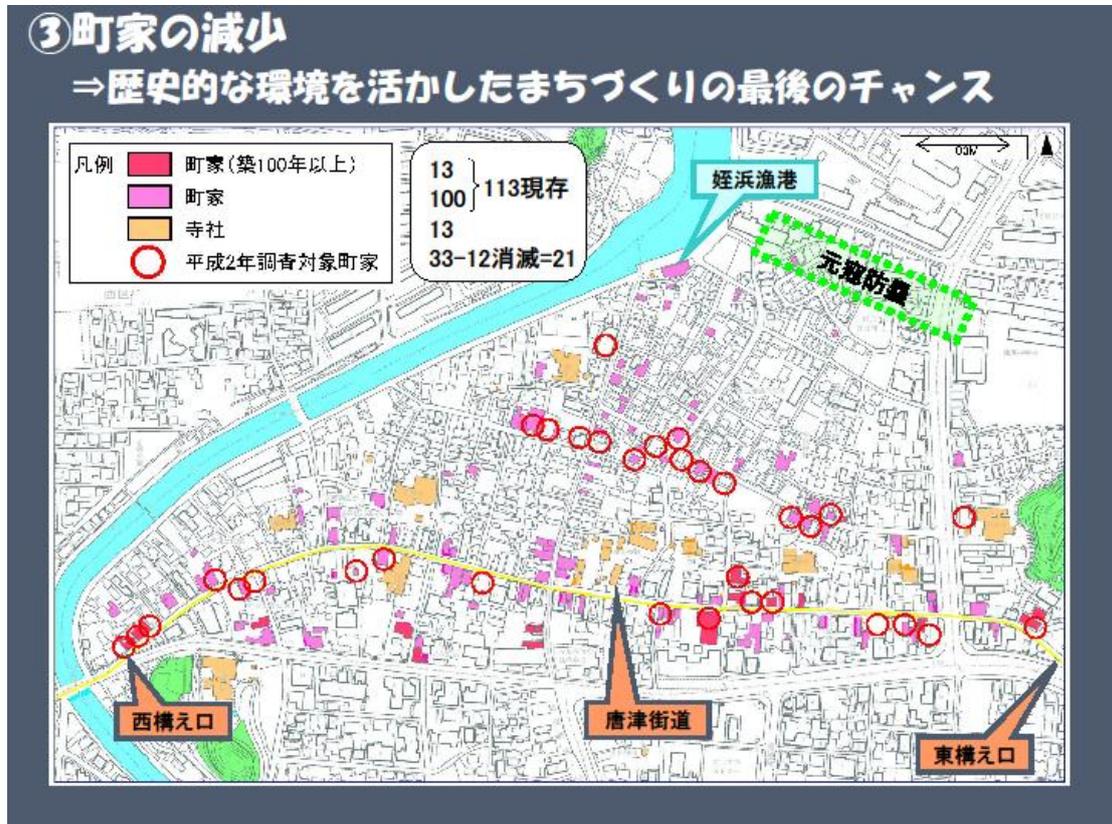




福岡県西方沖地震による姪浜での被害例:姪浜住吉神社(左)、伝統的町家建築(右)

(2) 姪浜をどこにでもあるようなまちにたくない

もう一つのきっかけは、姪浜の個性のひとつである伝統的町家建築の減少である。平成2年に福岡市教育委員会が調査した33軒のうち、平成19年3月の調査では12軒が無くなっていた。この中には、福岡県西方沖地震で被害を受けたことが原因で解体されたものもあるし、家や店の後継者がいなくなり売却され、マンションや駐車場になっていったものもある。特に唐津街道沿道は商業地域であり、高いマンションが建つ可能性が高い。人口が増えている地域であり、こうした動きは自然の流れではあるが、その流れに任せてしまうと、どこにでもあるような個性のない普通のまちになってしまう。筆者が「歴史的な環境を活かしたまちづくりを進める上で、これが最初で最後のチャンスである」と言ったことは決して過言ではない。



姪浜の町家分布状況(平成19年3月調査)

また、都市化の進展に伴うマンション化や駐車場化、景観形成への配慮に欠けた建築物の増加は、町並みの個性の喪失につながりつつあった。全国どこに行っても同じような街並みの形成が進む中で、筆者には「姪浜を普通のまちにしたいくない」という強い思いがあった。「地域に埋もれている身近な魅力資源を掘り起こしていくことが、姪浜ならではの地域特性を活かしたまちづくり・景観づくりの土台となる」という考え方は、筆者の姪浜でのまちづくりの哲学である。これは一歩も譲ることはできない。

姪浜の魅力資源は、多彩な歴史、伝説・物語、数多くの寺社や町家、狭い路地、海、港、魚市場、美味しい魚など数え上げるときりがない。地域の人が見慣れて、当たり前だと見過ごしているものにスポットを当てていくことが、姪浜ならではのまちづくりを進める第一歩なのである。



景観形成への配慮が望まれる高層マンション

**④地域に埋もれている身近な歴史や物語（まちかど遺産）の掘り起こし
⇒地域への誇りや愛着を育む土台**

例：興徳寺に伝わる「うさぎと龍の物語」



姪浜駅前にあるモニュメント
「Dragon King Rabbits」



龍王館

筆者の姪浜でのまちづくりの哲学

(3) まちづくり協議会発足

福岡県西方沖地震がきっかけと言いながら、筆者がすぐに姪浜で活動を始めた訳ではない。具体的な活動は、筆者が平成18年4月に再度、都市景観室に配属された時に、福岡市の職員を中心とした研究グループ「博多津にぎわい復興計画研究会」に入った時からである。このグループでは、歴史的建造物や町並みの保存・再生をテーマに定期的に講演会やまち歩きなどを実施しており、入会前から筆者も時々参加していた。後述する版画家の二川秀臣氏との出会いも、このグループが平成18年6月に主催した箱崎でのまち歩きだった。

唐津街道姪浜まちづくり協議会の立ち上げは、そのグループの活動の一環で平成19年3月17日に姪浜でまち歩きを実施した後に協議・決定され、3月26日に「唐津街道姪浜 町並み・まちづくり活性化協議会」として設立された。その時は、西区役所が実施していた「西区やる気応援事業」の支援を受けるための受け皿として設立されたものであり、地元のメンバーの参加はそれ以降となる。

なお、筆者らが作成した当時の設立趣意書は次のとおりである。自分ながら格調の高い趣意書だと思う。現会員や地域の皆さま方には、ぜひ設立時の筆者らの気持ちを思い起こしてほしい。

まちづくり協議会設立のきっかけとなった
姪浜でのまち歩き(平成19年3月17日)

街道を歩く
「旧姪浜宿の文化遺産探索」
主催：福岡市教育委員会(文化財管理課)
博多津にぎわい復興計画研究会

平成19年3月17日(土) 10:00~15:00



集合場所 愛宕神社一の鳥居前 ※愛宕2丁目1
◆地下鉄空見駅から徒歩5分
◆西鉄バス「愛宕下」停留所直ぐ

集合時間 9:30
コース 唐津街道:愛宕神社~興徳寺
募集人員 60人 ※先着順
参加費 600円程度(資料代、保険料) ※事前郵便振込み
雨天の場合 小雨決行

申込 平成19年3月15日までに、任意ハガキにて、郵便番号・住所・参加者氏名(複数申込可)・年齢・男女の別・電話番号・FAX番号を明記の上、福岡市教育委員会文化財管理課までお申し込み下さい。【当日必須】

【申込・問い合わせ先】福岡市教育委員会文化財管理課
〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1
TEL.092-711-4784 FAX.092-733-5537

唐津街道姪浜 町並み・まちづくり活性化協議会設立趣意書

唐津街道沿いの旧姪浜宿周辺地域には、中世、近世を中心とした歴史と文化が息づき、福岡市内でも有数の歴史的環境が形成されています。江戸時代初期には現在の唐津街道がつくられ、それに沿って伝統的な町家町並みが形成されました。都市化の進展とともに伝統的な町家は少なくなっていますが、興徳寺や姪浜住吉神社等の数多くの寺社と一体となって、現在も往時を偲ばせる文化的景観が継承されています。

しかし、その良さが地域内外にほとんど認識されておらず、まちづくりや地域活性化にほとんど活用されていないのが現状です。このままでは、地域固有の文化的景観が失われ、全国どこにでもある特徴のないまちになってしまうことが予想されます。

一方、4月に創刊予定の「ミシュラン日本ガイド」でも、伝統的町並みを有する都市が高く評価されるなど、地域固有の美しい町並みを活かした取り組みが強く望まれています。

このような状況のなかで私たちは、地域内外に唐津街道姪浜の魅力を発信し、多くの人を訪れる元気なまちになってほしいと願っています。伝統的な町家が次第に失われつつあるなか、唐津街道姪浜の文化的景観を活かしたまちづくりを進める最後のチャンスだと考えています。

このため、私たちは、地域住民や唐津街道姪浜に興味を持つ市民と協働で、地域の宝物(文化的景観資源)を調査し、多くの人々にその魅力を再認識してもらい、それを福岡市民共有の財産として活用することにより、唐津街道姪浜固有のまちづくりと地域活性化を進めていくため、「唐津街道姪浜町並み・まちづくり活性化協議会」を設立するものであります。

(平成19年3月26日)

5 筆者が考える姪浜の魅力

(1) 長く住んでいると見失いがちな地域の魅力

筆者らが活動を始める前は、姪浜で地域資源を活かしたまちづくり活動を自主的に行っていた団体はおそらくなかったであろう。自治協議会、商店会、姪友会などが既に活動していたが、活動の目的や内容が限定的であり、地域固有の魅力資源を活かしたまちづくりを進める視点は持ち合わせていなかったようである。地域住民の多くは、「姪浜には他の地域に誇れるものは何もない」と考えていたようであり、まちづくりの機運がなかったのも当然のことであろう。

長い間、同じ地域にいと、自分の住む地域の良さを見失いがちである。これは、どこの地域にも当てはまることで、姪浜に限ったことではない。まちづくり協議会の役員でさえ、後に国の登録有形文化財となるマイヅル味噌の建物についても、筆者から言われるまでは「見慣れた建物であり、こんな古い家のどこがいいのか」と言っていたほどである。よそ者の視点がまちづくりに求められるのは、こういうところである。そういう筆者も姪浜周辺に住んでいながら、かつ、都市景観行政に長く関わっていながら、姪浜の良さがわかっていなかった。まちづくりに関わる人間にとっては、反省すべきことであり、この反省が筆者の10年間の精力的な活動につながっていくことになる。



筆者がまちづくり活動に関わり始めた頃の姪浜(平成20年1月)

(2) 10年前に筆者が直感した姪浜の魅力

筆者が姪浜をじっくりと歩いて見たのは、前述の研究グループ「博多津にぎわい復興計画研究会」が平成19年3月17日に実施したまち歩き及びその1週間前の事前調査の時である。光福寺周辺の路地で、春を告げる黄色のミモザが鮮やかに咲いていたことが強く印象に残っている。そ

の時の姪浜のイメージは、「町並みとしては連続していないが、伝統的な町家建築が点在している」「寺社が多い」「狭い路地が多い」「姪浜石がよく使われている」「地域コミュニティが継承されている」ことなどである。御供所が寺町のイメージが強いのに対し、姪浜は普段着のまちであり、今後地域を調べていくといろいろな魅力が出てくるのではないかと感じた。その時の直感が、先程の協議会設立趣意書につながった。



印象に残るミモザ



地域コミュニティの継承を感じさせるお堂

(3) 筆者が考える姪浜の魅力

都市化の進展に伴う高層マンション化、高齢化の進展に伴う空家や空き店舗の増加、紋切り型のワンルールアパートや駐車場の増加などにより、ややもすると通り過ぎてしまいそうな姪浜の町並みであるが、じっくりと歩いてみると、新旧の多彩な「よかところ」を発見することができる。先人たちから受け継いできたものの代表は、日本誕生の神話や神功皇后伝説、奈良時代や鎌倉時代からの歴史を持つ多くのお寺や神社、元寇防塁、小戸から生の松原にかけての白砂青松、江戸時代に栄えた唐津海道の町並み、港の風景などたくさんある。

姪浜の歴史

(古 代)

- ・神功皇后伝説
- ・大陸や南海諸島との交流(中国製、半島製、南海産の出土品)

(平安時代)

- ・唐 房(南宋からの渡来人の居住地・・・旧町名に「当方」)

(鎌倉時代)

- ・元寇、元寇防塁
- ・九州探題(現在の愛宕山あたり)

(江戸時代)

- ・唐津街道宿場町、廻船業、漁業、製塩業など

(大正時代～昭和30年代)

- ・早良炭鉱設立～閉山

(現 在)

- ・ベッドタウン、臨海部の大型商業施設(埋立地など)

姪浜の歴史概要

一方、姪浜駅周辺や海沿いの現代的な商業施設や高層マンションなどは、姪浜の環境の良さや便利さが生み出した新たな風景である。姪浜で実施された平成 22 年度の九州大学大学院の都市・建築ワークショップのテーマは「上書きされた都市・姪浜」であったが、良く練られたテーマであったと思う。

エリア的に見れば、区画整理や埋め立てによって様変わりした姪浜駅周辺や海浜部と、その間にポツンと取り残されたような旧唐津街道周辺、その新旧のコントラストが姪浜の魅力である。また、新旧の様々な魅力スポットを歩いて回ることができることも姪浜の大きな魅力である。特徴が見えにくくなりつつある現在の姪浜であるが、多彩な「よかところ」を地域の方々に認識していただき、それをどのようにまちづくりに活用していくのか、まちづくり協議会に求められる役割は大きい。



姪浜の回遊ルート



唐津街道経浜には、興徳寺や住吉神社などの数多くの寺社があります。また、歴史的な背景を物語るように、様々な宗派に所属する古寺名刹が狭い地域に集積しています。旧経浜宿は、宿場町、商人町（商船）、漁師町（漁業）の性格を有し、「経浜千軒」と呼ばれるほど栄えましたが、寺町としての顔も備えています。



唐津街道経浜には、興徳寺や住吉神社などの数多くの寺社があります。また、歴史的な背景を物語るように、様々な宗派に所属する古寺名刹が狭い地域に集積しています。旧経浜宿は、宿場町、商人町（商船）、漁師町（漁業）の性格を有し、「経浜千軒」と呼ばれるほど栄えましたが、寺町としての顔も備えています。



唐津街道経浜を特徴づけているものに、伝統的様式の町家があります。都市化の進展や福岡県西方沖地震の影響などで、次第にその数は減少していますが、今でも昔の宿場町の雰囲気を感じさせる町並みが継承されています。



昔ながらの道の形も唐津街道経浜の特徴です。鉤の手（かぎのて）と呼ばれる道の形は、防衛の手段として、敵が一気に攻め込みにくくするために、また、敵を遠い詰めやすくするために城下町の入口や通りを直角に曲げたものですが、ここ経浜でも随所にもその形跡が見られます。そして、塀や建物に囲まれた狭い路地空間も唐津街道経浜の魅力です。ほっとする空間を私たちに提供してくれています。

経浜の魅力資源の一部(筆者が平成20年9月に作成した資料から抜粋)

6 まちづくり協議会の活動概要

(1) 活動概要

具体的な活動を振り返る前に、まずは全体の活動概要を示しておこう。一つひとつの活動はオーソドックスかも知れないが、それぞれのステージのまちづくりの熟度や課題に対応した活動を丁寧に行ってきた。地道ではあるが、これほど多彩な活動を実践してきた団体はおそらくないであろう。自分でもよくやってきたと自画自賛している。

◆ 1st ステージ（主に平成 19 年度～21 年度）

『地域の魅力の再認識と地域内外への発信』を目標に、「まち歩きマップやかかわら版の発行」「まちづくり活動拠点の設置」などによる姪浜の見どころ・活動の情報提供や、「景観歴史発掘ガイドツアー」「国の登録有形文化財でのみそ蔵コンサート」「歴史ある寺社での灯明コンサート」などの多彩な町並みイベントを実施してきた。

◆ 2nd ステージ（主に平成 22 年度～25 年度）

『地域協働のまちづくり計画の策定及び景観まちづくりの実践』を目標に、住民参加のワークショップも取り入れながら「元気！姪浜計画」や「景観づくり計画」の策定を行うとともに、「町家再生の実践」「旧町名表示板の設置」「姪浜ブランドの認定」「姪浜町家の認定」などの具体的な活動を展開し、目に見える形でまちづくりの効果を伝えてきた。

また、「子どもまちなみ探検隊」や「子ども落書き消し隊」などの次の世代を担う子どもたちを対象にした景観づくり普及活動にも取り組んできた。

◆ 3rd ステージ（主に平成 26 年度～27 年度）

『国の登録文化財のみそ蔵を中心とした姪浜のまちなみの個性の再構築』を目標に、「姪浜景観づくりの手引き」を発行し地域への普及活動を行うとともに、平成 25 年末に味噌の製造場としての約 1 世紀の役割を終えて閉店したマイヅル味噌のみそ蔵（姪浜の歴史的・景観的シンボル）の再生・継続的活用に向けた活動を展開してきた。

最近では、姪浜の次のまちづくりのステージ「姪浜ネクストの推進」に向けた活動や、多彩なよかところを再発掘・活用する「姪浜まち旅プロジェクト計画」を展開中であった。

(2) 活動内容一覧

段階	活動内容	活動開始年度
1 s t s t e r j e t	(1)定例会	H19 年度
	(2)地域の魅力資源調査	H19 年度
	(3)地域の魅力資源集の作成	H19 年度
	(4)まち歩きマップの作成・発行	H19 年度
	(5)まちづくり講演会・シンポジウム	H19 年度
	(6)登録文化財の登録への協力	H19 年度
	(7)景観歴史発掘ガイドツアー	H19 年度
	(8)みそ蔵コンサート	H19 年度
	(9)版画展・町家展	H19 年度
	(10)先進都市調査	H20 年度
	(11)まちなみパネル展	H20 年度

1 s t a g e	(12)他団体との交流・連携活動	H20 年度
	(13)マスコミへの情報発信	H20 年度
	(14)町家再生の実践	H21 年度
	(15)灯明コンサート	H21 年度
	(16)旧町名表示板の設置	H21 年度
	(17)まちづくり活動拠点(まちの案内所)の開設・運営	H21 年度
	(18)姪浜の食材を使った料理でのおもてなし	H21 年度
	(19)景観づくり地域団体の認定	H21 年度
	2 n d s t a g e	(20)全国区の補助金へのチャレンジ
(21)地域との交流会		H22 年度
(22)九州大学との連携(都市・建築ワークショップ等)		H22 年度
(23)様々な場面での姪浜の PR		H22 年度
(24)視察受入&意見交換		H22 年度
(25)かわら版の発行		H22 年度
(26)まちづくり計画策定ワークショップ		H22 年度
(27)「元気! 姪浜計画」の策定		H22 年度
(28)女性部会「はまこみち」の発足・活動		H23 年度
(29)「姪浜ブランド」の認定		H23 年度
(30)「姪浜ブランド」の PR		H23 年度
(31)景観づくり委員会		H23 年度
(32)「景観づくり計画」の策定		H23 年度
(33)「姪浜町家」の認定		H23 年度
(34)ディスカバー姪浜展を主体としたウィークリー事業		H24 年度
(35)町家活用イベント(姪浜シネマ、町家コンサート)		H24 年度
(36)着物で唐津街道の町並みをそぞろ歩き		H24 年度
(37)まちなみネットワーク活動		H24 年度
(38)地域のシンボルであるみそ蔵の再生・継続的活用に向けた活動		H25 年度
(39)子どもたちを対象にした景観づくり普及活動		H25 年度
(40)全国区の賞へのチャレンジ		H25 年度
(41)地域からの贈り物		H25 年度
(42)景観まちづくり宣言	H25 年度	
3 r d s t a g e	(43)「景観づくりの手引き」の作成	H26 年度
	(44)海を意識したプロジェクト(遊覧船等)	H26 年度
	(45)「TEAM 姪浜ネクスト」の推進	H26 年度
	(46)win-win-win-win 方式によるまち歩きマップの作成・発行	H27 年度
	(47)ポストみそ蔵としての「まち旅プロジェクト計画」の策定	H27 年度
	(48)空き店舗を活用した新案内所の開設	H27 年度

「参考資料 2 唐津街道姪浜まちづくり協議会と筆者の 10 年の歩み」

「参考資料 3 姪浜プロジェクト 48 (MPT48)」

～筆者が唐津街道姪浜まちづくり協議会在籍中に取り組んだ多彩な活動～

7 1st ステージの活動（主に平成 19 年度～21 年度）

（1）地域課題、まちづくりの目標

平成 19 年度に活動を開始した当時の課題は、「地域の方々が地域の歴史や魅力に気付いていない」ことであった。前にも述べたが、長く住んでいると、それが当たり前のこととなり、地域の魅力を見失いがちとなる。多くの地域で同じようなことが言われるが、姪浜も例外ではなかった。伝統的な町家にしても、当時は「こんな古い家のどこがいいのか」という感じであった。また、狭い路地も姪浜の魅力のひとつであるが、「こんなところを案内したくない」という具合であった。

こうした状況の中で、筆者らは「姪浜の魅力をまずは地域の方々に知っていただき、誇りと愛着を持っていただきたい。そして、姪浜の魅力を地域内外に発信していきたい。」という目標を立てた。具体的な活動を紹介していこう。

1st ステージの地域課題、活動目標

- 地域課題：地域住民自身の地域の魅力の認識不足
- 活動目標：地域の魅力の再認識と地域内外への発信

（2）1st ステージの最初の定例会

協議会が発足して初めての定例会は、平成 19 年 5 月 29 日に姪浜公民館で開催された。この時はまだ福岡市職員が中心であり、地元の会員は数名であった。この時の定例会では、会員の自己紹介に引き続き、協議会設立趣意書や西区やる気応援事業の内容を説明した後、今後の活動などについて意見交換を行い、出席者がそれぞれ姪浜への想いを語り合った。

定例会後の懇親会は「たつき」で行われたが、昨日のように覚えている。平成 28 年 8 月の西日本新聞の記事によると、たつきの女将さんが最初の懇親会の様子を覚えていてくれたようだ。もう 10 年も前の事である。



最初の定例会

なお、この時に在籍していた多くの市職員も平成 23 年春までに退会し、最後まで残っていたのは筆者だけである。歴史や町並みに興味があるだけでは目標を持ち続けるのは難しく、また、業務の枠を超えて自分の住む地域以外で、まちづくり活動に参加するのは、何かメリットを感じられないと難しいということであろうか。

8 平成 19 年度の活動

(1) 地域の魅力資源調査、魅力資源集の作成、まち歩きマップの作成

最初の取り組みとして、4月から地域にどのような魅力資源があるのか、地域の特徴である寺社、町家、路地、塀、お堂、地蔵、石碑、緑などを調査した。協議会で実施したものもあるが、筆者が個人的に調査したものが圧倒的に多い。地域内をくまなく、そして何回も歩いた。歩く度に新しい発見もあり、また、同じ場所でも季節によって違った表情を見せてくれた。通りかかった地域の方々も声をかけてくれた。こうした地域の方々との出会いも調査の楽しみであった。



地域の魅力資源調査

こうした調査をもとに「地域の魅力資源集～唐津街道姪浜 見て歩き、食べ歩き～」を作成した。当初版でも 30 ページ以上に及ぶもので、我ながら力作であった。古いパソコンを使っていた時代で、動きが悪く、作成に苦労したのを思い出す。川岡会長はこの資源集を見て「一体だれが、いつ作ったのか」と驚かれていた。



地域の魅力資源集(概要版)



地域の魅力資源集(詳細版)

地域の魅力資源集は協議会主催の最初のまち歩きイベント（平成 20 年 3 月）で参加者に配布され、とても喜ばれた。しばらくは、まち歩きイベントの度に更新を続けた。また、概要版も作成し配布するとともに、A1 サイズにパネル化し様々な場面で活用してきた。

地域の魅力資源調査の成果は、まち歩きマップにも活用された。他の地域のマップをいろいろ収集した後、平成 20 年 3 月に当初版のマップを作成した。A3 両面、二つ折りのシンプルなものであり、片面が姪浜の魅力の紹介、片面がまち歩きマップとなっている。漫画家の長谷川法世氏の姪浜の町家のイラストや、版画家の二川秀臣氏の版画もお借りした。第 3 版まで発行し（15,000 部配布）、姪浜の魅力を多くの市民に伝えてきた。新しいマップができて、片側のマップ面のデータを更新しながら使い続けており、筆者の住む愛宕浜のマンションの広報誌でも 2 回掲載された。



最初のまち歩きマップ

(2) キックオフイベント

協議会のキックオフイベントは、平成 19 年 9 月 29 日の姪浜住吉神社での「まちづくり講演会 & シンポジウム～長谷川法世さんと姪浜の町家を語ろう～」であった。これは、漫画家の長谷川法世氏の講演と、法世さんを含めたパネラーを含むシンポジウムである。平成 19 年は読売新聞で毎週土曜日に、法世さんが取材した福岡の町家が連載されており、タイムリーなテーマとして企画したものである。姪浜でも 15 軒の町家取材されていた。いきなり「町家に暮らす～伝統的な町家・町並みの良さを見直す～」をテーマにするのはどうかという意見もあったが、その時のタイムリーな話題と人、雰囲気などを総合的に判断して決めていくのが事務局長である筆者の役割

であり、進め方である。

内容としては、法世さんが取材し描いた町家のイラストをスクリーンで紹介しながら、その時々エピソードを話すもので、そのユニークな話しぶりに会場は大いに盛り上がった。その後のシンポジウムには、法世さんに加え、建築家の鮎川透氏、地元の町家所有者として早船正夫氏（郷土史家）と白水洋子氏（マイヅル味噌代表）にもパネラーとして参加していただいた。コーディネーターにはまちづくりの専門家でもあり、協議会会員（当時）でもある十時裕氏にお願いした。鮎川氏には専門家の視点、早船さんと白水さんには町家を維持していく上での苦労などを話していただいた。法世さん、鮎川さん、早船さんのお子さんは東大在学中または出身ということでも盛り上がった。十時さんの進行も手慣れたものであった。

こうした講演会やシンポジウムにおいては、パネラーの選定はもちろん、シナリオの作成、事前協議なども事務局長である筆者が主体的に行っており、その準備にかなりの時間も費やしていた。こうしたイベントは、当日は流れに沿って進行していただくだけであり、イベントが始まる前に既に90%は終了しているものである。

また、演出にも気を使った。樹齢700年のイチョウをライトアップするとともに、周辺に灯明を配し、幻想的な雰囲気 연출した。オリジナルのステージも作った。手間暇とお金をかけても、そして天気の様子を気にしながらも場所にこだわる必要がある。公民館や市民センターではなく、姪浜の魅力を伝えられる場所で行うことに大きな意義があるのである。これも筆者のこだわりである。



まちづくり講演会 & シンポジウム

当日は今にも雨の降りそうな天気であったが、筆者らの苦労を見てくれていたのであろうか、何とか持ちこたえてくれた。きっと姪浜住吉神社の神様のおかげであろうか、シンポジウムが終わり懇親会の開始と同時に大粒の雨が降り出したのであった。ちなみにその日の懇親会の会場は「旬やみなくち」であった。シンポジウムの話題と美味しい料理、お酒で懇親会が盛り上がったのは言うまでもない。キックオフイベントは大成功であった。

なお、法世さんが今回の内容を大変気に入られ、博多部の御供所でもぜひ実施したいという話があり、当時福岡市都市景観室に在籍していた筆者が全面的に対応することになり、平成20年3月29日に古刹・承天寺で開催した。パネラーは法世さんの他、御供所まちづくり協議会の瀧田喜代三さん、版画家の二川秀臣さん、石村萬盛堂の石村一枝さんで、コーディネーターは建築家の鮎川透さんという顔ぶれであった。こちらも大成功であった。

(3) 春の町並みイベント2008

次の大きなイベントは、平成20年3月15日を中心に開催した「ガイドツアー&みそ蔵コンサート&版画で歩く唐津街道展」で、盛りだくさんの内容であった。イベントの開催にはいろいろな調整が必要であるが、同じ日にいろいろなイベントを重ねる時はより詳細な調整が必要となる。

この時はまず、コンサートの演奏者の選定と日程の確保を行った。会員の福原さんの紹介により、チェロの于波(ウ・ハ)さん、ピアノの葉山由美さん、ヴァイオリンの佐久間大和さんに決定。もちろん、会場となるみそ蔵の日程も確保した。

版画家の二川秀臣氏には前年(平成19年)の秋に古賀市で開かれていた版画展の会場に二川さんを訪ね、姪浜でも版画展をお願いしたいと申し出、快諾を得ていた。版画展の会場についても、みそ蔵を軸に考えていたが、一週間単位となりマイヅル味噌の業務に支障を来すため、他の会場を検討。ホームページでオープンしたばかりのコトリスタジオ(マイヅル味噌の正面。cafebar PIPSの2階)の情報を偶然に入手し、オーナーの首藤さんに連絡。二川氏を含めて早速協議。段取りは順調に進んでいった。その後、ガイドツアーのコース設定を行い、案内する寺社やお店、町家などへの依頼を済ませた。市役所にいると、こうした段取りは慣れたものである。

このように様々な調整を済ませた上で、広報ちらしを作成し広報活動に入っていった。市政だよりや公民館だより、西区ホームページへの掲載依頼の他、主なマスコミにも記事掲載及び取材依頼を行った。地域内の公民館やお店にも広報ちらしを配布した。地域の一団体が広報活動をするのは結構大変である。申込みや問い合わせ先はすべて事務局長の筆者であり、申込みリストの作成や相手方への連絡など対応に時間を取られた。

次は当日までの準備である。コンサートではプログラム&プロフィールや会場の設営計画の作成、音響機器の手配などを行い、前日に設営を済ませた。版画展も設営計画、人員配置計画、搬入計画などについて二川さんと協議。前日に二川さんの自宅に版画を受け取りに行き、設営完了。大変だったのは、ガイドツアーの準備である。出来上がったばかりのまち歩きマップと地域の魅力資源集を透明のファイルに入れるという作業の他、名札やルート、タイムスケジュールも班ごとに作成した。初めてのガイドツアーということもあり、前日も自宅に戻って、夜遅くまで作業に追われた。

こうして、いよいよイベント当日を迎えた。ここまで来れば、イベントはほぼ終了。後はお客さんを迎え入れるだけである。当日は天気にも恵まれ、ガイドツアーには地域内外から多くの方々

に参加していただいた。姪浜住吉神社からスタートし、寺社、町家、路地、お薦めのお店、版画展の会場を案内。3月15日ということで桜はまだ咲いていなかったが、黄色のミモザや白色のユキヤナギがガイドツアーに彩りを添えた。マイヅル味噌ではみそ汁を振る舞っていただいた。姪浜名物の魚嘉の蒲鉾や仲西商店の削り節の試食は、この時のガイドツアーから既に始まっていたと思う。2時間程度のコースであったが、参加した方々に大変喜んでいただいた。



ガイドツアー

また、みそ蔵コンサートは、マイヅル味噌の建物が平成19年12月に国の登録有形文化財に登録されたことを地域内外に広く伝えるとともに、幻想的な雰囲気の中での演奏を楽しんでいただきたいという趣旨で企画したものである。味噌の香りのする空間でのコンサートは珍しいということで、多くの方々に参加していただいた。チェロの于波さん、ピアノの葉山由美さん、ヴァイオリンの佐久間大和さんには、楽しいトークを交えながら「白鳥」や「リベルタンゴ」などを演奏していただいた。

途中、電源が切れるハプニングもあったが、演奏者は何もなかったかのように演奏。これも手作りコンサートならではのことである。版画家の二川さんも版画展の会場から駆けつけ、その様子を絵に描いてくれた。マイヅル味噌の白水さんと筆者へのプレゼントだった。

みそ蔵コンサートは、その後協議会のオリジナルイベントとして定着していくことになった。コンサート後の打ち上げは、オープンしたばかりの「あこめの浜」で行った。名物のとん平焼きやお好み焼きに舌鼓を打ちながら、美味しいビールやお酒で盛り上がった。コンサートに来ていただいた方々も多く来店されており、「いいコンサートだったよ」と口々に声をかけてくれた。



みそ蔵コンサート

「版画で歩く唐津街道展」は一週間の開催であった。この展示会に合わせ、二川秀臣さんにはマイヅル味噌、姪浜住吉神社、興徳寺、且過だるま堂の版画を新たに作成していただいた（石橋啓延邸は既に作成済）。二川さんは旧街道沿いの歴史的建造物が年々失われつつあることに危機感を覚え、版画でその姿を残しておきたいという思いから長崎街道や唐津街道を中心に多くの作品を作られ、いろいろな地域で展示会を開催されている。勤めていた会社を定年で辞めてから、本格的に版画を彫られているが、その情熱には頭が下がる思いである。現在は 80 歳半ばであるが、元気に活躍されている。久しぶりにお会いして、筆者のまちづくり協議会卒業やマイヅル味噌のみそ蔵の報告を兼ねて、ゆっくりと話をしてみたい。



版画で歩く唐津街道展

9 平成 20 年度の活動

(1) トークショー

平成 20 年度から実施したのは、歴史的建造物でのトークショー（まちづくり講演会）である。前にも書いたが、こうした事業は公民館や市民センターではなく、寺社、みそ蔵、町家、cafebar PIPS（旧郵便局舎）などで行い、歴史的建造物の魅力を伝えていくことに意義がある。これも筆者のこだわりである。

平成 20 年度は、cafebar PIPS で 2 回の講演会を「唐津街道姪浜塾」として実施した。20～30 名の講演会にはちょうどいい規模の会場であり、雰囲気も良く、リラックスして会話ができる。講師は、第 1 回目が地域デザイナーの高山美佳氏、第 2 回目が西日本文化編集長の深野治氏であった。高山さんには『地域の魅力を伝える、活かす～「風景」「物語」「食」と地域活性化～』について、深野さんには『唐津街道と姪浜』についてお話しいただいた。トークショーの相手はお馴染みの十時裕氏。講師や会場との掛け合いも上手い。講演会終了後には、同会場で懇親会。講演会の話題も踏まえ、楽しいひとときを過ごした。ちなみに PIPS は現在ワインバーとして使われているが、サロンのな会場としてはもってこいの場所であると思う。いろいろな使われ方を期待したい。



トークショー

(2) 先進都市調査

平成 20 年度から先進都市調査を始めた。最初の視察は、八女市横町、山鹿市豊前街道、熊本市古町、黒川温泉、田主丸町、吉井町などであった。メンバーは、協議会から筆者を含めて 5 名、市役所から 2 名、合計 7 名であった。いずれも町並みなどの地域固有の魅力資源を活かしたまちづくりを推進している地域であり、会員に実際に見て感じてほしいと企画したものである。姪浜とは置かれている状況は異なるが、他の都市を参考にしながら「姪浜の魅力資源をどのように活用していくのか」についてしっかり考えていくことが、今もこれからも求められている。先進都市調査は、そのための絶好の機会なのである。

また、こうした企画は、宿泊する場所や食にもこだわる必要がある。宿泊は、筆者が以前から使わせていただいている南小国町の農家の宿「さこんうえの蛙」であり、オーナー手作りの野菜を使った料理が大変美味しい。静かな環境も福岡にはないものだ。セミやカエルの声が静かな山里に響いていた。建物も農家の納屋をリフォームしたもので、こういう場所に泊まることにも意義がある。同行したメンバーの中には、「肉や魚はないのですか」と言っている人もいたが、その

地域や場所でしか体験できないことを体感し、考えることが、次の地域づくりにつながるのである。これも筆者のこだわりである。



先進都市調査：八女福島(左)、山鹿(右)

(3) まちなみパネル展

平成 20 年度からまちなみパネル展も始めた。これは、地域資源集の概要版を A1 サイズに印刷・パネル化し展示するもので、当初は 16 枚のパネルを作成した。実は、このパネルの写真撮影のために夏の暑い時期に何度も足を運んだ。休日だけでなく、出勤途中にバスを下車して写真を撮ったこともある。それまで写真はたくさん撮っていたが、パネルに拡大する以上はどうしても人のいる町並みを撮りたかったからである。こうしたこだわりも大切である。

さて、このパネルの最初の出番は、10 月の「西区まるごと博物館 IN 小戸ヨットハーバー」であった。大きさと枚数、統一されたデザインに他の展示関係者も驚かされていた。来場者の評判も上々だったと思う。このパネルは、毎年秋の「西区まるごと博物館」での展示だけでなく、みそ蔵でのイベントなどの際にも何度も使われ、浜の魅力紹介ツールとしての役割を果たしてきた。ただ、作成から既に 9 年が経過しパネルも陳腐化しており、そろそろ見直しが必要だろう。



まちなみパネル展

(4) 秋の町並みイベント 2008

秋の町並みイベントとして、11 月 1 日に「町並みウォッチング&みそ蔵講演会、みそ蔵コンサート」を実施した。町並みウォッチング&みそ蔵講演会は、まち歩きの専門家である鹿児島島の東川隆太郎さん(NPO 法人まちづくり地域フォーラム・かごしま探検の会代表理事)とまちを歩き、

東川さんのユニークな視点で姪浜のまちを語っていただいたものである。

町並みウォッチングでは「寺社巡りコース」「町家町並み巡りコース」「お薦めのお店巡りコース」「おもしろ路地巡りコース」の4班に分かれ、まちを散策。まち歩きイベントは、いろいろ試行を繰り返している時期であり、この時はテーマ型で実施した。東川さんには、おもしろ路地巡りコースに入っていた。東川さんの視点は面白く、参加者からは笑いや感嘆、驚きの声が上がった。和洋折衷の床屋（理髪店）や、卯建（うだつ）のある家を面白がっていたように思う。

2時間ほど歩いて東川さんの講演会。テーマは「まちかどの宝探し～素敵なものはまちに転がっている・姪浜編～」であった。姪浜のまちを歩いた印象や気になったことを話していただいた。また、東川さんがテーマとしている「世間遺産」もたくさん紹介していただき、会場も大変盛り上がった。冒頭の自己紹介では「僕はまち歩きの達人なのに、こんなに太っているなんて、おかしいですね。僕は食べるのが大好きなんです。」と話すなど、最初から最後まで笑いの止まらない楽しい講演会であった。



町並みウォッチング



みそ蔵講演会

講演会後は、夕方からみそ蔵コンサート。今回はアコーディオンの新井武人さんとピアノの中島千智さんの演奏。ヨーロッパの街並みを思い起こさせる映画音楽や躍動あふれるオリジナル曲を演奏してもらった。軽快な演奏に多くの参加者が酔いしれたようだった。みそ蔵では、いろいろなジャンルの音楽が可能である。200年の歴史を持つ空間の包容力であろう。

筆者は前日までの多くの準備、当日のイベントの運営と息つく暇がないくらい充実していた。参加していただいた皆さま、本当にありがとうございました。



みそ蔵コンサート

(5) 唐津街道サミット

これは、唐津街道の宿場町の関係者で構成する「唐津街道サミット」の第1回目を前原宿で開催したものである（11月22日）。地域活動を積極的に推進している唐津街道沿いの赤間宿（赤間地区コミュニティ運営協議会）と前原宿（前原名店街）が、西新の高取商店街と姪浜宿（唐津街道姪浜まちづくり協議会）に呼びかけて実施したもので、各地域の関係者32名が参加した。姪浜宿からは筆者を含め3名が参加し、前原の郷土史家・有田和樹氏らの案内で前原宿を見て回った。有田さんの手作りのマップが印象に残った。前原宿は、町並みとしては連続していないが、古い商家などが点在し、街道の名残を感じることができた。その後、古い商家を改装した飲食店「古材の森」で、それぞれの地域の抱える課題や取り組み事例などについて話し合った。

今回のサミットでは、いろいろな関係者が商店街を元気にしたいと活動しているのがよくわかった。姪浜にもこうした情熱を持った方々が増えれば、地域も変わっていくだろうと感じた次第である。地域にある身近な宝（モノ、ヒト、コト）を探求し、しっかり活用していくことにもっと目を向けたらいいのではないだろうか。

なお、今回の意見交換がきっかけとなり、唐津街道サミットが組織され、広がりを見せながら毎年1回程度のペースで、各宿持ち回りで開催し、町おこしや地域づくりをテーマに意見交換を行っていくことになった。



第1回唐津街道サミット

(6) 「版画で歩く福博のまち～二川秀臣～」展

これは、「福岡市赤煉瓦文化館誕生100年祭」の一環として、協議会と福岡市で共催したものである（1月25日～2月8日）。内容としては、「福博のまちづくりを考える一環」及び「広域的視点から唐津街道の町並みを考えるきっかけづくり」として、唐津街道、長崎街道などの旧街道の風景をテーマに、九州各地で展覧会を開催している版画家・二川秀臣氏が描いた福博の町並みを版画で紹介するものである。期間中、1千人を超える市民の皆さまに会場いただき、箱崎～博多～福岡～姪浜を中心とした歴史的建造物と町並みの魅力を版画で楽しんでいただいた。

二川さんには、この展示会に合わせ、赤煉瓦文化館だけでなく、福岡城址など周辺の歴史的建造物を新たに彫っていただいた。赤煉瓦文化館の版画は、二川さんのご厚意により、展示会終了後も同館に寄贈・展示させていただいている。

筆者は協議会の事務局長及び福岡市職員（当時は都市景観室に在籍）として、企画～広報～準備（版画の運搬・設営・返却）～案内まで担当した。まさに一人数役である。二川さんからいた

だいた赤煉瓦文化館の版画は今でも自宅に飾っている。二川さんにはその後も、姪浜での版画の展示に何回も協力していただくことになるが、とても礼儀正しい方で多くの手紙や展示会の案内状をいただいた。筆者はそのすべてを今でも大切に保管している。機会があれば「版画家・二川秀臣×姪浜まちづくり人・大塚政徳」交流展を企画したいと考えている。



「版画で歩く福博のまち～二川秀臣～」展

(7) 春の町並みイベント 2009

これは、平成 20 年度の最後の事業となる「ガイドツアー&ウォークラリー、みそ蔵コンサート」である（3月20日）。広報ちらしにも二川秀臣氏の版画を積極的に使わせていただくようになった。ガイドツアーは今回で3回目となり、回を重ねるごとに準備にも慣れていった。ウォークラリーは初めての試みだったが、参加者が少なかったことや対応できるスタッフが限られていることなどから、今回限りとなった。

みそ蔵コンサートも3回目となり、協議会の事業として次第に定着していった。演奏者の選定に当たり、今回は前年の秋の唐津街道サミットで前原宿を訪れた際に古い建物を再生した「音蔵」のを知り、そこの演奏情報を入手し、オカリナの和田名保子さんの演奏を聴きに行った。みそ蔵でも演奏してほしいと打診し、快諾をいただいた。この時の共演者はギターの下隆二さん。「さくら」「コンドルは飛んで行く」「ブルームーン」などの曲を演奏していただき、オカリナ、ケーナ、ギターの音色が古いみそ蔵に優しく響き渡った。至福の時である。参加者からも感嘆の声をいただいた。苦労が吹き飛ぶ瞬間である。参加者からの喜びの声は、次の活動へのエネルギーになっていった。



ガイドツアー



みそ蔵コンサート

コラム5 東京駅

筆者は、平成 20 年度は「福岡市赤煉瓦文化館誕生 100 年祭」の実行委員会のメンバーとしても活動した。福岡市赤煉瓦文化館は辰野金吾氏設計の建物であるが、辰野氏設計の建物のうち、筆者が何回も見てきたのは東京駅である。今でこそ東京のシンボルとなっているが（もちろん竣工した当時もそうであったが）、筆者が東京にいた頃（昭和 55 年～61 年）はそんなに大事にされているという印象はなかった。赤煉瓦駅舎の保存運動が起こったのは、筆者が東京を離れた頃であろうか。その後、平成 15 年に国の重要文化財に指定、平成 19 年から復原工事が行われ、創建時の意匠も忠実に再現された。



昭和 55 年頃の東京駅



現在の東京駅(平成 26 年6月撮影)

10 平成 21 年度の活動

(1) 町家再生の実践

平成 21 年度に入り、まち歩きイベントで時々見せていただいたことが縁で、町家所有者から改修に当たっての相談を受けた。この町家は、築 100 年程の建物であり、以前は八百屋さんとして使われていた。しばらくは空家であったが、埼玉在住の所有者が定年を機会に姪浜に戻ってくるのに合わせ、どのように改修したらいいのか筆者らが相談を受けたものである。

まず、建物の調査を行ったが、明治、大正、昭和の 3 つの時代が同居する建物であることが判明した。土間が玄関から裏庭まで続いているのが特徴で、裏庭には隣のお寺の博多塀も見ることができる。博多塀が造られた時期は不明であるが、造られた当時の雰囲気を感じさせている。また、大正時代に改修した道路側の建物のガラスもほぼ当時のままである。台所には、懐かしいかまどもあった。そして、よく調べてみると、八百屋さんの前は魚屋さんとして使われていた痕跡もあった。



改修前

筆者らの要望は、外観については今の雰囲気をできるだけ維持し、内部については現在の生活に合うような形にリフォームしていただきたいということであり、具体的な提案もさせていただいた。所有者も景観への配慮については当初から前向きであり、方向性は同じであった。行政からの補助金は一切入っていないが、景観形成に十分配慮していただき、所有者には感謝の気持ちでいっぱいである。



まちづくり協議会からの提案



改修後



まち歩きでの案内

この他、家の改修か建て替えて相談を受け、改修という形で町並みの連続性に配慮していただいた町家もある。その一方で、空家状態であった町家の活用について打診し、内部まで調査させていただいた家もあったが、親族の反対で解体・建て替えられた家もある。

また、自主的な取り組みとして、古い町家や家屋が飲食店やカフェ、美容室などとして再生・活用される事例も増えてきた。これも筆者らの活動の成果かも知れない。

（２）灯明コンサート IN 興徳寺

多くの寺社があることも姪浜の大きな特徴であるが、地域の人は意外とその歴史や魅力を知らない。筆者は協議会発足当時から古刹・興徳寺でコンサートを開きたいと考えていた。平成 18 年に福岡市都市景観室が御供所の承天寺で実施したライトアップウォークコンサートが印象に残っていた。平成 19 年 9 月に協議会で実施した姪浜住吉神社での灯明をともした「まちづくり講演会&シンポジウム」も頭によぎった。灯明コンサートは、音楽だけでなく、普段味わうことのできない幻想的な雰囲気と魅力的な夜間景観を演出し、参加者に姪浜の魅力を伝えていくことを目的に行うものである。

具体的に企画を始めたのは 6 月頃である。7 月の定例会で承認後、8 月上旬に興徳寺の福山住職に依頼に行った。興徳寺は禅宗のお寺であり、こうしたイベントは難しいと考えていたが、ご住職からは快諾をいただき、演奏の分野についてもオカリナがいいなという要望をいただいた。早速、この年の春にもみ蔵で演奏してもらった和田名保子さんに打診し、こちらも快諾をいただいた。その後は、コンサート当日（10 月 3 日）まで具体的な準備を進めていくことになった。課題は、全体の配置計画、照明や灯明の配置計画、ステージの設置方法、雨天時の対応などであったが、現地を確認を重ね、入念に準備を進めていった。

また、特に苦労したのは、広報である。今回は募集人数が 200 名である。協議会にとっては、かつてない大きなイベントである。いつも通り広報らし、市政日より、公民館日よりなどを活用していたが、集客に苦労していた。そのため、知り合いの朝日新聞の原口記者に何とか記事にしてほしいと何度もお願いした。原口記者からは「大塚さん、お願いはわかるが、中央紙は紙面が限られているため、同じ団体の記事を何回も書くわけにはいかない。何か新しい要素がないと難しい。」というアドバイスをいただき、知恵を絞り何とか記事にさせていただいた。記事が出た途端、それまで伸び悩んでいた申込みが数日間で 100 名を超え、マスコミの力を実感した。最終的

には 200 名を超える応募があった。これ以降、何を行うにしても「マスコミに記事にもらえる内容」を常に意識して活動を進めていくことになった。



福岡市西区姪の浜の旧唐津街道（小倉―唐津）沿いの住民らでつくる実行委員会が10月3日午後7時から、地区で最も古い寺院、興徳寺で「灯明コンサート」を開く。宿場町でありながら、商人町、漁師町といくつもの顔をもっていた姪の浜の、寺町としての側面を、地区内外の人に知ってもらおうと企画した。

オカリナや、アシの一種で作られた南米の縦笛ケーナの奏者として九州一円で活動する和田名保子さんと、ジャズやクラシックから童謡まで幅広い音楽を手がける男女2人組のvisions（ビジョンズ）が共演。当日は参道や本堂前の

灯明空間響く音色

姪の浜 古寺で来月コンサート

寺町のよさ 有志PR

本堂前のコンサート会場。マンションが林立する足元に伝統的な街並みが息づいている＝福岡市西区姪の浜5丁目

境内が外部のイベントに使われるのは初めて。提供を快諾した福山正文住職（07）は「観光寺院ではありませんが、地元の方が懸命に頑張っておられるので、協力しようと考えました」と話す。

定員200人。参加費1500円。申し込みは、住所、氏名、年齢、電話番号を書いたはがき（〒819・0013 福岡市西区愛宕浜2の3の2の601）またはメール（otui-masa@iwk.jp）、ファクス（092・8822・3831）で大塚さん（090・7929・7758）まで。

コンサート会場に計400の灯明を置く。好天なら大木のクスノキの下で、雨がひどければ本堂で演奏を聴いてもらう。

約30人からなる実行委はこの2年ほど、江戸期以前のさまざまな面影を残す姪の浜の魅力を知ってもらおうと、白壁の町屋、寺の長塀に沿った迷路のような路地でのウォークラリーや、町屋内の見学ツアーなどを企画してきた。

その一人で市役所勤務の大塚政徳さん（51）によると、地区内には、主だった寺が八つ、10を超す神社がある。1260年創建の興徳寺は、7千坪を超す境内にクスノキやカシがうっそうと茂る。「興徳寺を抜きに寺町姪の浜は語れない。お寺独特の空間でしか味わえない音楽を聴いてほしい」

朝日新聞に掲載された記事

当日の設営は、ステージの設置、イスや照明の配置、灯明の準備など順調に進んでいった。天気心配もなかった。午後7時からの開演に合わせ、6時過ぎから灯明の点火を始めた。西区歴史よかとこ案内人さんのご厚意により、希望者には興徳寺の説明をしていただいた。午後7時の開演時には、周辺はかなり暗くなり、幻想的な雰囲気となっていった。司会者による興徳寺の紹介も「興徳寺にまつわる白うさぎ伝説」を盛り込んだもので、この伝説を初めて知る参加者も多かったことだろう。



準備を終えて

午後7時15分頃から演奏をスタート。演奏はオカリナ&ケーナの和田名保子さん、ピアノの塚

本美樹さん、ウッド・ベースの間村清さんの3名。「旅愁」「小さい秋みつけた」「コンドルは飛んで行く」「月までとどけ」「赤とんぼ」「黒田節」「つきせぬ想い」などの曲を演奏していただいた。オカリナ、ケーナ、ピアノ、ウッド・ベースの音色が750年の歴史のある古刹・興徳寺の境内に優しく響き渡った。この日は中秋の名月。大きなクスノキの枝の上から鮮やかなお月さんが顔を見せた。夜の深まりとともに、400個の灯明もより幻想的となり、感動的な時間となった。参加者からも喜びの声をたくさんいただいた。



灯明コンサート IN 興徳寺

(3) 秋の町並みイベント 2009

これはガイドツアーと合わせ、みそ蔵で長谷川法世さんの講演会「福博町並みゼミ（11月14日）」と展示会「町家散歩展（11月14日～21日）」を実施したものである。マスコミにPRしていくためには、毎年同じような繰り返しではなく、常にアンテナを張り、今何をしたらいいのかを考えておかないといけない。「町家散歩展」は、平成19年に読売新聞で連載された福博の町家のイラストの展示会で、平成21年の夏に博多町家ふるさと館で実施されており、みそ蔵でもぜひ実施したいと考えていた。巡回展示という位置付けである。法世さんに依頼したところ快諾をいただき、展示会に合わせて講演もしていただくことになった。

展示会で苦労したのは、展示計画である。イラストのサイズが小さいことや、イラストと説明文が分かれているためイーゼルが使いにくいこともあり、テーブルとみそ蔵のベンチを利用することになった。また、小さな木製イーゼルや説明文用の斜めの手作りの台もたくさん用意することになった。実は、筆者はみそ蔵にあった2つの味噌樽を中央に据え、そこに法世さんの作品を展示したいと考えていたが、幻に終わった。今でも少し後悔している。

講演会は、平成19年9月のキックオフイベントと同様、法世さんが取材し描いた姪浜の町家のイラストをスクリーンで紹介しながら、その時々エピソードを話していただいた。もちろん、みそ蔵の白水家も含まれる。実際に取材した家で行う講演会や展示会は、より意義のあるものであると思う。数あるみそ蔵でのイベントの中でも、筆者の記憶に残るイベントの一つである。



町家散歩展



講演会

また、展示会や講演会に合わせて、ガイドツアーも実施した。同じ日に複数の事業を重ねることは、事務局長である筆者の負担は当然増えるが、できるだけ多くの方々に法世さんの作品を見てほしかったからである。今回は、ガイドツアーについては触れないが、この頃、筆者が西日本新聞に投稿した記事を紹介しておこう。「姪浜ことりっぷ」の提案でもある。常にアンテナを張り、マスコミへのPRの機会をうかがっていたのである。

7月21・22 西日本

九州の街歩き隊

福岡市西区姪浜 唐津街道の歴史巡る

かつて唐津街道の宿場としてにぎわった福岡市西区姪浜地区。秋の一日、歴史散歩を兼ねた。

かつて唐津街道の宿場としてにぎわった福岡市西区姪浜地区。秋の一日、歴史散歩を兼ねた。

スマートフォンは祇園河原町、東に向かい姪浜小学校近くで知られる住吉神社、イチにある探検隊を訪ねる。鎌倉時代、室町時代の築来に備えられた江戸。その昔、商船で栄えた町とか、角地にあり六角形の町家が大口マンを感じる。

唐津街道の路地を通り、唐津街道の宿場。かつて水戸町、小戸町と呼ばれた場所を巡って、約50年の歴史を誇る古刹・興隆寺。この10月には灯明コンサートが行われ、幻想的雰囲気にも多くの人が酔いしれた。

真徳寺神社を巡り、北側にめば住吉神社のイチョウが見えてくる。この散策エリアには老舗のかつお節やかまぼこ店もあり、食べ歩きを楽しむ満喫できる。

小戸町の古い町並み。白壁の町家がゆかしい

臨濟宗大徳寺派の禅寺興隆寺

★あなたの街を歩いてみませんか？ 約1万歩（約6km）のコースを作り、①コースの地図②見所の説明（300字以内）③実際に歩いたリポート（約800字）と写真（2、3枚）を、住所氏名、連絡先を明記して、郵送か電子メールで文化部生活班「街歩き隊」係まで。選考の上、一部を紙面に掲載します

（唐津街道姪浜まちづくり協議会・大塚政徳）

筆者が西日本新聞に投稿した「姪浜ことりっぷ」の提案

(4) 旧町名表示板の設置

町並みイベントだけでなく、具体的に目に見える形でまちづくりの効果を伝えていくため、協議会でできることから取り組むことになった。その最初の事例が旧町名表示板の設置である（平成22年1月～）。これは、地域の方々に地域への誇りや愛着を感じていただきたいと考え、昭和30年代の町名表示板を作成し、散策コース（景観回遊路）の主要な場所に設置しているものである。表示板は会員の手作りであるが、書道の得意な肥塚さんがいたからこそできた協議会オリジナルの事業である。残念ながら安いプレートを使用しており、雨が直接かかる場所には適していなかったようだった。予算を確保して、再度作り直してもいいくらいの意義のある事業である。そして、外注するのではなく、会員が手作りで地域への想いを込めて作ることに意義がある。

そのためには、書道や工作が得意で、地域への想いと情熱のある肥塚さんのような人材が必要である。後述する「姪浜ブランド認定事業」や「姪浜町家認定事業」も肥塚さんがいたからこそできた事業である。肥塚さんが卒業した協議会は、活動の幅が狭くなり、姪浜の身近なまちづくりの推進にとって、大きな痛手となったのではないだろうか。



旧町名表示板

(5) まちの案内所の開設

平成22年2月には、国の登録有形文化財であり、地域のシンボルとなっているマイヅル味噌の建物内に「まちの案内所」を開設した。これは活動を進める過程で、会議をするスペースや荷物を置くスペースが必要になり、マイヅル味噌さんのご厚意により格安の家賃で場所を借りることになったものである。味噌貯蔵用の冷蔵庫が置かれていた20㎡の部屋を、約3ヶ月かけて会員が手作業で壁塗りや床張り替えなどを行った。

オープン当日も早速、福岡市都市景観室や NPO 福岡デザインリーグ、西区歴史よかところ案内人の方々と秋のまち歩きイベント「景観歴史発掘ガイドツアー」について打ち合わせを行い、3つの新聞社からも取材に来ていただいた。まちの案内所では、平成27年3月までの約5年間、姪浜の見どころを紹介した歴史散策マップを配布したり、イベントや唐津街道に関する情報提供などを行ってきた。



改修の様子



案内所の開設

(6) 春の町並みイベント 2010

これは、平成21年度の最後の事業で、春のイベントとして定着してきた「ガイドツアー」と「みそ蔵コンサート」である(3月27日)。ガイドツアーは、案内するコースは今までほとんど変わっていないが、初めて桜の開花時期に合わせて開催したものである。桜の名所である光福寺、万正寺、姪浜住吉神社の桜もほぼ満開で、以降の春のガイドツアーは3月の最終土曜日を基本に実施していくことになった。

みそ蔵コンサートについては、今回が4回目となった。会員の阪本さんの紹介でリュート(深町信秀氏)とリコーダー(執行絵里氏)による古楽の演奏とした。リュートは聞き慣れない方も多と思うが、弦楽器の一種で、主に中世からルネサンス、バロック期にかけてヨーロッパで大変愛用された古楽器で、素朴で繊細な美しい音色が特徴である。また、その美しく魅力的なフォルムは、絵画や彫刻、詩などの題材として、多くの芸術家たちの作品に残されている。深町さんと執行さんの息の合ったコンビで「ルネサンス音楽と過ごす春のひととき」をテーマに、「バッハ

の G 線上のエリア」「サリーガーデン」「ロビンは緑の森の中へ」など 20 曲以上を演奏していただき、その美しい音色がみそ蔵に響き渡った。



ガイドツアー



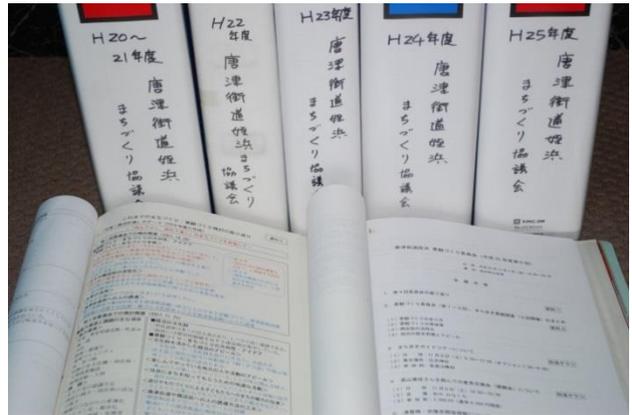
みそ蔵コンサート

(7) 定例会

最後に地味ではあるが、定例会について触れておこう（平成 19 年 5 月～）。定例会については、発足当時から毎月 1 回を基本に実施してきた。スケジュールやイベントが主な議題であるが、筆者の定例会の進め方は、必ずレジュメをしっかりと作り込み、何を協議するのか、何を決めるのかを明確にしてきた。議事録代わりにもなるし、欠席された方にも協議内容がわかるようにするためでもある。また、進行が事務局からの一方通行とならないよう、ワークショップをしたり、市役所の出前講座を取り入れたりするなどの工夫も忘れなかった。



定例会の様子



定例会の様子

定例会などの資料。筆者は大半の資料を作成してきた。

唐津街道浜まちづくり協議会 平成21年度事業計画の振り返りと見直し(案)

H21.12.18

()内は主な担当者、日程については、これをベースに今後調整していく。赤字表示の日程は終了または決定済

	4~6月	7~9月	10~12月	1~3月
■ガイドツアー&ウォークラリー(横谷、豊計)			11/14(土)朝	3/20(土)朝
■みそ蔵コンサート(福原、阪本)	白水さん主催 6/13(土)6/27(土)			3/20(土)夕
■町並みパネル展(大塚、川岡) ※イベントの都度、展示	6/27(土)	9/27(日)	11/14(土)~21(土)	3/20(土)
■灯明コンサートIN興徳寺(大塚、福原、川岡、阪本、上原)			町家散歩 11/14(土)~21(土)	唐津街道展 3/20(土)~27(土)
■まちづくり講演会(大塚、横谷)			11/14(土)星 長谷川法世氏	3/20(土)星
■西区まるごと博物館IN小戸2009への参加(阪本、田中、上原) (町並みパネル展示) (出店販売)		9/27(日)		※都市景観室と共催予定
■歴史散策マップ更新・増刷(道地)、地域の魅力資源集の更新(大塚)			※マップの更新はH22年度に変更予定	
■唐津街道浜まちづくり構想作成(大塚、道地) (協議会全員) ◆協議会定例会 (大塚) 毎月第3金曜日19:00~(原則) ◆ワークショップ(土時、大塚)	4/18(土) 5/15(金) 6/26(金)	7/17(金) 8/21(金) 9/18(金)	10/23(金) 11/20(金) 12/18(金)	
WS①都市景観室との意見交換 WS②地域資源・課題の再確認 WS③まちづくりテーマの確認				
■景観づくり地域団体の認定(川岡、大塚)		都市景観室との勉強会(6/26)		H22年度からの活動助成を目指す。 ●申請
■唐津街道ネットワーク活動(大塚、川岡) (イベントへの参加、意見交換)		福岡市都市景観室との勉強会、協議・調整		●申請
■他都市調査(大塚)	木屋瀬宿 5/23(土)	肥前浜宿、神代小路(豪雨のため中止) 7/25(土)~26(日)	前原宿 11/27(金)	赤間宿 2月
■旧町名表示(阪本、肥塚、田中)				旧町名表示板設置(3月イベント時にお披露目)
■町家再生モデル検討(道地、大塚)	現地調査 6/27(土)	リフォーム提案書作成、リフォーム業者 8/11(火)家主打合せ	表示する町名、設置場所等についての地元調整、表明札作成等 方向性決定	
■事務所設置(阪本、田中)			家主等との調整	入居 協議、契約 改修工 披露式

平成 21 年 12 月の定例会の資料の一部

11 1st ステージの振り返り

(1) 主な活動メンバー

発足時は、福岡市職員を中心とした前述の研究グループ「博多津にぎわい復興計画研究会」の会員が主体であったが、活動を続ける中で市職員は次第に減少。その一方、発足時は数人であった地域会員は、川岡会長の声かけもあり、少しずつ増えていった。その中には、地域で顔の広い川岡さんに依頼され何となく会員になった人もいるし、ふるさと・姪浜のために役に立ちたいと思って入会した人もいる。後者の代表は、肥塚さんである。肥塚さんは川岡さんの同級生でもある。筆者が事務局長として協議会の活動を牽引していく中で、肥塚さんの存在は次第に大きくなっていった。多彩な活動を展開できたのも、肥塚さんの存在が大きかった。

会員数も発足当時の10数名から約3倍の35人（協力会員を含む）に増えた。会の活動に賛同してくれる人が増えたということだろう。ただ、実際に活動に参加する会員は限られており、活動の拡大とともに事務局長である筆者の負担は増えるばかりであった。



灯明コンサート IN 興徳寺(平成 21 年 10 月)

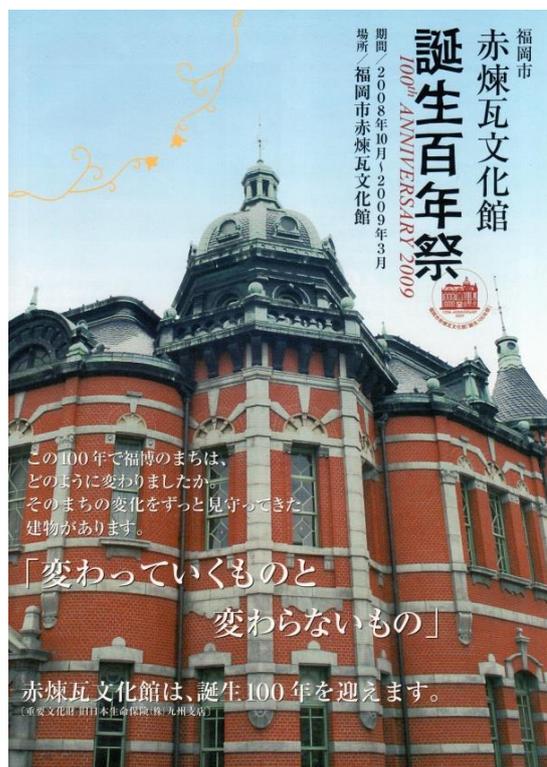


ガイドツアー(平成 22 年 3 月)

ちなみに、筆者の1st ステージの3年間は、仕事や姪浜の活動以外にも多忙を極めていた。平成19年度からは筆者の住むマンション(906戸)の管理組合の役員となり、特に平成20年度は副理事長という要職を任せられ、毎週のように会議に出ていた。その後も、筆者の住む棟の大規模修繕委員長を任せられ、業者選定や住民との調整など忙しい時期を過ごした。

また、平成20年度は「福岡市赤煉瓦文化館誕生100年祭」の実行委員会のメンバーにもなり、様々な活動に関わった。公私ともども忙しい時期ではあったが、大変充実していた時期であった。

「福岡市赤煉瓦文化館誕生100年祭」の
実行委員会のメンバーとしても活動



(2) 活動資金

この時期の主な活動資金は、福岡市西区が実施していた「西区やる気応援事業」である。平成19～21年度の3年間、毎年50万円を助成していただき、活動を軌道に乗せることができた。各会員から会費を徴収していなかった時期であったので、タイムリーな補助金であった。

1年目（平成19年度）は総事業費67万円のうち、助成金（50万円）が大半を占めていたが、3年目（平成21年度）は総事業費103万円で、助成金以上の額をイベント参加料やバザー収入などで調達できるようになった。補助金はあくまで従で、それがなくなっても事業を継続していくことを資金面の目標にしてきており、概ね目標を達成することができた。

【1stステージの事業費の変遷】

単位：千円

	助成金	自己資金	総事業費
平成19年度	500	170	670
平成20年度	500	343	843
平成21年度	500	532	1,032

(3) 表彰、認定

表彰としては、平成21年度に「福岡市都市景観賞」「ふくおか地域づくり活動賞」などを受賞した。活動開始から2年余りで、こうした賞を受賞できる団体に成長したことになる。これは、1stステージの精力的な活動の成果であり、今後の活動の大きな励みにもなった。

なお、都市景観賞受賞の審査委員講評では次のように記されている。まさに筆者が目指したシナリオ通りに進んでいった。

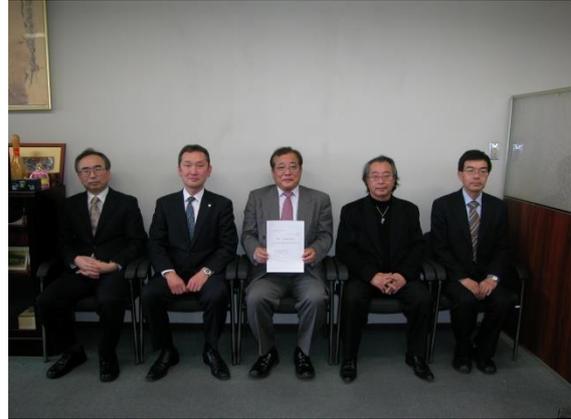
都市景観賞受賞講評

唐津街道は豊臣秀吉が文禄元年（1592年）に名護屋城出陣に際して利用し、江戸時代には福岡藩が参勤交代や長崎警備に使った。奈良・平安時代の律令官道との関連も指摘され、歴史ある重要な街道であった。本活動はその宿場の一つである姪浜の歴史文化資源を活用して景観まちづくりを進めるものである。協議会発足から2年余りの間に、歴史文化資源の調査、学習、発信、イベント、他地域との交流等をあわせて25件以上を実施した。今後はまちづくり構想策定や町家再生など、具体的な方向に進みつつある。事務局は協議会自らが担い、地域住民の主体性が明確である。このように本活動は地域主体の着実な歴史景観まちづくりとして高く評価される。

また、博多部の御供所まちづくり協議会に続き、福岡市都市景観条例に基づく「景観づくり地域団体」に認定された（平成22年3月16日）。これは、これまでの景観まちづくりに寄与する協議会の活動を福岡市が高く評価し、認定したものである。この認定により、景観に配慮した自主的なまちづくり活動に対し、必要な経費の一部の助成を受けることができるようになった。わかりやすく言えば、協議会が景観形成に配慮したまちづくりを進めていくことを行政が認定できる制度であり、自他ともに「景観」をキーワードとしたまちづくりを進めていくことを地域内外に宣言するようなものである。



福岡市都市景観賞の受賞



景観づくり地域団体の認定

(4) 総括

このように1st ステージの3年間は、試行錯誤を繰り返しながら頑張ってきた。自分でも、かなり突っ走ってきたと思う。他の団体であれば、10年間に相当するものであろう。いくつかの賞もいただき、活動の励みにもなった。

スタート時は、「地域住民自身の地域の魅力の認識不足」という課題に対して、「地域の魅力の再認識と地域内外への発信」という活動目標を立てていた。この課題や目標に対し、様々な事業を実施してきた。イベントは一見外向きのようなイメージを与えるが、そうではない。地域外から多くの方々に来ていただくことで、地域の方々に「外からの来訪者が増えている。姪浜って魅力がある地域なんだな」と感じていただき、誇りを持っていただくことがイベントの趣旨なのである。当時の資料を振り返ると、筆者はこの時期の成果について次のように記している。

協議会に対する当時の筆者の評価

- ・協議会が発足して以来、一貫して「地域の魅力資源の再発見」をテーマに活動してきた。その結果、地域の人にとっては、身近にあり何気ないものと感じているものが、外部の人が評価することで、本当に大事なものであることを再認識してもらえたのではないかと考えている。
- ・活動を続ける中で、まちづくりについての認知度が向上し、地域の方々の参画が次第に増えてきている。イベント参加者からは感謝と感動の言葉をたくさんいただき、活動の励みとなっている。また、各事業に当たっては、関係する団体や寺社、お店、住民の協力を得ながら実施しており、今後のまちづくりに向けての関係づくりも進んでいる。
- ・様々な活動を通して、いろいろな方々とのネットワークが広がるとともに、当協議会の認知度も向上している。今後、地域固有のまちづくりを進める上で大きな財産となるものと確信している。

1st ステージに掲げた目標は、3年間の目標ではなく、新たな目標を付加しながら、進化と深化を求めながら、以降も継続的に事業を進めていくことになる。

12 2ndステージの活動（主に平成22年度～25年度）

（1）地域課題、まちづくりの目標

平成22年度からを2ndステージと位置付け、活動もより活発になっていった。1stステージの活動により、地域内外に姪浜の魅力を発信してきており、こうした成果を受け、新たな地域課題にチャレンジしていくことになった。当時の課題は「地域のまちづくりの方向性が不明確」「まちづくりの効果を具体的に目に見える形で示す」ことであった。こうした状況の中で、筆者らは「姪浜のまちづくりの方向性を示す計画を作ろう」「地域でできる取り組みから実践しよう」という目標を立てた。

2ndステージの地域課題、活動目標

- 地域課題：①地域のまちづくりの方向性が不明確
②まちづくりの効果の具現化（具体的に目に見える形で示す）
- 活動目標：①地域協働のまちづくり計画の策定
②景観まちづくりの実践

（2）2ndステージの最初の定例会

2ndステージの最初の定例会（平成22年4月16日）では、唐津街道姪浜ならではのまちづくりに向けて、「姪浜のお宝（他地域にはない姪浜の魅力）」「まちづくり協議会の役割」「今後の活動」「まちづくりの推進に当たっての協議会心得」について確認し、協議会の方向性を明確にした。なお、姪浜の宝については、今までの調査や関係者の声、イベントでのアンケート結果を踏まえ、筆者が分析したものである。

姪浜のお宝

- 古い町家、寺社、狭い路地など、昔の宿場町の雰囲気を感じさせる町並み
- 神話の時代（神功皇后、小戸大神宮など）、中世（元寇防塁など）、近世（旧唐津街道など）の様々な時代の歴史が息づいていること
- 興徳寺、住吉神社などの多くの寺社と境内の豊かな緑
- 商船で栄えた商人町、漁業を営む漁師町、宿場町、寺社町などの多様な顔を備えていること（それらの名残が随所に感じられること）
- 地元で獲れる新鮮で美味しい魚
- 身近な商店街（地元で作って売るお店が姪浜商店街の特徴）
- 河童祭り、夏越祭りなどの地域のお祭り
- 地域の人間的なつながり（路地や商店街により、昔ながらのコミュニティがある）
- 周辺には、愛宕神社、小戸大神宮、生の松原元寇防塁などの歴史文化資源の他、マリノアシティなどの新しい魅力スポットがある。

まちづくり協議会の役割

- 唐津街道姪浜のまちづくりは、上記のお宝を地域の魅力資源（共有財産）として認識し、活用していくこと。これだけの魅力を備えた地域は、福岡市内にはない。
- 協議会の役割は、様々な活動を通じ地域内外に唐津街道姪浜の魅力を発信するとともに、地域固有の歴史・文化資源を活かしたまちづくり計画を策定し、実践していくこと。

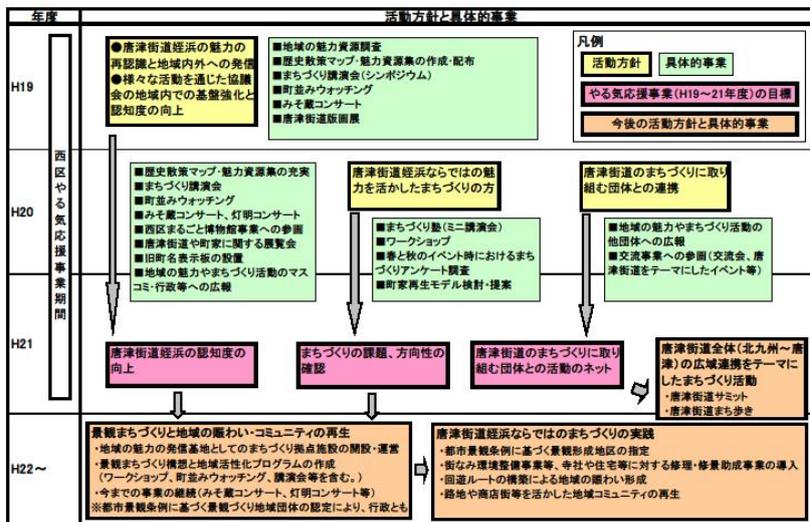
今後の活動

- 今までの活動の継続
- 案内所の機能強化（町並み案内、町家改修相談など）
- まちづくり構想の作成
- 景観まちづくり計画の作成
- 景観行政との連携による景観まちづくりの実践

まちづくりの推進に当たっての協議会心得

- 焦らず、怒らず、根気よくの精神で。まちづくりは、一步後退二歩前進、一步前進二歩後退の繰り返し。根気よくやりましょう。
- 何でも楽しくやりましょう。まちづくりに関わる人自らが楽しくなければ、長続きしません。
- 継続は力なり。どんなに小さな取り組みも、10年続けば立派な成果につながります。
- 若者、ばか者、よそ者の視点を大切にしましょう。特に外部からの視点は、新鮮な意見や感覚を含んでいます。
- 黙っていて、誰かがまちづくりをやってくれるわけではありません。地域の一人ひとりが、地域の魅力資源を活かしたまちづくりの推進に向けて目標と当事者意識を持って取り組みましょう。

唐津街道経浜まちづくり協議会のこれまでの活動状況と今後の取り組み予定



参考資料



まちづくり講演会(シンポジウム) 町並みウォッチング みそ蔵コンサート みそ蔵講演会

平成 22 年 4 月の定例会資料の一部

13 平成 22 年度の活動

(1) まちの案内所披露式

平成 22 年度の最初の事業として、マイヅル味噌の建物の中に開設した「まちの案内所」の披露式を 5 月 16 日に実施した。これは、協議会設立 3 周年を兼ねたものである。3 年間お世話になった関係者や案内所の改修工事に協力いただいた方などをお招きして、今までの活動報告を行うとともに、今後の姪浜のまちづくりの方向性について説明した。こういう機会を利用しないと、地域の方々には協議会の活動を知らない。地域資源集の概要版も配布したが、多分初めて見る方も多かったことであろう。そして、改めて姪浜のいいところを再認識していただけたことと思う。

その後は、祝賀会で盛り上がった。いつもお世話になっている長谷川法世さんをはじめ多くの方々に来場いただき、会場となったみそ蔵も喜んでいただけたことであろう。

また、案内所開設記念のみそ蔵コンサート「能 IN みそ蔵」を 6 月 19 日に実施した。3 月に古楽の演奏をしていただいた深町さんと執行さんの紹介によるものであり、能楽大倉流小鼓方の久田舜一郎氏による小鼓の演奏と能についての講演であった。能の歴史や演目の舞台背景、湿度による音の鳴り具合の違い、たたく位置で音階の変化を出すといった解説に、参加した人たちは感心していた。能の演目「翁」の演奏では、凜とした掛け声と鼓の音色がみそ蔵に響き渡った。



まちの案内所披露式



能 IN みそ蔵

(2) 福岡市長との対話集会「聞きたかけん」

福岡市長との対話集会「聞きたかけん」が 6 月 10 日にマイヅル味噌のみそ蔵で開催された。会員や関係者 14 名が出席し、吉田市長と「景観と回遊性」をテーマに懇談を行った。冒頭に筆者が協議会の活動状況をパワーポイントで説明した後、意見交換を行った。その中に、姪浜魚市場前付近からマリノア方面にかかる名柄川人道橋の提案があり、最初はこれに話が集中した。地元の要望を伝える場ではないので、好ましい展開ではなかったが、何とか次の話題へと移った。地元の方は役所の人があると、何でも要望したくなるが、まずは地域で何ができるかを考えることが先である。まだまだ成熟していない協議会の姿が浮き彫りになった場面であった。

橋の件については、その後、不法に係留された船舶の撤去に向け、福岡市から名柄川の管理者である福岡県に要望が出され、まずは不法係留船の撤去に向けて動き出すことになった。

また、市の担当者の話によると、福岡市の歴史ある町並みと言え、どうしても博多部の方に目が向けられがちであるが、唐津街道沿いの姪浜に未だに江戸時代から昭和初期にかけての古い町家が約 100 軒も残っていると聞いて驚いたとのことであった。



聞きたかけん

(3) 九州大学アーバンデザインセミナー

7月9日に九州大学の大学院生を対象にした「アーバンデザインセミナー2010」がマイヅル味噌のみそ蔵で開催された。これは、九州大学の大学院生約15名が「歴史」「回遊」「地域の活性化」「町並み」などをテーマに、姪浜のまちづくりについての提案を発表し、地域の皆さま方と活発に意見交換を行ったものである。

姪浜には、日本誕生神話や神功皇后伝説のある海岸、奈良時代や鎌倉時代からの歴史を持つ神社やお寺の数々、元寇防塁跡、江戸時代に栄えた街道や廻船が出入りした港、大正から昭和30年代にかけての炭鉱など、様々な歴史が積み重なっている。一方、区画整理や埋め立てによってつくられた姪浜駅周辺や海辺などには現代的な商業施設や高層マンションなどが建ち並び、古くからの街道や港の風景とは対照的な表情を見せている。このように姪浜は、時代や目的によってそれぞれ異なる空間づくりの技術が用いられ、風景が上書きされ続けてきた。

今回のテーマは「上書きされた都市」ということで、多彩な歴史を持つ姪浜にふさわしいテーマであった。空間特性、都市形成や商業空間の変遷、歩行者空間のあり方などについての学生の皆さまからの斬新な視点と大胆な提案は、今後の地域づくりに大いに参考にさせていただきたいと思った次第である。



九州大学アーバンデザインセミナー

(4) かわら版の創刊

地域の魅力やまちづくり活動を広く地域住民に発信することを目的とした「かわら版」を9月

1日に創刊した。創刊号はこれまでの3年間の活動を主体に、「姪浜・まちかど遺産ピクニック」や「トピック」「秋のイベント」などを掲載した（A3版、両面カラー）。姪北校区や姪浜校区の回覧板での広報の他、協議会案内所、地域内の主要なお店、近隣の5公民館、西区役所、福岡市情報プラザなどで配布した。マスコミへの広報にも努め、4つの新聞に掲載された。こうした広報の効果もあり、当初印刷の3,000部がすぐに無くなり、急ぎよ3,000部を増刷することになった。地域内外の評判も上々であり、協議会の活動を広くPRする絶好の機会となった。

以降も、年間1～2回のペースで発行し（各回4,000部程度）、協議会の活動内容や姪浜の魅力の紹介をしてきた。筆者が協議会に在籍中は、平成27年11月までに第9号まで発行。この間、NPO日本都市計画画家協会「日本まちづくり大賞」の受賞時に号外を発行することもあった。かわら版の編集長は筆者であり、原稿の大半も筆者の執筆によるものである。第4号からは「事務局長通信」などのコーナーを設け、その時々筆者の想いを伝えてきた。これについては、「コラム」の中で順次、紹介していきたい。



創刊にあたって
（金井あづさ）

姪浜地区のまちづくりを推進するために、協議会が発行する『かわら版』が創刊されました。この号では、協議会の活動内容や姪浜の魅力を紹介しています。また、事務局長通信などのコーナーも設け、その時々筆者の想いを伝えてきました。これについては、「コラム」の中で順次、紹介していきたい。

今後の活動状況
（金井あづさ）

協議会の活動内容は、毎月1回のペースで行われています。また、協議会の活動内容や姪浜の魅力を紹介しています。また、事務局長通信などのコーナーも設け、その時々筆者の想いを伝えてきました。これについては、「コラム」の中で順次、紹介していきたい。

発行にあたって
（金井あづさ）

協議会の活動内容は、毎月1回のペースで行われています。また、協議会の活動内容や姪浜の魅力を紹介しています。また、事務局長通信などのコーナーも設け、その時々筆者の想いを伝えてきました。これについては、「コラム」の中で順次、紹介していきたい。

活動報告
（金井あづさ）

協議会の活動内容は、毎月1回のペースで行われています。また、協議会の活動内容や姪浜の魅力を紹介しています。また、事務局長通信などのコーナーも設け、その時々筆者の想いを伝えてきました。これについては、「コラム」の中で順次、紹介していきたい。

かわら版

（5）先進都市調査

平成22年度に「地域づくりを巡る町並みツアー」を実施した。これは、福岡市から「景観づくり地域団体」の認定を受け、景観に配慮したまちづくりの推進に向け、会員の勉強や関係団体との協力体制の強化を目指したものである。

まずは、9月に事務局スタッフ6人で肥前浜宿（鹿島市）、塩田宿（嬉野市）、森岳商店街（島原市）、神代小路（雲仙市）を視察した。いずれの地域も、地域固有の古い町並みや歴史的建造物を活かしたまちづくりを進めている。視察に当たっては、各地域への視察依頼や日程調整なども

筆者が中心になって行うことになるが、手慣れたものである。

肥前浜宿は、浜川の河口につくられた在方町（江戸時代の農村における小都市集落）である。江戸時代は長崎街道多良往還（多良海道）の宿場町として、また有明海に臨む港町として栄え、明治以降も酒造業や水産加工業に支えられ、豊かな町並みがつくられてきた。江戸時代から「浜千軒」といわれ、通り沿いには今でも白壁土蔵造りの酒蔵や草葺の町家が立ち並び、伝統的な景観を色濃く残している（伝統的建造物群保存地区）。漆喰のはがれた土壁が素朴で風情がある。9月中旬でまだ暑い時期であったが、酒蔵に入ると少しひんやりしていた。町並みが産業や生業と関係あることが実感できるまちである。



肥前浜宿

塩田宿もかつて長崎街道沿いに栄えた宿場町である。すぐ近くを流れる塩田川は当時、嬉野や有田など、焼物の積み出しや陸揚げを行う港として利用され繁栄した。物資取引の中心地となった馬場下一帯は今も白壁造りの町家が残し、当時の様々な建築様式がかつての面影を伝えている（伝統的建造物群保存地区）。また、塩田石工による石垣や仁王像、恵比寿像などが加わって良好な歴史的風致を構成している。人通りは少なかったが、町家、寺社、塩田川など多彩な魅力資源と歴史は、姪浜の参考になると思った。地域資源の掘り起こしの大切さを改めて感じたところである。



塩田宿

森岳商店街は、島原市内の6つの商店街のひとつである。近くに島原城があり、この特性を活かしたまちづくりを進めている。伝統的建造物群保存地区ではないが、古い町家や商家を「登録

有形文化財（文化庁）「まちづくり景観資産（長崎県）」「まち並景観賞（島原市）」の制度で認定することで、歴史的景観を活かしたまちづくりを進めている。また、古い町並みと調和した商店（酒屋、金物屋、レストランなど）が人気となっており、姪浜でも参考になる事例である。



森岳商店街

神代小路は、天正15年（1584年）の九州国割を経て、慶長13年（1608年）鍋島信房が初代領主となったことに始まる。城址の森と塀を兼ねた川に囲まれた武家地ならではの閉鎖的な空間を有している。江戸中期の地割りをよく残し、武家屋敷建築の主屋や長屋門が、屋敷囲いを構成する生垣や石垣、水路などの環境要素と相まって美しい町並み景観を醸し出している（伝統的建造物群保存地区）。定年を機会に神代小路に戻られる方もいるとのことであるが、高齢化が進み、人口も減少するなど、町並みを維持していくことの難しさを感じた。



神代小路

また、12月に豊後高田市の昭和の町、臼杵市二王座、杵築市城下町を視察した。参加者は、会員、よかとか案内人さんなど18名であった。

昭和の町は、昔どこにでもあった町並み（今は失われた町並み）を逆手にとり、『商業と観光』の一体的振興策として「昭和の町」づくりという明快なテーマをもとに、店舗修景（お化粧直し）、かつて1万俵の米を納めていた旧農業倉庫を活用した観光拠点づくり（昭和の夢町三丁目館）、地元住民がまちを紹介する「ご案内人」制度など、オリジナリティある取り組みが行われている。昼食会場でのアルミ容器の給食が懐かしかった。

臼杵は城下町で、寺院、町家、商家、武家屋敷、洋館が混在しており、独特の町並みを形成している。特に二王座付近は、ゆるやかな坂道が続く静かな町であり、伝統的建造物群保存地区ではないが、質の高い建築が豊かな町並みを創出し、変化のある独特の風情を醸し出している。町家も狭い路地に密集して建ち並んでおり、迷路のようである。江戸時代から現在に至るまでの長い歴史を随所を感じる事ができた。



臼杵

杵築は江戸時代の城下町の風情が残るまちである。杵築城を中心として南北の高台に武士が住み、その谷あいには商人が住んでいた町で、「サンドイッチ型城下町」の構造となっている。特に北台武家屋敷通りは、上級武士や家老たちの屋敷がずらりと並び、今でも色濃く江戸時代の面影を留めている。また、江戸の粋な風情を残す町家界隈の町並みもあるが、道路拡幅によりヒューマンスケールの限界性が失われ、イメージが大きく変わってしまったような気がする。神代小路と同様に、高齢化と人口減少が進み、町並みを維持していくことの難しさを感じた。



杵築

(6) 唐津街道特産品フェア

唐津街道のまちおこしに取り組む各団体との交流活動「唐津街道サミット」については、平成20年度から実施され、まち歩き、意見交換会などが行われてきた。平成22年7月には、第3回目のサミットが高取で開催。各団体による具体的なまちおこしについての活発な話し合いが行われ、「各宿場町を訪ねるツアーの開催」「唐津街道共通のロゴマークの制作」「10月に西新から高取にかけての商店街で開催される祭り（勝鷹夢まつり）での各宿場町のPR」などのアイデアが出さ

れた。

これを受け、早速10月の「勝鷹夢まつり」で唐津街道のコーナーが設置され、各地域のPRとともに、栗まんじゅう（前原宿）、地酒（赤間宿）など、それぞれの地域の特産品が販売された。姪浜宿からはパンの店・窯蔵さんの「みそメロンパン」、魚嘉さんの「蒲鉾」、仲西商店さんの「削り節」を販売するとともに、歴史散策マップやかかわら版を配布し、姪浜の魅力をPRした。



唐津街道サミット IN 高取



唐津街道特産品フェア

（7）景観歴史発掘ガイドツアー

10月23日と24日の両日、NPO法人FUKUOKAデザインリーグ及び福岡市と共催で、『景観歴史発掘ガイドツアー』を実施した。宿場町、商人町、漁師町、寺町などの様々な顔を持つ姪浜の歴史の痕跡とまちの風情、そして食文化にも触れていただくというツアーであった。

コースは今までのガイドツアーとほとんど変わらないが、よかところ案内人さんの専門である「歴史」の視点に加え、デザインリーグさんの専門である「都市計画、建築」の視点加わることで、より充実した内容となった。また、新たな町家やお寺をコースに加えた他、昼食も老舗の「たつき」さんの協力により特製の姪浜弁当（地元でとれた野菜や魚を使用）にしたことで、参加者により姪浜らしさを伝えることができたと考えている。

他の団体との共催は初めてであったが、「参加料が高くても質の高い内容であれば、参加してみたい人はたくさんいる」ということがわかるなど、刺激を受けたガイドツアーであった。これを機会に、新たな視点を取り入れたガイドツアーを展開していくことになった。



景観歴史発掘ガイドツアー



「たつき」さんの協力による特製の姪浜弁当

(8) まちづくり計画策定ワークショップ

秋の多忙な行事が一段落したところで、10月からは「地域固有の歴史的環境を活かした町並みづくりと地域の賑わい形成」に向けて、地域住民を対象としたワークショップを始めた。それまでの活動成果を踏まえ、次のようなテーマを中心に検討を重ねた。

これまでの活動を踏まえた「景観まちづくりと地域活性化」のテーマ

- ◆地域固有の歴史的環境を活かした町並みづくり
- ◆歴史的魅力を活かしつつ、臨海部の集客施設との連携をも考慮した商店街の賑わい形成
- ◆町家、路地、商店街などで育まれてきた豊かな地域コミュニティの維持・継承
- ◆古い町家を活かした快適で新しい暮らし方や再生活用の提案
- ◆東西の歴史回遊ルートや南北の賑わい回遊ルートの形成
- ◆これらの取り組みによる姪浜ブランドの構築と地域内外への発信

【第1回ワークショップ】

第1回のワークショップは、「姪浜の主要な場所で、まちの人たちや来街者にインタビューして唐津街道やまちづくり協議会の知名度、姪浜のまちづくりへの要望を聞き、今後の協議会活動のあり方やまちづくりの方向付けに活かす」という内容であった。その結果をまとめたものが下表である。協議会やその活動が、まだ知られていないことを実感できるワークショップであり、これを機会に知名度向上に向けた活動をさらに進めていくことになった。

第1回ワークショップのまとめ

◆唐津街道

- ・唐津街道を知っている人が多かったのは愛宕神社であり、神社を訪れるような人は唐津街道にも興味があるということであろう。したがって、「歴史」をベースにしながら唐津街道を再生していくのが良いのではないか。

◆協議会

- ・唐津街道で聞いても約半数の人が協議会のことを知らず、全体では知らない人が約4割に達する。唐津街道のPRとあわせて協議会を知ってもらうことが必要である。

◆協議会の活動（イベント）

- ・唐津街道では知られているが、全体としては約6割の人が初めて聞いたという状況であり、活動の知名度も低い。活動のPR方法やPRする場所を考える必要があるのではないか。

◆姪浜のイメージ

- ・「新しい町と古い町」「便利で住みやすい町と寂れている町」「炭鉱や漁業も含めた歴史の町と臨海部の新しい町」など、まさに「上書きされたまち」として多様な見方をされている。
- ・このことは、まちの魅力の焦点がぼやけてしまうということにもなるが、逆に多様性をうまく活かして、いろいろな魅力を備えたまちにしていくことの可能性を秘めているということではないか。「上書きされたまち」をどのようにして「住みやすいまち、楽しいまち」に結びつけるかがアイデアの出どころである。



第1回ワークショップ

【第2回ワークショップ】

第2回ワークショップは、4つのグループに分かれて、「姪浜の10年後を見据えたまちづくりを具体的に企画・提案する」という内容であり、それぞれのテーマに沿ってグループごとに議論し、提案をまとめてもらった。楽しく進めていくことで、まちづくりへの参加意欲を高めていくことができたと考えている。ワークショップの進行は十時さんであったが、さすがに進め方が上手で、参加者もワークショップの楽しさを実感できたのではないかと考えている。

第2回ワークショップのテーマ

〈テーマA：ドラマによる姪浜の魅力発信方法〉

- ・姪浜を舞台としたドラマを、放送作家になりきって企画する。

〈テーマB：散策お薦めコースガイド〉

- ・カップル向け、高齢者向け、若い女性向け、障がい者向けなど、利用者を想定したルートづくりを行う。

〈テーマC：大切にしたい町並み〉

- ・古い建物（町家）を店舗や旅館に復元し、姪浜の古きよき時代を堪能できる場所として活かす。

〈テーマD：姪浜ブランドづくり～姪浜でマンション生活を10倍楽しむ方法～〉

- ・春夏秋冬の楽しみ方、子どもの遊び場、高齢者のお楽しみスポットなどを提案する。



第2回ワークショップ

【第3回ワークショップ】

第3回ワークショップでは、今までの振り返りを行うとともに、専門家の鮎川透氏（建築家）を交えて参加者と意見交換を行った。

鮎川透氏のミニ講演骨子

- ・考えをできるだけ目に見えるものにしていくことが重要である。景観のガイドラインを作るのもその一つである。
- ・まちづくりは泥臭くて、決して格好のいいものではないことを心に刻んでおくこと。
- ・ブランドをつくる。町並みもブランドである。ただ、すべて本物であることがコンセプトであるが。
- ・町並みづくりに当たっては、昔の材料にこだわるばかりでなく、その時代時代に合った本物の材料を使おう。
- ・景観を考えるガイドラインをなるべく早く作るが必要であり、住民、土地所有者、建物所有者のコンセンサスを得ておく必要がある。
- ・町家は住みにくく、また、地主や建物所有者は自分の不動産からできるだけ高収入を得たいと望み、高層のマンションなどを建てたがるのが当たり前である。それでも、唐津街道に100戸近く残っている町家建築を残して、姪浜文化を後世に残す意義や、通りの魅力を高めることで人を呼び、まちが活性化する方法を丁寧に説明し、よく話し合う必要がある。



第3回ワークショップ

（9）広域回遊マップ作成

姪浜の魅力を再発見・再確認するため、身近にあっても日頃気付かずに見過ごしている歴史的遺産や産業遺産、生活の痕跡、旧町名の由来、周辺エリアの魅力資源などを調査した。この調査をもとに平成23年1月、「海恋のまち・姪浜まち歩きマップ」を作成・発行した。旧唐津街道周辺については「歴史散策マップ」を作成していたが、今回のまち歩きマップはエリアを広げ、東は室見川、西は十郎川、南は姪浜駅、北は博多湾までを対象とした。

内容としては、姪浜の代表的な「よかところ」を楽しむことができる4つのお薦め回遊ルートや、暮らしの中の意外な「お宝」発見を楽しめる回遊サブルートを設定した。また、寺社や史跡の他、まちかど遺産や海辺の集客施設、お薦めのお店、受け継がれている祭りなどを表示した。

このマップは、B3 蛇腹折り加工で、折り畳めば B5 サイズで持ち運びしやすいものとした。6,000部を印刷し、約 2 年間かけてイベントなどで配布。概ね好評のマップだったのではないだろうか。



広域回遊マップ

(10) 唐津街道サミット IN 姪浜宿

平成 23 年 3 月 12 日に、唐津街道のまちおこしに取り組む各地域の団体で構成する「唐津街道サミット」を姪浜宿で開催した。第 4 回目となる今回のテーマは「食」。各地域の特産品を使った唐津街道弁当、食べ歩きスタンプラリー、町歩きイベントにおける食のガイドなどの多彩なアイデアが出された。

また、懇親会では、姪浜の食材（新鮮な魚、白魚、姪浜海苔など）を使った料理や、姪浜の名産品（魚嘉のかまぼこ、仲西商店の削り節、窯蔵のパンなど）を使った料理を提供し、参加した皆さまに大変喜ばれた。これは、肥塚副会長の提案によるもので、こだわりとおもてなしの気持ちを料理に込めたものである。こうした地道な取り組みが、姪浜ブランドの構築につながることを実感した。



唐津街道サミット IN 姪浜宿

実は、このサミット前日の 11 日の午後 2 時 46 分に東日本大震災が発生し、津波が押し寄せる映像が強烈な印象として残っている。福岡にも津波が押し寄せる可能性があり、その影響を受ける団体もあるということで開催するかどうか悩んだが、既に食材を手配していたこともあり、関係者と相談して開催を決断した。筆者は当時、耐震の仕事をしていた頃であり、その日のことは

特に印象に残っている。

(11) 「元気！姪浜計画」の策定

まちづくり計画策定ワークショップやアンケート調査などを踏まえ、3月に「元気！姪浜計画」を策定した。これは、地域による、地域のためのまちづくり計画であり、短期、中期、長期ごとに、具体的に何をしていくかの方向性を示したものである。

まちづくり協議会では、地元の人たちにとっては「住みやすさ・暮らしやすさ」のあるまち、訪れる人たちにとっては「楽しさ」のあるまちの実現を目標として、新旧の多様な「よかとこ」を姪浜の個性として活かすことができるような「まちづくり・町並み景観づくり」を地域の皆さまとともに進めていきたいと考えている。

「元気！姪浜計画」は、こうした想いを込めて策定したもので、今後の地域のまちづくりの共有指針となるものと考えている。



「元気！姪浜計画」

計画の概要であるが、「景観まちづくりの実践と姪浜ブランドの構築」を目指し、6つの基本方針と21の具体的な実現化方策を示している。6つの基本方針を示しておこう。

6つの基本方針

① 広域回遊ネットワークづくり

回遊ネットワークによって歴史的資源や商店街、公園、海辺、さらには新旧のまちをつないで姪浜の魅力を増幅させる。

② 姪浜のまちの個性の再構築（住まいづくり・町並み景観づくり）

町家などの地域資源の保全・活用を進めるとともに、培われてきた地域の知恵を活かした住まいづくり・町並みづくりによって姪浜の魅力や活力を再構築する。

③ 商店街の賑わいづくり

若者の姿のある通りづくりを目ざすとともに、「地産・新鮮・手作り」を活かして地域の人にも訪れる人にも喜ばれる商店街にしていく。

④ 姪浜ブランドづくり

姪浜ならではの「もの」や「ものがたり」を活かした姪浜ブランドを生み出す。

⑤ 地域を知る場・機会づくり

姪浜の魅力を知る・学ぶ・楽しむ場や機会を設けて地域内外の交流を育てつつ、姪浜の魅力を発信する。

⑥ 環境にやさしいまちづくり

「身近に海や川がある」「歩いて暮らせる」「地産地消ができる」……このような姪浜を持続し、向上させるために「環境」の視点を大切にする。

地域で議論し提案する「町並み景観づくり」

●スタートは「よかとこ探し」から

「町並み」は、住宅などの「建物」や「建物に付属するもの（塀や生け垣、駐車場など）」さらには、「道路」や「道路に設置してあるもの」の集合体である。それぞれの建物や建物に付属するものは個人のものであるが、それらが集まった「町並み」はみんなのものであり、「町並み」を良くしていくためには地域全体で考えていかなければならない。

町並み景観を良くしていくためには、まずは、「今ある良いものを探し、なぜ良いかを分析すること」から始めることが良いと考える。実現化方針②の「良好な住まいや町並みの再発見・再評価」からスタートしたい。



協議会主催の町並みウォッチング、町並み調査

●地域・目・よそ者の目・若者の目を合わせた「町並み景観計画」の提案

平成22年度には協議会が主催して3回にわたって「まちづくりと地域活性化ワークショップ」を行った。この場には、地域内外の方たちや九州大学の学生の方たちにも参加していただき、「地域・目」と「よそ者の目」、「若者の目」で姪浜の将来像について議論した。協議会ではこのような場を今後も継続的に開いて、姪浜の「よかとこ」を伸ばしながら町並みのあるべき姿の実現につなぐ「町並み景観計画」を立案し、地域に広めていきたい。



九大生も参加した第2回「まちづくりと地域活性化ワークショップ」(平成23年12月5日)

(4) 姪浜ブランドづくり

●姪浜ならではの「もの」や「ものがたり」を活かした姪浜ブランドを生み出す。

実現化方針① 今ある名産品や優良な店舗の「姪浜ブランド」認定 ……423年度に実施予定

唐津街道沿いや旧魚町通りにはすでに名産品といえる商品を販売している店舗があり、このような商品や店舗を「姪浜ブランド」や「姪浜ブランドの店」として協議会が認定し、広く世の中にアピールしていく活動を進めていきたい。具体的には認定シールや看板などを協議会がデザインして制作し、商店に贈ることを検討する。

●ブランド候補の名店、名産品の例



●認定シールや看板のデザイン案

- ・商品のパッケージや包み紙に貼ることができる「協議会認定・姪浜ブランド」のシール
- ・店頭に掲げるような「協議会認定・姪浜ブランド店」の看板または暖簾



地域ブランドの商標の例

街並みの雰囲気を出す木製暖簾

「元気！姪浜計画」の内容の一部

また、計画の概要を地域の方々に広報するため、3月26日に建築家の鮎川透氏と地域デザイナーの高山美佳氏を招いて、みそ蔵で「町並み形成と地域ブランドづくり」というテーマで講演会を開催した。協議会から「元気！姪浜計画」の説明をした後、鮎川氏からは小値賀島での取り組み、高山氏からは筑後での取り組みを紹介していただき、「元気！姪浜計画の実践に向けて」意見交換を行った。

この講演会をきっかけに「姪浜ブランドの構築」に向けて、具体的な実践に動き出すことになった。また、平成23年度に入ると、協議会の中に「女性部会はまこみち」が発足するが、この講演会で「まちづくりは女性の視点も大切」という高山氏の発言に刺激を受けた女性の発意によるものであった。



講演会

平成 22 年度の振り返り

平成 22 年度は、この他、「みそ蔵コンサート」を 2 回（9 月 20 日、10 月 23 日）、「ガイドツアー」を 1 回（3 月 26 日）を開催し、協議会のイベントとして定着させていった。10 月 2 日に予定していた「灯明コンサート IN 小戸大神宮」は当日まで準備をしていたが、残念ながら雨天中止となった。肥塚副会長には、手作りのステージまで作っていただいたが、そのお披露は平成 23 年度に持ち越しとなった。小戸大神宮でのコンサートは、参加者の開場へのアクセス、集客、コンサート空間の仕切り方などの課題を残しており、未だに実現していない。夜間の灯明コンサートではなく、福岡市内でも有数の夕日スポットという特徴を活かして、サンセットコンサートを検討した方がいいかも知れない。



みそ蔵コンサート



春のガイドツアー

振り返ってみると、協議会の事業量も年々増えていき、平成 22 年度も多くの事業を実施してきた。各種イベントに加え、まちづくり計画の策定、先進都市調査、他団体との連携事業など多彩な事業を運営していく事務局長の業務量は半端ではなかった。

唐津街道歴史 秋の町並みイベント 2010

灯明コンサート IN 小戸大神宮

2010年 10月 2日(土) 会場 小戸大神宮(西区小戸公園内)

開演 17:30 開演 18:00 雨天中止 観覧人数: 200名(観覧料が保証です) 観覧料: 1,500円(当日現地払い)

<div style="font-weight: bold; margin-bottom: 5px;">■宇波(ウ・ハ) Cello: チェロ</div> <p>1963年中国VHビンゲンに生まれる。11才より、幸大副匠(ハルビン芸術学院)の教師ウケストラチェロ(曹廣)にチェロを習いはじめる。13才でVHビンゲンにてサイタルデビュー。1982年、ポール・トゥルトウリエのマスタークラス修了。1983年、北京京劇学院を首席で卒業し、中国のトッププレイヤーによるソリストにて協演ソリストとして活躍。1987年に帰国後、1991年より福岡、長崎、熊本にて毎年リサイタルを開催。1994年、大塚、上島、笠原等と協演で多くのリサイタル、ソロ、アンサンブルの活動をこなしている。本年6月、11枚目となるアルバム『ピアノ』を三友音楽出版からCD『Remembrance』をリリース。</p>	<div style="font-weight: bold; margin-bottom: 5px;">■山田(やま) ゆみ Piano: ピアノ</div> <p>ハワイ大学にてピアノをピーター・コラックから師事。音楽グループ CONTINUE 主宰。1997年より毎年、福岡市内においてチャリティーコンサートを主催し、ピアノが ALTEZZA を担当し、小戸公園で協演に際しては、聖公会を中心とする多くのプレイヤーと協演。クラシック・ジャズ・ロック・ポップスなど幅広いジャンルで演奏活動に携わっている。福岡青年音楽家協会会員。本年7月、ピアノソロアルバム『Remembrance』をリリース。</p>
---	--

■問い合わせ・申込み先
 住所、氏名、年齢、電話番号を明記して、はがき、E-mail、FAX で下記までお申込みください。
 唐津街道歴史まちづくり委員会 事務局 大家政信 〒819-0018 福岡市西区礎宮2-3-2-601
 E-mail: ottu-masa@iwk.bbq.jp FAX: 092-882-3831 TEL: 090-7929-7758(携帯)

○主催 唐津街道歴史まちづくり協議会 ○共催 唐津観光局 ○後援 福岡市 ○協力 小戸大神宮

雨天中止となった小戸大神宮での灯明コンサート

14 平成 23 年度の活動

(1) 女性部会「はまこみち」発足

4 月には、女性部会「はまこみち」が発足した。女性部会は、3 月のまちづくり講演会の講師である高山美佳氏（地域デザイナー）の「地域の活性化は、女性のロコミで大きく変化していく」という言葉に感銘を受け、女性 4 人で立ち上げたものである。平成 23 年度は、「演劇ワークショップ」「みそ蔵コンサート（津軽三味線コンサート）」「開運メイク講座」「髪結い講座」「はまこみちカフェ」「姪浜漁協の協力による魚料理教室」「秋のコンサート IN 姪浜住吉神社（津軽三味線コンサート）」などの女性ならではの視点を活かした地道な活動を精力的に展開してきた。

しかし、男性と比べ定例会などに出席できる時間帯が限られていることや、会員相互のコミュニケーション不足などにより、女性部会としては 2 年ほどで解散し、新たな組織「姪浜商店街の女将さんを応援する会あこめっこ」を立ち上げることになる。人間関係の難しさを改めて感じるようになった。



はまこみちカフェ



秋のコンサート IN 姪浜住吉神社

(2) 「姪浜ブランド」の認定

唐津街道沿いや旧魚町通りにはすでに名産品といえる商品を販売しているお店や、地元で獲れる新鮮な魚を使った料理を提供している老舗のお店がある。このような商品やお店を「姪浜ブランド」や「姪浜ブランドの店」として協議会が独自に認定し、広く地域内外にアピールしていく活動を平成 23 年度から始めた。

その第一弾として、8 月に「姪浜ブランドの認定」を行った。今回認定させていただいたのは、「魚嘉（かまぼこ）」「仲西商店（削り節）」「マイヅル味噌」「パンの店・窯蔵」の地元で作って売る 4 つのお店、そして「御園」「旬やみなくち」「鰯っ子」「達揮（たつき）」の 4 つの料理店である。これらのお店には、協議会がデザインした認定プレートを贈呈し、地域内外に「姪浜ブランド」として発信していくことになった。その後、地元で作って売るお店として「味鶴堂（饅頭）」「糸山鮮魚店」「緒方畳店」「倉谷泉堂（表具・襖店）」、飲食店として「大衆割烹ふる庄」「あこめの浜」を認定した（合計 14 店）。

認定に当たっての明確な基準はないが、「味」「老舗」「伝統」「店の構え」という視点で総合的に判断して認定した。大半の人が「そうだろうな」というお店ばかりである。なお、認定プレートは肥塚副会長の地域への想いのこもった手作りのプレートである。工作と書道の得意な肥塚さんがいたからこそできた事業である。各店舗のオーナーが喜んだのは言うまでもない。これこそ

「This is Meinohama」プロジェクトである。



「姪浜ブランド」の認定

(3) 灯明コンサート IN 姪浜住吉神社

平成 21 年度から始めた灯明コンサートであるが、22 年度に小戸大神宮で予定していたコンサートは雨天中止となった。小戸大神宮は参加者のアクセスやコンサート空間の仕切り方などの課題もあり、今回は姪浜住吉神社で実施することとした（9月10日）。演奏者は、昨年も依頼していたチェロの于波（ウ・ハ）さん、ピアノの葉山由美さんである。第1回みそ蔵コンサートで演奏していただいたメンバーである。

設営時の課題は、ステージの設置方法であったが、前の年に小戸大神宮用に準備していたステージを使うことになった。肥塚さんの発案で、いろいろな場所で使えるようになっているものである。高さも広さもある程度は対応できる。もちろん、みそ蔵でのイベントにも対応できる。今回がそのお披露目でもあった。ステージの場所は、樹齢 700 年のイチョウの神木の下であり、最もふさわしい場所である。



ステージの設営を終えて

天候も少し心配ではあった。雨は降らなかったが、湿度が高く、チェロの演奏には少し影響があると于波さんが話していた。屋外でのイベントは、天候の心配が付きものであるが、幻想的な雰囲気の中でのコンサートを通じて、姪浜の魅力を伝えていくことが目的であるので、場所にこだわることはとても重要である。

午後 7 時 15 分頃から演奏をスタート。「愛の讃歌」「白鳥」「フラメンコ」「愛情物語」「リベルタンゴ」などの曲を演奏していただいた。チェロ、ピアノの音色が奈良時代からの歴史のある姪浜住吉神社の境内に優しく響き渡った。400 個の灯明もより幻想的となる。この会場での平成 19 年のシンポジウムを思い出す。平成 21 年の興徳寺でのコンサートとは雰囲気は異なるが、姪浜にふさわしいコンサートとなった。



灯明コンサート IN 姪浜住吉神社

(4) 唐津街道物産展

平成 22 年 10 月の「勝鷹夢まつり」での唐津街道のコーナーが好評だったことを受け、今回は西新プラリバで赤間、姪浜、前原、唐津の 4 つの宿場町が参加し、毎週末に持ち回りで出店したものである。姪浜宿からは 9 月 24 日と 25 日に、魚嘉さん（蒲鉾）、仲西商店さん（削り節）、マイズル味噌さん（もろみ味噌）、窯蔵さん（みそメロンパン）の 4 つの姪浜ブランド店が出店し、それぞれの商品を販売した。両日とも大好評で、特にみそメロンパンの売れ行きがよかった。

協議会は、魚嘉さん、仲西商店さん、マイズル味噌さんの商品を買って販売し、姪浜ブランドの魅力を PR した。また、姪浜の魅力を PR するパネルを展示するとともに、歴史散策マップやかかわら版、10 月のイベントのちらしを配布した。各店からも販売に来ていただき、お店の宣伝だけでなく、姪浜の PR もしていただいた。

両日とも朝早くからの会場の設営、販売、姪浜の PR、撤収など、限られた人数の対応で大変であったが、姪浜ブランド店との信頼関係を強くした催しであった。こうした積み重ねが、人と人との絆を構築していくのである。後日、筆者の知り合いから「大塚さん、プラリバで蒲鉾を売ってましたね」と言われたが、仕事だけではない筆者の意外な側面を見てもらって嬉しかった。



唐津街道物産展 IN 西新プラリバ

(5) 景観歴史発掘ガイドツアー

平成 23 年度のガイドツアーでは、昼食時間を挟み、午前 10 時～午後 3 時までのロングコースを試みた。従来の午前中だけのコース設定だと、案内できる場所が限られているため、時間を長

くし、案内する範囲も広げた。各地でいろいろなイベントが行われる秋のガイドツアー（10月22日）には35名が参加、桜の名所巡りを打ち出した春のガイドツアー（3月31日）には70名が参加した。

また、春のガイドツアーでは、参加者に姪浜の魅力を知っていただくため、昼食時間にクイズを実施した。これは肥塚副会長の提案によるものである。クイズの内容は「A 歴史と文化遺産の宝庫！姪浜」に関するものとして「唐津街道」「亀井南冥」「元寇防塁」など5問、また「B 姪浜で水揚げされる水産物」として「ヒイラギ」「おきゅうと」「シロウオ」など5問、合わせて10問であった。西区以外の参加者が多かったが、姪浜のことを知らない方も多く、大いに楽しんでいただいた。このような参加者が楽しめる催しをもっと増やしていきたいと思った次第である。



春のガイドツアー

元気！姪浜学(解答)

唐津街道姪浜まちづくり協議会
H240331

[A]歴史と文化遺産の宝庫！姪浜

質問番号	正解	説明
問1	1	1:北九州市～唐津120kmの道、13の宿場の一つが姪浜宿
問2	2	1:亀井 昭隆(かめい しょうりゅう)……南冥の長子、江戸後期の儒学者。1773～1836 2:亀井 南冥(かめい なんめい)……江戸後期の儒学者・歴史・福澤諭吉の叔父。1743～1814 3:亀井 勝一郎(かめい かついちろう)……函館生まれ、文芸評論家。1907～1996
問3	3	1:モンケ ……モンゴル帝国の第4代皇帝。ジンギスカンの末子トウルの子 2:ジンギスカン……モンゴル帝国の創設者。元の太祖。名はテムジン。モンゴル族を統一 3:アビライ ……元帝国の初代皇帝、モンゴル帝国第5代の皇帝
問4	2	2:かぼの伝説……河童伝説17/12～13(住吉神社)
問5	3	3:豊臣秀吉……長門山の岩水。1592年、朝鮮出兵の際、この地を通過中にごんごんと湧き出る岩清水を見つけ、生の松原で茶会を催された。

[B]姪浜で水揚げされる水産物

質問番号	正解	説明
問6	3	3:シマコ産卵期は初春から初夏
問7	2	2:トンマサヒトコト呼ぶ。1及び3は岡山県他の呼び方 
問8	3	3:アツの名前の由来は食べて味が良かったので、「アツ」と名がついた。
問9	2	1:このタコは「船ダコ」と言い、アオイガイ科のタコ 2:「イイダコ」 3:このタコは「柳ダコ」と言い、北海道や東日本で消費されている。マダコ科のタコ
問10	1	1:津エビの寿命は1年半から2年半と見られる。津エビの産卵期は6～9月で、メス1匹で100万個の受精卵を海中に放出し、プランクトンとして浮遊生活を送りながら半日ほど孵化する。孵化から数日で体が変化し、殻皮を繰り返しながら稚エビとなり、10ヶ月余りで出荷できるサイズになると言われている。

参加者に姪浜の魅力を知ってもらうため、クイズも採用

(6) 景観づくり委員会、景観づくり計画 STEP 1 の策定

前述のとおり、協議会では平成23年3月に姪浜地域の今後のまちづくりの基本方針及び実現化方策を示す『元気！姪浜計画～景観まちづくりの実践と姪浜ブランドの構築に向けて～』を策定した。この中の主要な基本方針のひとつである「姪浜のまちの個性の再構築（住まいづくり・町並み景観づくり）」の実現に向けて、10月に地元関係者、関係団体、九大生、専門家、行政職員など25名で構成する「唐津街道姪浜景観づくり委員会」を立ち上げ、景観づくり計画の検討を進めていった。

具体的には、秋の様々な行事が終了した平成23年10月後半から24年3月にかけて、ワークショップ形式により5回の委員会を行い、委員の皆さま方から町並み形成や地域活性化に向けた多彩なアイデアをいただきながら検討を重ねた。



景観づくり委員会

景観づくり委員会での検討内容

- ① 姪浜ならではの景観まちづくり資源は何か（まちの個性をつくっているものは何か）
- ② まちの個性が失われつつある要因は何か
- ③ まちの個性を再構築するためには何が必要なのか（何を残し、何を創造していくのか）
- ④ 重点的に景観形成を図っていく区域はどこか（景観づくり重点区域の設定）
- ⑤ 景観づくり重点区域の景観形成の考え方
- ⑥ 景観まちづくり手法の検討（景観形成地区の指定、景観重要建造物の指定など）
- ⑦ 景観まちづくりにあたっての地域と行政の役割分担

また、唐津街道に沿って唐人町～今川～西新～藤崎を歩き、景観事例調査を行った。身近な事例の中に、姪浜の町並み形成の参考になりそうなちょっとした工夫をたくさん発見することができた。テーマを持ってまちを歩くことが、いかに面白く、そして重要であるかということを変更して認識したところである。これと並行して、住民の皆さまに町並みへ関心をもっていただくため、九大生の協力を得ながらビジュアルな町並み模型も制作した。



景観事例調査



町並み模型制作

景観づくり委員会では、町並みへの「関心」や町並み改善への「意識・意欲」を育てることか

ら始めて、個性再構築の実現へと歩みを進めていくことが良いと考え、まずは景観づくり計画のステップ1として「景観づくりの考え方」と「景観よかところ事例集」の作成を行った。これは、姪浜の町並みの個性を再構築していくためには、まずは住民の皆さまに町並みへの関心を持っていただくことが必要であるからである。この中で景観づくりの方向性とテーマを次のように設定した。

景観づくりの方向性

<まちの将来像・目標>

- 誇りの持てるまち・心が豊かになるまちにしたい！
- 人が住みやすいまち・きれいなまち・ゴミのないまちにしたい！
- 生活や文化と一体となった景観づくりを！
- 商店街をコミュニティの核にしたい！
- 姪浜の宝を地域と行政の協力で福岡市の財産に！

<まちづくり・景観づくりのアイデア>

- 地域の宝（町家・町並み・寺社・樹木など）を残す・活かす・まちの魅力アップにつなげる。
- 町家や空き店舗をまちの魅力づくりに活かしながら商店街の活性化に役立てる。
- 街道沿いの集合住宅も町並みの魅力づくりに貢献できるような景観づくりの工夫をする。
- 商店街や神社をコミュニティ交流の核にする。（コミュニティの「ひだまり」づくり）
- 魚や海に関する資源（港、水辺、魚市場、朝市など）を地域交流空間として活かす。

景観づくりのテーマ

地域の宝を再発見し、町並みの魅力アップに活かす景観づくり

今後は、ステップ2の「景観づくり手引き集」の作成を経て、ステップ3の「景観ルールのたたき台づくり」へと取り組みを進めていくこととしている。また、協議会ではブロック塀の板塀化など、町並み改修の実験を行って、その成果を「手引き集」や「景観ルールのたたき台」に反映させる計画である（STEP1作成当時の考え方）。

景観づくり計画 STEP1～3の位置付け

<ステップ1～「景観づくりの考え方」と「景観よかところ事例集」の作成～>

- ・景観づくりを進めていくための基本的な考え方（目標やテーマ）を設定した。
- ・町並みの向上・個性再構築のための方法を知る・学ぶことを目的として、姪浜や他の地域の町並みの「よかところ」を集めて事例集を作成した。

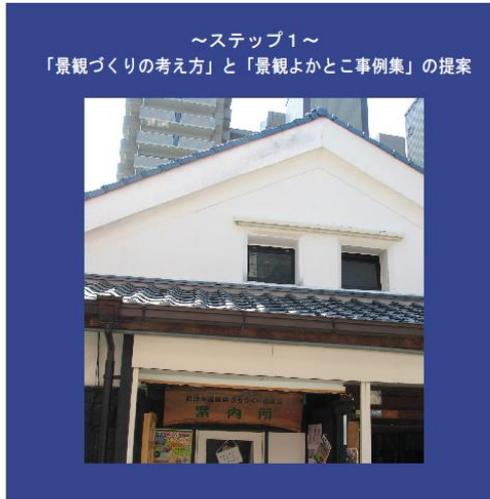
<ステップ2～「景観づくり手引き集」の作成～>

- ・「事例集」をベースに、住民の方たちや姪浜に関心を持っておられる方たちの意見やアイデアを重ね、町並みの向上・個性再構築のための「手引き集」をつくる予定である。

<ステップ3～「景観ルール」のたたき台づくり～>

- ・「景観づくり」を実効性のあるものにするためには将来は「ルール化」することを考える必要がある。ステップ3では「手引き集」をもとに、住民参加で「ルール化」について議論するためのたたき台をつくる予定である。

姪浜景観づくり計画



平成 24 年 6 月
 姪浜景観づくり委員会
 唐津街道姪浜まちづくり協議会

地域の個性が息づく 路地

●キーポイント：「愛務」が生まれるような路地に育てる。
 ・姪浜にはたくさんの路地があります。寺社の白壁、沿道の花や木、飲食店の表情など、路地それぞれが持っている特徴を活かした景観づくりを工夫すれば、姪浜のまちに一層の魅力が加わります。「愛務が生まれる路地」や「回遊したくなる路地」を育てていきましょう。

■事例：まちの歴史を感じさせる路地



★住吉神社北側の路地



★順光寺横の路地



★印：旧姪浜地区の事例

★光福寺横の路地

■事例：情緒やわくわく感のある路地



★白濁寺前の路地

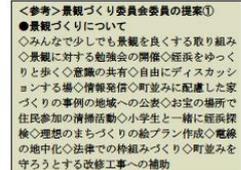


西新商店街脇の路地…建物から突き出た看板が少ないために乱雑さが抑えられています。

■事例：花や緑が気持ちをなごませる路地



★姪浜大通り脇の路地



＜参考＞景観づくり委員会委員の提案①
 ●景観づくりについて
 ◇みんなですらでも景観を良くする取り組み
 ◇景観に対する勉強会の開催◇姪浜をゆっくりと歩く◇意識の共有◇自由にディスカッションする場◇情報発信◇町並みに配慮した家づくりの事例の地域への公表◇お宝の場所ですら住民参加の清掃活動◇小学生と一緒に経典探検◇理想のまちづくりの絵プラン作成◇電線地中化◇法律での枠組みづくり◇町並みを守ろうとする改修工事への補助

8

景観づくり計画 STEP1

(7) 九州大学都市・建築ワークショップ

これは、九州大学建築学科3年生を対象にしたワークショップである（12月9日）。「今の学生は社会との接点が少なく、何でもできると思い込んでいる」ということで、新旧の二つの地域に出かけ、実際にまちづくり団体や事業者がどのような取り組みをしているのかを学ぶため、企画したとのことである。平成23年度は、新しい地域として東区のアイランドシティ、古い地域として姪浜をフィールドワークの場として選定したとのことである。

姪浜での進め方としては、マイヅル味噌のみそ蔵で、筆者が30分ほど姪浜の歴史や魅力、まちづくり協議会の活動を説明した後、意見交換を行った。その後、まちに出て、姪浜住吉神社や商店街、路地などを案内。参加した学生には姪浜の魅力や協議会の活動内容だけでなく、会員がどういう想いで活動しているのか、どのような工夫をしているのかなども知っていただいたことと思う。筆者も学生の新鮮な意見を聴きながら、まち歩きを楽しんだ。

こうしたフィールドワークの体験を通じて、一人でも多くの学生に姪浜というまちに関心を持っていただけたらと思う。そして、社会人になってからも、それぞれの地域のまちづくりのために尽力している人々がいることを認識していただくとともに、今後の仕事に活かしてほしいと思う。

筆者が協議会在籍中は、姪浜では平成24年度を除き、毎年開催されており、毎回30～40人の学生が参加した。



九州大学都市・建築ワークショップ

(8)「ふくおか地域づくり活動奨励賞」受賞

当協議会では、「ふくおか地域づくり活動賞」を平成 21 年度と 22 年度に 2 年連続で受賞していたが、今回は奨励賞ということで大賞に続く賞（第二席）の受賞となった（2 月 11 日）。今までの地域に根ざした多彩なまちづくり活動が評価されたものであり、嬉しく思う。今回の表彰式は、筆者のふるさと・行橋市で開催されるということで、筆者が受賞の挨拶をすることになった。協議会の活動を開始して、ちょうど 5 年になる頃の筆者の姪浜へのまちづくりへの想いを伝えた。挨拶文を添付しておこう。筆者の父の墓も会場のすぐ隣にあり、休憩時間に早速受賞の報告を行った。父は筆者の活動をどのように思っているのだろうか。



表彰状



受賞の挨拶をする筆者

受賞挨拶

(前略)

さて、この度は、「ふくおか地域づくり活動賞」の奨励賞をいただき誠にありがとうございます。当協議会は平成 19 年 3 月に設立し、来月でまる 5 年になります。設立のきっかけは、7 年前の福

岡県西方沖地震で多くの町家が被害を受けたこと、そして都市化の進展などもあり、伝統的な町家が次第に少なくなり、マンションや駐車場になったりしているということで、なんとか古い町家や数多くの寺社などの歴史的な環境を活かしたまちづくりを進めていきたいということで立ち上げました。

協議会設立からの一環したテーマは、「地域の魅力の再認識と地域内外への発信」ということです。地域にずっと住んでいると、地域の魅力を失いがちです。例えば、古い町家があっても、地域の方は「こんな古い家のどこがいいのですか」と言います。そこに自分たちみたいなヨソモンが「こんな古い町家や寺社がたくさんある地域は福岡市内にはないですよ。こうした歴史的な資源を活かしたまちづくりを進めていきましょう。」ということで、いわゆるヨソモンが中心になって立ち上げました。

具体的な活動内容ですが、お手元にかわら版をお配りしていますが、イベントとしては「寺社や町家、路地、お薦めのお店などを巡る景観歴史発掘ガイドツアー」「登録有形文化財であるマイヅル味噌の建物でのみそ蔵コンサート」「歴史あるお寺や神社での灯明コンサート」「唐津街道や町家をテーマにした展示会」などがあります。

また、広報活動としては「まち歩きマップ」や「かわら版」を発行しています。

最近では、地域のまちづくりをどのように進めていくのかということで、まちづくりや景観づくりの検討を行っています。平成 23 年 2 月には今後の地域のまちづくりのガイドラインとなる「元気！ 姪浜計画」を策定し、現在は「景観まちづくり計画」の策定に取り組んでいます。

また、具体的に目に見える形でまちづくりの効果を伝えていきたいということで、「旧町名表示板の設置」や「姪浜ブランド認定事業」、「町家の改修相談」なども行っています。

こうした多彩な事業を継続的に、かつ、毎年ステップアップしながら進めていけるのは、当協議会の会員構成にあると思います。当協議会は、自分を含めたヨソモン、そして生粋の地元の方で熱心に活動をするバカモン、さらには新風を吹き込むワカモンで構成されているのが特徴です。いわゆる「ヨソモン、バカモン、ワカモン」によるまちづくりを進めています。

また、当協議会はいろいろな職種の会員で構成され、各会員はそれぞれ特技を持っています。例えば、地方史研究家、書道家、写真家、建築士、まちづくりコンサルタントなど、それぞれの得意分野を活かして活動を展開しています。また、「頭」「体」「お金」のいずれかを提供してもらっています。頭は面白い企画を提供してくれること、体は時間を惜しまず活動してくれること、お金は資金面での協力です。このように多様な人材の存在と、それぞれができる範囲で楽しくまちづくりに関わっていくことが、長く、根気よくまちづくりを進めていく上で重要ではないかと考えています。

最後になりますが、こうした活動をしながらも、先日、古い町家が 1 軒なくなり、悲しい思いをしました。まちづくりは「1 歩前進、2 歩後退」の繰り返しだとつくづく感じたところがございます。「1 歩前進、2 歩後退」の繰り返しでは、まちはよくなりませんが、今回の表彰を励みとして、今後も、「1 歩前進、1 歩後退」「1 歩後退、2 歩前進」を繰り返しながら、長期的な目標を持って、さらに活動をステップアップさせていきたいと考えています。

また、機会がございましたら、京築地方の皆さまとも郷土のために地域づくりができればと考えています。本日はどうもありがとうございました。

平成 23 年度の振り返り

平成 23 年度は、この他、かわら版を 2 回発行（10 月 1 日、3 月 31 日）、「みそ蔵コンサート」を 2 回（6 月 25 日、10 月 22 日）、「みそ蔵舞踏会（インド舞踊）」を 1 回（11 月 12 日）開催するなど多くの事業を実施してきた。筆者は事務局長としてイベントの他に、景観づくり計画の策定、姪浜ブランド認定など多彩な事業を企画・実践するなど、筆者の業務量も年々増えていった。当時は耐震関係の仕事も担当しており、東日本大震災直後ということもあり、公私とも忙しい時期であった。



みそ蔵コンサート



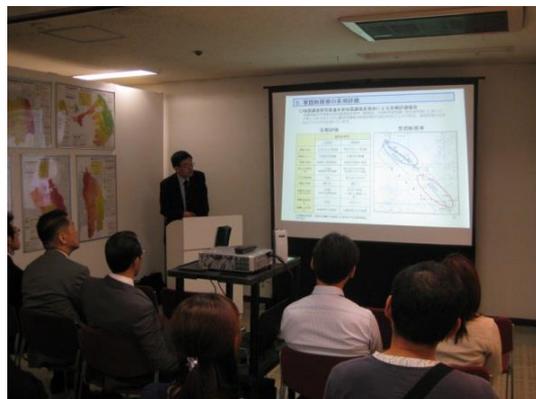
みそ蔵舞踏会



かわら版第3号



宗像赤間宿からの視察対応。姪浜だけでなく、御供所の取り組みも紹介できるのも筆者の強み



耐震の出前講座

15 平成 24 年度の活動

(1) 協議会設立 5 周年記念イベント「唐津街道姪浜ウィーク」

平成 24 年度の最初の事業として、5 月 26 日から 6 月 2 日にかけて『唐津街道姪浜ウィーク』を開催した。内容としては、姪浜に関する絵画や写真等を展示した「ディスカバー姪浜展」、姪浜がロケの現場となった高倉健さん主演の映画“網走番外地～悪への挑戦～”の上映会「姪浜シネマ」、姪浜出身の松坂奏輔氏の演奏による「5 周年記念コンサート」、姪浜の魅力スポットを巡る「景観歴史発掘ガイドツアー」などである。

今までは、年度当初の事業は少なかったが、5 周年記念事業ということで、初夏の時期に実施した。準備も大変であり、半年前の平成 23 年 11 月の定例会で事業の概要を協議し、12 月の定例会で企画を確定、2 月から広報を始めた。

ディスカバー姪浜展や姪浜シネマでは、昔の懐かしい写真や風景、生活道具に涙を浮かべながら鑑賞されている方もいた。今回は、普段なかなか入ることのできない築 180 年のマイヅル味噌のみそ蔵や築 80 年の宮の前公会堂でのイベントということもあり、一週間の間に約 600 名の方にご来場いただき、姪浜の多彩な魅力を改めて知っていただけたのではないかと思う。



ディスカバー姪浜展



5周年記念コンサート



姪浜シネマ



景観歴史発掘ガイドツアー

(2) 協議会設立 5 周年記念交流会

これは、協議会設立 5 周年記念イベント「唐津街道姪浜ウィーク」の一環として、日頃から当協議会の活動にご支援・ご協力いただいている方々をお招きして実施したものである(6 月 3 日)。内容としては、「景観づくり計画」の策定状況の報告、「姪浜町家」に認定させていただいた町家

所有者への認定プレートの贈呈式、地元出身のドラマー・榊孝仁氏によるミニコンサートに引き続き、姪浜ブランド認定店による料理や食材を使った懇親会を行い、交流を深めた。姪浜の多彩な食の魅力も改めて感じていただけたことと思う。

交流会は単なる懇親会ではない。景観づくり計画の報告や姪浜町家認定プレート贈呈式を組み込むことで、地域の方々に協議会の活動状況を伝えることができ、また、姪浜出身の榊孝仁氏に演奏していただくことで、地域としての一体感も演出することができた。



「景観づくり計画」の策定状況の報告

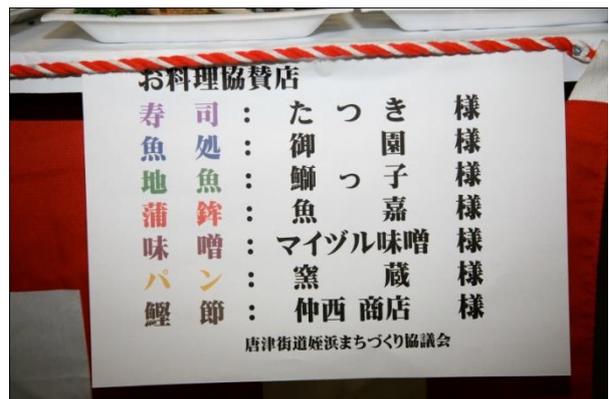


ミニコンサート

その中でも、今回特にこだわったのは、料理や食材である。平成 23 年 3 月に姪浜で実施した「唐津街道サミット」の時の料理や食材が大好評だったことを受け、今回も姪浜ならではの料理でおもてなしをすることとした。7つの姪浜ブランド店（たつき、御園、鯛っ子、魚嘉、仲西商店、マイヅル味噌、窯蔵）のご協力をいただき、参加者に提供させていただいた。手間暇はかかり、スタッフは大変であったが、まちづくりにはこうしたこだわりが大切である。中心になって企画・実践していただいたのは肥塚副会長である。姪浜への想いが強い肥塚さんならではの企画であり、こうした会員の存在が地域内外への発信力につながっていった。



姪浜ブランド店の協力による交流会



(3) 「姪浜町家」の認定

6月3日、地域の貴重な財産として、地域の町並み形成に寄与している町家11軒を「姪浜町家」として認定させていただいた。姪浜には、江戸時代から昭和初期にかけて建てられた約100軒の町家が残っているが、老朽化や後継者不足などの理由で取り壊される家が増えている中で、当協

議会が独自に「姪浜町家」に認定することで、価値を再認識していただくきっかけになればと考え、こうした取り組みを始めた。選定にあたっては、当協議会のメンバーが平成 23 年秋から現地調査や所有者へのヒアリングを行い、保存状態や町並みへの貢献度等を総合的に判断し、まずは 11 軒の町家を認定した。認定した町家の所有者には、当協議会から手作りの認定プレートを贈呈させていただいた。

姪浜ブランド認定プレートと同様に町家認定プレートを作っていたいただいたのは、肥塚副会長である。肥塚さんは工作も書道も得意であり、何よりも心を込めて活動される方である。肥塚さんがいたからこそ、協議会オリジナルの取り組みとして実践することができた。



姪浜町家の認定

(4) 灯明コンサート IN 興徳寺

興徳寺での灯明コンサートは平成 21 年度に続き今回が 2 回目である (10 月 6 日)。ご住職からは「3 年に 1 回」と言われており、それに沿った形で実施することになった。今回はオカリナ & ケーナの和田名保子さんとピアノの佐藤金之助さん。午後 6 時 45 分頃から演奏をスタート。「コンドルは飛んで行く」「荒城の月」「十五夜お月さん」「月までとどけ」「夢海道」「夜行杯」などの曲を演奏していただいた。オカリナ、ケーナ、ピアノの音色が 750 年の歴史のある古刹・興徳寺の境内に優しく響き渡り、400 個の灯明が幻想的な雰囲気を出した。感動的で至福な時間であった。大きなクスノキの下でのコンサートは、姪浜ならではの企画であり、会場を快く提供していただいた興徳寺さんに改めて感謝申し上げたい。



灯明コンサート IN 興徳寺

(5) 唐津街道を知る一週間

これは、5月～6月にかけて実施した「唐津街道姪浜ウィーク」の秋バージョンとして、11月10日～17日に実施したものである。内容は『唐津街道』をテーマにしたもので、具体的には寺社・町家町並み・おもしろ路地・お薦めのお店などを巡る「まち歩きガイドツアー」、ドラムとピアノの演奏による「みそ蔵コンサート」、歴史研究家による「唐津街道に関する講演会」、女性部会による「着物で唐津街道の町並みをそぞろ歩き」、そして版画家・二川秀臣氏の作品を展示する「版画で歩く唐津街道展」である。



唐津街道に関する講演会



版画で歩く唐津街道展



着物で唐津街道の町並みをそぞろ歩き

この中で今回初めて取り組んだのが、参加者に着物を着ていただいていたのまち歩きである。みそ蔵での着物のワンポイント講座、ミニファッションショー、町並み散策、寺社での撮影会、レトロなお店での昼食会、お寺での点茶を行った。準備は大変だったが、女性部会が中心となり成功裏に終了することができた。

これも6月の唐津街道姪浜ウィークが終了後に準備に入り、7月の定例会で事業の概要を協議し、8月の定例会で企画を確定、9月から広報を始めた。企画や各種調整、準備、広報は大変であるが、筆者は常に全体の動きを頭に入れながら、迅速かつ丁寧に取り組んだ。秋はいろいろな地域でイベントがあり集客は大変であるが、多くの方に参加いただき、姪浜の魅力を発信することができた。

（6）全国町並みゼミ福岡大会

11月30日から12月2日に「全国町並みゼミ福岡大会」が行われ、期間中、姪浜でも分科会が開催された。筆者も実行委員会のメンバーとして企画段階から参加し、主に姪浜分科会の企画や調整業務に主体的に携わった。分科会会場の確保やまち歩きコースの設定、交流会の企画など実行委員会と協議会の調整が大変であったが、できる限りの対応をさせていただいた。

前にも述べたが、筆者は鴻池組時代から伝統的町並みに興味を持ち、歴史的町並み保存の実務的な手引書である「歴史的町並み事典（西山卯三氏監修）」を購入したのもこの時である。今までに100を超える伝統的建造物群保存地区のうち、2/3程度は見学に行ったのではないだろうか。

さて、福岡市内で全国町並みゼミが開催されるとは全く考えてもいなかったことであり、どこを案内するのか疑心暗鬼であった。「都市部における町並み保存のあり方」というテーマだとわかり、ようやく納得した次第である。福岡市内だと博多部の御供所周辺や姪浜あたりだろうか。それでも、全国で町並み保存に精力的に取り組んでいる方々が来られた時に、正直に言って、見せる場所があるのかというのが本音であった。しかし、分科会では包み隠さず姪浜の現状と課題をお伝えし、まち歩きでは姪浜ならではのコース設定でおもてなしすることとした。また、交流会では会場と料理にこだわることとし、町並みでは負けても、料理とおもてなしでは負けない企画に取り組んだ。

こんな筆者の考え方を理解し、一番サポートしてくれたのは、肥塚副会長であり、率先して交流会の企画や準備をしていただいた。平成23年3月の「唐津街道サミット IN 姪浜宿」や平成24年6月の「協議会設立5周年記念交流会」でも、姪浜ブランド料理によるおもてなしをしており、今回の町並みゼミの交流会でもその経験を活かしてもらうことになった。他の5つの分科会では飲食店で交流会を開催したが、手作りの料理でおもてなしをしたのは姪浜だけであった。参加した皆さま方にもきっと喜んでいただけたことと思う。

また、分科会とまち歩きの間の昼食は、姪浜の老舗「たつき」に注文していたが、他の2つの分科会からも注文していただいた。当協議会が主催した平成22年の秋のまち歩きの際の「たつき」の弁当が気に入って、注文していただいたとのことであった。小さなことではあるが、筆者の気配りである。

こうして前日まで入念に各種調整と準備を行い、当日は午前の分科会、午後のまち歩き、夕方の交流会と無事に進んでいった。分科会や交流会では活発な意見交換を行い、姪浜の景観づくりの参考にしていきたいと思った。無いものねだりをする必要はなく、姪浜ならではの地域資源を

活かした景観づくりをしていけばいいのである。



分科会



まち歩き



交流会

(7)「景観発見&まちづくり」体験体感ツアーIN 姪浜

これは、福岡県美しいまちづくり協議会の依頼を受けて、当協議会のまちづくり活動についての説明・意見交換とまち歩きを行ったものである（2月2日）。県内から約20名の方々に参加していただき、協議会活動や姪浜の魅力をPRした。ちょうどJ-COMの取材もあり、当日の様子を撮影していただき、協議会活動をPRする絶好の機会となった。



「景観発見&まちづくり」体験体感ツアーIN 姪浜

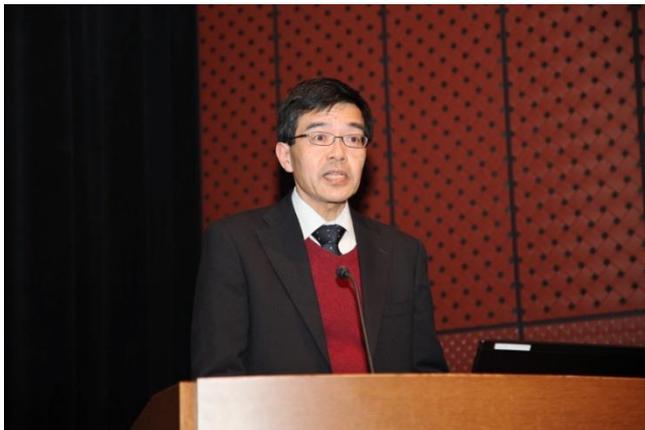
1時間半程度の説明と意見交換の後、姪浜ブランド店「旬や みなくち」での昼食をはさんで、

午後から2時間程度、寺社（興徳寺、光福寺、姪浜住吉神社）や町家（宮の前公会堂、石橋邸、石城戸邸、マイヅル味噌）、路地、お薦めのお店（仲西商店、魚嘉、味鶴堂、窯蔵）などを案内させていただいた。2月2日の開催ということで、まだ肌寒い時期ではあったが、参加した皆さま方に大変喜んでいただいた。いろいろな団体が当協議会を視察や研修先として選んでいただけるようになったことを嬉しく思う。これも粘り強い活動の成果であろう。

（8）福岡県景観大会での活動 PR

これは、毎年開催されている「福岡県景観大会」において、当協議会の活動を発表する機会に恵まれたものである（3月2日）。前述の「景観発見&まちづくり」体験体感ツアーで受け入れ先となった団体が発表することが恒例になっていた。300人程度の参加者を収容できるほど広い会場であったが、当日は各種の表彰や講演など様々な行事が組み立てられている中で、当協議会の発表は最後に近い時間帯であったため、既に退席された方も多かった。少ない参加者の中での活動報告となったが、姪浜のまちづくりへの想いをしっかりと伝えることができた。この経験が全国区レベルの表彰のプレゼンテーションにつながっていくことになった。

また、体験体感ツアー当日の様子をパネルにさせていただき、活動の PR をすることができた。スケッチ展では、姪浜の石橋啓延邸を描かれた方が入賞されていたことも付け加えておこう。活動報告やパネル展示の機会を与えていただいた関係者の皆さま方に感謝申し上げたい。一つひとつの地道な活動が姪浜の魅力を発信しているのである。



プレゼンテーションをする筆者



パネル展による活動の PR

（9）春の町家コンサート

コンサートについては、これまでマイヅル味噌のみそ蔵や寺社で実施してきたが、もっと身近な場所でできないかと考え、町家で企画したものである（3月30日）。候補としては、まち歩きで案内させていただいている森住邸や石橋邸もあったが、まずは音楽を聴いて、美味しい料理を味わえる場所として御園（みその）で企画することになった。演奏は姪浜出身・在住のいわつなおこ氏に依頼した。1時間にわたるアコーディオンの演奏が室内に心地良く響き渡った。「ミュージットの女王」「街角」「ブルータンゴ」「群衆」「パリのいたずらっ子」などの軽快な音楽が古い町家にもよく似合った。定員いっぱいの30名の参加者も大変満足した様子だった。

演奏後は御園の美味しい料理とお酒で盛り上がった。いわつ氏にも会食の最中に改めて演奏し

ていただいた。至福の時間である。これこそが、姪浜ならではの空間であり、時間である。姪浜でしかできないことを追及していくことが、姪浜流のまちづくりであり、筆者の信念である。こうして平成24年度も多くの成果を残して、締めくくることがとなった。



春の町家コンサート

(10) 歴史散策と桜の名所巡り

春のガイドツアー「歴史散策と桜の名所巡り」は、平成24年度事業として平成25年4月6日に予定していたが、強風と雨の予報があり中止となった。約60名の市民から参加の申込みをいただいていたことが、今でも記憶に新しい。ガイドツアーが雨天中止になったのは、この時だけである。

また、例年だと桜の見頃の時期が4月上旬であることから今回は4月6日に予定していたが、この年は平年より10日ほど早く3月13日に開花。満開も3月22日であり、4月6日はほとんど葉桜状態であった。天気が良くガイドツアーを実施していても、桜を見れない状況であった。こういうこともあり、以降の春のガイドツアーは3月の最終土曜日で恒例化していった。

唐津街道姪浜 景観歴史発掘ガイドツアー
歴史散策と桜の名所巡り

■日 ち：平成25年4月6日(土) ※少雨決行
 ■時 間：午前10時～午後3時
 (受付：午前9時30分～)
 ■受付場所：姪浜往吉神社(西区姪浜3-5-5)
 ■募集人数：40名(事前申込みが必要です。)
 ■参 加 料：1,300円
 (昼食付き。当日受付時にいただきます。)

■内 容：
 ●西区歴史よかとこ案内のガイドによる町並みウォークです。
 ●唐津の桜の見どころをご案内予定です。
 ●唐津街道歴史の魅力をじっくり味わえる「唐津街道コース」と、周辺の歴史スポットを回る「小戸・元寇防塁跡コース」の2つのコースからお選びいただけます。
 ●唐津街道コースでは、「寺社」「町家町並み」「おもしろ路地」などを見て歩きます。普段見ることのできない町家もご案内予定です。
 ●小戸・元寇防塁跡コースでは、唐津街道周辺の主な寺社の他、小戸大神宮、元寇防塁跡などの周辺の歴史スポットを見て歩きます。
 ●お薦めのお店で昼食を予定しています。

■申込み先
 住所 氏名・年齢、電話番号を明記して、はがき、E-mail、FAXで下記までお申込みください。
 唐津街道歴史まちづくり協議会 事務局 大塚 敬徳
 〒818-0013 福岡市西区粟倉浜 2-3-2-601
 E-mail: ottsu-mass@uk.bbq.jp FAX: 092-882-3831
 ■電話での問い合わせ先 田中女士: 090-3734-1366

主 催：唐津街道歴史まちづくり協議会
 後 援：福岡市 経女会
 協 力：姪浜往吉神社、小戸大神宮、興徳寺
 西区歴史よかとこ案内人あこめグループ
 マイツル味噌、ハチの店・寶蔵
 魚屋(かまぼこ)、仲西商店(刺身屋) ほか

雨天中止となった春のガイドツアー

平成24年度の振り返り

平成24年度は、協議会設立5周年記念イベント「唐津街道姪浜ウィーク」から始まり、「姪浜町家認定事業」や「灯明コンサート」「唐津街道を知る一週間」「全国町並みゼミ福岡大会」など、多くの事業を実施してきた。事業内容も年々進化していった。こうした活動は次第に県外にも知られるようになり、他都市から視察も来られるようになった。今までは、筆者らが先進都市調査に出かけていたが、他都市からの視察や研修の増加は地道な活動の成果と言えると思う。

16 平成 25 年度の活動

(1) まち歩きワークショップ

平成 25 年度の最初の事業は、4 月 27 日の景観づくり計画 STEP 2 の策定に向けたまち歩きワークショップからスタートした。「姪浜のまちの個性の再構築(住まいづくり・町並み景観づくり)」の実現に向け、1 年間かけて景観づくり計画の策定を行っていくに当たり、まずは関係者 10 人でまちを歩き、姪浜の魅力と課題を再確認しようとしたものである。

「唐津街道の入り口を示すサインがあった方が良い」「町並みに合わせて自動販売機の色を変えてもらってはどうか」「お寺の近くにある店舗のテント広告の色が雰囲気に合わない」などの意見を出し合った。また、室町時代に九州を統治する九州探題が置かれていた探題塚付近の丘では、「ここを展望台にしたら辺りを一望できる」といった意見が出され、参加者全員でうなづき合ったものだ。これについては、筆者が活動の企画書を作成しており、「今後の展開方策の提案」の中で紹介したい。

この他、店舗のショーウィンドウの中の展示物が季節ごとに入れ替えられたり、満開の大きなツツジの木に出会うなど、思わぬ発見もあった。みんなで楽しくまちを歩き、新しい発見もあった一日であった。



新しい発見のあったまち歩きワークショップ

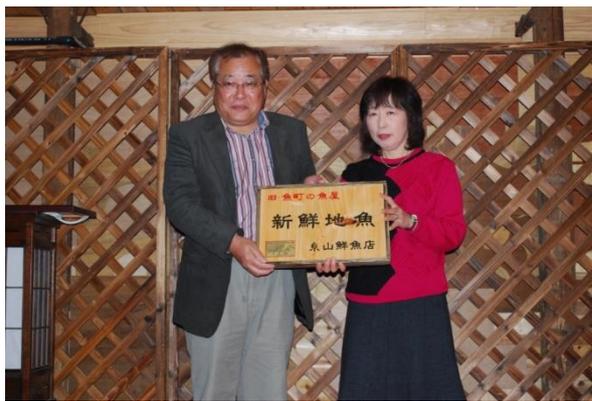
(2) 第 2 回姪浜町家認定式

4 月 27 日、地域の貴重な財産として、地域の町並み形成に寄与している町家 10 軒を新たに「姪浜町家」として認定させていただいた。平成 24 年 6 月の 11 軒と合わせ計 21 軒になった。また、約 50 年にわたり地域のお魚屋さんとして親しまれている「糸山鮮魚店」さんを「姪浜ブランドのお店」として認定させていただいた。姪浜ブランド認定店はこれで 12 件になった。認定した町家やお店の所有者には、当協議会から手作りの認定プレートを贈呈させていただいた。

姪浜には残していきたい町家や、姪浜ならではのお店がたくさんあるが、今後も「姪浜ブランドづくり」の一環として、こうした活動を続けていくべきであろう。今回のプレートも肥塚副会長の手作りである。こうした活動が展開できるのも、姪浜への想いの強い肥塚さんがいたからこそである。



肥塚さん手作りの姪浜町家認定プレート



姪浜ブランドの認定

(3) まち歩きマップ改訂

当協議会では、これまで「歴史散策マップ」(平成 20 年 3 月から 15,000 部配布)と「まち歩きマップ」(平成 23 年 1 月から 6,000 部配布)を発行してきたが、今般、これらのマップを合体し、より地域の魅力を PR できる「改訂まち歩きマップ」を発行したものである。

A2 サイズで、まち歩きに便利なジャバラ折加工で 10,000 部作成したものである。片面には地域の歴史や魅力資源(神社仏閣、お祭り、路地など)、そしてそれらを巡る回遊ルートを示している。また、片面には「姪浜ブランド認定店」をはじめとしたお薦めのお店などを紹介している。企画、予算調達、デザイン、印刷など全て当協議会の会員が手作りで作成したものである。4 月下旬から配布を開始したが、1 年半程で在庫がなくなるなど大好評のマップであった。



改訂まち歩きマップ

(4) 感謝状

筆者の個人的なことになるが、4 月 27 日の姪浜町家や姪浜ブランド認定式の中で、協議会から感謝状をいただいた。これは、筆者の今までの精力的な協議会活動に対する感謝の気持ちと、今後も協議会活動を牽引してほしいという趣旨であった。当時は、公務員の不祥事が相次いでいる中で、地域に飛び出し、率先してまちづくり活動を推進している公務員が姪浜にいるということも伝えたかったのであろう。筆者の想いを酌んでいただいた肥塚副会長の発意によるものである。

ありがたくいただくとともに、今まで以上に頑張ろうという気持ちでいっぱいであった。これを機会に、筆者のやる気もさらに高まり、全国的な賞を多数受賞していく推進力となっていった。

福岡市西区姪浜地区の市民団体「唐津街道姪浜まちづくり協議会」が10月、NPO「日本都市計画家協会」（東京）が主催する地域活動の大会で日本一になった。「多彩で地道で着実に」と、高く評価された活動の企画を練り、協議会の事務局長も務めるが、地元住民ではない。2005年3月の福岡沖地震が地域おこしに携わる契機になった。

姪浜住吉神社の壊れた鳥居、屋根が崩れ落ちた町家…。ニュース映像が伝える姪浜の惨状に胸を痛めた。

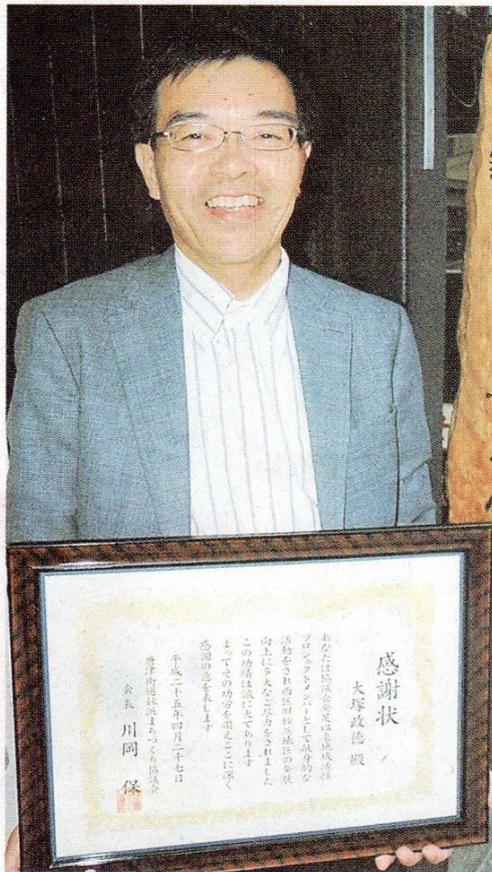
一方で、画面の奥に広がる歴史や風情漂う街並みにくぎ付けになった。「身近なところにこんな味わい深い場所があったなんて」

行橋市出身で西区愛宕浜に住んでいたが、地震の前



「唐津街道姪浜まちづくり協議会」事務局長

おおつか まさのり
大塚 政徳さん(55)



賞をもらったという。グループのメンバーから突然贈られた感謝状だ。「ずっと自分はよそもんだと思ってきたから、地域の一員として認められた気がした」。結成から6年、姪浜は今や第二の故郷以上の場になった。「いつか移り住んで町家で暮らしたい」。胸に秘めた思いは日々膨らんでいる。

(首藤厚之)

よそもん視点生かす

には、姪浜で10年ほど暮らしたことがあった。足元の素晴らしさを見落としていたという思いが、地域おこし活動へと駆り立てた。

土日は姪浜を歩き回り、

街歩き地図を作った。地元史の歴史に詳しい住民の川岡保さん(65)と出会い、07年3月、川岡さんから住民数人とグループを結成した。

地域おこしで大切にして

いるのは、住民とは違った「よそもん」の視点。旧街道沿いの古い商家を「姪浜町家」として認定したり、古いみそ蔵でコンサートを開いたり。10月の全国大会

では「埋もれている歴史や物語を掘り起こす体験こそ、地域への愛着や誇りはぐくむ土台になる」と訴え、最高賞獲得へと導いた。

この春、もっとうれしい

H25.11.18 西日本新聞

NPO 日本都市計画家協会「日本まちづくり大賞」受賞時の西日本新聞の記事(平成25年11月18日)

また、当時の筆者の気持ちを記したエッセイがあるので、合わせて紹介させていただく(再掲)。

震度6弱からの転機 ※筆者が当時書いたエッセイ(再掲)

平成17年3月の福岡県西方沖地震、それが私の人生の大きな転機となった。姪浜でも多くの町家や寺社が被害を受けた。「姪浜にはこんなに素晴らしい歴史資源が残っていたのか。まだ、遅くはない。歴史的な環境を活かしたまちづくりを進める上で、これが最初で最後のチャンスだ。」と前向きに考え、地域の関係者に声をかけ、2年後にまちづくり協議会を立ち上げた。私が49歳の時だ。

それまで福岡市職員として長く景観行政に携わっていながら、自分が住む地域のことにはあまり関心がなかった。それからは今までの20年間を取り戻すかのように、『姪浜の宝を福岡市民の宝に!』を目標に精力的に活動を続け、地域から感謝状もいただいた。

今はやりの二刀流ではないが、公務員そして地域のまちづくりのリーダーとして、引き続き「私の人生は二刀流、二毛作」をテーマに息長く、そして仲間とともに楽しくまちづくり活動に関わっていきたい。

なお、平成25年8月に、横手市増田地区の内蔵を訪問した時の想いを記したものがある。地域づくりの楽しさを地域の方々に伝えたかったものである(コラム6)。

コラム6 人生は二刀流、二毛作

先日、「内蔵」などの歴史的な町並みで知られる秋田県横手市の増田地区に行ってきました。同地区は江戸末期～昭和初期に、宮城県と秋田県を結ぶ交通の要所として発展し、葉タバコや蚕糸の生産などで商人文化が栄えました。当時の商人たちが、成功の証として母屋の中に蔵を造ったのが、内蔵の始まりとされています。内蔵を公開している家も多く、私も5軒見せていただきましたが、見事な蔵に圧倒されました。年内に国の重要伝統的建造物群保存地区指定が予定されており、注目される地域になっていくと思われまます。

ここも後継者不足という課題がありますが、仕事で増田を離れていた方々が定年を機会に故郷に帰り、家を守っていくという状況のようです。この繰り返して町並みやコミュニティが継承されていくという考え方は、超高齢社会では十分考えられることです。町並みに関わらず、定年後に地域づくりに関わっていく社会になればいいと思います。姪浜の皆さま、若者も高齢者も「人生は二刀流、二毛作」の時代ですよ。家庭や仕事だけでなく、地域に飛び出しませんか。地域づくりは楽しいですよ。(平成25年8月30日に秋田県横手市増田地区を訪問して。平成25年9月30日発行の「かわら版第6号」より)



(5) NPO 日本都市計画家協会「日本まちづくり大賞」受賞

NPO 日本都市計画家協会賞は、全国の都市や地域で実践されている様々な分野やテーマの「草の根まちづくり活動」を応援し、優れた理念や活動を全国に発信・波及することを目的に、平成15年(2003年)にスタートしたものである。前回までに80団体が受賞していた。大賞は各賞(優秀まちづくり賞、全国まちづくり会議特別賞、支部賞など)に選考された団体が公開プレゼンテーションを行い、会場参加者による投票を参考にして、最終審査会を経て選ばれることとなっている。

当協議会は、まずは福岡支部賞を受賞し、全国から選ばれた7つの団体とともに、長岡市で開催された「全国まちづくり会議 2013 in 長岡」の中で、10月5日に公開プレゼンテーションに臨み、翌6日の最終審査会を経て大賞を受賞したものである。

当協議会のテーマは、『姪浜の宝を福岡市民の宝に！～歴史的な環境を活かした地域協働の町並み形成と地域づくり推進活動～』である。筆者は姪浜ならではのまちづくり資源(歴史、物語、町並み、海、食など)を活かした、これまでの7年間の地道な取り組みを福岡市の代表としてしっかりPRしてきた。

当協議会は、一つひとつの活動はオーソドックスながらも、多彩で地道に着実に、そして真摯な姿勢で取り組んでいることが高く評価されたとのことである。また、唐津街道沿いの町並みの外観を向上させようとするにとどまらず、姪浜のまち全体を視野に入れて、歴史や物語などをはじめとした地域資源を活かして、まちの個性の再構築(エリア・コンバージョン)につなげようとしているのだという評価をいただいた。

今回の受賞は、まちづくりの専門家に評価していただいたものであり、姪浜だけでなく福岡市にとっても誇りであり、福岡市民に誇れる賞だと考えている。

なお、今回のプレゼンテーションに当たり、建築や都市を学んでいる長男を大宮から長岡に呼び寄せ、父親(筆者)の頑張っている姿を見せることができた。福岡や姪浜も捨てたものじゃないと思ってもらったかも知れない。

この活動記録を書いているのが、平成28年10月である。当時大学1年生だった長男も今は大学4年生である。平成25年に建築や都市を学び始めた長男も、この3年で随分と成長したに違いない。月日の経つのは本当に早いものだ。3年前の快挙を改めて思い出したところである。



公開プレゼンテーションで熱弁をふるう筆者



筆者の大賞受賞スピーチ

プレゼンテーションを行った筆者のコメント

各団体に与えられたプレゼン時間は8分。私は7番目にプレゼンすることになりました。先にプレゼンを行った6団体を参考にして、メリハリをつけながら、流れるようなわかりやすい説明を心がけました。福岡を出発する前に市役所の先輩から「歴史的な町並みや建造物が次第に失われつつある 150 万都市・福岡の一地域の地道な取り組みを、自信を持ってアピールして来たらいい」というアドバイスを受け、まさしくそれを実行しました。

「姪浜の地理的位置と歴史」「協議会の活動エリア」「活動のきっかけ」を話した後、「多彩な活動内容」を説明し、最後は「活動の成果」「今後の活動予定」で締めくくりました。自分としても大変納得のいくプレゼンであり、協議会活動や市役所の出前講座などで場数を踏んだ成果が出たと思っています。申請資料は限られた枚数での表現であり、他の団体に比べ、ややアピール力に欠けた感じを持っていましたが、姪浜への熱い想いを込めたプレゼンで逆転といったところでしょうか。

今回の受賞を励みとして、今後も『姪浜の宝を福岡市民の宝に！』を目標に、粘り強く、楽しく、そして次の世代に引き継いでいけるように活動を進めていきたいと考えています。また、今回プレゼンを行った他の7団体も、様々な課題のある地域を何とか元気にしたいと取り組んでおり、今回の出会いをきっかけに交流を始めていきたいと考えています。

(平成 25 年 10 月 31 日発行のかわら版より)



(6) ふくおか共助社会づくり表彰「協働部門賞」受賞

8月31日、福岡県が主催する「ふくおか共助社会づくり表彰」の協働部門賞を受賞した。この賞は新たな共助社会の実現に向け、NPO・ボランティアと企業、その他団体、行政との優れた協働の取り組みを表彰するものである。当協議会は「九州大学大学院 人間環境学研究院 都市・建築学部門 菊地研究室」との協働による「町並み保全と地域づくり」の取り組みが高く評価されたものである。

当初は、8月31日に表彰式が予定されていたが、台風の影響で10月6日に延期されたものであり、前述の「日本まちづくり大賞」と合わせ、新潟県長岡市と福岡市で同日での嬉しいダブル受賞となった。平成25年10月6日は、当協議会にとって記念すべき一日となった。

活動概要と受賞理由

都市化の進展や平成17年3月に発生した福岡県西方沖地震により、地域の特徴である町家が次第に減少する中で、「歴史的な環境を活かした景観づくりの推進と姪浜ブランドの構築」を目標に、地域資源の保全・活用に向けた意識醸成とその実践を図る取り組み。

協議会に参加している地域内外の人々の多様なノウハウ・スキルを活用し、地域資源の調査と情報発信、ワークショップの企画運営、まちづくり計画策定、町家再生などの様々な取り組みを行っており、学生が若い視点を活かし、地域資源の調査やまちづくりワークショップの運営に協力。

これらにより、町並みの保存に向けた地域住民の機運醸成が図られたことで、将来的な景観づくり・まちづくりまで見据えた息の長い取り組みとして定着し、さらなる発展が期待される。

ダブル受賞を記念して、かわら版号外を発行したが、その時の筆者のコメント（事務局長通信）を記しておこう。受賞はあくまで通過点である。次に向けての筆者の熱い想いが伝わるであろう。現状に満足せず、常に前を向いて前向きに取り組む姿勢こそが大事なのである。

コラム7 『姪浜の宝を福岡市民の宝に！』の実現に向けて

当協議会は、今までに「福岡市都市景観賞」「ふくおか地域づくり活動賞」を受賞しています。今回、応募のきっかけとなったのは、一部の地域を除き、全国どこに行っても同じような景観形成が進む中で、一地域の地道な取り組みを通して、それぞれの地域にある歴史や文化、物語等を掘り起こし、個性ある地域づくりの一助になればという想いからです。

姪浜には、古い町並みが面的に残っているわけではありませんが、歴史、物語、町並み、海、食などの様々な魅力資源があります。町並みだけ見ると、いつの間にか通り過ぎてしまいそうですが、じっくりと歩いて見ると、まさに「宝のまち・姪浜」を実感することができます。こうした身近な資源をしっかりと評価し、まちづくりに活かし、後世に引き継いでいくことが重要です。

我々の活動そのものは、全国的にも評価されたということですが、今後は町並みとして目に見える形で成果を出していかないとはいけません。そのためには、地域の住民や関係団体の皆さまの今まで以上の「姪浜への想い」と、それを実現化するための熱意と実行力が不可欠でございます。どうか、宝の持ち腐れにならないよう『姪浜の宝を福岡市民の宝に！』を目標に、共に知恵を出し、汗を流していきましょう。（平成25年10月31日発行の「かわら版号外より」）

(7) 唐津街道姪浜ウィーク「とっておきの姪浜！」

10月19日から11月9日にかけて『とっておきの姪浜！』と銘打って、次のような姪浜ならではの多彩な「こだわりとおもてなし」のイベントを実施した。地域内外から多くの皆さま方に参

加していただき、姪浜の魅力を伝えることができた。

今回は、NPO 日本都市計画家協会「日本まちづくり大賞」受賞記念という位置付けも行い、市政記者クラブに投げ込みを行うなど、協議会活動や姪浜の魅力を積極的に PR した。

「とっておきの姪浜！」の内容

- 住吉神社での幻想的な「灯明コンサート」
- マイヅル味噌の閉店前に多くの方々にその歴史と魅力を知っていただきたいと企画した「みそ蔵特別公開」
- 姪浜がロケの現場となった高倉健さん主演の映画“網走番外地～悪への挑戦～”の上映会「みそ蔵シネマ」
- 地域のイベントとしてすっかり定着した「みそ蔵コンサート」
- 姪浜の魅力スポットを巡る「景観歴史発掘ガイドツアー」
- 小学生を対象とした「子どもまちなみ探検隊」



灯明コンサート



みそ蔵特別公開



みそ蔵コンサート

この中で、今回のトピックを紹介する。まずは、関係者の皆さま方のご協力を得て、ガイドツアーのオプションとして初めて姪浜魚市場をコースに組み込んだ。福岡市内に魚市場があるのは、長浜と姪浜だけである。競りの様子を見学していただいたが、新鮮な魚が水揚げされる港町・姪浜の良さを実感していただけたことと思う。

また、子どもまちなみ探検隊も初めての試みであったが、歴史ある寺社、昔ながらの町家、迷

路のような路地、そして蒲鉾や削り節の試食というような姪浜ならではの内容に、参加した子どもたちは興味津々で大満足の様であった。講師の高山美佳氏（協議会アドバイザー）のアイデアで、まち歩き後に俳句を詠んでもらったが、子どもたちの感性の高さに驚かされた。例えば「ゾロゾロと 歩く細道 メイロはま」「今晚の ビールのつまみは カマボコと 歴史のかほり ビバ姪の浜」などである。次の世代を担う子どもたちにも姪浜の魅力を伝えていきたいと改めて思ったところである。



魚市場の競り見学



子どもまちなみ探検隊



まち歩き後に子供たちに詠んでもらった俳句

(8)「あしたのまち・くらしづくり活動賞」受賞

11月30日、「(公財)あしたの日本を創る協会」が主催する「あしたのまち・くらしづくり活動賞」を受賞した。この賞は、全国各地で様々なテーマで地域活動に取り組んでいる団体の中から先進的・先駆的な活動を顕彰するものである。平成25年度は、全国各地から254件の応募があり、36件が受賞、当協議会は振興奨励賞をいただいた。

当協議会のテーマは、10月に受賞した二つの賞と同じ『姪浜の宝を福岡市民の宝に！～歴史的な環境を活かした地域協働の町並み形成と地域づくり推進活動～』で、多彩な地域資源を活かした、これまでの7年間の地道な取り組みが評価されたものである。



表彰式



表彰状

(9) 様々な受賞に伴う協議会活動のPR

平成25年度に前述の3つの賞を受賞したことに伴い、マスコミからの取材も大幅に増えた。特にNPO日本都市計画家協会「日本まちづくり大賞」の受賞は全国へのPR効果も高く、いろいろな取材を受けることになった。遠方から視察に来られる団体も出てきた。地域の団体や住民の皆さま方からも協議会の活動を評価していただけるようになった。マスコミを通じた地域への情報発信は、地域の皆さま方の地域への誇りや愛着の醸成につながっていった。筆者の描いたシナリオ通りである。

また、各賞受賞に大きく貢献してきた事務局長個人への取材も数社からあり、日頃からの精力的な活動を通じた筆者のまちづくりへの想いを伝えてきた。

住民組織「姪浜まちづくり協」

宿場町の歴史伝え日本一

都市計画の全国大会

11月25、26日 5日日本新聞

町家保存や散策ツアーガイド 多彩な取り組み 高評価

「宿場町の歴史を伝えるために、町家保存や散策ツアーガイドなど、多彩な取り組みを行っています。高評価を受けています。」

今月の姪浜の宝を福岡市民の宝に！

その活動が「日本まちづくり大賞」を受賞

唐津街道姪浜まちづくり協議会 事務局長 大塚 政徳さん

「姪浜の魅力は、新旧の街開発が進む姪浜駅から、マリノアシティの中間地帯にほかりと昔から変わらない場所がスポット的に残っているんです。面白いと思うか、ほっとしますね。唐津街道を中心とした旧姪浜地域は多彩な歴史、多くの寺社、古い町家、物産、海、食と様々な魅力的な資源があります。町並みだけを見ると、いつの間にか通り過ぎてしまいがちですが、じっくりと探してみると、

まさに「宝のまち・姪浜」を実感することができそうです。地域を掘り下げていく、その街にしかないものが見えてくる。こうした身近な資源をしっかりと評価し、まちづくりにも活かす。後世に引き継いでいくことが重要だと思います。」

と熱く語っていたのは、この姪浜地区の市民団体「唐津街道姪浜まちづくり協議会」事務局長、大塚政徳さん。今年10月、NPO「日本都市計画家協会」が主催する、第10回「日本都市計画家協会賞」の最高部門である「日本まちづくり大賞」を受賞。「多彩で地道で精美」と高く評価された活動の企画を練り、プレゼンテーションを行ったその人である。

実は大塚さん、出身は行橋市。ご自身も「まよもん」と謙遜されるが、姪浜周辺に住んで約27年、姪浜大好き人間。最後にべらべらと世代に、メッセージをお願ひした。「埋もれている歴史や物語を掘り起こす体験や、地域への愛着や誇りを育む土台になります。地域に出て行けば、いろんな発見があります。人との出会い、ネットワークが広がるのはとても楽しいこと。もし時間があれば是非参加して欲しいです。」

大塚さんの瞳は輝いていた。

会員募集
 経歴の歴史や町並み、地域づくりに関心のある皆さまの参加をお待ちしています。
 ●お問い合わせ先 / 唐津街道姪浜まちづくり協議会 事務局 大塚
 e-mail: ottu-messe@iwk.bbq.jp FAX: 092-882-3631 携帯090-7929-7758

マスコミ掲載記事

(10) 地域の皆さま方からの贈り物

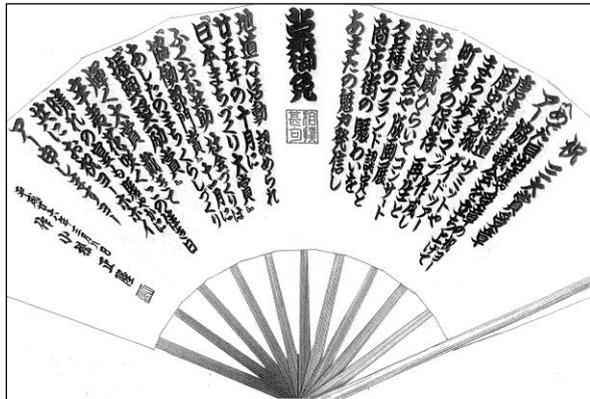
前述の三つの栄えある賞をいただき、マスコミに大きく取り上げられたこともあり、地域の皆さま方から嬉しい贈り物をいただいた。

まずは、姪の浜六丁目在住の方から 12 月に「姪の浜史跡めぐりの歌」を作っていただいた。姪浜への熱い想いの込められた歌で 37 番までである。

姪の浜史跡めぐりの歌 	
一 博多の駅をあとにして 姪の浜へいざ行かん 地下のトンネル走り行く 空港線の心地よさ	十一 袖ヶ浜を後にして 名柄の川に沿い行けば 鎌倉武士の昔より 建てる鶯は興徳寺 
二 唐津に向かう筑肥線 相互乗り入れ便利よく 高架のホームの姪の浜 行き交うバスも絶え間なし	十二 しっくい塗りの白壁や 町家作りの小格子の 奥に三毛猫昼寝して カラス飛んでも目もさめず
三 白魚踊る室見川 河口に貝掘る人もあり 愛宕の山は木々青く 南はかすむ叶ヶ岳	十三 街道に沿う水町に 仰ぐイチョウの天満宮 
四 姪浜駅の北口に 立てば母校の内浜小 我も娘も時超えて 学びて遊ぶ楽しさよ	十四 その梅の実は七草の 粥とて今年々に 詣でる人にふるまって 今に伝わる鬼すべよ
五 渡船場の岸あとにして フェリーに乗れば十分余 春は桜の能古の島 夏は涼しき森の陰	十五 いかなる縁か室町の 昔に建てる照林寺 その御霊屋の奥深く 菅公の神体祀られて
六 コスモスの花の咲く頃は アイランドパークで楽しまん 集まる親子も数知れず 夕焼けの空も忘れぬ	十六 過ぎし昔の吉日に 舞鶴城より移せしと み奥の裏に墨黒く 残せし人は誰ならん
七 壇一雄の旧宅や 思索の森に展望台 立ちて東を眺めれば 海の中道 志賀の島	十七 母を亡くして幾年ぞ 彼岸に参る菩提寺の 墓前に香をくゆらせて 祈るは君と子らのため
八 遠い故郷に妻や子を 残して来たる防人の うたも哀しや万葉に 心を映す波の色	十八 九州霊場 法蔵院 春は甘茶の花まつり 秋は歩きの町めぐり 参拝男女四時絶えず
九 父は二十で遠泳し 能古の向かいの岸につく 	十九 銀杏の実の熟すころ 順光寺の横通り 三叉路に立つ庚申塔 ゆかり知る人今いずこ
十 神功皇后の凱旋を 今も語るか磯の風 小戸大神宮も祀られて 神代を偲ぶ御膳立	二十 枕の草子の昔より 近くは志ん生の落語まで 庚申待ちの名を留めし 赤きお面は猿田彦

姪の浜史跡めぐりの歌

もう一つは、豊浜二丁目在住で相撲甚句をされている小松正隆様から、相撲甚句を通じて姪浜のまちづくりに協力したいというお話をいただいた。歴史散策マップや現地取材をもとに「姪浜の名所旧跡」及び「三賞受賞」に関する甚句を作っていただき、平成 26 年 3 月 8 日の「三賞受賞記念祝賀会」で披露していただいた。お祝いの席に相応しい歌で、出席された方々も大変感激されていた。



相撲甚句(左)とその披露(右)

こうした地域の方々からの贈り物は、「地域資源の保全・活用に向けた意識醸成と双方向のまちづくりへの展開」につながりつつあると感じた次第である。

(11) 子どもウォークラリー

平成 25 年秋の「子どもまちなみ探検隊」が大好評だったこともあり、2月8日に西日本新聞社「姪浜ビィーキ」と共催で「姪浜の玉手箱～ナゾ解きウォークラリー」を実施した。姪浜には、一年中飾られている注連縄、住吉神社のカップの像など「これ何？」と疑問に思うようなナゾが多くあるが、今回はこうしたナゾを解き明かしながら、姪浜を探検してゴールを目指すものである。

ナゾを解くとご褒美（仲西商店の削り節、岡村屋のレモンケーキなど）をもらえるポイントもあり、ゲームのように楽しみながら地域のことを学べる内容であった。また、魚嘉の蒲鉾を使った燻製づくりの体験、そして平成 25 年末で長い歴史に幕を下ろしたマイヅル味噌の味噌を使った豚汁のふるまいもあった。参加した子どもたちも大いに満足した様子であった。保護者の皆さま方にも好評で、今後も協議会のイベントとして定着させていきたいと思ったところである。



子どもウォークラリー

(12) 子ども落書き消し隊

3月1日に景観回遊路に面した光福寺の塀の落書き消しを行った。ここはガイドツアーで毎回案内するお薦めのコースであるが、落書きが酷く、何とかきれいにさせていただきたいとご住職に申し入れ、快諾を得て実施したものである。

ここでも子どもたちに参加する場を設け、塗装作業に関わっていただいた。最初は慣れない手つきで緊張していたが、次第にうまく塗れるようになっていった。協議会スタッフも作業に加わり、最後は職人さんにきれいに仕上げていただいた。大人も子どもも一緒になって作業し、絆を深め楽しい一日を過ごすことができたと思う。

こうした活動は、子どもたちがまちの歴史や魅力を知り、楽しみ、その価値を継承していくことや我がまちに誇りを持つことにもつながり、また、まちを訪れる人たちの楽しみも深まると確信したところである。



before



落書き消しの様子



after



参加者全員で記念撮影

(13) 三賞受賞記念祝賀会

前述のように、当協議会は平成 25 年の秋に、NPO 日本都市計画家協会の「日本まちづくり大賞」、福岡県の「ふくおか共助社会づくり表彰」、(公財) あしたの日本を創る協会の「あしたのまち・くらしづくり活動賞」の 3 つの公的な賞を受賞した。これを記念して 3 月 8 日、地域への報告会を兼ねて祝賀会を開催し、出席された方々と喜びを共有した。豊浜在住の小松正隆さんをはじめとする玄海相撲甚句会の皆さま方にもお祝いの相撲甚句を披露していただき、御園さんの美味しい魚料理とお酒で大いに盛り上がった。

筆者らは、これらの受賞を励みに、今後も『姪浜の宝を福岡市民の宝に!』の実現に向けて、地域の総力を結集してまちづくり活動に取り組んでいく決意をしたところであった。



三賞受賞記念祝賀会

(14) まちなみフォーラム IN 唐津街道姪浜

これは、3月29日に福岡県内で町並みなどの地域遺産の保存継承に取り組む団体「まちなみネットワークふくおか」と共同で実施したものである。午前中のまち歩きイベント「歴史散策と桜の名所巡り」には約50名の皆さまに参加いただき、寺社、町家、路地、姪浜ブランド店などを巡った。桜の名所である光福寺、万正寺、探題塚の満開の桜に参加者は大いに魅了されていた。

また、午後からは「まちなみ保存継承活動のこれから」というテーマで、福津市津屋崎、飯塚市内野宿など県内各地で町並みの保存継承に取り組んでいる4地域の取り組みを報告していただき、これをもとに活発な意見交換を行った。少子高齢化の進行に伴う空家の増加によるコミュニティの維持の深刻さや、伝統家屋を修理する技術・技能者の育成などが大きな課題となっている中で、会場の皆さま方と地域遺産を活かしたまちづくりの方向性や、その戦略と実践方策について考えた。姪浜の景観づくりのヒントもたくさんいただき、今後役に立てていきたいと思ったところである。



まち歩き



フォーラム

(15) 姪浜町家等の認定

3月29日、地域の貴重な財産として、地域の町並み形成に寄与している町家6軒を新たに「姪浜町家」として認定させていただいた。また、地域の畳屋さんや表具・襖屋さんとして親しまれている「緒方畳店」と「倉谷翠泉堂」さんを「姪浜ブランドのお店」として認定させていただいた。これで認定させていただいた町家は累計26件、ブランド店は14件となった。認定した町家やお店の所有者には、当協議会から手作りの認定プレートを贈呈させていただいた。今までと同様、肥塚さんの熱い想いの込められた手作りのプレートである。

姪浜には残していきたい町家や、姪浜ならではのお店がたくさんある。今後も「姪浜ブランドづくり」の一環として、こうした活動を続けていくべきであろう。



姪浜ブランドの認定

(16) 景観づくり計画 STEP 2 策定

景観づくり委員会は平成 23 年 10 月に活動を開始し、その成果として 24 年 6 月に「景観づくり計画ステップ 1～景観づくりの考え方と景観よかこと事例集～」を策定し、地域への報告会を行った。その後、平成 25 年 3 月に再開し、自治協議会や商店会、姪友会の関係者、町家所有者、九州大学大学院生などに参加していただき、9 回の委員会と 3 回のまち歩きワークショップを行い、その成果として平成 26 年 3 月末に「景観づくり計画ステップ 2」を策定したものである。



景観づくり委員会



まち歩きワークショップ

景観づくり委員会で整理した「姪浜における景観づくりの課題と取り組みの視点」は次のとおりである。

景観づくりの課題「このままじゃ姪浜らしさがのうなるばい！」

唐津街道を中心とした旧姪浜地域は、多彩な歴史、多くの寺社、古い町家などの魅力資源により福岡市内でも有数の歴史的環境が形成されているが、その魅力が地域内であまり認識されていない。このことは都市化の波によって年々まちの個性が薄らいでいくことの要因にもなっている。

こうした課題に対応するため、当協議会が中心となって、平成 19 年度から景観まちづくりの取り組みを進めているが、歴史的資源や町並みの個性が活かされて、姪浜の宝が福岡市民の宝になっていくのか、あるいは市の中心部に近いゆえに都市化に埋没して地域の個性を失い、一層雑然とした町並み（どこにでもあるような特徴のないまち）へと向かっていくのか、今がまさしく正念場である。

こうした中、当協議会では平成 23 年 2 月に今後の姪浜地域のまちづくりの方向性を示した『元気！姪浜計画』を地域に公表した。計画の柱のひとつである「姪浜のまちの個性の再構築（住まいづくり・町並み景観づくり）」の実現に当たっては、地域の皆さま方に関心を持っていただくか、さらには景観向上・個性再構築に向けて地域がいかに協働していくかが大きな課題となっている。



高層マンションにおいても景観形成への配慮が望まれる。

取り組みの視点

姪浜の景観への関心を呼び起こし、地域住民に景観づくりに積極的に関わってもらうためには、次のような視点が必要であると考えている。

- 地域住民に、いかに街道や路地、寺社、町家、海などの地域資源に目を向けてもらい、その良さを感じ、体験してもらうか。
- 地域資源の再認識を踏まえて、いかに景観向上・個性再構築の意識を醸成し、地域協働の基盤を育てるか。
- 「規制」と捉えられがちな景観づくりを、いかに「個性ある暮らしの環境の継承・創造」に結びつけるか。

また、当該地域固有の歴史的環境を活かした景観づくりを浸透させ、展開していくため、計画づくりと並行して次のような事業を実施してきた。

景観づくり委員会で取り組んできたこと

○地域への誇りや愛着を感じてもらうことを目的とした住民参加の景観まちづくり活動

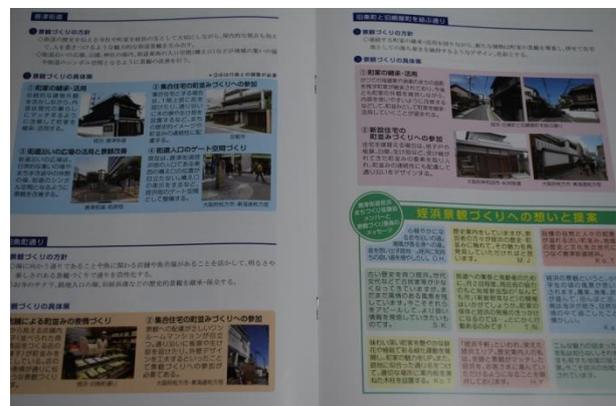
- ①まちや港の資源（寺社・町家・街道・路地等の歴史的環境資源、名柄川・船溜り・魚市場・造船所等の水辺環境資源等）を巡るまち歩きワークショップと景観分析マップなどによる現況景観のまとめ・公表
- ②子ども景観教室（将来を担う子どもたちに地域の景観的魅力をわかりやすく伝え、自分の住む地域に愛着を持ってもらう）
- ③住民参加によるお寺の塀の修景（景観回遊路に面したお寺の塀の落書き消し）

○地域協働の景観づくり計画の策定

- ①地域主体の「景観づくり委員会」による景観づくり計画の検討・作成（「景観づくり手引き集」の作成、「景観ルールたたき台」づくり）
- ②唐津街道姪浜町並みゼミの開催（景観づくり計画の地域への発表等により、今後の景観まちづくりに向けての意識の共有を図る）
- ③かわら版による活動の報告や景観づくり計画の地域への広報

こうして策定された計画では、景観づくりのエリアや方向性についてステップ1を見直すとともに、姪浜固有の地域資源を活かした景観づくりを浸透させ展開していくため、「景観づくりと並行して進めるべき実践活動」や「景観づくり推進組織」についても提案している。

「地域のことは、地域で考え実践する」これがまちづくりの基本である。黙っていて誰かがまちづくりをやってくれるわけではない。景観づくり委員会でできることは限られており、地域の皆さま方の積極的な参加が必要である。



景観づくり計画ステップ2

(17) 姪浜景観まちづくり宣言

これは、景観づくり計画が示す姪浜の景観づくりの方向性をわかりやすく示し、地域の皆さま方と共有するため、「姪浜景観まちづくり宣言」を行ったものである（3月14日）。

この宣言を踏まえ平成26年度からは、地域の関係団体や住民の皆さま方のさらなる協力と幅広い参加をいただきながら、より詳細な計画を策定するとともに、具体的な景観づくりを実践していくこととした。

「姪浜景観まちづくり宣言～姪浜の宝を福岡市民の宝に！～」

姪浜のまちを眺めながらじっくりと歩いてみると、町並みのそこここにはたくさんの「よかところ」を発見することができます。歴史ある数々の寺社、古い町家、唐津街道、路地、祠、お堂、寺社や民家の花・緑、港の風景など数え上げると切りがありません。このように姪浜は「寺町」「宿場町」「港町（漁師町、廻船町）」の面影を今に伝える全国的にも珍しいまちです。

私たちは、地元の人たちにとっては「住みやすさ・暮らしやすさ」のあるまち、訪れる人たちにとっては「楽しさ」のあるまちの実現を目標として、このような多彩な「よかところ」を姪浜の個性として活かすことができるような「まちづくり・町並み景観づくり」を地域の皆さま方とともに具体的に実践していくため、ここに「姪浜景観まちづくり宣言」を行います。

『姪浜の宝を福岡市民の宝に！』の実現に向けて、地域の総力を結集して取り組んでいきましょう。

○姪浜ならではの多彩な歴史や文化を活かした景観づくりを進めよう

興徳寺や住吉神社に代表される寺社、江戸時代から昭和時代にかけての伝統的な町家、唐津街道の宿場の名残を感じさせる町並みや道の形、海辺のまち独特の路地のネットワーク、祠、お堂、寺社の豊かな緑、港の風景などは、姪浜固有の宝（魅力資源）です。これらを最大限に活用した景観づくりを地域協働で進めていきましょう。

○地域の貴重な財産である町家を現代的視点で再評価し、積極的に活用しよう

町家は、地域の長い歴史の中で生み出された建築様式です。「寒い」「暗い」「暮らしにくい」ということをよく聞きますが、もともとプライバシーや採光、通風の確保など生活の知恵が詰まった家です。最近では、快適な暮らし方が提案された事例やレストランなどとして再生された事例も多く見ることができます。こうした町家の特性を現代的視点で再評価し、住居や店舗として積極的に活用していきましょう。私たちも町家を保全・再生・活用するための体制づくりを進めていきます。

○新しい建物や駐車場も町並みの向上に貢献するような景観づくりの工夫をしよう

様々な事情で古い町家が解体され、その後はワンルーム形式のマンションやアパートが建ったり、駐車場になったりしています。新しい建物や駐車場も町並みの連続性や色彩、緑化などに配慮し、地域の町並み形成に積極的に参加していきましょう。

○景観づくりを住みやすさ・暮らしやすさや商店街の賑わい創出につなげよう

「何のための景観づくりか？」「だれのための景観づくりか？」ということをよく耳にします。姪浜の景観づくりは外観を整えたり、観光化することが主な目的ではありません。私たちは、姪浜ならではの魅力資源を活かした景観づくりの取り組みにより、「地域の皆さま方が歴史ある姪浜に暮らし、ここで商売をすることに誇りと愛着を持ち続けてほしい」と考えています。そして、街道や路地を活かした地域コミュニティと会話が生まれる対面型の商店街を再生し、高齢者や子どもたちの姿が溢れるまちにしていきたいです。

○子どもたちに誇りをもって手渡すことのできる景観づくりをしよう

姪浜には多くの宝があります。しかし、まちの宝や伝統はそのまま放っておくと錆びたり朽ちたりして、最後には消滅してしまいます。まちの宝や伝統に磨きをかけて次の世代にバトンタッチしていきましょう。また、子どもたちといっしょに姪浜を歩いてまちの姿とともに観察し、姪浜の宝や物語を伝えるなど、子どもたちが姪浜に関心や誇りを持つための入口をつくってあげましょう。

平成26年3月14日

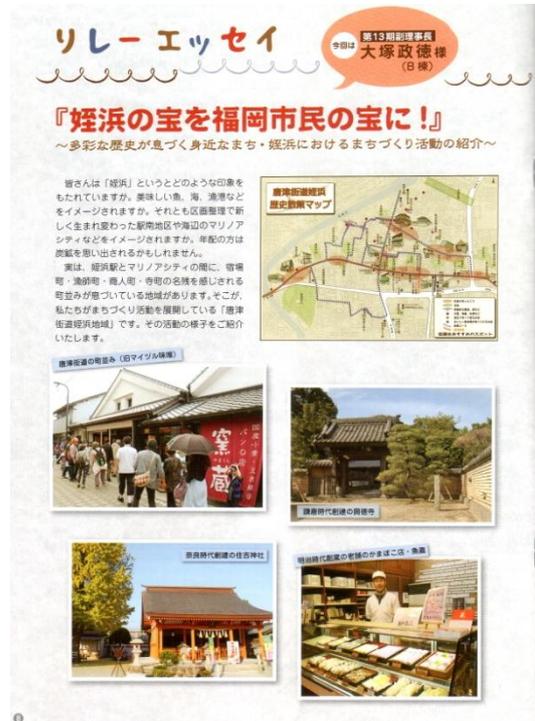
唐津街道姪浜まちづくり協議会、唐津街道姪浜景観づくり委員会

平成 25 年度の振り返り

平成 25 年度は、この他に「みそ蔵コンサート（5 月 11 日）」、各種関連事業、視察対応などの他、かわら版を 3 回発行するなど多忙を極めた 1 年間であった。また、筆者が住むマンション（906 戸）の広報誌でも異例のページ（5 ページ。通常は 1～2 ページ）を割いて姪浜や協議会活動の紹介をさせていただいた。筆者の活動をしっかり見てくれていた方が同じマンションにいたことを大変嬉しく思う。

平成 25 年度は職場が異動になり、慣れない業務に取り組む中でも充実した 1 年を過ごすことができた。出張で秋田県（仙北市角館、横手市増田）、協議会の活動で新潟県（長岡市、村上市）、岡山県（倉敷市）に行く機会にも恵まれ、いろいろな地域の取り組みを学ぶことができた。

また、長男が関東の大学に入学し、建築や都市、環境の勉強をするようになったことにより、筆者自身も初心に帰って建築や都市を再度勉強するようになった。筆者らが学生時代に学んだことより遥かに進化していることに驚かされたが、筆者自身の今後の人生を考える絶好の機会と捉えるようになった。今こうして書いている活動記録も、筆者のこれまでの人生を振り返るものでもある。こうした機会を与えてくれた長男に感謝したい。



筆者が住むマンションの広報誌にも掲載

コラム 8 気持ちの 100 倍返し

地域づくりはまさしく喜怒哀楽の世界です。喜びや楽しみはみんなで共有できますが、怒りや哀しみはあまり外に出さずに胸の内にとめておくようにしています。このところ、様々な事情で古い町家が取り壊されたり、伝統あるお店が閉店されるなど、辛いと感じることも多いですが、その一方で姪浜の魅力や相撲甚句や史跡めぐりの歌にさせていただくなど、地域の皆さま方の温かい気持ちをいただけて会員一同大変感激しております。

皆さま方からいただいた気持ちは、まずは 10 倍の気持ちでお返しし、それが地域の皆さま方に戻っていく時にはその 10 倍、つまり当初いただいた気持ちの 100 倍にして地域に返していきたいと思っています。具体的には「姪浜の魅力」として地域内外に広く PR していきます。昨年「倍返し」という言葉が流行しましたが、姪浜流の倍返しは「気持ちの 100 倍返し」です。

今後も、嬉しいことも辛いこともすべてプラスのエネルギーに変えて、姪浜ならではのまちづくりの実現に向けて辛抱強く取り組んでいきたいと考えています。どうか皆さま方のご支援、ご協力、そして何よりも地域づくりへの積極的なご参加をお願いいたします。「どうかご支援ヨーホホイ アー願いますヨー」。(平成 26 年 3 月 31 日発行の「かわら版第 7 号」より)

17 2ndステージの振り返り

(1) 主な活動メンバー

1st ステージ (H19～21 年度) の町並みイベントを中心とした事業に加え、「元気！姪浜計画 (まちづくり計画)」や「景観づくり計画」の策定、「姪浜ブランド」や「姪浜町家」の認定、九州大学や地域づくりに取り組む団体との連携など、活動は年々充実していった。会員は協力会員を含め 35 人程度いたが、実際に活動するメンバーは限られていた。活動が充実すれば充実するほど、それは筆者の負担増につながっていった。筆者が頼りにしたのは、肥塚副会長であり、太田景観づくり委員会委員長であった。この二人がいたからこそ、2nd ステージの新たな事業を進めることができた。



西区どんたく参加(平成 23 年5月)



津屋崎視察(平成 25 年 11 月)

(2) 活動資金

平成 22 年 2 月からマイヅル味噌内に案内所を構えたこともあり、家賃や光熱費が年間 25 万円ほどかかることになった。会員から会費 (5 千円/人) を徴収することになったが、家賃を賄えるほどではなかった。また、平成 19～21 年度の 3 年間の「西区やる気応援事業」の助成が終了し、新たな活動資金を調達する必要がある。

参加料を徴収できるイベントについては、収支が黒字になることはなかったが、赤字にならない状況までもっていくことができた。しかし、「元気！姪浜計画」や「景観づくり計画」の策定、また、それに伴うワークショップや講演会の開催などの経費については新たな助成金を探す必要があった。幸いなことに平成 21 年度末に福岡市より認定を受けた「景観づくり地域団体」への助成制度を平成 22 年度と 23 年度に活用することができた。

また、全国区の助成金にも果敢にチャレンジし、2nd ステージの 4 年間で 4 つの補助事業の採択を受けることができた。さらに、福岡県が平成 25 年度に創設した「ふくおか地域貢献活動サポート事業補助金」にも採択された。こうした助成金を活用することで、まちづくり活動をさらに軌道に乗せることができた。

筆者は協議会活動全体を見渡し、どの時期にどのような活動を進めていくのかを的確に把握し、それに応じた適切な助成金獲得を念頭に入れていた。助成金を何に使うのではなく、数ある助成金の中から、協議会の活動状況に応じた助成金を選択し、チャレンジしていくことが大切であり、筆者はそれを常に意識していた。

【2nd ステージの助成金】

- ・ 景観づくり地域団体活動助成金（福岡市） H22 年度、23 年度
- ・ 住まい・まちづくり担い手事業助成金（住まい・まちづくり担い手支援機構） H22 年度
- ・ URCA まちづくり企画支援事業助成金（再開発コーディネーター協会） H24 年度
- ・ まちづくり人応援助成金（まちづくり市民財団） H24 年度
- ・ 街なか再生助成金（区画整理促進機構） H25 年度
- ・ ふくおか地域貢献活動サポート事業補助金（福岡県） H25 年度

【2nd ステージの事業費の変遷】

単位：千円

	助成金	自己資金	総事業費
平成 22 年度	2, 5 3 3	1, 3 2 6	3, 8 5 9
平成 23 年度	5 0 0	1, 1 2 7	1, 6 2 7
平成 24 年度	6 2 0	1, 3 3 5	1, 9 5 5
平成 25 年度	8 0 0	2, 2 5 7	3, 0 5 7

（3）表彰、認定

2nd ステージの表彰としては、平成 25 年度の NPO 日本都市計画家協会の「日本まちづくり大賞」、福岡県の「ふくおか共助社会づくり表彰」、(公財)あしたの日本を創る協会の「あしたのまち・くらしづくり活動賞」である。また、平成 22 年度と 23 年度に福岡県の「ふくおか地域づくり活動賞」を連続受賞した（23 年度は大賞に続く奨励賞）。この賞は平成 21 年度にも受賞しており、3 年連続の受賞となった。

この他、平成 24 年度に「まちづくり人応援助成金」を受けたまちづくり市民財団から「まちづくり人」として認定された。



NPO 日本都市計画家協会「日本まちづくり大賞」受賞



「まちづくり人」として認定

（4）総括

このように 2nd ステージの 4 年間も、様々な事業を展開してきた。2nd ステージがスタートした時の課題は、「地域のまちづくりの方向性が不明確」「まちづくりの効果を具体的に目に見え

る形で示す」ことであった。こうした状況の中で、筆者らは「姪浜のまちづくりの方向性を示す計画を作ろう」「地域でできる取り組みを実践しよう」という目標を立て、1st ステージで実践してきた多彩な町並みイベントの継続・充実に加え、計画策定業務（まちづくり計画、景観づくり計画）や具体的な実践事業（姪浜ブランド認定、姪浜町家認定等）に取り組んできた。

協議会設立から4～7年目という時期であり、ややもすると中だるみしやすい時期であったが、協議会の熟度や地域の状況に応じた新たな目標を立て、ほぼ計画通りに活動を実践してきた。協議会全体としても、地域としても、また筆者個人としても、いろいろと成果の多いセカンドステージであったと思う。

H26.1.24景観づくり委員会及び定例会

平成25年度事業の進捗状況の確認及び今後の予定について

月	景観づくり委員会を中心とした地域協働事業		協議会主催事業	関連事業
	委員会 定例会 ▲	歴史的な環境を活かした 地域協働の町並み形成と地域づくり推進事業 ※助成事業（一部助成対象外）		
4月	▲4/19	第1回まち歩きワークショップ(4/27) ◇まち歩きマップ改訂(4/27)	各種助成事業に応募 ↓ 審査 ↓ 2つの助成事業に採択	
5月	▲5/24 ◆5/25			◆みそ蔵コンサート(5/11)
6月	◆▲6/21			◆歴史散策マップ改訂(データ更新。6/21)
7月	◆▲7/26		事業計画検討 ↓ 関係者協議 ↓ 順次、事業計画決定	
8月	◆▲8/23			◆角館、横手市増田視察(8/28～30)
9月	▲9/14	◆第2回まち歩きワークショップ(9/14) ◆まちづくり瓦版第6号 (景観づくり委員会の事業計画の発表等。9/30発行)		◆全国町並みゼミ倉敷大会(9/20～22) ◆西区まるごと博物館(9/29)
10月	▲10/11	◆まちづくり瓦版号外 (日本都市計画家協会賞受賞記念。10/31発行)	◆灯明コンサートIN住吉神社(10/19)	◆日本都市計画家協会賞受賞(10/5～6)
11月	◆▲11/1	◇みそ蔵シネマ(11/2) ◇みそ蔵コンサート(11/2) ◇みそ蔵特別公開(11/2～9) ◇まち歩きガイドツアー(11/9) ※第3回まち歩きワークショップ ◆子どもまちなみ探検隊(11/9) ◆第4回まち歩きワークショップ(11/30) (他都市視察として遠足、赤間宮で実施)	唐津街道姪浜ウィーク 『とっておきの姪浜!』として実施(11/2～9)。	◆あしたのまち・くらしづくり活動賞受賞(11/30)
12月	▲12/20 兼忘年会	景観づくり計画の検討 ・たたき台を作って3回の委員会ですとめる。	光福寺の塀の落書き消しの検討 ・方法の検討 ・お寺との協議 ・専門家との協議	◆九州大学「都市・建築ワークショップ」(12/6)
1月	◆▲1/24		◆「姪浜町家」認定事業(6軒リストアッププレート制作) ◆「姪浜ブランド」認定事業(2店リストアップ打診プレート制作)	◆姪浜フェスティバル(1/25) (唐津街道補装完成記念イベント)
2月	◆▲2/21予定	◆子どもまちなみ探検隊(2/8。姪浜ビィーキと共催)		◆唐津街道サミット(2/15。福津市睦町)
3月	◆▲3/14予定	◆光福寺の塀の落書き消し(3/1) ◆まちなみフォーラムin姪浜(3/29) ◆まちづくり瓦版第7号 (景観づくり計画の発表等。3/31発行) ◆景観づくり計画策定(3/31)	○ガイドツアー ○パネルディスカッション等 ○交流会(18:00～20:00)	◆受賞祝賀会(3/8。御膳) ◆姪浜町家及びブランド認定プレート贈呈式(3/29。まちなみフォーラム時)
備考		◆福岡県共助社会づくり基金助成金 ◆街なか再生助成金	◆各種イベントに合わせた町並みパネル展 ◆各種視察・講演対応	◆ふくおか地域づくりネットワーク協議会 ◆福岡県美しいまちづくり協議会 ◆まちなみネットワーク福岡

事業の進行管理(平成26年1月の景観づくり委員会及び定例会の資料より)

18 3rdステージの活動（主に平成26年度～27年度）

（1）地域課題、まちづくりの目標

平成26年度からを3rdステージと位置付け、活動も一段と活発になっていった。今までの7年間の活動の成果と反省を踏まえ、新たな地域課題にチャレンジしていくことになった。当時の課題は主に次の3点であった。

- ・景観づくりの実践について、より具体的な検討を加え、実施が可能な部分から目に見える形にしていくとともに、広報や推進体制（組織づくり、ルール化など）を検討していく必要がある。
- ・平成25年12月に味噌の製造場としての約1世紀の役割を終えて閉店したマイヅル味噌のみそ蔵（国の登録有形文化財。姪浜の歴史的・景観的シンボル）を今後、具体的にどう再生し、継続的に活用していくかが喫緊の課題であり、地域の総力を挙げて取り組んでいく必要がある。
- ・みそ蔵に代わる地域のシンボルとなる新たな魅力スポットや、姪浜らしさにこだわった多彩な事業を発掘・発信していく必要がある。

こうした状況の中で筆者らは、みそ蔵の再生・継続的活用に向けて、「みそ蔵を再び地域のシンボルに！」を目標に住民参加の様々な事業を展開するとともに、精力的な景観づくりの普及活動により、みそ蔵を中心とした姪浜のまちなみの個性の再構築を目指していくこととした。また、次のステージに向けた姪浜のまちづくり『姪浜ネクスト』に向けて、姪浜の多彩なよかところを再発掘・活用する「姪浜まち旅プロジェクト計画」に取り組み、姪浜の魅力を地域内外に発信し、身の丈にあった観光スタイルの定着を目指していくこととした。

具体的な活動を紹介していこう。1stステージや2ndステージで開始した事業も継続していくことになり、事務局長の役割はさらに重要になっていった。

3rdステージの地域課題、活動目標

- 地域課題：①景観づくりの実践に向けた意識高揚
②味噌の製造場としての約1世紀の役割を終えて閉店した、地域の歴史的・景観的シンボルであるマイヅル味噌のみそ蔵の再生・活用
③みそ蔵に代わる地域のシンボルとなる新たな魅力スポットや、姪浜らしさにこだわった多彩な事業の発掘・発信
- 活動目標：①国の登録文化財のみそ蔵を中心とした姪浜のまちなみの個性の再構築
②次のステージに向けた『姪浜ネクスト』の推進

（2）3rdステージの最初の総会

2ndステージの最初の定例会（平成22年4月16日）で、「まちづくり協議会の役割」「まちづくりの推進に当たっての協議会心得」などについて確認していたが、3rdステージの最初の総会（平成26年5月16日）で改めて「活動心得」について事務局長案として示した。これは、対外的な講演などで筆者が話していることであるが、3rdステージの開始に当たり改めて確認したものである。以下に当時の資料をそのまま示そう。

平成 26 年 5 月 16 日の総会で示した活動心得（事務局長案）

- ◆焦らず、怒らず、根気よくの精神で。まちづくりは、一步後退一步前進、一步前進二歩後退の繰り返し。根気よくやりましょう。（※大阪・富田林の長老の言葉）
- ◆何でも楽しくやりましょう。まちづくりに関わる人自らが楽しくなければ、長続きしません。
- ◆継続は力なり。どんなに小さな取り組みも、10年続けば立派な成果につながります。
- ◆まずは家庭、次が仕事、まちづくりのプライオリティは3番目で構いません。家庭や仕事を犠牲にしてまで、まちづくりに関わる必要はありません。しっかりした土台の上で、まちづくりに関わります。 （※博多部の長老の言葉）
- ◆各自のできる範囲で協力をお願いします。頭（企画を出す）、体（汗をかく）、時間（時間を惜しまず奉仕活動をする）、お金（活動資金の協力）のいずれかで協力をお願いします。
- ◆会員は十人十色です。それぞれの特技を活かして活動に参加してもらうことで、いろいろな取り組みができます。
- ◆会員の意見も様々です。まずは皆さまの意見を聴きましょう。
- ◆何事もできる方向（どうしたらできるのか）で考えましょう。いきなりできないというスタンスでは、何もできません。
- ◆よそ者、ばか者、若者の視点を大切にしましょう。特に外部からの視点は、新鮮な意見や感覚を含んでいます。それに加え今後は、高齢者、女性、子どもの視点を取り入れていきましょう。
○今までのキャッチフレーズ「ヨソモン、バカモン、ワカモン」
○これからのキャッチフレーズ「ヨソモン、バカモン、ワカモン+高齢者、女性、子ども」
- ◆黙っていて、誰かがまちづくりをやってくれるわけではありません。会員の一人ひとりが、姪浜の魅力資源を活かしたまちづくりの推進に向けて目標と当事者意識を持って取り組みましょう。
- ◆すべての企画において、姪浜らしさ（内容、場所など）にこだわります。
※創意工夫してマスコミに取り上げてもらえるような企画が必要
- ◆できることから始め、具体的に目に見える形で成果を示していきましょう。
※アイデアはまちなかに溢れている。地域の実情に応じて実践していくことが大事
- ◆課題も多いですが、まちづくりの過程を楽しみながら、次世代にバトンタッチしていきましょう。

この中で、筆者が特に伝えたかったことは、「他人の意見を傾聴すること」「どうしたらできるのかを前向きに考えること」の2点である。ここで、誤解してほしくないのは「楽しく＝楽しくなければならない」ということではない。まちづくりは決して楽しいものではない。その中でも各人がやりがいを見出せばいいのである。まちづくり協議会は親睦団体ではないのである。

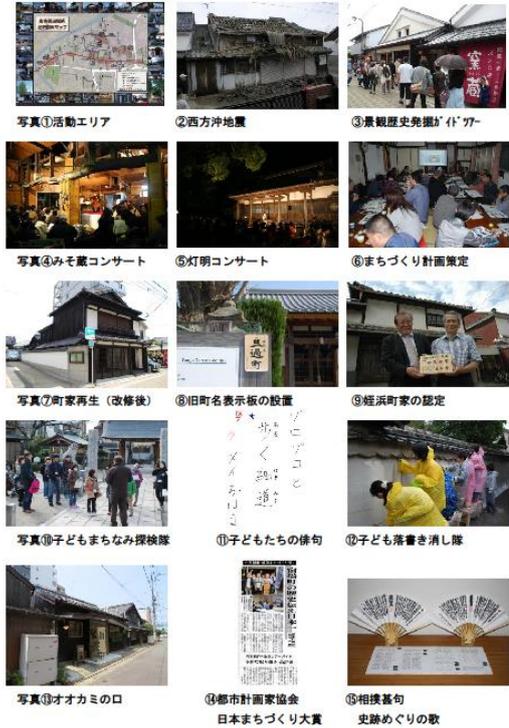
19 平成 26 年度の活動

(1) 「ふくおか美まちチャンネル」出演

平成 26 年度の具体的な事業は、福岡県美しいまちづくり協議会が主催する「ふくおか美まちチャンネル」への出演からスタートした（5月 22 日）。福岡県からの委託を受けた男女・子育て環境改善研究所の富山さんからの依頼であった。平成 24 年度の「全国町並みゼミ福岡大会」や「景観発見&まちづくり体験体感ツアーIN 姪浜」「福岡県景観大会」での縁などもあり、筆者に依頼があったものである。

当日は NG なしの 20 分程度の収録であったが、姪浜の魅力やまちづくり協議会の活動を 15 枚の写真を使いながら、しっかり PR させていただいた。様々な場面で活動内容を発表する機会に恵まれ、その度にプレゼンテーションもうまくなっていったと思う。仕事で得た経験を地域活動に活かし、地域活動で得た経験を再度仕事に活かすという好循環にもつながっていったのではないだろうか。

ふくおか美チャンネル（2014. 5. 22 唐津街道姪浜）



「ふくおか美まちチャンネル」で紹介した 15 枚の写真

(2) 町家談義

これは石城戸邸の駐車場をお借りして、交流会を行い地域の方々と親睦を深めたものである（7月 12 日）。協議会としての正式な行事ではないが、姪浜住吉神社の河童祭りに合わせて、日頃から協議会活動でお世話になっている地域の方々に声をかけて実施した。協議会のメンバーだけの親睦では内向きで発展性が少なく、姪浜のまちづくりや協議会の活動について関係者と食事をしながら意見交換を行い、率直な意見を聴くことが必要であるという趣旨で企画したものである。



町家談義

あいにくの雨であったが、まちづくりについて普段は話すことの少ない関係者にご参加いただき、交流を深めることができた。その中心には肥塚さんの手作りの料理が並んでいた。人通りの多い祭りの時期に目に留まる町家の一角を利用させていただいて、地域の方々と交流することは、

まちづくりへの関心を深める上で意義のあることであり、まちづくりには外（協議会会員以外）の視点も大切であるということ改めて認識させられた次第である。

（3）阿部真也先生との再会

6月に西日本新聞社経済部の根井記者から連絡があり、秋から連載を予定している「大学の知恵を地域のものに」の一環として協議会に取材依頼があった。趣旨は福岡大学名誉教授の阿部真也先生が昭和55年に西日本新聞の地域提言シリーズ「わが町」で取り上げた地域が、その後どのように変容していったのか、当時の状況と現在を比較しつつ、将来に向けたまちづくりの方向性を大まかに描ければというものであった。

根井記者から連絡があった時は、姪浜を取材していただける嬉しさとともに、阿部先生に久しぶりにお会いできるという期待感と楽しみがあった。「福岡都市科学研究所配属」の欄で紹介したが、筆者は平成13～14年度に「福岡大都市圏における広域連携のあり方に関する研究」を担当。その研究責任者が阿部先生であった。阿部先生とは、イギリスやドイツの調査に同行させていただき、その頃のことも思い出した。イギリスに行く機会があっても、なかなかコッツウォルズやエジンバラ、シェイクスピアの生誕地であるストラトフォード・アポン・エイヴォンを訪問することは少ない。この時の研究成果は、筆者の中ではまちづくりや景観づくりに脈々と生き続けている。



福岡都市科学研究所の調査で阿部先生に同行(ハノーバー)

阿部先生と久しぶりに再会したのは、8月のお盆前だった。福岡都市科学研究所卒業後は道端で時々お会いすることはあったが、ゆっくりと話したのは初めてであった。先生は大変お元気そうで、姪浜の歴史や商店街の活性化などについて意見交換させていただいた。職場を離れても、地域づくりが縁で再会したことになる。筆者が姪浜で頑張っていることが、阿部先生との再会につながったのであろう。研究機関や市役所で培った人的ネットワークは、地域づくりの中でしっかり活かされているのである。



西日本新聞に掲載された記事
（平成26年12月8日）

(4) 福岡市職員技術研究発表会

これは、福岡市技術職員が各々の専門分野で携わった研究や成果を発表し、各専門分野の技術に触れる機会を設けることにより、技術職員の資質向上を図ることを目的に、毎年8月頃に実施されているものである。

筆者は、市役所の業務の枠を超えて地域に飛び出し、建築技術職員の専門性・企画力を存分に発揮し、地域のまちづくりを牽引し、姪浜を全国にPRしている建築技術職員のまちづくりへのこだわりと熱い想いを伝えた。タイトルは「地域の誇り&まちなみ育てプロジェクトIN姪浜 ～建築技術職員の専門性を活かした地域貢献活動～」である。この中で、建築技術職員として特に工夫したことは次のとおりである。

建築技術職員として特に工夫したこと

- 継続的な活動を支えるのは資金
⇒全国区の数十倍の助成金に応募・採択
- 多彩な活動を支えるのは十人十色の会員
⇒職業、特技、考え方の異なる多彩なメンバー構成を活かした活動内容
(各会員の多彩なノウハウ・スキルの活用)
- マスコミを通じた地域への情報発信
⇒マスコミに記事にしてもらえるような活動内容の工夫
- 活動における姪浜らしさへの徹底したこだわり



こういう場を通じて姪浜の魅力や協議会の活動状況を伝えていくことで、多くの福岡市職員に姪浜という地域に興味を持ってもらうことも筆者の狙いなのである。こうした人前での発表は、10月の建築士会まちづくり賞のプレゼンテーションでも役立つことになった。

(5) 法被作成

4月の定例会で協議会の長老の西嶋功さんから法被を作ったらどうかという提案があった。全員賛成ということではなかったが、希望者のみ購入という方向でまとめ、5月の総会で承認後、作成に向けて動き出すことになった。デザインは会員の佐伯さんをお願いし、いくつかの案の中から一つの案に絞り込み作成に入ることとなった。作成費は1着あたり11,000円であったが、協議会から5,000円の補助を出すようになり、個人負担は6,000円であった。

法被が出来上がったのは9月中旬であり、お披露目は9月20日の「登録文化財 みそ蔵特別公開」であった。評判は上々であった。この法被は協議会の各種イベントだけでなく、関連事業などでも着用し、姪浜や協議会をPRすることになった。筆者もこの法被を着て様々な場面でプレゼンテーションを行った。協議会設立から6年半が経ち、協議会の認知度も向上してきた時期であり、効果的な法被作成であった。もう少し早く作っていても良かったかも知れない。



まちの案内所の前で記念撮影



「日本建築士会連合会」まちづくり賞表彰式

(6) 登録文化財 みそ蔵特別公開

マイルズ味噌の建物は、江戸時代後期に建てられ、酒蔵→飛行機の部品工場→みそ蔵と様々な形で活用されてきたが、平成 25 年 12 月に味噌の製造場としての約 1 世紀の役割を終えて閉店した。

このみそ蔵は、姪浜の歴史的・景観的シンボルであり、地域のまちづくり・景観づくりに欠かせない重要な建物である。筆者らは、地域のシンボリックな空間を残し、何らかの形で活用していきたいと考え、所有者の協力を得て平成 26 年 9 月から定期的に特別公開を実施した。平成 27 年 3 月までに 7 日間公開したが、約 1,500 人の方にご来場いただいた。来場者の関心も高く、「なつかしい味噌の香りがする」「地域のシンボルとしてぜひ残していただき、何らかの形で活用してほしい」などの声を多くいただいた。

また、公開に合わせ「姪浜展」「トークショー」「ワークショップ」「みそ蔵コンサート」などを開催した。トークショーでは、姪浜港に住んで 18 年になるオランダ人のヤップ夫妻に「ヨットで訪れた 55 ヶ国の港から福岡、そして姪浜を選んだ理由」などについて話していただいた。「美しい海と山に囲まれた福岡が好き」「治安もよく、人々も温かい。いつかは定住を考えているほどのこのまちが好き。姪浜最高」という言葉に参加者は感激されていた。



みそ蔵特別公開



姪浜展



トークショー



ワークショップ

(7) とっておきの姪浜！

平成 19 年度から実施している各種イベントも年々充実してきた。その根底にあるのは「姪浜らしさ」へのこだわりであるが、平成 26 年度はさらにチャレンジしていくことになった。

その代表的なものが、平成 26 年 9 月に実施した「遊覧船で巡る福岡の歴史とまちなみ」である。これはまち歩きとマリノア遊覧船「ゆーみんトマト」による博多湾回遊を組み合わせたガイドツアーで、従来のまち歩きに加え、博多湾から姪浜周辺を眺め、歴史解説を行うことで、海との関わりの深い姪浜の歴史をより知っていただくことができたのではないかと思います。



遊覧船ツアー

また、平成 27 年 3 月には景観歴史発掘ガイドツアーの一環として、「着物で唐津街道の町並みをそぞろ歩き」を実施した。唐津街道の趣のある町並みを着物で散策しながら、まちの歴史や景観を学び、伝統文化に触れてもらうことができたと思う。光福寺や万正寺、観音寺、姪浜住吉神社の満開の桜に参加者は大変喜んでいて、沿道の皆さまも美しい着物姿に魅了された様子で、「着物の似合うまち・姪浜」をアピールできた。

この他にも、恒例となった「歴史散策と桜の名所巡り」「子どもまちなみ探検隊」などを実施し、姪浜らしさを全面的に PR した。こうした小さなチャレンジの積み重ねが「姪浜まち旅プロジェクト計画」へとつながっていくことになった。



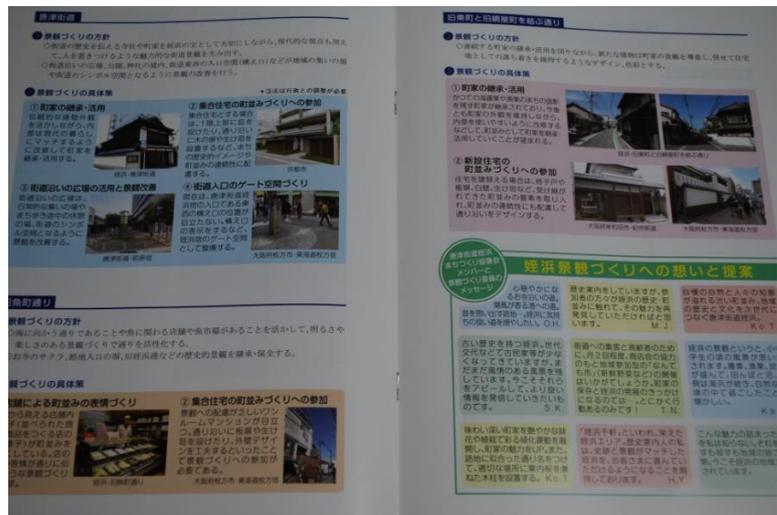
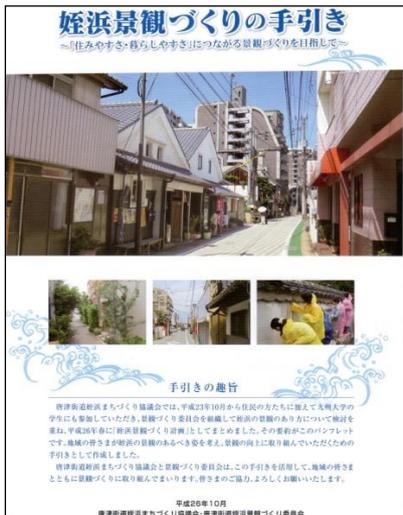
着物でそぞろ歩き



子どもまちなみ探検隊

(8)「姪浜景観づくりの手引き」発行

平成26年3月に策定した「姪浜景観づくり計画」の内容を地域の方々に広く知っていただき、活用していただきたいと考え、それをわかりやすく示した「姪浜景観づくりの手引き」を10月に発行した。まちづくり協議会と景観づくり委員会では、地域の集まりでの出前講座やみそ蔵でのパネル展などを開催し、この手引きを活用して地域の方々とともに姪浜ならではの地域特性を活かした景観づくりに取り組んでいきたいと考えていたが、当時の協議会の体制では難しく、活用されていないのが現状である。



姪浜景観づくりの手引き

(9) 建築士会「まちづくり優秀賞」受賞

平成25年10月にNPO日本都市計画家協会賞「日本まちづくり大賞」を受賞したが、今回は(公社)日本建築士会連合会のまちづくり賞にチャレンジした。この賞は、より身近になった市民まちづくりのなかで、建築士及び建築士会としての専門性をいかに発揮し、見事にその役割を果たしてきた活動を支援するとともに、他団体、地域との連携を強化した地域まちづくりのさらなる発展に資するため、優れたまちづくり活動などの実績を評価・表彰するものである。

筆者は4月の募集開始からすぐに書類作成に入り、入念に準備を進めていった。当協議会の取り組みは、地道で多彩な活動が特徴であるが、アピール感にやや欠ける印象は否めず、そこを審査員にどうアピールするかに苦労した。6月に応募書類を作成し提出。第一次選考通過の通知と第二次選考の案内が来たのは8月上旬であった。

審査は第一次選考と第二次選考に分かれており、第一次選考を通過した7団体が、第二次選考会で公開プレゼンテーションに臨むことになる。第二次選考会当日(10月23日)に第一次選考の審査過程を記した資料が配布された。それを見ると、特に突出した団体はなかったが、当協議会は3～5番手あたりだったと思う。賞金10万円をいただけるのは上位3団体であり、筆者はプレゼンテーションにかけることとした。今回も限られた時間でのプレゼンテーションであり、トータルな取り組みが売り物の当協議会としては焦点を絞るのに苦労したが、「建築士&公務員」として地域のまちづくりに情熱を持って取り組んでいることをアピールした。

全団体のプレゼンテーションが終了した後、発表者が前のテーブルに並んで審査員の質問を受けることになった。筆者も数名の審査員から質問を受け的確に答えていたが、まだ3位以内に入る自信はなかった。もう1問ぐらい質問して欲しいと思っていた矢先に、公務員である審査員から「業務の枠を超えて、地域に飛ぶ出す公務員として頑張っていること」を最大限に評価していただき、これが決め手となり大賞に次ぐ優秀賞につながったのではないかと思う。「建築士&公務員」として浜浜のまちづくりへの関わり方が大きく評価されたことになる。公務員である審査員からは「大塚さんは今後も放し飼い職員、固有名詞のある役所職員として頑張してほしい」という審査講評が今でも強く印象に残っている。



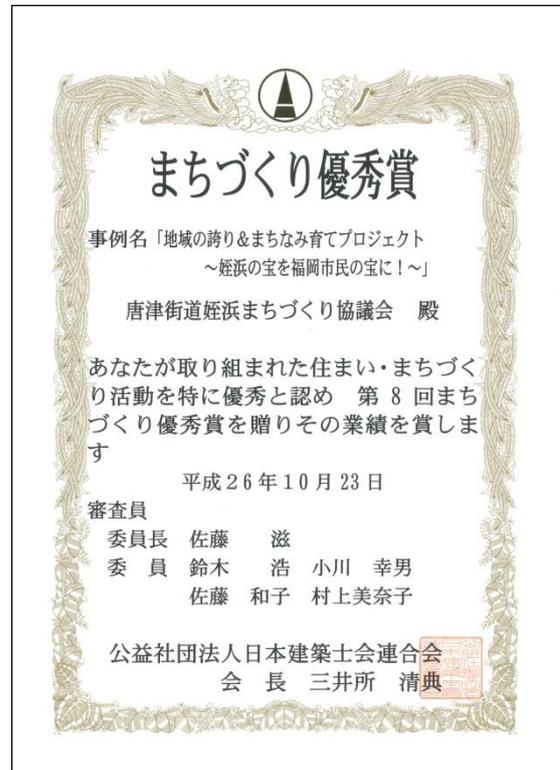
公開プレゼンテーション

筆者は第二次選考会当日に表彰を受け、翌日の建築士会連合会の大会にも出席し、そこでも受賞報告をしていただいた。その時に通路を挟んで隣の席に座っていたのが、太田国土交通大臣の

代理として出席されていた杉藤大臣官房審議官であり、後に筆者が耐震関係の業務で大変お世話になることになった。これも何かの縁であろうか。

当協議会に対する審査講評（抜粋）

- まさに建築士が中心となって行政と手を組み、住民を巻き込んで、地域の持っている固有の歴史を掘り起こし、住民に共感を与え、誇りにまで昇華させている。その過程は緻密で、例えば子どもたちへの景観教育などは、まちなみ探検隊にとどまらず、壁面の落書き除去などの実体験を取り入れ、将来のまちづくりへの担い手づくりまで目論んでいる。
- よそ者の建築士が活動し、景観形成まで手がけるという活動。その中に自治体の職員もいたということ。地域活動に役人が主体的に参加することは立場上難しいところがあり、地域の個性を大切にしたいという強い思いを持つ職員が「放し飼い職員」として果たした役割も大きいと感じた。今後とも、固有名詞のある役所職員として頑張ってもらいたい。
- 行政職でありながら建築士としての立場で地域に貢献する姿勢が感動を与え、優秀賞となった。



つかの間の休日(福島県郡山市)

コラム9 宗像剛氏との再会

建築士会まちづくり賞の受賞は筆者には特別の意味がある。今回の建築士会連合会の全国大会は福島県郡山市であった。筆者は平成25年の時点でこの情報入手し、今回（平成26年）のまちづくり賞への応募を考えていた。それは鴻池組時代の知り合いである宗像剛氏（前掲）に久しぶりにお会いしたかったからである。宗像さんが経営する会社の名前は聞いていなかったが、「郡山市宗像」で検索すると「八光建設の宗像社長」であることがすぐにわかった。

筆者が宗像さんへ連絡を入れたのは、第一次選考を通過した旨の連絡があった8月上旬である。「10月に郡山に行くのでぜひお会いしたい」旨のメールを入れた。翌日に宗像さんから歓迎しますという返信があった。実は、筆者は7月に出張で福島県喜多方に行く機会があり、その時に会うこともできたが、晴れの場で再会したいという筆者の想いは7月再会ではなく、既に10月再会に向けられていたのである。

第二次選考会が終わり表彰を受けた後、宗像さんが選考会場まで迎えに来てくれていた。28年振りの再会を喜び合った。しかし、鴻池組時代に体重が約85kgあった筆者のイメージから遠くかけ離れており、すぐに筆者だと認識できなかつたらしい。再会した時の筆者の体重が63kgだからやむを得ないかも知れない。

その後いろいろ会話をする中で、宗像さんも「NPO 郡山アーバンデザインセンター」の理事として、地域のまちづくりプロジェクトに関わっていることがわかった。このプロジェクトには、東京大学の北沢猛先生（故人）や出口敦先生も関わられており、ここでも不思議な縁を感じた。筆者も、北沢先生が横浜市の都市デザイン室長時代にシーサイドももちを案内することもあったし、筆者が横浜に視察に行った時にも大変お世話になった。出口先生には都市景観室時代や都市計画課時代、そして姪浜のまちづくりでもお世話になった。福岡と郡山は遠く離れているが、人はいろいろなところでつながっているのだと感じたところである。

(10) 執筆

平成25～26年度にかけて全国的な賞を受賞することになり、執筆依頼も入るようになった。まずは、公務員の読者が多い月刊誌「地方自治職員研修」の「進行形！景観まちづくり」というコーナーで「歴史的資源を活かした町並みづくりと賑わいづくり」というテーマで執筆（B5版3ページ）させていただいた。

内容は「姪浜と私」「宝のまち・姪浜～姪浜の歴史と魅力～」「活動のきっかけとねらい、協議会の体制」「活動内容」「取り組みのポイント～人を活かす、資源を活かす～」「地域内外からの反応・反響」「自治体職員よ、地域に出よう！スキルを活かそう！」「今後の展望」ということで、自治体職員としての業務の枠を超えた取り組みをコンパクトにまとめた。この中で、筆者は「私はこの活動に業務として関わっているわけではありませんが、地域の皆さま方に喜んでいただき、地域から感謝状までいただけるのはこの上なく公務員冥利に尽きます。」と述べている。

また、建築士会まちづくり賞の受賞に伴い、会誌「建築士」にも執筆した（A4版2ページ）。テーマはプレゼンテーション時と同じ「地域の誇り&まちなみ育てプロジェクト～姪浜の宝を福岡市民の宝に！～」。内容は「地方自治職員研修」と同じようなものであるが、「建築士&公務員」

としての取り組みを紹介した。

この中で、筆者は「私のような一建築士や一公務員が地域に飛び出すだけでも地域は大きく変わります。建築士として様々な形で建築に携わっている読者の皆さま方も、それぞれの経験を活かして地域づくりに関わることで地域力は大きく向上し、それを自分自身にフィードバックすることで今後の業務や定年後の生活にも役立つと確信しています。」と述べている。

進行形！景観まちづくり

歴史的資源を活かした町並みづくりと賑わいづくり

唐津街道景観まちづくり協議会 大塚政徳 事務局長

経浜と私

平成17年3月の福岡県西方沖地震、それが私の人生の大きな転機となりました。私の住む経浜でも多くの町家や寺社が被害を受けました。被害を受けて改めて気付くというのは残念ですが、しかし、「経浜にはこんなに素晴らしい歴史的資源が残っていたのか。まだ遅くはない。歴史的な環境を活かしたまちづくりを進める上で、これが最初で最後のチャンスだ」と前向きに考え、地域の関係者に声をかけ、2年後にまちづくり協議会を立ち上げました。私が40歳の時です。

それまで私は福岡市職員として長く景観行政に携わっていましたが、自分が住む地域のことはあまり関心がありませんでした。それからは今までの20年間を取り戻すかのように「経浜の宝を福岡市民の宝に！」を目標に精力的に活動を続け、地域から感謝状もいただきました。30歳代後半までは、職場でも「セブンイレブン（朝7時から夜11時まで）」と言われるくらいに働きましたが、今後は、はやりの二刀流ではありませんが、地域への恩返しを込めて、「人生は二刀流、二毛作」をテーマに息長く、そして仲間とともに楽しく地域活動に関わっていきたくと思っています。

本稿で紹介するのは、福岡市職員でもある私が景観行政の知識と経験を活かし、業務の枠を超えて地域の景観づくりに取り組んでいる事例です。まちづくり事例としてだけでなく、読者の皆さまの今後の役所生活の参考にもなれば幸いです。

宝のまち・経浜～経浜の歴史と魅力

経浜は、人口150万人都市・福岡市の西区の中心的な地域です。地下鉄の終点駅なので、名前を聞かれたことがあるかもしれません。ややもすると通り過ぎてしまいがちな経浜の町並みですが、じっくりと歩いてみると、町並みのそこそこたぐさんの「よかとこ」を発見することができます。その中には私たちの先人たちが受け継いできたものもあり、また、その上に新たに追加されたもの、生み出されたものもあります。

先人たちが受け継いできたものの代表は、日本誕生の神話や神功皇后伝説、奈良時代や鎌倉時代からの歴史を持つ神社やお寺の数々、元寇防塁、小戸から生の松原にかけての白砂青松、江戸時代に栄えた唐津街道の町並み、港の風景などたくさんあります。一方、経浜駅周辺や海沿いの現代的な商業施設や高層マンションなどは、経浜の環境の良さや便利さが生み出した新たな風景です。

このように経浜は新しいものと古いものが共存するまちですが、区画整理によって新しく生まれ変わった経浜駅周辺と、海沿いのマリノアシティの間にあって、はつんと取り残されたように歴史的な環境が残っている地域があります。ここが私たちの主な活動地域で、宿場町、商人町、漁師町、寺町の4つの顔を備えた全国的にも珍しいまちです。その中央を東西に走る唐津街道を中心に、数多くの寺社や古い町家、路地などが残り、今でも街道の名残を感じさせる町並みが継承されています（写真1）。

写真1：街道の名残を感じさせる経浜の町並み

地方自治職員研修 2015. 1 37

第8回 まちづくり賞 結果発表

まちづくり優秀賞

地域の誇り&まちなみ育てプロジェクト
～経浜の宝を福岡市民の宝に！～

実施団体 福岡 唐津街道経浜まちづくり協議会
大塚政徳 唐津街道経浜まちづくり協議会 事務局長

宝のまち・経浜 経浜の歴史と魅力

経浜は、福岡市西区の中心的な地域です。地下鉄の終点駅なので、名前を聞かれたことがあるかもしれません。ややもすると通り過ぎてしまいがちな経浜の町並みですが、じっくりと歩いてみると、町並みのそこそこたぐさんの「よかとこ」を発見することができます。その中には私たちの先人たちが受け継いできたものもあり、また、その上に新たに追加されたもの、生み出されたものもあります。

先人たちが受け継いできたものの代表は、日本誕生の神話や神功皇后伝説、奈良時代や鎌倉時代からの歴史を持つ神社やお寺の数々、元寇防塁、小戸から生の松原にかけての白砂青松、江戸時代に栄えた唐津街道の町並み、港の風景などたくさんあります。一方、経浜駅周辺や海沿いの現代的な商業施設や高層マンションなどは、経浜の環境の良さや便利さが生み出した新たな風景です。

このように経浜は新しいものと古いものが共存するまちですが、その魅力が地域住民にほとんど認識されていませんでした。また、平成17(2005)年の福岡県西方沖地震の影響や都市化の進展による町家の減少、マンションや駐車場の増加などにより、地域固有の歴史的景観が失われつつあります。

このような状況の中で、歴史的な環境を活かしたまちづくりを進める上で何が正念場であると考え、危機感を持って立ち上がった筆者の建築士が中心として、平成19年3月に「唐津街道経浜まちづくり協議会」を立ち上げました。当初は10名程度のメンバーでスタートしましたが、今では協力会員を含め60名のメンバーで「よかとこ」を、また、若者の視点を大切にして、「経浜の宝を福岡市民の宝に！」を目標に、経浜ならではの多様な魅力を活かした地域協働のまちづくりを精力的に推進しています。

継続的で多様な活動内容

協議会は平成19年の立ち上げ以降、スタッフアップしながら活動を展開しています。

1stステージ(主に平成19年度～)

「地域の魅力の再認識と地域内外への発信」を目標に、まち歩きマップや互換の発行、まちづくり活動拠点の設置等による経浜の見どころ・活動の情報提供や、景観歴史発見ガイドツアー、国の登録有形文化財でのみそ蔵コンサート、歴史ある社での灯明コンサートなど多様なイベントを実施しています(写真1)。

2ndステージ(主に平成22年度～)

「地域協働のまちづくり計画の策定」を目標に、住民参加のワークショップも取り入れながら「元美」経浜計画や景観づくり計画の策定を行っています。また、「景観まちづくりの実践と経浜ブランドの構築」を目標に、町家再生の実践、旧町家表示板の設置、経浜ブランドや経浜町家の認定(写真2)などの活動を展開し、目

に見る形でもまちづくりの効果を伝えています。最近では、子どもまちなみ探検隊、子ども落書き消し隊など次の世代を担う子どもたちを対象にした景観教育にも取り組んでいます(写真3)。

3rdステージ(平成26年度～)

「国の登録文化財のみそ蔵を中心とした経浜のまちなみの個性の再構築」を目標に、「景観づくりの手引き」を発行し地域への普及活動を行うとともに(写真4)、平成25年末に味の製造場としての約1世紀の役割を終えて閉店した旧マイルド味噌の再生・歴史的活用に向けた活動を展開中です(写真5)。

このように、まちづくりの各段階に応じた多様な活動を牽引しているのが、私をはじめとした数名の建築士です。全国どこへ行っても同じような町並みの形成が進む中で、地域に根ざっている身近な魅力資源を掘り起こすことが、経浜ならではのまちづくり・景観づくりにつながるかと考えており、建築士としての専門性を存

写真1：みそ蔵コンサート

2 Kenchikusha 2015.3

月刊「地方自治職員研修」2015年1月号

日本建築士会連合会 会誌「建築士」2015年3月号

「参考資料4 進行形！景観まちづくり～歴史的資源を活かした町並みづくりと賑わいづくり～」

(月刊「地方自治職員研修」2015年1月号)

「参考資料5 地域の誇り&まちなみ育てプロジェクト～経浜の宝を福岡市民の宝に！～」

(日本建築士会連合会 会誌「建築士」2015年3月号)

(11) 都市景観大賞現地審査

平成26年末に申請していた「都市景観大賞(景観教育・普及啓発部門)」の現地審査を3月9日に受けることになった。現地審査は書類審査で上位に入った団体が受けることになっており、いい位置につけていたと思われる。

現地審査に来られたのは、審査委員の卯月盛夫氏(早稲田大学教授。建築家、都市デザイナー)である。卯月先生はアーバンデザインの分野で有名なシュトゥッツガルト大学大学院に留学され、シュトゥッツガルト市やハノーバー市の都市計画局を経て帰国。世田谷区都市デザイン室主任研

究員、世田谷まちづくりセンター初代所長をされるなど、都市デザインの権威である。筆者がシュトゥツガルトに2回視察に行った時には、卯月先生の著書を参考にさせていただいた。憧れの先生との対面となった。

現地審査ではまず、マイヅル味噌のみそ蔵で協議会の取り組み状況をパワーポイントで説明。先生からは「なぜ、これほど多彩な事業を継続できるのか、他の審査委員からも聞いてきてほしいと言われている」などいくつか質問があった。先生が一番関心があったのは、活動資金と人材だったのでないだろうか。

その後、時間の許す限り地域内を案内。良い所も気になる所も包み隠さず見ていただいた。その場所での活動写真や今昔写真を見てもらうことで、より効果的な説明ができたと思う。福岡市の職員が都市景観行政の経験を活かして、業務外でも地域のまちづくりに関わっていることを一番評価してくれたことが、先生との会話の中でもわかった。こうして現地審査も滞りなく終了し、5月末の審査結果の発表を待つことになった。

成果例①マスコミ掲載⇒地域への情報発信



現地審査では、パワーポイントや新聞記事などで多彩な活動を PR

(12) 姪浜ネクスト始動

次のステージに向けた姪浜のまちづくりを地域の方々といっしょに考えていくため、「姪浜ネクスト」を3月21日にスタートした。これは、福岡市が推進する「福岡ネクスト」の姪浜版で、みんなの想いをひとつにして、姪浜の多彩な「よかところ」を活かしたまちづくりの実現に向けて取り組もうとするものである。

第1回目の放談会では、これまでの活動を振り返りながら、「伝えていきたいこと」「問題のあること」「これからやるべきこと」について、いろいろな意見やアイデアを出し合った。



「姪浜ネクスト」に向けた最初の放談会

平成 26 年度の振り返り

平成 26 年度も上記のような多彩な事業を展開してきた。仕事も忙しい時期ではあったが、事務局長として協議会の活動を牽引してきた。忙しい合間にも 2 回、福島県に行く機会に恵まれた。1 回目は市役所の研修で喜多方、会津若松、大内宿を訪問、2 回目は建築士会まちづくり賞の関係で郡山を訪れた。前述の宗像さんには郡山で、姪浜でお世話になった石神さん（九州大学卒、当時は都市計画協会に出向中）には喜多方でお会いすることができた。人とのつながりを実感できた 1 年でもあった。



会津さざえ堂



会津大内宿

さて、この頃の筆者の気持ちを書いたものがあるので、これを紹介して平成 26 年度の締めくくりとしたい（コラム 10）。

コラム 10 課題に取り組むこと＝まちづくりの楽しさ

当協議会設立の発端となった福岡県西方沖地震から早くも10年が経過しました。住吉神社の鳥居や門が倒れたり、町家の屋根が崩れ落ちたりした映像が蘇ります。「多彩な歴史や魅力を活かしたまちづくりを進めたい」と考え、協議会を立ち上げたのは、それから2年後です。当時、知人から「姪浜はまちづくり不毛地」と揶揄（やゆ）されたこともありましたが。

しかし、私はこの8年間、だれよりも精力的に活動し、姪浜の魅力や活動を地域内外、そして全国に発信してきました。その成果はマスコミへの登場回数に表れ、去年は30回近くになりました。一市民団体としては、その数は福岡市内でも突出しています。これは、姪浜らしさにこだわった多彩なまちづくり活動によるものですが、姪浜という地域そのものに魅力がないとマスコミは取り上げてくれません。

今後も、いろいろな課題に取り組むことを楽しみながら、粘り強く活動を進めていきたいと考えています。そして姪浜が「まちづくり先進地」と呼ばれるようになっていけばいいなと思っています。それだけの可能性を姪浜は持っているのです。

(平成27年3月31日発行の「かわら版第8号」より)



かわら版やマスコミを通じた情報発信は、他都市などからの視察や研修の増加につながっていった。

20 平成 27 年度の活動

実質的には筆者の活動の締めくくりの年度である。活動を推進しながらも、悩みの多い年であった。いろいろな想いを込めて振り返りたい。

(1) 総会

平成 27 年度の事業計画については、既に平成 27 年 3 月と 4 月の定例会で案を示し議論を重ねてきた。かなり具体的な計画であり、今まで以上に詳細な計画であった。5 月 30 日の総会でも特に意見はなく承認された。この事業計画に沿って各事業が進んでいくことになった。

また、総会終了後に、博多祇園山笠振興会前会長（現顧問）の瀧田喜代三氏に山笠や地域づくりについて講演していただいた。瀧田さんには、3 月に開かれた市役所の永野間先輩の退職祝いの時にお願ひし内諾を得ていた。瀧田さんは御供所まちづくり協議会会長として、また山笠振興会会長として素晴らしいリーダーシップを発揮するとともに、新しい視点で改革に取り組みされていた。参加した会員には大変勉強になったはずである。

その後、瀧田さんを囲んでの懇親会を御園で行い、美味しい魚料理とお酒で大変盛り上がった。瀧田さんは特にトンマを気に入られていた。最後の締めは瀧田さんの博多手一本。瀧田さん、ありがとうございました。



瀧田さんの講演会



瀧田さんの本場の博多手一本

(2) 「都市景観大賞（景観教育・普及啓発部門）」受賞

3 月に現地審査を受けていた都市景観大賞（景観教育・普及啓発部門）の結果通知が 4 月 15 日に届いた。当協議会の「地域の誇り & まちなみ育てプロジェクト～姪浜の宝を福岡市民の宝に！」が、最高賞の「大賞（国土交通大臣賞）」を受賞することとなった。

景観教育・普及啓発部門は平成 23 年度から実施されており、大賞（国土交通大臣賞）は福岡市内では最初の受賞となった。福岡市では平成 8 年度にシーサイドももち地区が都市景観 100 選（国土交通大臣賞）に選定されているが、これに続く快挙となった。

現地調査で姪浜を訪れた審査委員の卯月盛夫氏（早稲田大学教授。建築家、都市デザイナー）は、審査講評の中で「行政や一部の既存団体に偏らず、自発的な市民活動として、これほどまで幅広い景観まちづくり活動を継続的に進めてきたことは、極めて類い稀な事例であり、都市景観大賞にふさわしいと評価できる」と最大級の評価をいただいた。

6 月 12 日の受賞式には、川岡会長と太田景観づくり委員会委員長に出席してもらった。筆者も出席する予定であったが、議会前ということと、「空家等対策の推進に関する特別措置法」が 5 月

末に完全施行されたばかりで市民からの相談が増え、その対応もあり出席できなかった。受賞式では、川岡会長と同じ壇上に、都市空間部門で大賞を受賞された「大手町・丸の内・有楽町地区」の NPO 大丸有エリアマネジメント協会理事長の小林重敬先生も上がられていた。わが国の都市計画の重鎮である小林先生と当協議会の川岡会長が同じ壇上に並ぶことは、以前ならとても考えられないことであり、協議会が力をつけてきた証でもあった。



都市景観大賞受賞式

(3) 都市景観大賞受賞祝賀会

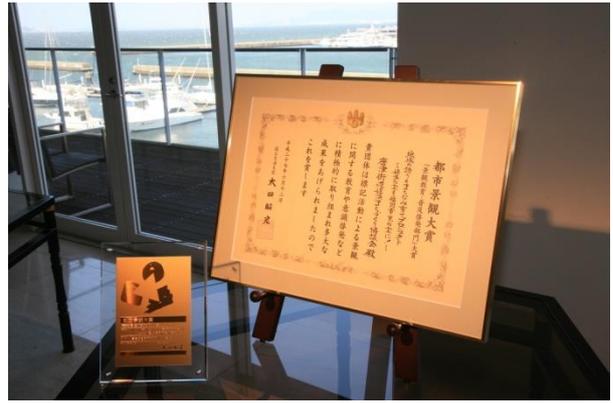
都市景観大賞受賞祝賀会については、4月の定例会で協議。会場については、筆者はマイヅル味噌のみそ蔵を第一候補に考えていたが、この時は既にみそ蔵の水道が使えないことが判明し、やむなく他の会場を探すことになった。そこで浮上したのが、ホテルマリノアリゾート福岡である。お祝いの会場としては文句なしであるが、逆に派手な印象を与えないかという危惧もあった。いろいろ議論はあったが、5月3日の事務局会議で決定し、具体的に役割分担を決めて準備を進めていくことになった。筆者も会場の段取り、参加料、演出、出席者選定、当日のスケジュールなど主体的に携わった。

6月28日の祝賀会当日は、普段から協議会の活動に協力いただいている100名を超える皆さまにご出席いただき、受賞を祝っていただいた。会場も博多湾に面した姪浜にふさわしい場所である。天気も筆者らを祝っているかのような青空であった。海と空の青色、海辺の風景こそが何よりも素晴らしい。祝賀会の冒頭に7分程度であったが、筆者が活動報告をさせていただいた。こういう晴れの場で活動をPRできることを嬉しく思った。来賓祝辞では、市役所の中園副市長からも祝辞をいただき、筆者のことを紹介していただいた。身に余るお言葉で大変恐縮した次第である。

祝宴では、いわつなおこ氏にアコーディオンのミニ演奏をしていただいた。彼女の演奏は、協議会としては「みそ蔵」「御園」に続き3度目であり、晴れの場にふさわしい明るい演奏である。みんなの笑顔が溢れる楽しいひとときであった。2時間という限られた時間の祝賀会であったが、「地域の総力を挙げて、姪浜ならではのまちづくりを推進していきましょう」ということで閉会。出席いただいた皆さま、本当にありがとうございました。



祝賀会



表彰状と表彰盾

(4) 夏の遊覧船イベント

今までは暑い時期のイベントは避けていたが、平成 27 年度は「遊覧船ゆーみんトマト」を活用した2つのイベントを企画・実施した。一つは8月8日の「遊覧船&夏休み親子まちなみ探検隊」で、海や港との関わりの深い姪浜の魅力を再発見するガイドツアーである。魚市場の競りやクルーザー等を見学した後、遊覧船に乗船し博多湾から福岡のまちなみを楽しもうというものであった。猛暑の中であったが、約 20 名の親子が参加。ヤップさんの双胴船にも乗船させていただき、参加者は大喜びの様子であった。



2つの遊覧船イベントの広報ちらし



遊覧船&夏休み親子まちなみ探検隊

もう一つは8月15日の「遊覧船から見る福岡のまちなみと花火大会」で、姪浜の恒例行事となったお盆の花火大会を博多湾から楽しもうというものである。普段見ることのできない幻想的な景観は、姪浜ならではのものである。多くの参加申込みをいただき、イベントの数日前に申込み

をお断りするほど大盛況であった。天気にも恵まれ、参加した皆さまに大変喜んでいただいた。アルコールやおつまみの手配などもあり朝から準備が大変であったが、参加者した皆さまの笑顔が苦勞を吹き飛ばしてくれた。こういう達成感こそが地域づくりの楽しさである。



遊覧船から見る福岡のまちなみと花火大会

これらの二つのイベントについては、今回の成果を受け毎年の行事として定例化していく予定であったが、平成 27 年 11 月末をもって遊覧船ゆーみんトマトの運航が休止された。「姪浜まち旅プロジェクト計画」の一つのプランが消滅することになり、残念に思う。

(5) 都市景観大賞受賞による視察研修受け入れ

6 月の都市景観大賞受賞の効果であろうか、国や県からの視察研修を受け入れることになった。一つは、9 月 5 日の「地域づくりネットワーク福岡県協議会福岡ブロック会議」である。この時の会場は法蔵院で、福岡都市圏の団体や自治体職員約 30 名が参加。1 時間の活動報告と意見交換の後、75 分間のまち歩きを行った。その後の懇親会を含め、県内各地で地域づくりに取り組んでいる方々と有意義な時間を過ごすことができた。



地域づくりネットワーク福岡県協議会福岡ブロック会議

また、11 月 18 日には九州地方整備局主催の「景観実務研修会」が姪浜で開催された。この時は、九州各県の自治体職員約 50 名に参加していただいた。活動報告の後にまち歩きを行い、その後、当協議会のアドバイザーでもある高山美佳氏（地域デザイナー）に講演していただいた。

姪浜をフィールドにこうした視察研修を開催していただくことをとても光榮に思うが、他の団

体の取り組みについて、むしろ筆者らが見習うことの方がまだまだ多いと思う。当協議会にとって、受賞はあくまで通過点であり、謙虚な姿勢でさらに活動を推進していく必要がある。



九州地方整備局「景観実務研修会」

(6) 姪浜ネクスト準備会

秋には多彩なイベントを企画していたが、その合間を縫って「姪浜ネクスト準備会」をスタートさせた。3月末に「姪浜ネクスト」を打ち出したが、準備会にこぎ着けるまでに半年近くかかっていた。協議会内部でも何をやるのかわかりにくいという議論はあったが、姪浜を取り巻く環境の変化に対応していくためには、当協議会だけでなく、地域内のいろいろな関係団体と連携して取り組んでいく必要がある。

9月～11月にかけて3回の準備会を行い、「TEAM 姪浜ネクストの位置付け」「具体的な実践活動」「運営体制」などについて意見交換を行い、イメージを共有し、平成28年3月の設立に向けて動き出すことになった。

準備会設立の背景・趣旨

- (1) 唐津街道姪浜まちづくり協議会の『都市景観大賞（景観教育・普及啓発部門）』の受賞を次のステージ（実践活動）につなげる。
- (2) 地域の歴史的・景観的シンボルであるマイヅル味噌の閉店
⇒「ポストみそ蔵」を見据えた新たな取り組みの必要性
- (3) 歴史的景観保護に向けた福岡市の取り組みとのタイアップ
- (4) 姪浜を取り巻く新たな課題や動向に対応した、地域としての取り組みの必要性



- 姪浜ならではの多彩な魅力資源（歴史、寺社、町家、路地、海、食など）を活かした具体的な実践活動
- 地域の総力を結集（各団体の垣根を超えた TEAM 姪浜としての取り組み）



第1回準備会

具体的な実践活動のイメージ

(1) 景観づくりの地域への普及及び実践活動

- ①「景観づくりの手引き」を活用した普及活動
- ②目に見える形での実践活動（地域でできることから実践）
⇒優先順位、効果、予算措置状況などを踏まえ対応
- ③福岡市における歴史的景観保護に向けた取り組み
⇒地域としても、行政と協働して具体的な景観づくりのルールを策定

(2) 姪浜まち旅プロジェクト推進活動

- ①着地型観光まち歩きマップの作成・印刷 ※平成 28 年 3 月末
- ②まち旅プロジェクト計画の策定（今までの事業の検証を含む） ※平成 28 年 3 月末
- ③具体的な実践活動の展開 ※平成 28 年 4 月～

(3) 中期的な取り組み

- ①名柄川人道橋の実現に向けたシナリオづくり
- ②次のステージを意識した夢のある提案

(7) 灯明コンサート IN 興徳寺

今回の灯明コンサートは、興徳寺で実施することとした（10月17日）。興徳寺では平成21年度、24年度に続き3回目の開催となるが、今回は興徳寺が境内を手入れされており、まだ途中段階ではあるがお祝いをしたという趣旨もあった。演奏者はお馴染みのチェロの于波（ウ・ハ）さん、ピアノの葉山由美さんである。みそ蔵コンサート、姪浜住吉神社での灯明コンサートに続き、3回目の演奏となる。今回も集客に苦労したが、会員の協力を得て何とか目標の170名に近い方々に参加していただいた。

さて、今回もステージの設置方法が課題であったが、閉店する際にマイヅル味噌さんからいただいた木製ベンチを組み合わせて使うことで対応した。その上にコンパネとカーペットを敷くことで立派なステージの出来上がりである。こういう時にも率先して対応してくれる器用な肥塚さんの存在が大きかった。ススキを飾っていただいたのも肥塚さんである。ちょっとした演出がコンサートを盛り上げる。寺社での灯明コンサートは通算5回目であり、設営や灯明の点火などの準備は順調に進んでいった。

日が落ちた午後6時45分頃から演奏をスタート。「プレリュード」「アヴェ・マリア」「リベル

タンゴ」「西北民風舞曲」「愛の讃歌」「ゴットファーザー」「シェルブールの雨傘」「ふるさと」などの曲を演奏していただいた。チェロ、ピアノの音色が 750 年の歴史のある古刹・興徳寺の境内に優しく響き渡った。400 個の灯明もより幻想的となる。会場の皆さまに姪浜ならではの空間と時間を楽しんでいただけることが、筆者にとっての最大の楽しみであり、まちづくり活動のやりがいであり達成感なのである。



興徳寺では3回目の灯明コンサート

(8) 最後のみそ蔵イベント

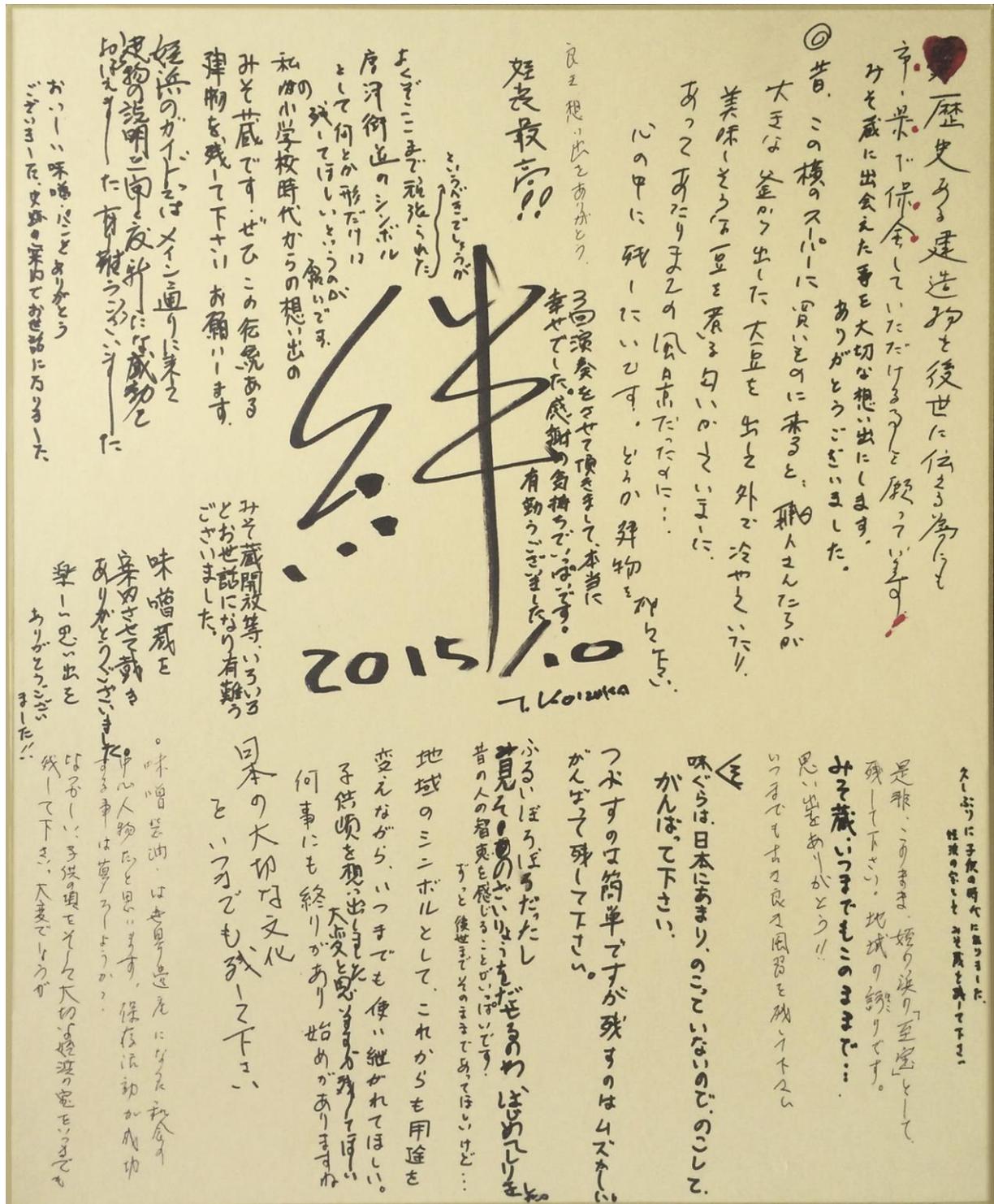
マイヅル味噌のみそ蔵については、当協議会が発足した平成 19 年 3 月以来、活動の中心であり、「みそ蔵コンサート」や「町家散歩展」「唐津街道展」「ディスカバー姪浜展」などの展示、「地域づくりや町並みをテーマにした講演会やシンポジウム」「子ども景観教室」「唐津街道サミット」「全国町並みゼミ福岡大会」「九州大学の都市・建築ワークショップ」などの会場としても使わせていただき、多くの方々に江戸時代から残る空間を体感し感動していただいた。

そして閉店が決まった平成 25 年の夏以降は、秋と春に特別公開を行い、建物の価値や後世に残していくことの意義、活用方法について、来場の皆さまと考えてきたが、いよいよ平成 27 年 10 月～11 月に「最後の特別公開」を行うことになったものである。みそ蔵に思い出のある方にもたくさんご来場いただいた。皆さまの感想の一部を紹介しよう。

最後のみそ蔵公開時での来場者の感想

- ・おじいさんの代までここで酒蔵をしていたが、飛行機の部品工場となった後、やめてしまった。やめた理由の詳細はわからないが、おじいさんは何も語ろうとしなかった。自分としては詳しく知りたかったが、嫁入りした身分なので聞けなかった。今回が最後のみそ蔵公開ということで、勇気を絞って来てみたら、いろいろ参考になることがあって感動した。パネルにもみそ蔵の歴史が正確かつ詳細に紹介されていて、うれしい。夢がかなったようで、良い思い出になった。(70 歳代女性。みそ蔵の前身の造り酒屋に嫁いだ方)
- ・マイヅル味噌の味噌をよく買いに来ていた。その当時は、みそ蔵の中まで入ることができなかったのが、今回が最後の公開ということで来てみた。店の奥がこんなに広いとは思っていなかった。その当時のことを思い出し、懐かしくて感動した。(60 歳代女性)
- ・第二次大戦中の飛行機の部品工場時代には、米軍は空襲の対象として狙っていたが外れ、近くにあった消防署が被害に遭った。戦火にも耐え、生き残った建物であり、歴史的生き証人でもある。小さい頃はここ付近でよく遊んだものだが、懐かしい。これからも用途を変えながら使い続けてほしい。(80 歳代男性)

また、来場者に「みそ蔵へのメッセージ」を色紙に書いていただいた。共通しているのは、「今までの感謝の気持ち」と「姪浜の宝であり、用途は変わっても何らかの形で活用してほしい」ということである。この色紙は、当協議会の活用が満了した平成27年12月に白水さんにお届けした。



みそ蔵へのメッセージ

(9) かわら版「みそ蔵特集」

筆者の在籍中の最後のかわら版であり、みそ蔵への想いを込めた特別企画である（11月25日発行）。みそ蔵については、既に売却の検討が進められていたが、地域の宝としてぜひ残してほしいという筆者の願いをみそ蔵のオーナーの白水さんに届けるため、最後のかわら版に託すことにしたものである。

「みそ蔵と私」というコーナーでは、協議会から4名の会員に書いてもらったが、筆者は事務局長通信の中で「みそ蔵の今後は未定とのことですが、‘ピンチをチャンスに’をモットーに常に前を見てチャレンジしていきましょう」と記している。常に前を向いて取り組む筆者の強い想いが込められている。

みそ蔵と私

川原 啓一
 本は小学生の頃、津南町を走り回り、みそ蔵まで通って、みそ蔵の味を覚えた。その時、みそ蔵の味は、母の味、父の味、自分の味、そして、このまちの味。みそ蔵は、私たちの生活の一部であり、私たちの誇りである。みそ蔵を守りたい、みそ蔵を愛したい。それが、私の願いである。

大田 博一
 文化庁の「国指定文化財等データベース」にも登録されている。みそ蔵は、江戸時代から続く、伝統的な味噌蔵である。その歴史は、古く、江戸時代から始まり、明治時代、大正時代、昭和時代と、時代とともに変遷してきた。みそ蔵は、私たちの生活の一部であり、私たちの誇りである。みそ蔵を守りたい、みそ蔵を愛したい。それが、私の願いである。

梅本 隆
 多岐にわたる味噌蔵の中で、みそ蔵は、独特の味と歴史を持つ。その味は、母の味、父の味、自分の味、そして、このまちの味。みそ蔵は、私たちの生活の一部であり、私たちの誇りである。みそ蔵を守りたい、みそ蔵を愛したい。それが、私の願いである。

メッセージ

みそ蔵の味は、母の味、父の味、自分の味、そして、このまちの味。みそ蔵は、私たちの生活の一部であり、私たちの誇りである。みそ蔵を守りたい、みそ蔵を愛したい。それが、私の願いである。

みそ蔵への協議会の活動

協議会では、みそ蔵の歴史や文化を伝えるための活動を行っています。その活動の一つとして、協議会主催の「みそ蔵まつり」が開催されています。このまつりでは、みそ蔵の歴史や文化を学ぶことができ、また、みそ蔵の味を楽しむことができます。協議会では、今後もみそ蔵の歴史や文化を伝えるための活動を行い、みそ蔵を守りたい、みそ蔵を愛したいという願いを実現していきます。

みそ蔵の歴史

みそ蔵の歴史は、古く、江戸時代から始まり、明治時代、大正時代、昭和時代と、時代とともに変遷してきました。みそ蔵は、私たちの生活の一部であり、私たちの誇りである。みそ蔵を守りたい、みそ蔵を愛したい。それが、私の願いである。

かわら版「みそ蔵特集」

(10) 新案内所改修

新案内所については、平成27年5月の総会時点では、当面は倉庫として使うことで承認を得、リフォーム費用として10万円を予算計上していた。しかし、7月の定例会及びその後の事務局会議で案内所として使う方向で決定し、順次改修を進めていくことになった。その時は、9月改修着手、11月中旬完成、11月下旬移転というスケジュールであった。



リフォーム前

履物店として使われていた時の荷物の搬出については春先から進めていたが、本格的に改修作業に取りかかったのは、9月下旬からである。主体的に改修作業を行ったのは、肥塚さんと小部家さんである。土日は毎週のように作業をしていただいた。筆者はまだみそ蔵でのイベントの対応や補助事業の申請、報告書作成などの多くの業務を抱えており、改修作業に関われるようになったのは10月下旬からであった。



リフォーム中

その後の作業も大半は肥塚さん、小部家さんが行い、筆者や阪本さんが時々手伝う程度であった。11月末にみそ蔵に置いてあった荷物をすべて移動。12月に入ると塗装作業に入り、他のメンバーも少しずつ参加してもらえるようになった。年内には予定していた工事はほぼ完了したが、一番ネックになっていたのは電気工事である。当面は、仮設ということで肥塚さんに暫定的に工事を行っていただき、12月末に何とか形を整えた。



リフォーム後

年が明けた平成 28 年 1 月 15 日に新案内所で記念すべき定例会を開催し、新案内所の運用についても意見交換を行った。その中で「当面は毎週土曜日の 10 時～15 時に案内所を開ける」ということで決定した。翌 16 日には地域への内覧会を行い約 30 名の方に来場いただいた。2 つの新聞社からも取材に来ていただいた。

その一方で、電気はまだ仮設の状態であり、電気工事の日程も見通しがつかない状況であった。1 月 17 日には肥塚さんが仮設の電気を撤去し、電気工事店の工事を待つことになるが、電気工事が終わったのは 3 月 10 日頃であった。こうして新案内所の改修は概ね完了したが、改修作業を通じていろいろな人間模様が見えてきたのであった。

また、1 月 16 日の内覧会以降、毎週土曜日の開所日には筆者と肥塚さんで対応することになった。筆者と肥塚さんは合間を見て、案内所の飾り付けや案内所裏の樹木の剪定や枝の搬出も行った。



開所後の様子



開所後も樹木の剪定や枝の搬出作業は続いた。

その後、筆者が在籍中に対外的な活動で案内所を活用したのは、3 月 4 日の久留米市京町地区コミュニティの視察、3 月 25 日の福岡市役所若手職員を招いての勉強会、3 月 26 日の姪浜ネクスト・まちづくり行動委員会発足式&祝賀会などである。地域のまちづくりのために安い家賃で貸していただいた貸主の気持ちに応えるためにも、しっかり活用していくことが必要である。



久留米市京町地区コミュニティの視察



福岡市役所若手職員を招いての勉強会

(11) 「ふるさとづくり大賞」受賞

年が明けた平成 28 年 1 月 5 日に「ふるさとづくり大賞」受賞という嬉しいニュースが飛び込んできた。これは、平成 27 年 7 月下旬に福岡市の担当部局から申請したらどうかという打診があり、2 日間で急ぎょ申請書類を作成し、西区役所からの推薦も受け、応募していたものである。

当日の受賞式には筆者が出席し、総務省の森屋宏大臣政務官から表彰状をいただいた。少し緊張したが、協議会の活動を牽引してきた筆者の晴れ舞台である。今までの苦労が評価された瞬間である。その後、受賞者全員で記念撮影。筆者は最前列の左から 2 番目の席であった。

その後、「地域の魅力を引き出す」をテーマにしたパネルディスカッションでは、「ヒト（人）」「モノ（物）」「コト（事）」や「相手への配慮」など、今後の姪浜のまちづくりのヒントになる内容もたくさん吸収し、収穫の多い受賞式となった。

この日の夜は、さいたま市にいる長男と大宮で合流し、美味しい料理を食べながら 2 人だけの小さな祝賀会を楽しんだ。「おめでとうございます。乾杯！」



平成27年度 ふるさとづくり大賞表彰式 平成28年1月23日 於 オークラ千葉ホテル

ふるさとづくり大賞表彰式

(12) 春のまち旅 2016

これは、筆者が企画した最後のイベントとなったまち歩きイベントである（3月26日）。今回は「白うさぎ伝説と桜の名所巡り&姪浜ブランド店巡り」である。コースは次のとおりである。

今回のまち歩きコース

姪浜駅南口集合・概要説明 (9:30~9:40)

⇒**うさぎと龍のモニュメント** (9:40~9:45) ⇒真根子神社経由 ⇒**興徳寺** (9:55~10:15)

⇒小戸町経由⇒**龍王館** (10:20~10:30) ⇒法蔵院 (10:35~10:40)

⇒順光寺 (10:45~10:50) ⇒**且過だるま堂** (10:55~11:05) ⇒光福寺横の路地

⇒**光福寺** (11:10~11:20) ⇒「**仲西商店**」で**削り節試食** (11:25~11:35)

※仲西商店試食中に案内所も見ていただく。ミニ休憩 (お茶と饅頭のサービス)

⇒「**魚嘉**」で**かまぼこ試食** (11:40~11:45) ⇒**住吉神社** (11:50~12:05)

⇒パンの店 窯蔵、みそ蔵 (12:10~12:20) ⇒東町経由⇒**万正寺** (12:30~12:40)

⇒**探題塚** (12:45~12:55) ⇒「**たつき**」で**昼食** (13:00~14:00) 解散

※東方面の桜の名所 (**観音寺**、**愛宕神社**) の紹介 (希望者には、よかとこ案内人さんが案内)

※凡例 : 白うさぎ伝説に関する場所

赤 字 : 桜の名所 **青 字** : 昼食、試食場所

当日は35名の方々に参加していただき、絶好の天気の中、姪浜ならではのコースを楽しんでいただいた。参加者は大変喜んでいただいていた。姪浜駅南口にある大きなモニュメントの由来を知っている方はほとんどいないのか、参加者がしきりにうなずいている様子が伝わってきた。昼食や試食の場所も大好評で、多くの方が削り節やかまぼこ、天ぷらを購入されていた。桜はまだ七分咲きといった感じであったが、姪浜の桜の名所をPRできたと思う。満開の頃に再度来ていただけたらと思う。



春のまち旅 2016

このように寺社やお店、まち歩きガイドの皆さまの協力を得ながら、一つひとつの事業を丁寧に展開していくことが、「姪浜まち旅プロジェクト計画」の推進につながり、ひいては姪浜地域の活性化につながっていくのである。

(13) 姪浜ネクスト発足式&祝賀会

春のまち旅 2016 の終了後、16時から「姪浜ネクスト・まちづくり行動委員会」を開催した。これは、平成 27 年 9 月～11 月の 3 回の準備会を踏まえて、いよいよ発足を迎えることになったものである。姪浜を取り巻く環境の変化に対応していくためには、地域内のいろいろな関係団体と連携して取り組んでいく必要がある。まずは賛同していただける団体・個人でスタートすることとした。第 1 回目は、筆者がパワーポイントを使って趣旨説明と予算の説明を行った後、意見交換。その後、当協議会のアドバイザーの高山美佳さんの記念講演を行った。

プログラムの最後は、交流会と祝賀会である。都市景観大賞の祝賀会と異なり、小さな祝賀会であるが、これが筆者の目指す本来の姿である。あくまで気持ちで祝い、もてなすことが大事なのである。祝賀会には次に示すような 5 つの趣旨があったが、どれ一つとっても容易なことではない。こういう多くの趣旨の祝賀会を 5 つ同時にできることは、素晴らしいことだと思う。

交流会・祝賀会の趣旨

- (1) TEAM 姪浜ネクスト発足記念
- (2) ふるさとづくり大賞（総務大臣賞）受賞記念
- (3) 新案内所完成記念
- (4) まちづくり協議会設立 10 年目突入記念（平成 19 年 3 月 26 日設立）
- (5) タイから姪浜に移住された吉本さん一家歓迎会



記念講演会



交流会・祝賀会

(14) win-win-win-win 方式による、まち歩きマップの改訂

当協議会では平成 20 年 3 月にまち歩きマップを発行して以来、工夫を重ねながら、これまで 3 万部以上配布してきた（当初のマップ：15,000 部、広域回遊マップ：6,000 部、現在のマップ：10,000 部）。特に現在のマップは、完成度も高く、地域の皆さまや来訪者にも大好評で、姪浜の魅力発信に大きな成果を上げてきた。

その財源については、当初は助成金（一部）を活用してきたが、その後は協議会の単独費用で

作成・発行していた。今後、継続して発行するためには財源確保が喫緊の課題となっていた。

そこで、今回の改訂に当たり筆者が提案したのは、まちづくり活動の継続性及び「来訪者」「店舗」「姪浜地域」「協議会」の4者の Win-Win-Win-Win の関係構築を目指して取り組んでいくことである。

まち歩きマップのメリット

- ◆来訪者……姪浜の魅力を享受できる。
- ◆店舗……来訪者や地域の方々にお店の情報を伝えることができる。
- ◆姪浜地域……姪浜の魅力を地域内外に発信できる。
- ◆当協議会……継続的なまちづくり活動に必要な財源を確保できる。

各店舗の協賛をお願いするに当たり、こうしたメリットだけでなく、『姪浜ネクスト～姪浜の宝を福岡市民の宝に！～』の実現に向けて、地域の総力を結集して、姪浜ならではの多彩な地域資源を活かしたまちづくりに邁進していきたいと伝えることとした。最終的には、26社から協賛金をいただいた。協賛いただいた各店舗の方々のご厚意に応えるためにも、地域に根ざした活動を展開していく必要がある。



Win-Win-Win-Win 方式により改訂したまち歩きマップ

(15)「姪浜まち旅プロジェクト計画」の策定

筆者が中心となり、1年間かけて取り組んできた「姪浜まち旅プロジェクト計画」の概要を紹介しよう。まずは、まち旅を進めていく背景は次のとおりである。

まち旅を進めていく背景

当協議会では、これまで姪浜の魅力の地域内外への発信をテーマに、「景観歴史発掘ガイドツアー」「みそ蔵コンサート」「まちなみ展示会」などの多彩なまちなみイベントを実施してきた。その結果、マスコミの取材回数の格段の増加や全国的な賞の受賞につながり、地域への来訪者が増えるなど地域の魅力発信や活性化に大きな成果を上げてきた。そして、その中心にはいつも地域の歴史的・景観的シンボルとなっているマイヅル味噌のみそ蔵（国の登録有形文化財）があった。

しかし、マイヅル味噌は平成25年末に閉店し、売却も検討されるなど、今後はイベント会場や地域交流の拠点などとしては活用しにくい状況であり、これに代わる地域のシンボルとなる新たな魅力スポットや、姪浜らしさにこだわった多彩な事業を発掘・発信していく必要がある。⇒『ポストみそ蔵の発掘』が喫緊の課題である。

みそ蔵に代わる地域のシンボルとなる新たな魅力スポットや 姪浜らしさにこだわった多彩な事業の発掘・発信

こうした課題を踏まえ、姪浜のまちづくりの次のステージ『姪浜ネクスト』の一環として、地域内の各団体と協働で、姪浜の多彩なよかところを再発掘・活用する「姪浜まち旅プロジェクト」に取り組み、姪浜の魅力を地域内外に発信し、身の丈にあった観光スタイル（着地型観光）の定着を目指していくものである。また、まち旅プロジェクトに取り組むことにより、コミュニティ交流や商店街活性化、地域に対する誇りや愛着の醸成につなげていくものである。



また、当協議会では平成27年度に、海や港・歴史との関わりの深い、姪浜らしさにこだわったモデル事業（夏休み親子まちなみ探検隊、遊覧船から見る福岡のまちなみと花火大会、寺社コンサート、寺社講話&紅葉巡りツアー、着物で唐津街道の寺社をそぞろ歩き、白うさぎ伝説と桜の名所巡り&姪浜ブランド店巡り）に取り組み、参加者の反応、これまでの実績などを踏まえ、今後の継続的实施に向けた可能性と課題を探ってきた。

こうしたモデル事業と並行して、「着地型観光まち歩きマップの作成・印刷」「まちなみ案内所の整備」といった情報発信ツールの整備を進め、姪浜の多彩な魅力資源を活用した「姪浜まち旅プロジェクト計画」を策定した。その概要は次のとおりである。

姪浜まち旅プロジェクト計画（概要）

1 活かすべき多彩な魅力資源

- (1) 寺社 (2) 町家町並み (3) 路地 (4) 海、港
(5) まちかど遺産 (6) 歴史、物語 (7) 食 (8) お薦めのお店

2 今後考えられるプログラム

- (1) 総合型まち歩き（今までの景観歴史発掘ガイドツアー）
○ショートコース（半日コース） ○ロングコース（一日コース）
○東コース（住吉神社～愛宕神社） ○西コース（住吉神社～小戸大神宮）
- (2) テーマ型まち歩き
○白うさぎ伝説を巡るツアー（姪浜駅南口モニュメント～興徳寺～龍王館～且過だるま堂）
○寺社巡りツアー（今まで案内していない寺社も含む寺社限定ツアー）
○歴史巡りツアー（古代～現代までを体験できるコース設定）
○海に特化したツアー（魚市場～造船工場～海豚の慰霊碑～漁協～双胴船～クルーザー）
○路地巡りツアー（住吉神社周辺の路地、光福寺周辺の路地、順光寺周辺の路地など）
○伝説・物語巡りツアー（白うさぎ伝説、武内宿禰伝説、探題塚伝説、元寇伝説）
- (3) 季節型イベント
○歴史散策と桜の名所巡りツアー（春） ○歴史散策と紅葉巡りツアー（秋）
○着物でそぞろ歩き（春、秋）
- (4) 講話
○寺社講話（住職や宮司の講話&境内散策）
- (5) コンサート
○寺社での灯明コンサート
○町家コンサート
○町家コンサート&姪浜ブランド料理
- (6) 体験型イベント
○お寺での座禅体験、点茶体験
○蒲鉾作り体験、削り節削り体験
- (7) まち歩き&お薦めのお店でランチ
○白うさぎ伝説を巡るコース&
姪浜ブランド店でランチ
○景観歴史発掘ガイドツアー&
姪浜ブランド店でランチ
- (8) ウォークラリー
○姪浜駅～唐津街道・魚町通り周辺～
マリノアシティ or 能古島
※JR九州や福岡市交通局との連携検討
- (9) 子どもたちを対象にしたイベント
○夏休み親子まちなみ探検隊

姪浜まち旅プロジェクト計画

【まち旅を進めていく背景】	1
【まち旅プロジェクトの実施に向けたモデル的試行】	3
【まち旅プロジェクト推進のための情報発信ツールの整備】	6
1 着地型観光まち歩きマップの作成・印刷	
2 まちの案内所の整備	
【姪浜まち旅プロジェクト計画】	7
1 活かすべき多彩な魅力資源	
2 今後考えられるプログラム	
3 今後の課題	
4 実施に向けて	



2016年3月
唐津街道姪浜まちづくり協議会

最後に、コラム 11（かわら版第 9 号に掲載した事務局長通信）とともに、多忙を極めた平成 27 年度を振り返りたい。

平成 27 年度の振り返り

平成 27 年度も地域のために様々な活動を展開してきた。今までで一番活動した時期ではないだろうか。職場も異動になり、「空家対策」や「耐震対策」という話題性のある仕事に取り組むことになった。公私ともども大変忙しい時期ではあったが、事務局長としての強い責任感と使命感をもって協議会の活動を牽引してきた。こうした精力的な活動は、国からの 2 つの賞の受賞という形で評価されることになった。

一方で、案内所の移転に伴う改修などで会員間の結束の乱れが生じたのも事実である。まちづくりへの志や協議会の運営方法などに対する考え方の違いもあった。

また、みそ蔵の存続について、筆者は福岡市と所有者、所有者の代理人の間に立ち、いろいろな協議・調整を行ってきた。みそ蔵の件については後で触れたい。



つかの間の休日（ふるさとづくり大賞受賞の翌日。谷中散策）

コラム 11 ピンチをチャンスに

今回の都市景観大賞の受賞により、3年連続して全国的な賞を受賞することになりました。当協議会がいろいろな賞をいただけるのは、協議会が頑張っているからではなく、その根底に姪浜という地域が素晴らしい魅力を持っているからです。地域の皆さま方も姪浜に住み、商い、まちづくり活動に関わることに誇りを持っていただきたいと思います。

我々が目指すのは、ただ一つ、地域内の各団体や関係者が協働・連携し、「姪浜の多彩な魅力資源を活かした、姪浜でしかできないまちづくり」を実現することです。みそ蔵の今後は未定とのことですが、「ピンチをチャンスに」をモットーに常に前を見てチャレンジしていきましょう。（平成 27 年 11 月 25 日発行の「かわら版第 9 号」より）

21 3rdステージの振り返り

(1) 主な活動メンバー

3rd ステージ (H26 年度～27 年度) の2年間は、協議会活動の最盛期であった。新たな会員を迎えることで今まで以上に精力的な活動を展開することができた。それは、伴さんであり、小部家さんであり、仲西商店 (削り節) の店主・東納さんである。定例会の中でも積極的に前向きな発言をしていただき、定例会の雰囲気も一変していった。今までの事業の継続に加え、案内所賃貸に当たっての交渉や改修、協議会の運営のあり方についての前向きな意見交換など、彼らの存在は大きかった。



みそ蔵公開イベント(平成 26 年 10 月)

(2) 活動資金

3rd ステージの2年間は、「登録文化財のみそ蔵を中心とした姪浜のまちなみの個性の再構築」及び「次のステージに向けた姪浜ネクストの推進」を活動目標に掲げた。みそ蔵を再生・活用したいという想いと、その一方でポストみそ蔵を見据えた事業展開という一見相反する課題に取り組むことになった。

協議会の会費だけではその費用を捻出できないため、各種助成金に申請した。平成 26 年度は、福岡県の「ふくおか地域貢献活動サポート事業補助金」及び「公益信託 大成建設自然・歴史環境基金」に採択された。この2つの助成金は今まで以上に筆者の想いを込めて応募したものである。

また、平成 27 年度は、まちづくり地球市民財団の「まちづくり人応援助成金」に採択された。これはポストみそ蔵を視点に入れた「姪浜まち旅プロジェクト計画」の推進をテーマにしたものである。

さらに、平成 27 年度の後半に区画整理促進機構の「街なか再生助成金」にも採択された。これは、「姪浜を次のステージへ～空き店舗を再生・拠点とした姪浜ネクスト推進事業～」をテーマとしたもので、補助対象期間が平成 28 年 2 月～12 月であり、ほぼ平成 28 年度の補助事業である。これは、明らかに実践的な活動を視野に入れたものであった。

全国区の助成金の採択はなかなか難しいが、筆者は果敢にチャレンジしてきた。前にも述べたが、筆者は協議会の活動及び地域の状況を踏まえ、それに対応した適切な助成金獲得を念頭に入れてきた。助成金を何に使うのではなく、数ある助成金の中から、協議会の活動状況に応じた助成金を選択し、チャレンジしていくことが大切であり、筆者は常にそれを意識していた。

【3rd ステージの助成金】

- ・ふくおか地域貢献活動サポート事業補助金（福岡県）H26 年度
- ・公益信託 大成建設自然・歴史環境基金 H26 年 12 月～27 年 11 月
- ・まちづくり人応援助成金（まちづくり地球市民財団）H27 年度
- ・街なか再生助成金（区画整理促進機構）H28 年 2 月～12 月

【3rd ステージの事業費の変遷】

単位：千円

	助成金	自己資金	総事業費
平成 26 年度	500	924	1,424
平成 27 年度	1,000※1	1,672	2,672
平成 28 年度	500※2		

※1 「公益信託 大成建設自然・歴史環境基金」……2 年度に跨るため H27 年度で会計処理

※2 「街なか再生助成金」……2 年度に跨るため H28 年度で会計処理

(3) 表彰

3rd ステージは、日本建築士連合会「まちづくり優秀賞」、「都市景観大賞 景観教育・普及啓発部門（国土交通大臣賞）」「ふるさとづくり大賞（総務大臣賞）」の3つの全国レベルの賞を受賞した。今までの活動の実績が大きく花開いたことになる。そして何よりも姪浜及び協議会の名前を全国に発信することができたことが嬉しい。



各種賞の受賞により姪浜及び協議会の名前を全国に発信

(4) 総括

このように 3rd ステージの2 年間は、「登録文化財のみそ蔵を中心とした姪浜のまちなみの個性の再構築」及び「次のステージに向けた姪浜ネクストの推進」を目標に様々な事業を展開してきた。協議会としても活動がピークになった時期であり、地域内外から大きな評価を受けた時期である。

筆者は、難しい仕事を抱えていた時期であったが、「姪浜を次のステージへ」を目標に、協議会の方向性や地域の状況を冷静に見極め、粘り強く推進してきた。

22 みそ蔵（登録有形文化財・マイヅル味噌）

ここで、今までの活動の中心であったマイヅル味噌のみそ蔵の件について触れておこう。

（1）みそ蔵とマイヅル味噌の歴史

みそ蔵とマイヅル味噌の歴史（概要）

（みそ蔵の歴史）

- ◇江戸時代後期（1830年以前）に造り酒屋の酒蔵として建造され、大正末期まで営業
- ◇第二次大戦中は飛行機の部品工場に転用
- ◇戦後は博多区呉服町から移転してきた「マイヅル味噌」のみそ蔵として再活用
- ◇約200年の役目を終え、建物を解かれる（平成28年12月）

（マイヅル味噌の歴史）

- ◇大正8年：呉服町にて創業
- ◇昭和20年：戦争で空襲に遭う。
- ◇昭和21年：姪浜に移転、飛行機部品工場のみそ蔵と店舗に改修して営業再開
- ◇平成17年：福岡県西方沖地震の被害を受ける。ボイラーや加圧釜の損傷により味噌の製造を大幅に縮小
- ◇平成18年：福岡市都市景観賞の受賞
- ◇平成19年：パンの店・窯蔵を新たに開店。国の登録有形文化財の登録を受ける。
- ◇平成22年：建物の一部を利用して「唐津街道姪浜まちづくり協議会」の事務所兼まちの案内所を開設
- ◇平成25年：味噌の製造場としての役割を終え、閉店（パンの店・窯蔵は営業中）
- ◇平成27年：協議会の案内所を旧魚町通りに移転
- ◇平成28年：パンの店・窯蔵 愛宕に移転・開店
酒蔵⇒飛行機の部品工場⇒みそ蔵と様々な形で活用されてきたが、役割を終え、建物を解かれる（12月）。

マイヅル味噌の建物は、文政13年（1830年）より前に造り酒屋の酒蔵として建てられた。お酒の銘柄は金盛（きんせい）である。姪浜でも唐津街道沿いは良い水が出たようで、3軒の造り酒屋があったようである。その後、第二次大戦中は飛行機の部品工場に転用された。軍機の部品を作っており、米軍もその情報をつかんでいたのか、この建物を空襲の標的にしていたことがみそ蔵特別公開時の来場者の話でわかった。幸いにも狙いが外れ、生き延びることになった。

その後、当時博多区の呉服町で味噌を造っていたマイヅル味噌（大正8年創業）が、戦争の被害に遭い、移転を余儀なくされたことから、姪浜に移転し、このみそ蔵で味噌造りを始めた。昭和21年のことである。国産の原料（大豆、米、裸麦）にこだわり、添加物は一切加えず、安全と安心、美味しさを追求してきた。また、麹も気温などに左右される性質に合わせて、かき混ぜる時期を職人の勘で見極めながら、1回の仕込みで使う分を40時間以上かけてゆっくり発酵させて作るなど、徹底した手作りの味噌が評判になった。しかし、平成17年の福岡県西方沖地震で被害を受け、ボイラーや加圧釜の損傷により味噌の製造を大幅に縮小した。



酒蔵時代の滑車



「金盛」の陶器の酒樽



昭和 32 年のマイヅル味噌の町並み(稚児行列)



味噌作り教室の様子

その一方、平成 19 年には白水さんの三男夫婦がパンの店・窯蔵を開店し、長男が作る熟成味噌を使ったみそメロンパンが大ヒットするなど、国産小麦と天然酵母にこだわった店として評判になった。また、平成 22 年にはみそ蔵の一角に当協議会の事務所兼まちの案内所を開設し、まち歩きマップやかかわら版を配布するなど姪浜の魅力スポットや協議会の活動を発信してきた。みそ蔵が久しぶりに賑わいを取り戻した時期でもあった。



パンの店・窯蔵



まちの案内所を開設した時の様子

しかし、諸事情により事業継続が困難になったことから、平成 25 年末に味噌の製造場としての

約1世紀の役割を終えて閉店し、協議会の案内所も閉鎖に近い状態となった。

(2) みそ蔵での多彩なイベント

みそ蔵での活動は今まで述べてきたことと重複するが、概要は次のとおりである。

当協議会が発足したのは平成19年3月である。以来、活動の中心はみそ蔵であった。みそ蔵での最初のイベントは、この建物が国の登録有形文化財に登録されたのを記念に20年3月に開催した「みそ蔵コンサート」である。味噌の香りが漂う空間の中で、古いみそ蔵に響き渡るチェロ、ピアノ、ヴァイオリンの演奏は参加した皆さまに感動を与えた。その後、協議会の定番イベントとして毎年2回程度開催し、アコーディオン、オカリナ、リュート、チェンバロ、津軽三味線、ボーカル、ギター、ドラムなど多彩な演奏が計15回にわたり繰り広げられた。

また、漫画家・長谷川法世さんの「町家散歩展」、版画家・二川秀臣さんの「唐津街道展」の他、姪浜の歴史や町並み・生活を紹介した「ディスカバー姪浜展」など、みそ蔵にふさわしい多彩な展示活動を行ってきた。味噌の香りのする空間の中で、来場者には昔のなつかしい雰囲気を感じ取っていただけたのではないかと思う。

この他、地域づくりや町並みをテーマにした講演会やシンポジウム、子ども景観教室、唐津街道サミット、全国町並みゼミ福岡大会、九州大学の都市・建築ワークショップなどの会場としても使われ、多くの方々に江戸時代から残る空間を体感し、感動していただいた。



みそ蔵コンサート



唐津街道版画展

そして閉店が決まった平成25年の夏以降は、秋と春に特別公開を行い、建物の価値や後世に残していくことの意義、活用方法について、来場者と考えてきた。

今まで戦火を免れ、様々な形で使われ、生き続けてきたみそ蔵である。いろいろな事情があるとはいえ、筆者らはいつまでも地域のシンボルであってほしいと願ってきた。これは、みそ蔵を訪れた方々だけでなく、多くの市民の願いだったと思う。

(3) みそ蔵に対する筆者の想い

マイヅル味噌のオーナーの白水さんから筆者らに閉店の話があったのは平成25年9月頃であった。「長男の体調が思わしくなく、これ以上味噌作りを続けることは難しい。平成25年末で閉店したい。」という非常にショッキングな連絡であった。筆者らが白水さんと今後の件について協議を開始したのは、この時からである。

筆者は早速、この年の秋のイベントを「唐津街道姪浜ウィーク」として位置付け、建物の価値や後世に残していくことの意義を市民の皆さまに伝えていきたいと考え、みそ蔵公開イベントを企画・実施した。



平成 25 年 11 月のみそ蔵公開イベント

白水さんは、「建物の半分を居住スペースとパン店とし、残りの半分を解体・売却することも検討」など何とか残す方向も考えていたが、ネックになるのは建物の修理費と固定資産税の問題であった。そして、12月には味噌の製造場としての約1世紀の役割を終え閉店した。在庫の味噌も完売した。

筆者は当然、姪浜のシンボルとして再生・活用したいという強い想いを持っていた。白水さんの気持ちも踏まえながら、地域や市民の関心をいかに高めていくかを考えた。そのためには、今まで以上にみそ蔵でのイベントを企画し、多くの方々にみそ蔵を見ていただくことが重要だと考え、まずは平成26年度の福岡県の「ふくおか地域貢献活動サポート事業補助金」に申請・採択された。9月～11月のみそ蔵公開イベントでは、5日間で約1,200人の市民に来場いただき、みそ蔵の魅力を知っていただいた。

姪の浜「マイヅルみそ」手作り1世紀の歴史に幕



白壁と瓦屋根が特徴のみそ蔵兼店舗

素材や手作りにこだわり、白壁の土蔵で造られることでも知られた福岡市西区姪の浜の「マイヅルみそ」が今月、約1世紀にわたる製造の歴史に幕を下ろす。製造・販売会社の4代目・白水勝博さん(48)が体調を崩し、事業継続が困難になった。みそ造りから身を引く白水さんは「みその魅力や先代から受け継がれた思いを伝えたい」と、これからは市民向けのみそ造り教室などで伝統の継承に力を入れる。

1919年(大正8年)、福岡市博多区で創業。戦災を受け、46年、現在の旧唐津街道沿いの場所に移った。江戸末期に建てられた白壁と瓦屋根が特徴の造り酒屋の土蔵を生かし、みそ蔵兼店舗に改装した。

マイヅルみそは、米や大豆などの原料は国産を使い、添加物は一切加えない。麴も気温などに左右される性質に合わせて、かき混ぜる時期を職人の勘で見極めながら、1回の仕込みで使う分を40時間以上かけてゆっくり発酵させる手法を守り続けた。機械で温度を調節しながら発酵させる現代主流の製法とは一線を画してきた。

先代で白水さんの父・勝利さんが2004年に他界後は、母・洋子さん(70)と店を守ってきたが、05年3月の福岡県西方沖地震で店の一部が壊れた。白水さんも体調を崩したため、従業員を解雇し、06年にいったん店を閉めた。

だが、地域の住民や全国ファンから存続を望む声が多数寄せられた。約2年後、体調が回復した白水さんは一部の製造工程を他の店に支援してもらいながら、製造を再開した。

「みそ造りは人づくり」。父のこの教えを実践しよう、と新たに造り方教室もスタート。親子の参加者も多く、みそが苦手だった子供も自ら造ったものを食べて好きになった。その様子を見て、父の教えが確かだったことを実感した。

しかし、白水さんは今年に入って再び体調が悪化した。5月を最後に製造を断念。在庫を売り切る年内をめどに店を閉めることにした。

自分には何ができるのか……。みその良さを伝えることにたどり着いた。年明けから体調を見ながら教室を開いたり、講演をしたりして伝統の味と文化を広げていく考えだ。

和食が、国連教育・科学・文化機関(ユネスコ)の無形遺産に登録された。「みそは和食の万能調味料。かつては各家庭で仕込み、それぞれの味があった。伝承される中で家族の心や絆も育んだ。和食が見直される中、しっかり伝える役目を果たしたい」と意気込んでいる。

(2013年12月8日 読売新聞)

みそ蔵閉店を伝える当時の新聞記事



みそ蔵特別公開(平成 26 年秋)

みそ蔵を残してほしいと思うのは、筆者だけでなく多くの市民の願いでもあるが、白水家のことなので、筆者らもあまり深入りすることはできなかった。しかし、筆者もここで諦めるわけにはいかなかった。白水さんからみそ蔵閉店の話がある前の平成 26 年 7 月に申請していた「大成建設自然・歴史環境基金助成事業」の採択も決まり、「みそ蔵の再生・継続的活用」をテーマとして平成 27 年 11 月まではイベント時のみそ蔵の活用について了承をいただいた。

こうして平成 27 年 11 月までは、みそ蔵公開やそれに合わせた展示会、コンサート、講演会などを開催し、市民の皆さまと建物の価値や後世に残していくことの意義、活用方法について考えてきた。



みそ蔵での最後のイベント(平成 27 年 11 月)

しかし、白水さんは平成 27 年 2 月に移転し、パンの店・窯蔵さんと協議会の案内所が残るだけとなった。協議会の案内所も 11 月末に退去。窯蔵さんは翌 28 年の夏に愛宕に移転し、新店舗での営業を始めた。この時にみそ蔵は空家となり、売買に向けた手続きが進められていったようだ。国の登録有形文化財のプレートも返却され、登録文化財からも抹消された。最終的には地場のデベロッパーに売却された。平成 28 年 12 月に約 200 年の役目を終え、建物も解かれた（解体されたという表現は似合わないだろう）。

筆者の職場で建設リサイクル法に基づく解体届を受理しており、筆者が担当課長の時にそれを受理するのも不思議な縁である。筆者は、解体が始まる 12 月 1 日の午前 8 時に最後の姿を写しにバスを途中下車してみそ蔵に向かった。解体業者が朝礼をしており、いよいよ解体が始まるのだ

など思った。今にも雨が降り出しそうな天気が寂しさをより助長させた。

その後、解体完了まで時々足を運んだ。解体を見届けるのも筆者の姪浜での活動のひとつまかも知れない。解体中のみそ蔵を見て、あるご老人が「何で壊すの。もったいない。寂しくなるなあ」とつぶやいていた言葉が印象的であった。最終的に解体が終わったのは、翌年の1月中旬であった。



解体開始当日(平成 28 年 12 月 1日)



解体中(平成 28 年 12 月 17 日)



解体前の町並み



解体後の町並み。寂しさは否めない。



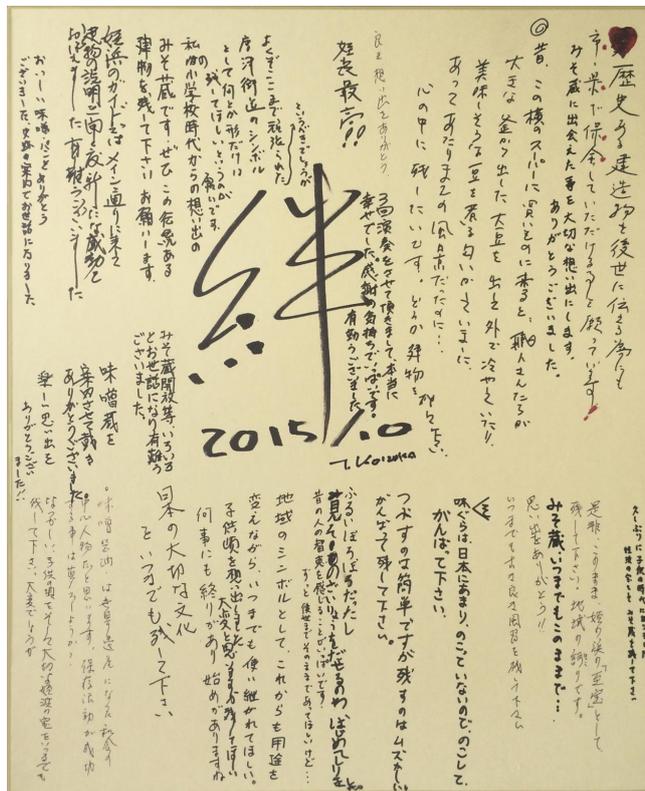
筆者らは、売却に傾いた白水さんの気持ちを考慮し、保存運動や署名活動といったことはしなかったが、かわら版で「みそ蔵特集号」を組んだり、みそ蔵公開時に来場者を書いていただいた色紙を白水さんに渡すなど、筆者としては白水さんに何とか残してほしいという気持ちを伝えて

きたつもりである。

また、みそ蔵の今後を心配した筆者の知り合いからも、みそ蔵活用の提案書を作成していただき、白水さんと直接話す機会も作った。福岡市からもみそ蔵保存に向けていくつか提案をいただいた。協議会としても、「みそ蔵活用計画書」を作成した。遅きに失した感は否めないが、事務局長としては最後まで粘り強く頑張ったつもりである。姪浜のシンボルが消えていくのは残念であるが、筆者としては白水さんに気を配りながら精一杯努力してきた。



かわら版「みそ蔵特集」(再掲)



来場者に書いていただいた色紙(再掲)

ところで、平成 25 年 8 月に「内蔵」で有名な秋田県横手市の増田地区に行く機会があり、姪浜やみそ蔵への想いを 4,500 字程度のエッセイにしたものがある。これは、平成 25 年 (2013 年) に「第 9 回 JTB 交流文化賞 交流文化体験賞 一般部門」に応募したものである。ちょうどマイヅル味噌の閉店が決まった頃であったと記憶している。白水さんにもお渡しした。さり気無く筆者の気持ちを伝えようとしたものである (参考資料 6)。

「参考資料 6 内陸部のまち・横手市増田と海辺のまち・福岡市姪浜

～日本海を隔てて 1100km 離れた地域の新たな交流の芽生え～

(2013 年 第 9 回 JTB 交流文化賞応募作品)

(4) なぜ残せなかったのか

「なぜ残せなかったのか」と聞かれば、まずは所有者の白水さんの意向によるところが大きいと答えるしかない。これだけの大きな建物を維持していく費用や固定資産税を負担していくことが難しいのは想像に難くない。筆者が白水さんの立場でも同じような選択をしたかも知れない。

ただ、筆者が不満に思うことは、協議会として何とか残す方法を考えられないのかという議論

がほとんど起きなかったことである。最初から諦めていた感は否めない。協議会として取り組んできた「みそ蔵公開イベント」などをどのように感じていたのだろうか。何とか残したいという強い気持ちを持っていただろうか。口で残したいとは、誰でも言えることである。協議会で不足していたのは、筆者を含め行動力のある会員がほとんどいなかったということだと思う。

これは協議会だけでなく、地域全体にも言えることである。保存運動をしたらどうかという地域の方々もいたが、自ら動こうとはしなかった。地域内にはいろいろな団体があるが、それぞれの枠組みの中でしか活動できていない。各団体を運営するだけでも大変なことはわかるが、地域全体の課題はそれぞれの団体の枠を超えて取り組む必要があるのではないだろうか。

終わったことをいつまでも振り返っても仕方ない。これからも姪浜のまちづくりは続いていくのである。今回のみそ蔵の消失を教訓として、地域全体として緩やかに連携・協働しながらまちづくりを進めていく必要がある。各団体でできることは限られており、姪浜全体の次のステージを見据えながら、各団体が枠を超えて、幅広い視点でまちづくりに取り組んでいく必要がある。今がその時期なのである。

(5) みそ蔵に関わる思い出

ここでは、みそ蔵に関わる筆者の思い出を少し紹介しよう。

○最初のみそ蔵コンサートの時に電源が落ちたが、演奏者は何もなかったかのように演奏していた。その後も時々あったが、手作りコンサートならではのことであろう。

○みそ蔵コンサートの余韻が忘れられない。参加者の満足そうな顔を見て、実施して良かったと思った。



活動を始めた頃のみそ蔵(平成 19 年)

○東川隆太郎さんの講演は最高に面白かった。笑いが止まらなかった。

○ヤップさんの話も良かった。世界 55 ヶ国の港の中から姪浜を選んでくれたそうだ。そういえば、この活動記録を書いている頃(平成 28 年 11 月 6 日)に愛宕神社でお会いした。お元気そうで何よりであった。

○展示の企画には苦労したが、みそ蔵という空間がカバーしてくれた。長谷川法世さんの町家散歩展の時は、飾りの台をたくさん作ったことを思い出す。

○「唐津街道サミット IN 姪浜宿」をみそ蔵で開催した時の料理は良かった。姪浜の食材を使った手料理は最高のおもてなしだった。

○まち歩きワークショップ後に九州大学の学生と食べたすき焼きも美味しかった。



唐津街道サミット IN 姪浜宿での料理



まち歩きワークショップ後、九大生とすき焼きパーティ

○味噌の香りも忘れられない。しかし、閉店後は少しずつ味噌の香りが薄れていった。

○都市景観大賞の受賞祝賀会は、本当はみそ蔵で実施したかった。

○いよいよ今日から解体か。やはり寂しい。姪浜住吉神社のイチョウが黄葉の見頃を迎えていた（平成 28 年 12 月 1 日）。

○かなり解体が進んだ。姪浜住吉神社では、お正月の準備が進められていた。もう少しで申年も終わり、みそ蔵も去る（平成 28 年 12 月 30 日）。



みそ蔵の解体が始まった頃の姪浜住吉神社



みそ蔵の解体が概ね終わった頃の姪浜住吉神社

○まだまだ思い出は尽きないが、10 年間ありがとう。そして 200 年間本当にお疲れ様でした。重荷を解いてください。みそ蔵は無くなっても、筆者の心の中にずっと生きています。

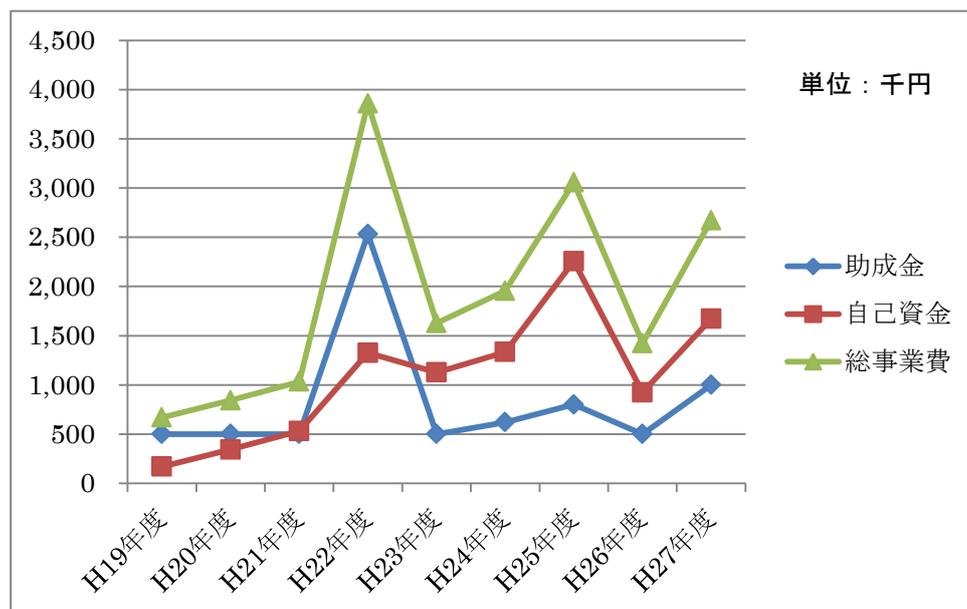
23 協議会卒業

(1) 卒業決意

平成 27 年度のところで読み取っていただけたと思うが、様々な活動を展開しながらも筆者は協議会活動の限界を感じていた。それを強く感じるようになったのは、平成 27 年 10 月の「灯明コンサート IN 興徳寺」の頃からである。協議会として事業を進めているのに、自ら主体的に関わる意識が薄いことへの会員への不満である。また、新案内所の改修に当たっての会員間の軋轢もあった。「リーダー不在」「無責任さ」などいろいろな人間模様が見えてきたのである。その後も協議会の運営方針などに対する会員との意見の相違もあり、ここで今までの活動を振り返ることも大事だと考え始めた。

また、筆者は事務局長という役柄、毎週末や帰宅後の多くの時間を協議会活動の企画立案やイベントに費やすなど、その関わり方は明らかにボランティアの域を超えていた。活動費も概ね右肩上がりであり、平均活動費は助成金を含め年間約 190 万円である。これだけの活動を地域の一団体が継続して行うのは大変であり、筆者の負担は年々増していき、心身ともに疲労はピークに達していたのである。10 年というのは一つの区切りであり、これまでの活動を振り返るとともに、環境を変えて、さらに自分を磨いていく絶好の機会と考えた。

【総事業費の変遷】



さらに、協議会卒業を決意しかけた平成 28 年 4 月中旬に、大学時代を過ごした熊本で震度 7 の大規模地震が 2 度発生し、大きな被害をもたらした。福岡市役所で建築物の耐震化の仕事も担当している筆者にとっては、人ごとではない。案の定、市民からの問い合わせも大幅に増えた。隣県で発生した地震はさすがに福岡市民に与える影響も大きいと実感した。

ちょうど熊本地震前の 3 月下旬～4 月上旬にかけて 2 回、熊本や阿蘇に出かけ、熊本城や阿蘇神社、阿蘇大橋、南阿蘇村などを見てきたばかりだった。訪問した先々の場所が大きな被害を受け、様変わりしてしまった。それはまさに『建築物の耐震化は重要な仕事である。大学時代の恩

返しをしよう。まちづくりの原点に戻ろう。』と筆者に伝えているようだった。姪浜という狭いフィールド、協議会という小さな組織を離れ、もっと大きな視点で世界を見てみようというメッセージだったのだろう。そして、筆者は4月22日の定例会で卒業の意思を伝えた。



熊本地震での被害(左:熊本城、右:阿蘇神社)

(2) 最後の取材

卒業を表明する前の3月に、福岡県県民情報広報課から「ハロー！ふくおか県」という番組の取材依頼を受けていた。当協議会の「歴史的な環境を活かした取り組み」を紹介したいということである。依頼を受けて、早速筆者の方で取材候補をリストアップし、「地域に埋もれている身近な歴史や物語（まちかど遺産）の掘り起こしが、地域への誇りや愛着を育む土台になる」といった点を取材してほしいと提案した。概ねこの提案に沿った形で連休明けの5月14日に撮影が行われた。

撮影当日は天候にも恵まれ、撮影も順調に進んでいった。筆者がインタビューを受ける場面が多かったが、筆者に質問してくれるのは、アメリカ出身で福岡在住歴3年のジュリアンさんである。なかなかの好青年である。

午前9時から始まった撮影は、姪浜魚市場からスタートした。魚町通りの注連縄、光福寺横の路地、興徳寺、旧小戸町の町家、龍王館などを経て、魚町通りに戻り仲西商店の削り節を取材。その後、協議会案内所、姪浜住吉神社、マイヅル味噌などを経て、最後は姪浜駅南口の白うさぎ伝説にまつわるモニュメントの撮影とインタビューであった。白うさぎ伝説に関する紙芝居の情報を伝えると、それを借りることはできないかと担当のディレクターから依頼があり、紙芝居を作成したよかと案内人の波多野さんに連絡し使用させていただくことになった。



「ハロー！ふくおか県」の一場面

そして筆者の法被姿もこれが最後となった。「卒業は表明していても、事務局長として最後まで責任を持って対応する」ことが、協議会を支えてきた事務局長の使命である。たまたま案内所に来ていた肥塚さんが、こうした筆者の姿を見て「地域のために最後まで精力的に活動する姿に深い感銘を受けました」というメールを送ってくれた。

この日に撮影されたものは、6月9日の夜に放送された。筆者の知り合いから「最後まで事務局長の務めを果たしましたね。10年間、本当にお疲れ様でした。」というねぎらいの言葉をいただいた。

(3) 協議会卒業

卒業を表明していても、まだまだ事務局長としての業務が残っていた。それは、5月31日の平成28年度総会の資料のうち、平成27年度の事業報告書と収支決算書の作成である。そして、補助事業の「まちづくり人応援助成金」の完了報告書作成である。かなりボリュームのある作業であるが、筆者でなければできない業務である。熊本地震の影響で本来の仕事も忙しい中、平日の夜と土日を作業に充てて何とか間に合わせた。

総会当日、筆者は第一号議案の「平成27年度事業報告、収支決算承認並びに監査報告の件」について説明した。その中で、「当初事業計画書は、H27年3月・4月の定例会で協議後、総会に提出して承認を得たものである」「総会で承認を得た事項を着実に遂行することが、事務局長の重要な業務の一つである」と丁寧に説明した。「新案内所の改修費用はどのくらいかかったのか?」「姪浜まち旅プロジェクト計画の内容はどのようなものか?」といった質問があると思っていたが、出席した会員からは何一つ意見も質問もなかった。こうして第一号議案は難無く承認された。

そして、次の議案（平成28年度事業計画・収支計画、役員改選など）に入る前に、筆者と肥塚さんは卒業の挨拶をして、思い出の多い案内所を後にした。こうして平成19年3月26日から始まった「唐津街道姪浜まちづくり協議会の事務局長」としての役割を終えたことになる。

また、今までの活動に当たり、お世話になった方々へは感謝の気持ちを込めて「10年というのは一つの節目であり、姪浜という狭いフィールド、協議会という小さな組織を離れ、もう一度原点にかえって、地域づくりや景観づくりを考えてみたいと思います。自分をステップアップする絶好の機会だと考えています。」と卒業の報告をさせていただいた。



思い出の多い新案内所での活動風景(平成28年3月)

(4) 協議会へのお土産

予期せぬ卒業であったが、それでも筆者は最低限の活動企画と助成金、協議会活動の PR の機会を残していた。

まず、平成 28 年 2 月～12 月までを補助対象とした（公財）区画整理促進機構の「街なか再生助成金」の活用である。これは 2 月に開始したばかりであり、本格的な活動は 4 月以降を予定していた。1 月に申請した時の背景（課題）、事業目標、事業内容は次のとおりであり、新案内所を拠点とした地域に根ざした活動を標榜していたものである。

街なか再生助成金で予定していた事業

【事業背景（課題）】

- 当協議会は、平成 22 年 2 月に国の登録有形文化財のマイヅル味噌の一角にまちの案内所を設置し、まち歩きマップやかわら版を配布するなど姪浜の魅力スポットや協議会の活動を発信してきた。しかし、平成 25 年 12 月のマイヅル味噌の閉店に伴い、その後は閉鎖状態が続いており、27 年 12 月の案内所の移転を契機として新たな活動拠点として運営していく必要がある。
- 「平成 27 年度都市景観大賞（景観教育・普及啓発部門）受賞を契機とした次のステージへの展開」「歴史的環境地区の景観づくりに対する福岡市の取り組みとの連携（届出対象の拡大）」「空き店舗の増加」などの当該地域を取り巻く環境の変化に対応していく必要がある。

【事業目標】

- 平成 27 年 12 月に空き店舗を活用して開設した新案内所を、地域の情報発信、コミュニティの場となるよう運営するとともに、空き店舗活用のモデルとして PR し、地域内への空き店舗活用の波及を目指していく。また、ここを拠点として姪浜ならではの多彩な魅力資源を活かしたまちづくり活動を実践していく。
- 地域内の関係団体などと協働・連携して「姪浜ネクスト・まちづくり行動委員会」を立ち上げ、具体的なまちづくり実践計画書を策定し、モデル事業を実施していく。

【事業内容】

- 空き店舗を再生・活用したまちの案内所の運営
 - ・空き店舗活用のモデル事業として地域への PR（空き店舗活用の地域内への波及）
 - ・情報発信、コミュニティの場としての活用
 - ・案内所の顔となる暖簾作成・設置
- 姪浜ネクスト・まちづくり行動委員会の運営
 - ・委員会（3回）
 - ・ワーキング（5回）
 - ・専門家による講演会（2回）
 - ・先進都市視察（1回、15名、福岡近郊）
 - ・まちづくり実践計画書策定（20ページ程度）
 - ・まちづくり実践計画書を踏まえたモデル事業の実施
（例：案内所周辺の店舗への暖簾設置によるまちなみ修景。4ヶ所）
- 地域への活動報告
 - ・季刊ニュースレターの発行（A4 カラー両面、3回、2,500部／回）

筆者が卒業してからどのような形で運用されたかわからないが、内容はともかく一通り終了したと川岡会長から連絡があった。それについては感謝したい。ただ、筆者が目指していたのは、「新案内所を地域の情報発信、コミュニティの場となるよう運営するとともに、空き店舗活用のモデルとして PR し、地域内への空き店舗活用の波及を目指していく」ことであり、地域に根ざした協議会としてどのように活動していくかが、今後の課題であると思う。

2つ目は、「ふるさとづくり大賞」の受賞団体の活動を紹介する映像の制作である。これについては、協議会の活動記録を15分程度のDVDとして制作するものであり、広報用としても活用できるものである。そのため、活動の様々な場면을撮影するものであるが、筆者が委託先の地域活性化センターには、「地域に埋もれている身近な魅力資源を掘り起こし、それを活用した継続的で多彩で地道な活動を取材してほしい」と伝えていた。概ね、これに沿った形で撮影が進んだものと思われる。

また、ふるさとづくり大賞の受賞により、遠く青森県から県内40市町村の企画担当部署の若手職員約50名が、平成28年8月25日に協議会の取り組みを視察に来られたたり、日本建築学会の九州大会に合わせて横浜から数名の学生が視察に来られた。その他、筆者が協議会卒業後も、いくつかの団体から視察の問い合わせが筆者にあった。このように都市景観大賞やふるさとづくり大賞の受賞は、全国的な情報発信につながっているのである。



協議会活動のPRの機会を増幅させた「ふるさとづくり大賞」の受賞

(5) まちづくりは志

最後になるが、地域に根ざしたまちづくり協議会に向けて、筆者からメッセージを贈りたい。これは、筆者の姪浜での10年間の活動に加え、都市景観室時代に直接関わった御供所や、先進都市調査で訪問してきた各地域の取り組みなどを踏まえたメッセージである。一つひとつの言葉の持つ意味をしっかりと考えていただき、高い志を持って姪浜のまちづくり課題に取り組んでいただきたい(コラム12)。

この中で筆者が特に伝えたいことは、「いろいろな地域課題に取り組むことを楽しみながら、粘り強く活動を進めていただきたい。達成感こそがまちづくりの楽しさである。そして、それが次第に地域に波及・浸透し、共感を得ていくのである。」ということである。

コラム 12 地域に根ざしたまちづくり協議会に向けて

■組織の使命（ミッション）

地域の課題に真摯に取り組むことが、まちづくり協議会の使命であり、楽しさである。

■リーダー（役員）

まちづくり協議会のリーダーに求められるのは、「地域課題の的確な把握」と「総合的な判断力」である。

■会員（ヒト）

まちづくり協議会の会員に求められるのは、「高い志」「前向き思考」「包容力」「相手への配慮」である。

■地域資源（モノ）

今あるモノを活かすことが大事。新しいモノは要らない。

■ストーリー（コト、こだわり）

地域ブランドを構築するのは、「地域らしさ」「情報発信」「地道・粘り」「地域の共感」である。

■ドーパミンの出るまちづくり

協議会活動を活性化するのは、「チャレンジ」と「自省」である。

■協議会を超えた地域全体としての取り組み

地域は運命共同体。これからは各団体の枠を超えて地域課題に取り組む視点が重要である。



多くの関係者の協力を得て行われる「まちなみフォーラム福岡」の活動。大川、内野宿、津屋崎のフォーラムに参加したが、受け入れ先となる地域の各団体がしっかり連携して取り組んでいた。姪浜でも参考にさせていただきたい。

24 活動のポイントと継続的で多彩なまちづくり活動の成果

(1) 活動のポイント（事務局長として工夫したこと）

筆者が唐津街道姪浜まちづくり協議会の事務局長として精力的に活動した期間は、平成19年3月～28年5月である。その期間は実に9年3ヶ月に及ぶ。協議会設立のための準備期間を含めれば、ちょうど10年である。10年にわたる活動の中で、事務局長として工夫したことは、次の点である。

①各段階の地域課題に対応した多彩なまちづくり活動を長期的展望に立って、段階的・継続的に進めてきた。

- ・ 1st ステージ～3rd ステージの課題に対応した目標設定及び具体的な活動の展開

②全国どこへ行っても同じような街並みの形成が進む中で、地域に埋もれている身近な魅力資源を掘り起こすことが、地域への誇りや愛着を育み、姪浜ならではの地域特性を活かしたまちづくり・景観づくりの土台になると考え、各種事業を推進してきた。

- ・ 地域の魅力資源調査、まち歩きワークショップ、景観歴史発掘ガイドツアー
- ・ 伝統的な町家の評価、姪浜町家の認定
- ・ 身近なまちかど遺産（姪浜まちかど遺産）の評価

**④地域に埋もれている身近な歴史や物語（まちかど遺産）の掘り起こし
⇒地域への誇りや愛着を育む土台**



例：興徳寺に伝わる「うさぎと龍の物語」



龍王館



姪浜駅前にあるモニュメント
「Dragon King Rabbits」

③ヨソモン（地域外の間人）、ワカモン（若者）の視点を活用し、長く住んでいると見失いがちな地域の魅力を、外部や若者の新鮮な視点で伝えるよう努めてきた。

- ・ 地域外の間人や若者の視点を活用した地域の魅力資源調査
- ・ 九州大学との継続的な連携・協力（ワークショップ、景観づくり委員会への参加など）



ヨソモン(地域外の間人)、ワカモン(若者)の視点が重要

④地域のまちづくり・景観づくりの方向性を共有し、より実践的なものにしていくため、まちづくり計画や景観づくり計画策定における住民参加、地域との対話や双方向性に努めてきた。

- ・住民参加のワークショップなどによる地域協働のまちづくりや景観づくり計画の策定
- ・地域内の関係団体、九州大学、行政などで構成する「景観づくり委員会」による景観づくり計画の策定
- ・活動成果のかわら版での公表、地域への発表会



ワークショップなどによる地域との対話

⑤各事業の実施に当たっては、地域内の関係団体、住民、商店、寺社などの協力を得ながら、お互いに連携して進めていくよう努めてきた。また、九州大学、行政などとの協働関係の構築にも努めてきた。

- ・各種町並みイベントへの協力、景観づくり委員会への参加
- ・九州大学主催の「都市・建築ワークショップ」への協力
- ・福岡市都市景観条例に基づく「景観づくり地域団体」の認定



大学、NPO、行政などとの連携

⑥姪浜らしさにこだわった多彩な町並みイベントの実施により、多くの参加者に地域の魅力を伝えることに努めてきた。

- ・コンサート、講演会、展示会など：公民館や市民センターを使用せず、手間暇と費用をかけても姪浜の魅力を伝える場所で実施
- ・景観歴史発掘ガイドツアー：歴史、物語、町並み（寺社、町家、路地、海）など、姪浜ならではの魅力を伝えるコースを設定



場所へのこだわりも重要

⑦各事業の実施に当たっては、マスコミに取り上げてもらえるような話題性のある活動内容に努め、姪浜の魅力や協議会の活動内容を地域内外に発信してきた。

- ・町並みイベント（景観歴史発掘ガイドツアー、まちなみ展示会、みそ蔵コンサート、灯明コンサートなど）
- ・印刷物（まち歩きマップ、かわら版など）
- ・具体的実践活動（町家再生の実践、旧町名表示板の設置、姪浜ブランド認定事業、姪浜町家認定事業、子ども落書き消し隊など）



マスコミに取り上げてもらえるような話題性のある活動内容に努めてきた。

⑧協議会に参加している地域内外の人々の多様なノウハウ・スキルをフルに活用して、多彩な活動を展開してきた。

- ・まち歩きマップ、かわら版、景観づくりの手引きなど：原稿作成、写真撮影、デザイン、印刷まで会員の手作り
- ・まちづくり計画、景観づくり計画：まちづくりや都市景観、建築を専門とする会員が中心となって作成（ワークショップ、景観づくり委員会も運営）
- ・旧町名表示板、姪浜ブランド認定プレート、姪浜町家認定プレート：工作や書道の得意な会員の手作り
- ・市役所やまちづくり活動で培ってきた人的ネットワークの活用



会員の多様なノウハウ・スキルをフルに活用した事例

⑨その他

- ・それぞれの時期の課題や目標に沿った活動を推進するため、難関の全国区の助成金に積極的にチャレンジ・採択されることで、協議会活動を加速させてきた。
- ・各種表彰にも果敢にチャレンジ・受賞することで、姪浜及び協議会の名前を全国に発信してきた。



様々な賞の受賞により、姪浜及び協議会の名前を全国に発信

(2) 継続的で多彩なまちづくり活動の成果

①姪浜ならではの景観資源を活かした多彩な景観教育・普及活動

- ⇒ マスコミの取材回数の格段の増加
- ⇒ 来訪者の増加
- ⇒ 地域の魅力の再認識と地域内外への発信
- ⇒ 地域住民の地域への誇りや愛着の創出



マスコミの取材回数の増加 ⇒ 地域住民の地域への誇りや愛着の創出

②ヨソモンの刺激

- ⇒ 地元会員の増加
- ⇒ 活動の活性化

⇒ 大学、行政、NPO、他地域との協働・連携

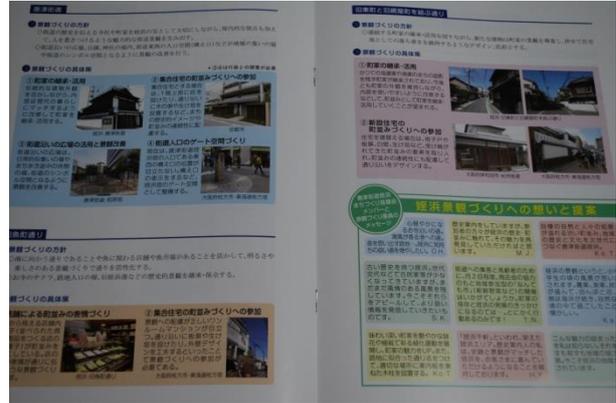
⇒ 活動の広がり

③住民参加のワークショップなどにより、地域のまちづくり・町並みづくりの総合計画となる『元気！姪浜計画』『景観づくり計画』を策定

⇒ 地域の歴史・文化・暮らしを踏まえたまちづくりや景観づくりの方向性の共有



元気！姪浜計画



景観づくり計画

④まちづくり実践活動の展開

⇒ まちづくりの効果を具体的に目に見える形で地域に示す（まちづくりの効果の具現化）。



旧町名表示板



姪浜町家認定プレート



案内所の開設

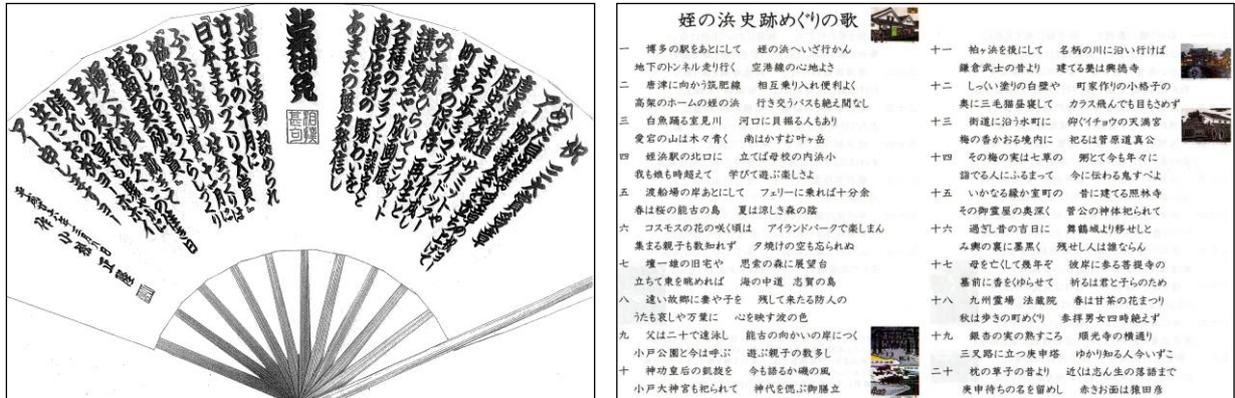


子ども落書き消し隊

⑤自主的に景観形成に配慮した建築物などの増加

地域住民から「相撲甚句」や「史跡めぐりの歌」の贈り物

⇒ 地域資源の保全・活用に向けた意識醸成と双方向のまちづくりへの展開



地域の方に作っていただいた相撲甚句(左)と姪の浜史跡めぐりの歌(右)

⑥各種賞の受賞

⇒ 全国的な評価及び姪浜の魅力の全国へのPR、地域への情報発信



⑦姪浜での活動成果の発信

⇒ 身近な景観資源を活かしたまちづくりの他地域への波及効果 (今後期待)

- ・まちづくりの熟度に応じた多彩な活動の展開
- ・「こだわり」「おもてなし」「多彩」「粘り強さ」「地道」

「参考資料3 姪浜プロジェクト48 (MPT48)」

25 新たな課題や動向を踏まえた、今後の姪浜のまちづくりの展開方策の提案

(1) 新たな課題や動向

この10年間の活動で多くの成果を上げたが、その一方で、新たな課題や動向もある。以下は、筆者が唐津街道姪浜まちづくり協議会に在籍中に示したものである。

姪浜を取り巻く新たな課題や動向

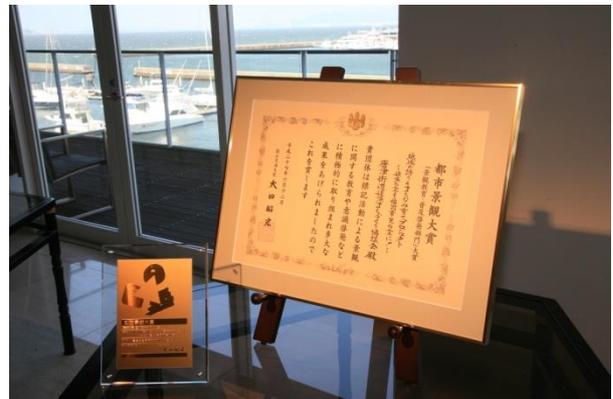
- ①「都市景観大賞」や「ふるさとづくり大賞」の受賞を次のステージにつなげる。
- ②姪浜の歴史的・景観的シンボルであるマイヅル味噌の消失
- ③歴史的景観保護に向けた福岡市の取り組み（歴史資源周辺区域での届出対象の拡大）との連携
- ④空き店舗の増加によるシャッター商店街化
空家、駐車場、ワンルームアパートの増加による町並みの個性の喪失
- ⑤新たな課題や動向、そして次のステージに向けた地域内の各団体の連携

(2) 新たな課題や動向への対応

①「都市景観大賞」や「ふるさとづくり大賞」の受賞を次のステージにつなげる。

全国的な賞の受賞は次のステージのスタートである。これは、姪浜という素晴らしい地域があつての受賞であり、これを励みとして姪浜地域全体として、姪浜ならではのまちづくりに向けて、各団体の垣根を超えて取り組んでいく必要がある。

平成27年6月の都市景観大賞受賞祝賀会での「地域の総力を挙げて、姪浜ならではのまちづくりを推進していきましょう」という気持ちを忘れずに、まちづくり活動に励んでいく必要がある。



都市景観大賞受賞

②姪浜の歴史的・景観的シンボルであるマイヅル味噌の消失

姪浜の歴史的・景観的シンボルであるマイヅル味噌の消失を現実と受け止め、次のステージに向けて、地域内の各団体と協働で姪浜の多彩なよかところを再発掘・活用する「姪浜まち旅プロジェクト計画」に取り組み、姪浜の魅力を地域内外に発信し、身の丈にあった観光スタイル（着地型観光）の定着を目指していく必要がある。

また、まち旅プロジェクト計画に取り組むことにより、コミュニティ交流や商店街活性化、

地域に対する誇りや愛着の醸成につなげていく必要がある。



地域の歴史的・景観的シンボルであるマイヅル味噌の消失

③歴史的景観保護に向けた福岡市の取り組み（歴史資源周辺区域での届出対象の拡大）との連携

福岡市では歴史的景観を保護していくため、「御供所・冷泉地区」「舞鶴・大濠公園地区」など市内の5つの区域を歴史的資源周辺区域として指定し、平成28年10月からこれらの区域で景観づくりの取り組みを強化（届出対象建築物の拡大）している。そのうちの1つが唐津街道姪浜地区であり、筆者らのこれまでの取り組みの大きな成果である。

行政側の届出対象建築物の拡大だけでなく、これを機会に地域としても景観づくりの取り組みを進めていく必要がある。筆者が協議会在籍時に積極的に取り組んできた「姪浜景観づくり計画（景観づくりの手引き）」「姪浜景観まちづくり宣言」を地域にいかにか普及・浸透させていくのか、また行政と協働して具体的な景観づくりのルールをどのように策定していくのか、地域としてしっかり取り組んでいかないと、本当に個性のない普通のまちになってしまうであろう。姪浜の地域力が今こそ試されているのである。



福岡市内の5つの歴史的資源周辺区域
(H27.9.1西日本新聞)



景観形成への配慮が求められる高層マンション群

④空き店舗の増加によるシャッター商店街化

空家、駐車場、ワンルームアパートの増加による町並みの個性の喪失

空き店舗の増加によるシャッター商店街化は、姪浜に限らず全国的な課題である。空家も

少しずつ増えてきており、管理不全空家になる前に活用するなどの検討が望まれる。また、最近では駐車場やアパートの進出も著しく、町並みの連続性が損なわれ、個性のない町並みになりつつある。こうした課題に対して、まちづくり協議会が中心となり自治協議会、商店会などと連携して、地域として危機感を持って取り組んでいく必要があると思う。



空き店舗の増加



狭い路地沿いにもワンルームアパートの進出

⑤新たな課題や動向、そして次のステージに向けた地域内の各団体の連携

上記の①～④の新たな課題や動向にどう対処していったらいいのだろうか。まずは、地域内のそれぞれの団体の実情をしっかりと認識する必要があると思う。キーワードを少し挙げてみよう。

- 人（企画できる人、汗をかく人、時間を提供する人、後継者）はいますか？
- 活動資金はありますか？
- 後継者はいますか？
- 姪浜の現状に対する問題意識や危機感を持っていますか？
- 姪浜の将来像を描いていますか？
- 活動目標をしっかりと持っていますか？
- いろいろな組織との連携について考えたことはありますか？

筆者の挙げたキーワードについて、危機感を持って取り組んでいる団体は、どのくらいあるだろうか。各団体はそれぞれの目的を持って設立されたものであり、その枠の中だけの活動で精一杯であり、枠を超える活動はできていないと思う。しかし、『地域を元気にしたい』ということは共通目標として持っているはずであり、今後は各団体の垣根を超えて、ゆるやかに連携して地域の課題に取り組んでいく視点が大変重要になると思う。

(3) 具体的な提案

①「元気！姪浜計画」の着実な推進

筆者がまちづくり協議会在籍時に精力的に取り組んだ内容については、平成23年2月に作成した「元気！姪浜計画」に基づくものもあるし、既に先行していた事業をこの計画に取り込んだものもある。現在の地域の状況を踏まえ、「元気！姪浜計画」を見直す必要があるが、基本的にはこの計画に基づいて具体的な実践計画を立て、事業を進めていくことが望ましいと思う。

『元気!姪浜計画』（平成 23 年 2 月策定）における実現化方策の実施状況

『元気!姪浜計画』の基本方針と実現化方策		実現化方策の実施状況
基本方針（１）広域回遊ネットワークづくり		
実現化方策①	広域回遊ネットワークの設定	・ H22 年度に設定完了
②	「まち歩きマップ」の制作・配布	・ H22 年度に改訂版制作 ・ H25 年度に現在のまちマップ制作
③	広域回遊ネットワーク普及のための実践活動 ・ 回遊ネットワークを取り入れたまち歩きの実施 ・ 姪浜の個性である「海や港とまちのつながり」をアピールするまち歩きの実施	・ H23 年度から広域コースでのまち歩きも実施（小戸公園までを含むエリア） ・ H26 年度に「遊覧船で巡る福岡の歴史とまちなみ」を実施
④	姪浜と能古島や小呂島とのつながりの活用	・ 未実施
⑤	案内板や標識などの改善計画の提案・推進	・ H23 年度から現況調査 ⇒ 景観づくり計画に反映
⑥	名柄川人道橋整備計画の推進	・ H22 年度に計画作成 ・ 今後、行政に働きかけ
⑦	レンタサイクルの導入の検討	・ 未実施
基本方針（２）姪浜のまちの個性の再構築（住まいづくり・町並み景観づくり）		
実現化方策①	町家保存・再生の推進	・ H21 年度からアドバイス開始 ・ H24 年度から「姪浜町家」認定事業開始
②	良好な住まいや町並みの再発見・再評価	・ H22 年度から実施
③	町並み景観計画の提案・推進	・ H23 年度に景観づくり委員会を組織し、段階的に「景観づくり計画」策定 ・ H26 年度に「景観づくりの手引き」作成
基本方針（３）商店街の賑わいづくり		
実現化方策①	若年層やファミリー層などへの「まち歩きマップ」の配布	・ H23 年度から実施
②	若い世代と地域住民との交流の場づくり	・ H22 年度から九大学生を対象に実施
③	商店街での小さな休憩コーナーづくり	・ H23 年度から実施
④	近隣農家や漁協などと連携した「市」の開催	・ 未実施
⑤	空き店舗を活用したチャレンジショップの導入	・ 未実施
基本方針（４）姪浜ブランドづくり		
実現化方策①	今ある名産品や優良な店舗の「姪浜ブランド」認定	・ H23 年度から実施
②	新たな「姪浜ブランド」づくり	・ 未実施
基本方針（５）地域を知る場・機会づくり		
実現化方策①	「姪浜学」講座の開催や「姪浜ものがたり」の発掘・継承	・ H24 年度から実施
基本方針（６）環境にやさしいまちづくり		
実現化方策①	地産地消の推進	・ 未実施
②	身近な水辺環境の再認識と保全・改善 ・ 広域回遊ネットワークの普及による水辺への関心や保全・改善意識の醸成 ・ 「港の歴史」や「博多湾の自然環境」を学ぶ「姪浜学」講座の実施	・ H23 年度から関係機関に協力する形で実施（松の植栽、博多湾調査） ・ H26 年度に「遊覧船で巡る福岡の歴史とまちなみ」を開催
③	車に頼らないで暮らせるまちづくりの推進 ・ 広域回遊ネットワークを活用した「環境にやさしいまちづくり」	・ 未実施

②多彩な魅力資源を活用した「姪浜まち旅プロジェクト計画」の推進による、身の丈に合った観光スタイルの定着（地域の暮らしや人との出会い）

筆者が、協議会在籍中に精力的に取り組んできた「姪浜まち旅プロジェクト計画」には、多くの楽しいアイデアやヒントを盛り込んでいる。久留米市や柳川市では市単位で実施しているが、姪浜だけでも多くのプロジェクトが可能である。この計画をブラッシュアップするとともに、地域全体で取り組んでいただきたい。それが身の丈に合った観光スタイルの定着につながるし、地域の暮らしや人との出会いにもつながっていくものと確信している。



姪浜まち旅プロジェクト計画

③景観づくりの地域への普及と実践

「元気！姪浜計画」の中で重点事業と位置付けている景観づくりの取り組みについては、「姪浜景観づくり計画STEP1、2」及びそれを踏まえた「姪浜景観づくりの手引き」として作成したが、地域への普及活動はほとんど進んでいない。この手引きをしっかりと活用して、地域を巻き込んだ取り組みを進めていく必要がある。

そのためには、まずは協議会会員がもっと景観づくりに関心を持つべきである。例えば、いろいろな地域に出かけ、それぞれの地域の魅力を感じ、その地域の方々と交流・対話することも必要だと思う。姪浜とは置かれている状況は異なるが、それぞれの地域を参考にしながら「姪浜の魅力資源をどのように活用していくのか」についてしっかり考えていくことが必要である。その地域や場所でしか体験できないことを体感し、考えることが、次の地域づくり・景観づくりにつながるのである。

そして、忘れてはいけないことは、唐津街道姪浜まちづくり協議会は博多部の御供所まちづくり協議会に続き、福岡市内で2番目に福岡市都市景観条例に基づく「景観づくり地域団体」に認定されていることである。福岡市では歴史的景観を保護していくため、唐津街道姪浜地区を歴史的資源周辺区域として指定し、平成28年10月から景観づくりの取り組みを強化（届出対象建築物の拡大）している。これと連携した取り組みを協議会が主体となり、地域を巻き込んで進めていく必要がある。

また、筆者が平成23年度に提案し、27年度の街なか再生助成金（区画整理促進機構）の採択により、ようやく実現した暖簾設置事業についても、賛同者を増やしながらかしずつ進めていったらいいと思う。景観づくりは目に見える取り組みが一番効果的である。



姪浜景観づくりの手引きの活用



先進都市視察



景観づくり地域団体の認定(平成22年3月)



暖簾設置事業(京都市西陣大黒町の事例)

④空き店舗や空家の活用に向けた地域としての取り組み

空き店舗や空家の活用について、まず、協議会や地域で取り組むことは、空き店舗や空家の存在が、姪浜のまちづくりにとって何が問題なのかを認識する必要がある。問題点や課題を把握した後は、空き店舗や空家の実態調査を行うことが望ましい。最初は詳細な調査ではなく、まち歩きをして、それを地図に落とし込むぐらいの全体把握程度の調査で構わない。

また、協議会が空家活用のコーディネーター的役割を担い、空家所有者や空家活用希望者から相談があった場合に、貸したい人と借りたい人の中に入り、活用方法などについて具体的に提案していくことや、そうした人材を育てることも今後の協議会の役割であると思う。空家活用プロジェクトもその一例である。



空家の実態調査



空家活用プロジェクト

⑤地域づくり資源の物語化

姪浜には多くの歴史や魅力資源がある。こうしたことを「姪浜読本」として作成・発行して、地域の方々や子どもたちにわかりやすく伝えていくことを提案する。目に見える特徴が失われつつある姪浜において、読み物としてわかりやすく伝えていくことは、大変意義のあることである。その参考になるのが小布施や田主丸の地域読本である。



小布施の魅力やまちづくりを紹介した「遊学する小布施」



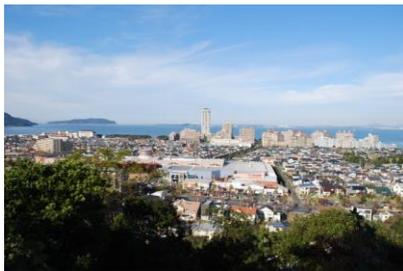
浮羽、吉井、久留米耳納の伝承や昔話を集めた「みのうの豆本」

⑥全国に誇る身近な歴史資源を活用した環境保全活動

筆者は福岡市都市景観室在籍中の平成8年頃から、眺望ポイント（視点場）にも関心を持っていた。姪浜周辺を広域的に見ると「福岡タワー」「愛宕神社」「能古島」という3つの眺望ポイントが存在する。こうした3つの視点場から見る福岡市のコントラストのある景観は魅力的であり、福岡市の都市形成の歴史を垣間見ることができる。今後も眺望景観という視点を大切にしていきたいと考えている。



福岡タワーから姪浜方面を見る



愛宕神社から博多湾を見る



能古島から市街地を見る

これを姪浜地域内で見てみると、鎌倉時代からの歴史のある3つの丘（探題塚、興徳寺山、丸隈山）がある。このうち、興徳寺山はお寺で整備中であり、丸隈山はボランティアの皆さまが草刈りや清掃をしている。しかし、探題塚は全国に誇る歴史資源でありながら、この存在を知る人はほとんどいない。また、境内は手入れされているが、その奥は姪浜や博多湾を一望できる場所にありながら、やぶ山のようにっており、足の踏み場もなく、極めて閉鎖的な状況である。



3つの丘(探題塚、興徳寺山、丸隈山)の位置

探題塚の概要

探題塚は鎌倉幕府が元軍の来襲に備えて探題を置いた場所であり、鷲尾城（現在の愛宕山）や防塁を築造したり、点検報告を各守護にさせていた。初代探題が北条時定であり、弘安5年（1282年）以降姪浜浦山館（万正寺山）でその任務に当たった。その後、足利一族が探題となり、幕府の任命する最後の探題・渋川堯頭は、ここ万正寺山で戦死した（1534年頃）。この堯頭を葬ったのが探題塚である。

即ち250年の長きにわたって防塁を構築し、外敵の侵攻から日本の国土を護ってきたものであり、姪浜は日本の国防の第一線であった。

そのため、身近にある探題塚という歴史資源にスポットを当て、子どもたちや地域住民の環境学習や歴史学習の場として活用させていただき、地域に開かれた開放的な空間づくりを通して、地域への誇りや愛着を醸成していくものである。歴史的故事を有する興徳寺山、丸隈山と合わせて、将来的には3つの丘による新たな歴史回遊ネットワークを構築できる。

また、姪浜には鎌倉時代に限っても、探題塚だけでなく、元寇防塁跡、元寇の時代からの歴史のある興徳寺など、全国に誇れる身近な歴史資源が数多くあるが、こうした活動がきっかけとなり、歴史資源のネットワーク形成及び歴史まちづくりの推進に大きく寄与できるのではないかと考えている。

探題塚の現況



探題塚のある方正寺山



探題塚に行く階段



探題塚（ここまでは手入れされている。）



探題塚の一角にある埴安神社



探題塚の奥。やぶ山のようになっており、足の踏み場もない状況である。



枝を剪定すると、経浜の市街地や博多湾が一望できる。



釜状穴のある大きな石も存在する。古くから信仰の場所であったと思われる。

活動イメージ



探題塚に関する調査、ワークショップ



樹木の伐採



枝の剪定



草刈り



散策路整備



一環境学習を終えて、参加者で記念撮影

子どもたちや地域住民による環境学習の実践（地域に開かれた開放的な空間づくり）

活動イメージ



完成記念披露式（桜の苗木植栽、感謝状・記念品贈呈等）



探題塚 PR イベント（まち歩きイベント、お花見コンサート）



「まちづくり互援」による地域への活動報告

活動後のイメージ



境内と一体となった見通しのきく開放的な空間へ

将来イメージ



経浜の市街地や博多湾を一望できる展望空間へ（※写真は他の場所からの眺望事例です。）



経浜の桜の名所へ



経浜の市街地や博多湾を一望できる展望空間へ（※写真は他都市の事例です。）

探題塚の現況、活動イメージなど

26 公務員や建築士の地域のまちづくりへの関わり方の提案

筆者は、公務員（福岡市職員）でもあり、建築士でもある。公務員や建築士の地域のまちづくりへの関わり方について、これまでの執筆文を紹介することで提案としたい。筆者のまちづくりへの想いをいくらかでも感じていただけたら幸いである。

（１）地域に飛び出す公務員としての提案

これは、月刊誌「地方自治職員研修」（2015年1月号）の「進行形！景観まちづくり」というコーナーでの筆者の執筆文（抜粋）である。

取り組みのポイント～人を活かす、資源を活かす～

（前略）

このようにまちづくりの各段階に対応した多彩な活動を、協議会に参加している地域内外の人々の多様なノウハウ・スキルをフルに活用しながら、また関係団体、九州大学、行政、NPO等と協働で進めています。私も、福岡市職員として培った専門性と企画力、人的ネットワーク等を存分に活用し、会の事務局長として力を発揮しています。特に公務員が長じるスキルである「各段階の課題に対応して段階的・長期的視点で取り組むこと」「職業・性格・意見の異なる十人十色の会員をまとめること」はまちづくりの現場で活かされています。

また、全国どこに行っても同じような町並みの形成が進む中で、「何これ！」と思うような地域に埋もれている身近な魅力資源を掘り起こすことが、姪浜ならではのまちづくり・景観づくりにつながると考えており、景観行政の経験を存分に発揮できる場面でもあります。

地域内外からの反応・反響

こうした活動による地域住民の反応ですが、「地域への誇りや愛着の創出」「活動の広がり」「地域の歴史・文化・暮らしを踏まえた、まちづくりや景観づくりの方向性の共有」「地域資源の保全・活用に向けた意識醸成」「双方向のまちづくりへの展開」につながっています。それを裏付けるものとして、例えば、地域住民から姪浜の魅力を「相撲甚句」や「史跡巡りの歌」にさせていただいたり、また、古民家の再生事例や自主的に景観形成に配慮した建築物等の事例が着実に増えています。

一方、対外的な反響ですが、全国的な賞をいくつも受賞することで、「姪浜の魅力の全国へのPR」にもつながっており、視察や研修のフィールドとして姪浜を選んでいただくことも多くなりました。今後は、「身近な魅力資源を活かしたまちづくりの他地域への波及効果」も大いに期待できると考えています。

自治体職員よ、地域に出よう！スキルを活かそう！

私はこの活動に業務として関わっているわけではありませんが、地域の皆さま方に喜んでいただき、地域から感謝状までいただけるのはこの上なく公務員冥利に尽きます。

私のような一職員が地域に飛び出すだけでも地域は大きく変わります。読者の皆さま方も仕事や家庭の事情もあると思いますが、それぞれの経験を活かして地域づくりに関わることで地域力は大きく向上しますし、それを自分自身にフィードバックすることで公務員生活や定年後の生活

にも役立つと確信しています。

参考資料4 「進行形！景観まちづくり～歴史的資源を活かした町並みづくりと賑わいづくり～」

(月刊「地方自治職員研修」2015年1月号)

(2) 建築士としての提案

(公社)日本建築士会連合会の会誌「建築士」(2015年3月号)の「建築士会まちづくり賞受賞」のコーナーでも執筆した。先程の公務員としての執筆とほぼ同時期のものであり、内容はほとんど変わらないが、その一部を紹介したい。

継続的で多彩な活動内容

(前略)

このように、まちづくりの各段階に応じた多彩な活動を牽引しているのが、私をはじめとした数名の建築士です。全国どこに行っても同じような町並みの形成が進む中で、地域に埋もれている身近な魅力資源を掘り起こすことが、姪浜ならではのまちづくり・景観づくりにつながると考えており、建築士としての専門性を存分に発揮できる場面です。「それぞれの地域の歴史や空間特性をしっかりと把握し、ここでしかできないことを形にしていく」、このこだわりが建築に携わる者としての原点であり、私たち建築士の使命だと思います。

地域内外からの反応・反響

(中略)

私のような一建築士や一公務員が地域に飛び出すだけでも地域は大きく変わります。建築士として様々な形で建築に向き合っている読者の皆さま方も、それぞれの経験を活かして地域づくりに関わることで地域力は大きく向上し、それを自分自身にフィードバックすることで今後の業務や定年後の生活にも役立つと確信しています。

(後略)

少し補足説明をしたい。筆者は姪浜で「地域に埋もれている身近な魅力資源の掘り起こしこそが、姪浜ならではの地域特性を活かしたまちづくり・景観づくりの土台となる」ということを常に発信してきたが、その場所の地域特性や空間特性をしっかりと読み取り、設計に反映していくことが建築士の役割であると考えている。地域づくりや景観形成づくりにおいて、建築士に求められる役割は大きいのである。

「参考資料5 地域の誇り&まちなみ育てプロジェクト～姪浜の宝を福岡市民の宝に！～」

(日本建築士会連合会 会誌「建築士」2015年3月号)

27 卒業後

(1) 地域づくりを巡る小さなまち旅

筆者は、平成28年5月31日付けで唐津街道姪浜まちづくり協議会を卒業したが、既に4月上旬に卒業の意思を固めていた。その時に考えていたことは、地域づくりを巡る小さなまち旅である。市内でもいいし、市外、県外でもいい。いろいろな場所を旅することは、地域づくりを考える上で大いに参考になる。そして、新たな出会いもある。姪浜という狭いフィールドを離れ、大きな視点で地域づくりを考えよう。筆者の新たな一歩が始まったのである。

姪浜での活動の目途が見えてきた平成28年3月以降に訪れた主な場所は、次のとおりである。これは、10年間の活動を振り返る旅であり、自分を見つめ直す旅でもある。初めての場所もあるし、思い出の場所もある。大学の卒業研究に関わった場所もあるし、建築を志した時期に訪れた場所もある。観光で訪れた場所もあるし、出張や視察で訪れた場所もある。テーマは地域づくりの勉強でもいいし、建築の勉強でもいい、人との出会いでもいい。何か感じ取ることができれば、それで十分なのである。

この10年間はどっぷりと姪浜の活動に浸っていたが、協議会を離れて見えてくるいろいろな物や考え方、いろいろな地域の取り組みを学ぶことを大切に充電期間を過ごしている。まちづくりに関わる人は、外の風や空気に触れることが必要だと改めて痛感している。

【10年間の活動及び自分を見つめ直す小さなまち旅】

年 月	主な訪問先
平成28年3月	■山鹿（八千代座、さくら湯）⇒南阿蘇村（思い出のペンション、免の石） ⇒阿蘇（阿蘇神社、草千里）
4月	■南阿蘇村（一心行の桜）⇒熊本（熊本城）
5月	■別府（上人ヶ浜温泉）⇒大分（大分県立美術館）⇒宇佐（宇佐神宮） ■東京（代官山、表参道、銀座、東京ミッドタウン、豊洲）
6月	■熊本（熊本城、熊本大学）
7月	■宇城（三角西港） ■長崎（出津教会）⇒雲仙（温泉）⇒天草（崎津教会）
8月	■波佐見（中尾山、モンネルギザムック） ■益城町（地震被害）⇒南阿蘇村（地震被害、思い出のペンション） ⇒阿蘇（孤風院、阿蘇神社）⇒久住
9月	■津屋崎（津屋崎千軒、新原・奴山古墳群）
10月	■東京（町屋、南千住、浅草、上野）
11月	■佐賀（バルーンフェスタ、古湯、三瀬） ■宗像（宗像大社）⇒津屋崎（新原・奴山古墳群、宮地浜）
12月	■熊本（熊本城、水前寺公園、夏目漱石旧居、新町・古町） ■唐津（旧高取邸、旧唐津銀行、唐津城）
平成29年1月	■北九州（北九州市立中央図書館、文学館）
3月	■東京（神楽坂、御茶ノ水、神田、六本木、銀座）



出津教会



出津集落



崎津教会



崎津集落



波佐見集落



波佐見モンネルギザムック



旧高取邸



旧唐津銀行

(2) 思い出の場所再訪

この中で、筆者が再訪した思い出の場所をいくつか紹介したい。それは、平成 28 年 5 月に訪れた東京の代官山、表参道、7 月の宇城の三角西港、8 月の阿蘇の孤風院、10 月の東京の町屋である。いずれも第一章で紹介した場所である。

【代官山】

槇文彦氏設計の代官山ヒルサイドテラスは、大学時代から有名であったが、最初に訪れたのは鴻池組時代である。その後、平成 26 年に建築や都市を学ぶ長男と再訪。槇さんのプロジェクト以外にも、同潤会アパートを建て替え・再開発された代官山アドレス（高層マンション、ショッピングセンター、スポーツプラザ、公園）や代官山 T-SITE（蔦屋書店を中核とした生活提案型商業施設）などのプロジェクトが完了し、大きな変貌を遂げていた。

再度訪れた平成 28 年 5 月には、大きな変化はなかったが、タブレットで撮影した写真に市川海老蔵さんとお子さんが写っていた。偶然である。撮影した時には気付かなかったが、後で長男が「この人海老蔵だよ」と教えてくれた。ランニングの最中であったようだ。瀟洒な街・代官山には多くの芸能人が住んでいるのだろう。



昭和 55 年頃の代官山ヒルサイドテラス



平成 28 年の代官山ヒルサイドテラス



代官山 T-SITE(平成 28 年5月)



代官山アドレス(平成 28 年5月)

【表参道】

鴻池組時代に見学したのは、当時の建築雑誌に掲載されていた山下和正氏設計のフロム・ファースト・ビルと現代建築研究所設計のヨックモック本社ビルである。その後、平成 26 年に長男と再訪。とても懐かしく思った。フロム・ファースト・ビルは、中庭と吹き抜けを取り入れ

た筆者の好きな建築の一つである。安藤忠雄氏設計の表参道ヒルズや多くのブランドのお店の進出により、さらにお洒落な街になっていた。隈研吾氏設計の根津美術館にも行ったが残念ながら休館中であった。

平成 28 年 5 月には、表参道ヒルズや前回は行けなかった根津美術館を中心に歩いて回った。根津美術館は、和風の要素を取り入れた隈さんらしい作品である。庭もきれいに手入れされており、外国人も多く訪れていた。平成 25 年度以降は、隈さんの作品を見る機会が多く、長岡市シティホールプラザオーレ長岡、浅草文化観光センター、長崎県立美術館、サントリー美術館などを訪れた。



昭和 55 年頃のフロム・ファースト・ビル



現在のフロム・ファースト・ビル(平成 28 年 5 月)



表参道ヒルズ(平成 28 年 5 月)

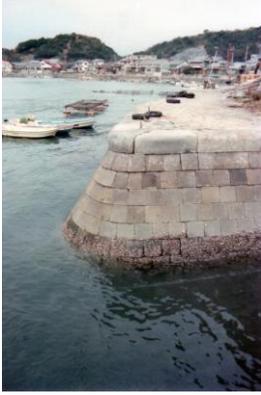


根津美術館(平成 28 年 5 月)

【三角西港】

大学を卒業して 36 年後の平成 28 年 7 月 3 日に久しぶりに三角西港を訪問した。石積みの埠頭や水路は当時とほとんど変わらないが、昭和 62 年の築港 100 周年を期に、当時の建造物の復元や周辺の公園整備も行われ、観光地としても賑わいを見せていた。小説家・小泉八雲（ラスカディオ・ハーン）ゆかりの旅館・浦島屋、倉庫を改修したカフェなど明治の面影を残す建物が印象的である。

大学時代にはだれ一人として観光に訪れる者はいなかったが、国の重要文化財や世界文化遺産に登録されたこともあり、雨天にも関わらず多くの観光客が訪れていた。エピソードになるが、20 年近く使っている腕時計の針が、三角西港を訪れた時に突然止まった。まるで 36 年前にタイムスリップしたかのように（再掲）。



大学時代に研究していた頃の三角西港(昭和 57 年2月。大学を卒業して2年後の写真)



現在の三角西港(平成 28 年7月)

【孤風院】

孤風院は、明治 41 年（1908 年）熊本高等工業学校の図書閲覧室（講堂）として建てられた熊本を代表する洋風木造建築であったが、昭和 51 年（1976 年）老朽化による解体決定に伴い、当時熊本大学助教授であった木島安史先生が買い取り、現在の地（阿蘇）へ移築し、住居として平成 3 年（1991 年）まで利用されていた。移築後は住みながら作り続けられ、木島先生が亡くなられた現在は、木島家の別荘としての利用のほか、「孤風院の会」によってメンテナンスを含めた建築教育活動の場として利用されている（再掲）。

孤風院を訪問するのは、熊本地震後の平成 28 年 8 月が最初である。大学時代には、木島先生の話は聞いていたが、訪れるのは今回が初めてである。木島先生の手記「孤風院白書」は鴻池

組時代から何度も読み感銘を受けていた。内部は見ることはできなかったが、外から見る限りは大きな損傷はなかったようだ。一安心である。

木島先生の想いを受け継いだ建築を訪問することで、建築や地域づくりへの想いを新たにしたい。同行した長男にも筆者の想いは伝わったと思う。長男は普段は CAD ばかり使っているようであるが、筆者は木島先生の建築に込める想いを伝えたかった。



孤風院白書

孤風院(平成 28 年8月)

【荒川区町屋】

町屋は、筆者が鴻池組時代に約3年間住んでいた場所である。町屋は下町であり、古いコミュニティが息づく地域で、昔ながらの銭湯やお店もあった。もんじゃ焼きのお店も多かった。毎日の夕食は町屋駅周辺で外食。駅前の定食屋さんや高架下のラーメン屋さん、住宅街にある中華料理屋さんによく通ったものである。

平成 28 年 10 月末に南千住に行く機会を利用して 30 年振りに寄ってみた。都電や高架下のある風景はあまり変わっていなかったが、駅周辺や幹線道路沿道には高層のマンションが建ち、様変わりしていた。一步路地に入ると昔の名残は感じられたが、筆者がよく利用したお店や銭湯などは大半がなくなっていた。土曜日の昼過ぎであったが、人通りもほとんどなく、寂しい印象を受けて帰った(再掲)。

よく考えてみると、筆者が高校卒業後に一人で住んだ地域は、熊本市黒髪(4年)、荒川区町屋(3年)、福岡市唐人町(1年)であり、いずれも歴史やコミュニティ、路地が息づく地域である。姪浜も含めて、こうした界隈性のある地域が以前から好きだったのかも知れない。



30年振りの町屋(平成28年10月)

(3) 熊本地震と筆者

筆者は、熊本地震前の平成 28 年 3 月下旬～4 月上旬に熊本、阿蘇、別府などを旅している。この時に熊本県内で訪問したのは、平成 12 年から毎年のように通っている南阿蘇村のペンション、阿蘇神社、一心行の桜、免の石、熊本城などであり、2 回の訪問で阿蘇大橋も 4 回渡った。

その後の 4 月 14 日と 16 日の震度 7 の熊本地震で、行った先々の場所が大きな被害を受けた。信じられない光景がテレビに映し出された。筆者は現在、耐震関係の仕事もしていることもあり、また、大学時代を熊本で過ごしたこともあり、今回の熊本地震はとても考えさせられるものがあった。

筆者は熊本地震後、大学時代の思い出の多い熊本のことを気にかかり、積極的に熊本に出かけている。被害を受けている今の熊本の状況をしっかり目に焼き付けておきたいからである。その中でも、熊本城、阿蘇神社、阿蘇大橋、そして益城町や南阿蘇村の住宅の被害はとても痛ましいものがあった。主要な観光地を結ぶ道路も閉鎖され、観光客も激減している。春とは違う光景が広がっていた。

しかし、これを現実と受け止め、未来に向けて、前向きに考えていかなければならない。これから長い時間をかけて熊本が復興されていく中で、その過程を見に何度も訪問したいと考えている。熊本城の復興には 20 年かかると言われている。筆者は現在 59 歳であり、熊本城が復興される頃には 80 歳近くになっている。今後は、熊本城の復興を見届けることを目標に生きていきたい。阿蘇神社の再建にも長い時間を要すると思われるが、その過程も見届けたいと思う。



熊本城(地震前)



熊本城(地震後)



阿蘇神社(地震前)



阿蘇神社(地震後)



阿蘇大橋の崩落



益城町のアパートの倒壊

折しも平成 28 年 8 月上旬に、熊本地震前に制作された映画「うつくしいひと」の上映会が福岡市内であった。熊本城、夏目漱石旧居、江津湖、菊池溪谷、草千里、通潤橋といった熊本の名所の地震前の姿が映し出された。こうした名所が、また元の姿に戻るよう願ってやまない。そして、復興の過程を定期的に見に行くことを、今後の楽しみにしていきたいと思う。



草千里(平成 28 年 3 月。50 年振りの野焼き後)



通潤橋(平成 26 年 3 月)

ところで、筆者がこの頃の想いを 4,500 字程度のエッセイとして書いたものがある。これは、「第 12 回 JTB 交流文化賞 交流文化体験賞 一般部門」に応募したものである。熊本復興への強い想いを込めている。

「参考資料 7 熊本地震と私～オオクワガタから始まった旅は復興へと向かう旅へ～」

(2016 年 第 12 回 JTB 交流文化賞応募作品)

(4) 姪浜での活動の振り返り (活動記録作成)

地域づくりを巡る小さなまち旅と並行して進めていったのが、今書いているこの「活動記録」である。冒頭に書いているように、今までの事務局長としての活動記録をまとめ、家族やお世話になった方々に筆者の姪浜への想いを伝えていくことにしたものである。この中では、協議会活動の 10 年間だけでなく、大学時代からの建築や地域づくりへの想いも振り返りながら、地域固有の魅力資源を活かしたまちづくりについても考えていくこととした。

協議会卒業直後の平成 28 年 6 月から書き始め、この段階を書いているのが平成 29 年 2 月である。ここまで辿り着くのに 8 ヶ月程かかった。「週末トラベラー&ライター」の生活であり、活動記録を書く時間は限られているが、もう一踏ん張りしたい。



久しぶりの三角西港訪問(A列車にて)



筆者が関わってきた様々な資料をもとに活動記録作成

充電期間中の週末はトラベラー&ライターの生活

(5) 姪浜や市役所での経験を活かせ

「地域づくりを巡る小さなまち旅」や「活動記録」は、今までの姪浜での活動の振り返りとともに、今後何らかの形で地域活動や定年後の生活に役立てていきたいという趣旨もある。そして、公務員や建築士としての経験を地域活動に活かさないかということもある。今後の具体的なプランはないが、前に紹介した日本建築士会連合会の会誌「建築士」の中で筆者は次のように述べている。

私のような一建築士や一公務員が地域に飛び出すだけでも地域は大きく変わります。建築士として様々な形で建築に向き合っている読者の皆さま方も、それぞれの経験を活かして地域づくりに関わることで地域力は大きく向上し、それを自分自身にフィードバックすることで今後の業務や定年後の生活にも役立つと確信しています。

また、市役所で経験した業務の中で、今後の活動に役立ちそうなのは「都市景観」「耐震」「空家対策」などの他、都市科学研究所での「広域連携」などの研究であろうか。他都市調査を通じて、いろいろな地域の景観やまちづくりの取り組みも調べることもできた。これに姪浜での約 10 年間の精力的な活動を組み合わせれば、定年後もいろいろなことができるのではないだろうか。

筆者が協議会を卒業する時に、ある知人が「市役所でのいろいろな経験、そして 10 年にわたる姪浜での地域づくりの経験を活かして、姪浜という狭いフィールドではなく、もっと広いフィールドで活躍してほしい」ということを話してくれた。

そして、平成 28 年 4 月の熊本地震の影響も大きい。大学時代を過ごした熊本の甚大な被害は、耐震の仕事もしている筆者にとっては何かの運命である。今までの経験を活かして熊本に恩返しをしたいと思うのも当然のことである。こうしたことを踏まえ、この活動記録を書きながら今後のことも考えていきたい。

この活動記録の最後の段階を書いている時に、日本住宅公団（現 UR 都市再生機構）で高蔵寺ニュータウンの設計などを担当されていた津端修一さんと奥様の英子さんのドキュメンタリー映画『人生フルーツ』を見る機会があった。高蔵寺ニュータウンで実現できなかった「雑木林のあるまち」「風の通るまち」を、自分の住宅の中で地道に取り組んでいる姿に深い感銘を覚えた。また、この映画の中で現代建築の巨匠の名言も登場する。

- ル・コルビュジェ『家は、暮らしの宝石箱でなくてはいけない』
- アントニオ・ガウディ『すべての答えは、偉大なる自然のなかにある』
- フランク・ロイド・ライト『ながく生きるほど、人生はより美しくなる』

建築家の村野藤吾氏の『建築らしいものを創り出したのは 60 歳を過ぎてから』という言葉と合わせて、今後の筆者の生き方の参考にしていきたい。

おわりに

この活動記録は、唐津街道姪浜まちづくり協議会卒業を機会に、家族やお世話になった方々に筆者の姪浜への想いを伝えようと書き始めたものである。しかし、書き進めていく中で、姪浜での10年間の活動の成果と反省を、今後何らかの形で、いろいろな地域での身近なまちづくりの推進に活かしていただきたいと考えるようになった。

そのため、10年間の活動を振り返るだけでなく、今まで訪問してきたいろいろな地域の取り組みも踏まえ、「今後の姪浜のまちづくりの展開方策」「公務員や建築士の地域のまちづくりへの関わり方」などについても提案させていただいた。また、活動期間中の筆者のその時々々の想いをコラムや執筆文として紹介させていただいた。姪浜の関係者だけでなく、各地域でまちづくりに関わる方々に参考にしていただければ幸いである。

今回は、姪浜での活動を中心とした活動記録という形にとどまったが、今後、機会があれば、これをブラッシュアップするとともに、今まで訪問してきた各地域の取り組みを調査・分析して、「身近な地域資源を活かしたまちづくりの実践方策に関する研究」という内容で研究を進めていきたいと考えている。

最後になりますが、この10年間は、唐津街道姪浜まちづくり協議会の関係者だけでなく、地域内外の多くの方々からご支援とご協力をいただきました。お世話になったすべての方々はこの場をお借りして感謝の意を表します。

また、今回、筆者のとりとめのない活動記録を会員研究として認めていただき、ご支援いただきました(公財)福岡アジア都市研究所の皆さま方に謝意を表します。

平成29年3月（活動記録のゴール）

(公財)福岡アジア都市研究所 会員研究員 (福岡市職員)
唐津街道姪浜まちづくり協議会 初代事務局長
大塚政徳

【連絡先】

〒819-0013

福岡県福岡市西区愛宕浜 2-3-2-601

TEL & FAX : 092-882-3831

携帯 : 090-7929-7758

e-mail : la-mound.m.63@iwk.bbiq.jp

参考資料

- 1 筆者の主な年表
- 2 唐津街道姪浜まちづくり協議会と筆者の10年の歩み
- 3 姪浜プロジェクト48 (MPT48)
～筆者が唐津街道姪浜まちづくり協議会在籍中に取り組んだ多彩な活動～
- 4 進行形！景観まちづくり
～歴史的資源を活かした町並みづくりと賑わいづくり～
(月刊「地方自治職員研修」2015年1月号)
- 5 地域の誇り&まちなみ育てプロジェクト～姪浜の宝を福岡市民の宝に！～
(日本建築士会連合会 会誌「建築士」2015年3月号)
- 6 内陸部のまち・横手市増田と海辺のまち・福岡市姪浜
～日本海を隔てて1100km離れた地域の新たな交流の芽生え～
(2013年 第9回JTB交流文化賞応募作品)
- 7 熊本地震と私～オオクワガタから始まった旅は復興へと向かう旅へ～
(2016年 第12回JTB交流文化賞応募作品)

(公財) 福岡アジア都市研究所 会員研究員 (福岡市職員)
唐津街道姪浜まちづくり協議会 初代事務局長
大塚政徳

筆者の主な年表

	年齢	主な出来事		印象に残る建築物、町並み等			
		家庭・学校・仕事	建築・まちづくり	現代建築	歴史的建造物・町並み・集落	海外訪問都市	
子ども時代	0	S33 誕生	<ul style="list-style-type: none"> ■実家の思い出 ■国鉄キャンペーン「ディスカバー・ジャパン」 ■テレビ紀行番組「遠くへ行きたい」 	<ul style="list-style-type: none"> ■大阪万博の建築物 ■丹下健三(国立代々木競技場) ■前川國男(東京海上ビル)※美観論争 	<ul style="list-style-type: none"> ■寺社(法隆寺、東大寺) ■城郭(会津若松城) ■伝統的町並み(妻籠宿、倉敷、萩) 		
熊本大学時代	18	S51 熊本大学建築学科入学	<ul style="list-style-type: none"> ■建築との出会い ■最初の設計、楽しい設計課題 ■建築への興味、建築巡り ■木島安史先生 ■山口百恵「いい日旅立ち」(国鉄キャンペーン) ■卒業論文(三角西港) ■卒業設計(Architectural Complex) 	<ul style="list-style-type: none"> ■磯崎新(福岡相互銀行本店) ■黒川紀章(福岡銀行本店) ■白井晟一(親和銀行本店) ■木島安史(上無田松尾神社) ■フランク・ロイド・ライト(旧帝国ホテル) ■住宅建築(清家清、篠原一男、吉村順三、菊竹清訓、宮脇壇、安藤忠雄) 	<ul style="list-style-type: none"> ■城郭(熊本城) ■近代建築(熊本地方裁判所、弧風院) ■港・都市計画(三角西港) ■伝統的町並み(日南市飴肥) 		
	22	S55 熊本大学卒業			<ul style="list-style-type: none"> ■寺社等(桂離宮、修学院離宮、三十三間堂、清水寺、銀閣寺、龍安寺、円通寺、詩仙堂、平等院鳳凰堂、法隆寺、唐招提寺、東大寺、薬師寺、室生寺、日光東照宮、伊勢神宮、鎌倉円覚寺舍利殿、金沢尾山神社神門) ■近代建築(京都中京郵便局、東京駅、迎賓館赤坂離宮) ■伝統的町並み(川越、栃木、金沢、倉敷、奈良今井町、日南市飴肥) 		
鴻池組時代	22	S55 鴻池組入社(東京本店設計部) 寮生活とコンペ 現場配属 荒川区町屋での生活と篠田さん 最後の現場	<ul style="list-style-type: none"> ■建築巡り ■歴史的建造物への興味 ■歴史的町並みへの興味 ■東京から福岡へ ■最初の海外旅行 	<ul style="list-style-type: none"> ■村野藤吾(小山敬三美術館、ハケ岳美術館) ■内井昭蔵(桜台コートビレッジ、久遠寺宝蔵) ■白井晟一(芹沢銈介美術館) ■山下和正(フロム・ファースト・ビル) ■榎文彦(代官山プロジェクト) ■磯崎新(群馬県立近代美術館) 			
	28	S61 鴻池組退社					
福岡市役所時代	28	S61 福岡市での生活スタート 福岡市役所入庁、住宅公社配属	<ul style="list-style-type: none"> ■シーサイドももちクリスタージュ ■シーサイドももち景観形成地区の指定 ■御供所景観形成地区の指定 ■御供所・瀧田喜代三さん ■海外派遣研修 ■研究「地下空間」「広域連携」、海外調査 ■都心部景観、広告付きバスシェルター 	<ul style="list-style-type: none"> ■木島安史(球泉洞森林館) ■安藤忠雄(サントリーミュージアム天保山、熊本県立装飾古墳館、兵庫県立こどもの館) ■伊東豊雄(八代市立発物館) ■坂倉準三(神奈川県立近代美術館) ■レム・コールハウス(香椎ネクサスワールド、アムステルダム集合住宅) ■アントニオ・ガウディ(サグラダ・ファミリア) ■イオ・ミン・ペイ(ルーブル・ピラミッド) ■ジャン・ヌーベル(アラブ世界研究所) ■ガエ・アウレンティ(オルセー美術館) ■ミス・ファン・デル・ローエ(ハルセロナ・パビリオン) ■ヨーロッパの現代建築 	<ul style="list-style-type: none"> ■寺社等(桂離宮、修学院離宮、清水寺) ■城郭(姫路城、松本城、犬山城、五稜郭) ■教会(崎津教会、大江教会) ■近代建築(ヨーロッパの近代建築、旧開智学校) ■ニュータウン(幕張、多摩、六甲) ■アーバンデザイン(横浜、神戸、パリ、ベルリン、シュトゥットガルト、バルセロナ) ■国際建築展(ベルリン、シュトゥットガルト) ■地域づくり(小布施、京都西陣) ■伝統的町並み(小樽、函館、角館、栃木、川越、金沢、松本、飛騨高山、須坂、彦根、長浜、京都、奈良、富田林、神戸、出石、知覧) ■ヨーロッパの街並み・集落 	<ul style="list-style-type: none"> ■ドイツ(ハイデルベルク、ローテンブルク、フランクフルト、ベルリン、シュトゥットガルト、ケルン、ハノーバー) ■オーストリア(ウィーン) ■イタリア(ローマ、ベネチア) ■スイス(インターラーケン、ユングフラウ) ■イギリス(ロンドン、エジンバラ、ストラトフォード・アポン・エイボン、コッツウォルズ) ■スペイン(バルセロナ) ■フランス(パリ) ■オランダ(アムステルダム、ユトレヒト) ■韓国(釜山、ソウル、金海) 	
	29	S62 結婚					
	30	S63 長女誕生					
	36	H 5 都市景観室配属 H 6 長男誕生					
		H12 福岡都市科学研究所配属 H18 都市景観室配属					
協議会活動中	49	H21 都市計画課配属 H22 企画・耐震推進課配属(耐震) H27 建築物安全推進課配属(空家、耐震)	<p>H19.3 唐津街道姪浜まちづくり協議会設立</p> <p>●事務局長として、各ステージの地域課題に対応した多彩な活動を企画・実践し、多くの成果を上げる。姪浜及び協議会の名前を全国に発信してきた。</p> <p>○1stステージ(H19～21年度) ○2ndステージ(H22～25年度) ○3rdステージ(H26～27年度)</p> <p>H28.5 唐津街道姪浜まちづくり協議会卒業</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ル・コルビュジェ(国立西洋美術館) ■前川國男(東京文化会館) ■伊東豊雄(せんたいメディアパーク) ■隈研吾(アオーレ長岡、長崎県立美術館、浅草文化観光センター) ■榎文彦(代官山プロジェクト) ■アストリッド・クライン(代官山蔦屋書店) ■安藤忠雄(表参道ヒルズ、秋田県立美術館) ■山下和正(フロム・ファースト・ビル) 	<ul style="list-style-type: none"> ■寺社(会津さざえ堂、阿蘇神社) ■城郭(会津若松城、熊本城、首里城) ■教会(大浦天主堂) ■近代建築(東京駅、武雄温泉楼門、八千代座、旧岩崎久彌邸、旧グラバー住宅、旧唐津銀行、旧高取邸、長崎次郎書店) ■産業遺産(軍艦島) ■伝統的町並み(角館、横手増田、会津若松、喜多方、大内宿、川越、長岡、村上、倉敷、高梁、木屋瀬、八女、吉井、内野、大川、塩田、鹿島、島原、雲仙、杵築、臼杵、山鹿、那覇) 		
協議会卒業後	58		<p>H28.6～ 地域づくりを巡る小さなまち旅 思い出の場所再訪 熊本地震と私 これまでの活動の振り返り 姪浜や市役所での経験を活かして 活動記録作成(H29.3完成)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■坂茂(大分県立美術館) ■隈研吾(根津美術館、サントリー美術館) ■磯崎新(北九州市立中央図書館) ■黒川紀章(国立新美術館) ■代官山、表参道、銀座等の現代建築 	<ul style="list-style-type: none"> ■教会(出津教会、崎津教会、大江教会) ■近代建築(弧風院) ■港・都市計画(三角西港) ■集落(波佐見、出津、崎津) ■熊本地震被害(熊本城、阿蘇神社、阿蘇大橋、益城町、南阿蘇村) 		
	59						

※活動記録に関するものを中心に記載。市役所の配属先は、主なものを記載。

唐津街道姪浜まちづくり協議会と筆者の10年の歩み

年度 ステージ	活動の目標	各活動の開始年度			助成金（補助金）	表彰、認定
		イベント関連	計画策定、情報発信等	関連事業		
H18年度	設立準備	<ul style="list-style-type: none"> 『博多津にぎわい復興計画研究会』として、講演会、まち歩き、姪浜での調査を実施。 H19.3.17の姪浜でのまち歩きイベント後に協議会設立を決定。 H19.3.26『唐津街道姪浜町並み・まちづくり活性化協議会』として福岡市役所有志を中心に設立。以降、地元メンバーを加える。H20.4.1に現在の『唐津街道姪浜まちづくり協議会』に名称変更。 				
H19年度	1st ステージ 地域の魅力の再認識と地域内外への発信	<ul style="list-style-type: none"> まちづくり講演会・シンポジウム 景観歴史発掘ガイドツアー みそ蔵コンサート 	<ul style="list-style-type: none"> 定例会 地域の魅力資源調査 地域の魅力資源集作成 まち歩きマップの発行（順次改訂） 		●西区やる気応援事業補助金（福岡市）	
H20年度		<ul style="list-style-type: none"> まちなみパネル展 	<ul style="list-style-type: none"> まちづくり先進都市調査 	<ul style="list-style-type: none"> 『西区まるごと博物館』への参加 『唐津街道サミット』への加盟 	●西区やる気応援事業補助金（福岡市）	
H21年度		<ul style="list-style-type: none"> 灯明コンサート 	<ul style="list-style-type: none"> 町家再生の実践 まちの案内所開設（マイヅル味噌内） 旧町名表示板設置 		●西区やる気応援事業補助金（福岡市） ●農業・地域協同活動支援基金（JA福岡市）	<ul style="list-style-type: none"> ◆農業・地域協同活動支援表彰（JA福岡市） ◆福岡市都市景観賞（福岡市） ◆ふくおか地域づくり活動賞（地域づくりネットワーク福岡県協議会） ◆景観づくり地域団体認定（福岡市）
H22年度	2nd ステージ 地域協働のまちづくり計画の策定 景観まちづくりの実践		<ul style="list-style-type: none"> 『元気！姪浜計画』の策定 かわら版の発行 	<ul style="list-style-type: none"> 九州大学『都市・建築ワークショップ』への協力 	<ul style="list-style-type: none"> ●景観づくり地域団体活動助成金（福岡市） ●住まい・まちづくり担い手事業助成金（住まい・まちづくり担い手支援機構） 	<ul style="list-style-type: none"> ◆西区の宝認定（西区まるごと博物館推進会） ◆ふくおか地域づくり活動賞（地域づくりネットワーク福岡県協議会）
H23年度			<ul style="list-style-type: none"> 景観づくり委員会設立 『姪浜ブランド』の認定 『景観づくり計画』STEP1の策定 	<ul style="list-style-type: none"> 『地域づくりネットワーク福岡県協議会』への加盟 	●景観づくり地域団体活動助成金（福岡市）	◆ふくおか地域づくり活動賞奨励賞（地域づくりネットワーク福岡県協議会）
H24年度		<ul style="list-style-type: none"> 着物で唐津街道の町並みをそぞろ歩き 町家コンサート 	<ul style="list-style-type: none"> 『姪浜町家』の認定 	<ul style="list-style-type: none"> 総合学習への協力（姪北小） 『全国まちなみゼミ福岡大会』参加 	<ul style="list-style-type: none"> ●URCAまちづくり企画支援事業助成金（再開発コーディネーター協会） ●まちづくり人応援助成金（まちづくり市民財団） 	◆まちづくり人認定（まちづくり市民財団）
H25年度		<ul style="list-style-type: none"> 登録文化財みそ蔵 特別公開 子どもまちなみ探検隊 	<ul style="list-style-type: none"> 『景観づくり計画』STEP2の策定 子ども落書き消し隊 『姪浜景観まちづくり宣言』の作成 地域の方から『姪浜相撲甚句』『史跡巡りの歌』の贈呈 	<ul style="list-style-type: none"> 『まちなみネットワーク福岡』への加盟。第1回まちなみフォーラム福岡を姪浜で開催 『福岡県美しいまちづくり協議会』への加盟 	<ul style="list-style-type: none"> ●街なか再生助成金（区画整理促進機構） ●ふくおか地域貢献活動サポート事業補助金（福岡県） 	<ul style="list-style-type: none"> ◆福岡県共助社会づくり表彰協働部門賞（福岡県） ◆日本まちづくり大賞及び福岡支部賞（NPO福岡都市計画家協会） ◆あしたのまち・くらしづくり活動賞振興奨励賞（あしたの日本を創る協会）
H26年度	3rd ステージ 登録文化財のみそ蔵を中心とした姪浜のまちなみの個性の再構築 次のステージに向けた『姪浜ネクスト』の推進	<ul style="list-style-type: none"> 海からまちを眺める遊覧船ツアー みそ蔵の再生・活用に向けた活動 	<ul style="list-style-type: none"> 『姪浜景観づくりの手引き』の発行 		<ul style="list-style-type: none"> ●ふくおか地域貢献活動サポート事業補助金（福岡県） ●公益信託 大成建設自然・歴史環境基金（H26.12～H27.11） 	◆まちづくり優秀賞（日本建築士会連合会）
H27年度		<ul style="list-style-type: none"> 新たなまち旅プロジェクトの発掘・夏休み親子まちなみ探検隊 遊覧船から見る花火大会 寺社講話&紅葉巡りツアー 白うさぎ伝説と桜の名所巡り&姪浜ブランド店巡り 	<ul style="list-style-type: none"> 『みそ蔵活用計画』の策定 姪浜ネクストの推進（TEAM姪浜ネクスト発足） 新案内所の移転、改修 『姪浜まち旅プロジェクト計画』の策定 まち歩きマップの改訂（来訪者、店舗、姪浜地域、協議会のWin-Win-Win方式） 街なか再生助成金の活用企画（ニュースレターの発行、暖簾による修景事業等） 	<ul style="list-style-type: none"> 総合学習への協力拡大（姪浜小、愛宕小） 	<ul style="list-style-type: none"> ●まちづくり人応援助成金（まちづくり地球市民財団） ●街なか再生助成金（区画整理促進機構。H28.2～12） 	<ul style="list-style-type: none"> ◆都市景観大賞 景観教育・普及啓発部門大賞（国土交通大臣賞） ◆ふるさとづくり大賞団体表彰（総務省）
H28年度	<p>初代事務局長として、精力的に様々な活動を企画・実践し、多くの成果を残す。H28.5.31次のステップアップを図るため、10年という節目を機会に協議会を卒業。地域内外の皆さま、長い間のご支援ありがとうございました。</p>					参考2

姪浜プロジェクト 48 (MPT48)

～筆者在唐津街道姪浜まちづくり協議会在籍中に取り組んだ多彩な活動～

ここでは、初代事務局長の筆者が中心となって企画・実践してきた多彩な活動『姪浜プロジェクト 48』を紹介する。一つひとつの活動は、オーソドックスなものであるが、まちづくりの熟度に応じた多彩な活動を展開してきた。「こだわり」「おもてなし」「多彩」「粘り強さ」「地道」をテーマにした 10 年間の精力的な活動により、姪浜の魅力及び協議会の活動を全国に発信してきた。

【活動概要】

◆ 1st ステージ（主に平成 19 年度～21 年度）

『地域の魅力の再認識と地域内外への発信』を目標に、「まち歩きマップやかわら版の発行」「まちづくり活動拠点の設置」などによる姪浜の見どころ・活動の情報提供や、「景観歴史発掘ガイドツアー」「国の登録有形文化財でのみそ蔵コンサート」「歴史ある寺社での灯明コンサート」などの多彩な町並みイベントを実施してきた。

◆ 2nd ステージ（主に平成 22 年度～25 年度）

『地域協働のまちづくり計画の策定及び景観まちづくりの実践』を目標に、住民参加のワークショップも取り入れながら「元気！姪浜計画」や「景観づくり計画」の策定を行うとともに、「町家再生の実践」「旧町名表示板の設置」「姪浜ブランドの認定」「姪浜町家の認定」などの具体的な活動を展開し、目に見える形でまちづくりの効果を伝えてきた。

また、「子どもまちなみ探検隊」や「子ども落書き消し隊」などの次の世代を担う子どもたちを対象にした景観づくり普及活動にも取り組んできた。

◆ 3rd ステージ（主に平成 26 年度～27 年度）

『国の登録文化財のみそ蔵を中心とした姪浜のまちなみの個性の再構築』を目標に、「姪浜景観づくりの手引き」を発行し地域への普及活動を行うとともに、平成 25 年末に味噌の製造場としての約 1 世紀の役割を終えて閉店したマイヅル味噌のみそ蔵（姪浜の歴史的・景観的シンボル）の再生・継続的活用に向けた活動を展開してきた。

最近では、姪浜の次のまちづくりのステージ「姪浜ネクストの推進」に向けた活動や、多彩なよかところを再発掘・活用する「姪浜まち旅プロジェクト計画」を展開中であった。

【活動内容一覧】

段階	活動内容	活動開始年度
1 s t ス テ ー ジ	(1)定例会	H19 年度
	(2)地域の魅力資源調査	H19 年度
	(3)地域の魅力資源集の作成	H19 年度
	(4)まち歩きマップの作成・発行	H19 年度
	(5)まちづくり講演会・シンポジウム	H19 年度
	(6)登録文化財の登録への協力	H19 年度
	(7)景観歴史発掘ガイドツアー	H19 年度
	(8)みそ蔵コンサート	H19 年度

1 s t e r e o t y p e	(9)版画展・町家展	H19 年度
	(10)先進都市調査	H20 年度
	(11)まちなみパネル展	H20 年度
	(12)他団体との交流・連携活動	H20 年度
	(13)マスコミへの情報発信	H20 年度
	(14)町家再生の実践	H21 年度
	(15)灯明コンサート	H21 年度
	(16)旧町名表示板の設置	H21 年度
	(17)まちづくり活動拠点(まちの案内所)の開設・運営	H21 年度
	(18)姪浜の食材を使った料理でのおもてなし	H21 年度
2 n d s t e r e o t y p e	(19)景観づくり地域団体の認定	H21 年度
	(20)全国区の助成金へのチャレンジ	H22 年度
	(21)地域との交流会	H22 年度
	(22)九州大学との連携(都市・建築ワークショップ等)	H22 年度
	(23)様々な場面での姪浜の PR	H22 年度
	(24)視察受入&意見交換	H22 年度
	(25)かわら版の発行	H22 年度
	(26)まちづくり計画策定ワークショップ	H22 年度
	(27)「元気! 姪浜計画」の策定	H22 年度
	(28)女性部会「はまこみち」の発足・活動	H23 年度
	(29)「姪浜ブランド」の認定	H23 年度
	(30)「姪浜ブランド」の PR	H23 年度
	(31)景観づくり委員会	H23 年度
	(32)「景観づくり計画」の策定	H23 年度
	(33)「姪浜町家」の認定	H23 年度
	(34)ディスカバー姪浜展を主体としたウィークリー事業	H24 年度
	(35)町家活用イベント(姪浜シネマ、町家コンサート)	H24 年度
	(36)着物で唐津街道の町並みをそぞろ歩き	H24 年度
	(37)まちなみネットワーク活動	H24 年度
	(38)地域のシンボルであるみそ蔵の再生・継続的活用に向けた活動	H25 年度
(39)子どもたちを対象にした景観づくり普及活動	H25 年度	
(40)全国区の賞へのチャレンジ	H25 年度	
(41)地域からの贈り物	H25 年度	
(42)景観まちづくり宣言	H25 年度	
3 r d s t e r e o t y p e	(43)「景観づくりの手引き」の作成	H26 年度
	(44)海を意識したプロジェクト(遊覧船等)	H26 年度
	(45)「TEAM 姪浜ネクスト」の推進	H26 年度
	(46)win-win-win 方式によるまち歩きマップの作成・発行	H27 年度
	(47)ポストみそ蔵としての「まち旅プロジェクト計画」の策定	H27 年度
	(48)空き店舗を活用した新案内所の開設	H27 年度

(1) 定例会



定例会は、発足当時から毎月1回を基本に実施してきた。事業内容やスケジュールの確認が主な議題であるが、筆者の定例会の進め方は、必ずレジュメをしっかり作り込み、何を協議するのか、何を決めるのかを明確にしてきた。議事録代わりにもなるし、欠席された方にも協議内容がわかるようにするためでもある。また、進行が事務局からの一方通行とならないよう、ワークショップをしたり、市役所の出前講座を取り入れたりするなどの工夫も忘れなかった。

(2) 地域の魅力資源調査



最初の取り組みとして、地域にどのような魅力資源があるのか、地域の特徴である寺社、町家、路地、塀、お堂、地蔵、石碑、緑などを調査した。協議会で実施したものもあるが、筆者が個人的に調査したものが圧倒的に多い。地域内をくまなく、そして何回も歩いた。歩く度に新しい発見もあり、同じ場所でも季節によって違った表情を見せてくれた。通りかかった地域の方々も声をかけてくれた。こうした地域の方々との出会いも調査の楽しみであった。こうした調査をもとに、「まち歩きマップ」や「地域の魅力資源集」を作成したり、身近なまちかど遺産を「姪浜まちかど遺産」として評価・紹介してきた。

(3) 地域の魅力資源集の作成



(町家町並み)
ここからは、唐津街道姪浜を歩いてみて、特徴のある町家や面白いと感じた町家をテーマに紹介します。



角地に建つ町家



卯建（うだつ）のある町家

卯建（うだつ）は、屋根の付いた小さな壁で、1階屋根と2階屋根の間に張り出すように設けられているものです。
本来、町家が隣り合い連続して建てられている場合に、隣家からの火事が燃え移るのを防ぐための防火壁として設けられたのですが、後には装飾的な意味に重きが置かれるようになり、自分の財力をアピールするための指標として関西地方を中心に商家の屋敷上には互いに競って立派な卯建が付けられました。江戸時代中期頃に造られるようになったといわれています。



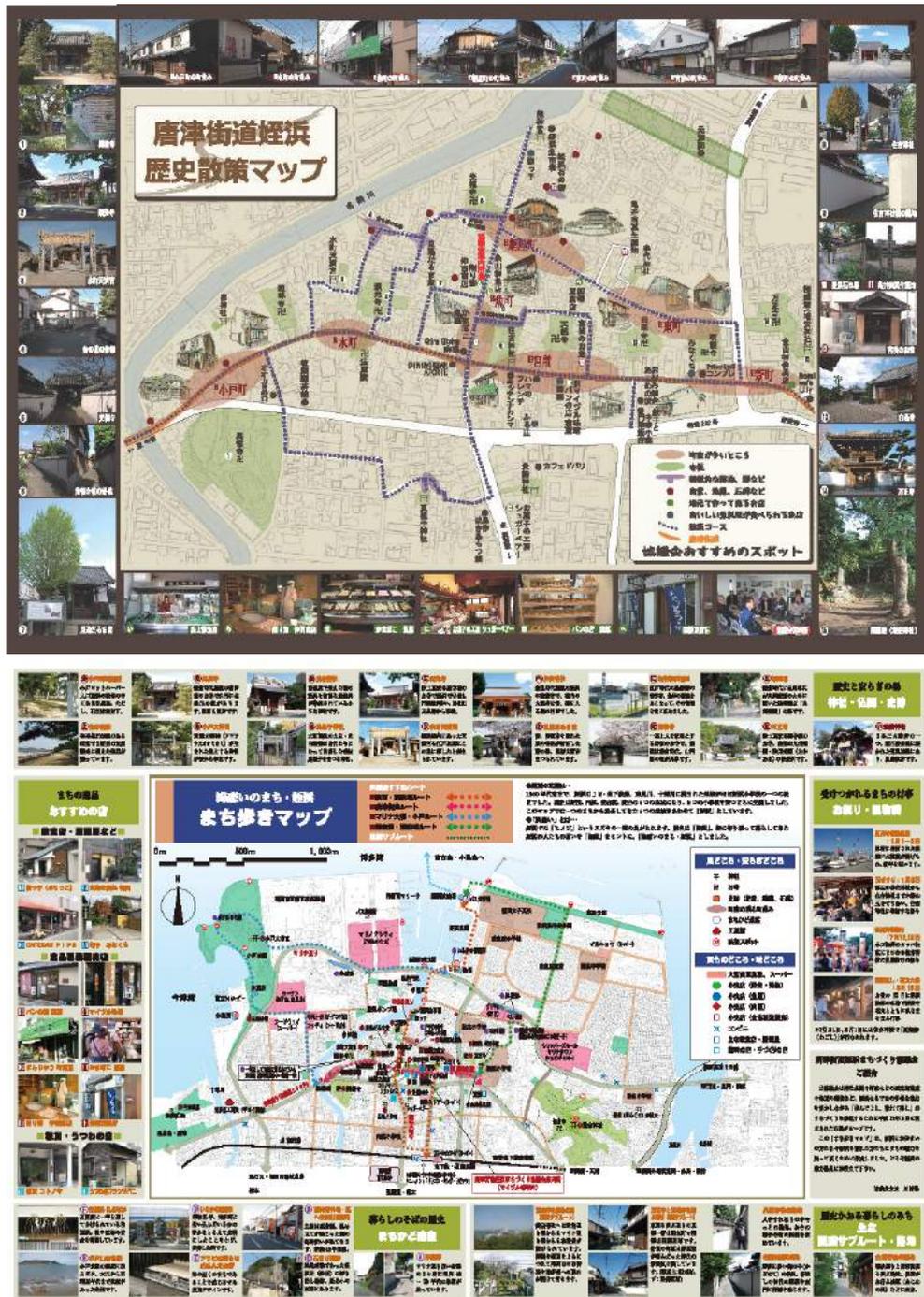
妻入り切妻造の町家

詳細版

概要版

地域の魅力資源調査をもとに「地域の魅力資源集～唐津街道姪浜 見て歩き、食べ歩き～」を作成した。当初版でも30数ページにも及ぶもので、我ながら力作であった。古いパソコンを使っていた時代で、動きが悪く、作成に苦労したのを思い出す。この資源集は協議会主催の最初のまち歩きイベント（平成20年3月）で参加者に配布され、とても喜ばれた。しばらくは、まち歩きイベントの度に更新を続けた。活動を始めた平成19年当時の姪浜の町並みの現状を伝える貴重な資料でもある。また、概要版も作成し配布した。概要版を拡大したものが、まちなみパネルである。

(4) まち歩きマップの作成・発行



地域の景観資源調査をもとに、「まち歩きマップ」を作成・発行し、地域の魅力を多くの市民に伝えてきた。当初版のマップ(平成 20 年3月発行)は、A3 両面、二つ折りのシンプルなものであり、片面が姪浜の魅力の紹介、片面がまち歩きマップとなっている(上段)。また、平成 23 年1月には広域回遊マップとして「海恋のまち・姪浜まち歩きマップ」を作成・発行した(下段)。B3 蛇腹折り加工で、折り畳めば B5 サイズで持ち運びしやすいものとした。25 年4月には、上記の2つのマップを組み合わせたものを作成・発行し、現在のマップ(28 年3月作成・発行)に引き継がれている。

(5) まちづくり講演会・シンポジウム①



平成19年9月に第1回目を開催して以来、「景観形成と地域づくり」をテーマに、春と秋を中心に年間2～3回実施してきた。会場の規模に応じて毎回30～120人が参加。寺社やみそ蔵、町家、旧郵便局舎での講演会などを通じて歴史的建造物の魅力を伝えてきた。手間暇とお金をかけても、姪浜ならではの場所(空間)にこだわるのが重要である。また、その時のタイムリーな話題と人、雰囲気などを総合的に判断していくのが事務局長である筆者の役割であり、進め方である。

(5) まちづくり講演会・シンポジウム②



平成19年9月に第1回目を開催して以来、「景観形成と地域づくり」をテーマに、春と秋を中心に年間2～3回実施してきた。会場の規模に応じて毎回30～120人が参加。寺社やみそ蔵、町家、旧郵便局舎での講演会などを通じて歴史的建造物の魅力を伝えてきた。手間暇とお金をかけても、姪浜ならではの場所(空間)にこだわるのが重要である。また、その時のタイムリーな話題と人、雰囲気などを総合的に判断していくのが事務局長である筆者の役割であり、進め方である。

(6) 登録文化財の登録への協力



旧マイヅル味噌の建物は、平成2年の福岡市教育委員会の調査では、あまり評価は高くなかったが、平成18年に改修工事を行った際に屋根裏から出てきた安全祈願札で江戸時代後期の建物であることが判明した。これを機会に登録文化財の登録に向けて、協議会会員と市の文化財担当の職員が協力して調査・図面作成を行った。各種手続きを経て平成19年12月に国の登録有形文化財に登録された(福岡市では第1号)。以降、協議会活動の拠点として、平成27年11月まで様々な形で活用させていただいた。平成28年末に役目を終えて解かれたが、みそ蔵での多彩な活動は姪浜の歴史のひとつまとして残っていくであろう。

(7) 景観歴史発掘ガイドツアー①



平成 20 年 3 月に第 1 回目を開催して以来、春(桜の頃)と秋(紅葉の頃)を中心に年間2~3回実施。毎回 40~60 人が参加。地域の見どころである寺社、町家、路地などを案内してきた。姪浜特産の「魚嘉の蒲鉾」や「仲西商店の削り節」の試食も参加者に大変喜ばれている。参加者との会話もまち歩きの楽しみである。2時間半のショートコースや昼食をはさんで回るロングコースも用意。いろいろな見どころを歩いて回れるのが姪浜の特徴であり、様々なバリエーションが可能である。こうした実践が「姪浜まち旅プロジェクト計画」につながっていくことになる。

(7) 景観歴史発掘ガイドツアー②



平成 20 年 3 月に第 1 回目を開催して以来、春(桜の頃)と秋(紅葉の頃)を中心に年間 2~3 回実施。毎回 40~60 人が参加。地域の見どころである寺社、町家、路地などを案内してきた。姪浜特産の「魚嘉の蒲鉾」や「仲西商店の削り節」の試食も参加者に大変喜ばれている。参加者との会話もまち歩き楽しみである。2 時間半のショートコースや昼食をはさんで回るロングコースも用意。いろいろな見どころを歩いて回れるのが姪浜の特徴であり、様々なバリエーションが可能である。こうした実践が「姪浜まち旅プロジェクト計画」につながっていくことになる。

(8) みそ蔵コンサート



みそ蔵コンサートは、マイヅル味噌の建物が平成 19 年 12 月に国の登録有形文化財に登録されたことを機に、その魅力を地域内外に広く伝えるとともに、幻想的な雰囲気の中での演奏を楽しんでいただきたいと実施してきたものである(1回目は平成 20 年3月。年間2~3回実施)。味噌の香りのする空間でのコンサートは珍しいということで、毎回多くの方々に参加していただいた。江戸時代後期に建てられ、地域のシンボルとなっているみそ蔵でのコンサートを通じて、歴史的建造物の魅力を伝えてきた。平成 28 年 12 月に役目を終え解かれたが、みそ蔵コンサートの思い出は忘れることはないだろう。

(9) 版画展・町家展



これは、「唐津街道版画展」「ディスカバー姪浜展」「町家散歩展」など唐津街道や姪浜、町家などをテーマにした展示会であり、平成20年3月に第1回目を開催して以来、毎年1回程度、みそ蔵を中心に実施してきた。版画家の二川秀臣氏や漫画家の長谷川法世氏の作品も数回にわたり展示し、毎回500人程度の市民に来場いただいた。企画と準備は大変であるが、場所と内容にこだわった姪浜ならではの事業である。いろいろとところで構築してきた筆者の人的ネットワークを存分に活用させていただいた事業でもある。

(10) 先進都市調査



これは、町並みなどの地域固有の魅力資源を活かしたまちづくりを推進している地域の調査であり、会員に実際に見て感じてほしいと企画したものである。姪浜とは置かれている状況は異なるが、他の都市を参考にしながら「姪浜の魅力資源をどのように活用していくのか」についてしっかり考えていくことが必要である。先進都市調査は、そのための絶好の機会である。協議会会員や関係団体の皆さまと一緒に視察に行った肥前浜宿、塩田宿、臼杵、杵築の町並みが印象に残っている。

(11) まちなみパネル展



春と秋のイベントなどに合わせ、地域の見どころを紹介する「まちなみパネル展」を実施してきた。これは、地域資源集の概要版を A1 サイズに印刷してパネル化したもので、当初は 16 枚のパネルを作成。このパネルの最初の出番は、平成 20 年 10 月の「西区まるごと博物館 IN 小戸ヨットハーバー」であった。大きさと枚数、統一されたデザインに来場者の評判も上々だった。このパネルは、毎年秋の「西区まるごと博物館」での展示だけでなく、みそ蔵でのイベントなどの際にも何度も使われ、姪浜の魅力紹介ツールとしての役割を果たしてきた。

(12) 他団体との交流・連携活動



唐津街道の宿場町で地域づくりに取り組む関係者で構成する「唐津街道サミット」を、各宿持ち回りで平成 20 年度からほぼ毎年開催。町おこしや地域づくりをテーマに、それぞれの地域の抱える課題や取り組み事例などについて意見交換を行っている。これまで、赤間宿、畦町宿、箱崎宿、西新高取、姪浜宿、前原宿、深江宿で開催した。各回、まち歩きと意見交換、懇親会という構成である。姪浜宿では、平成 23 年3月に開催し、姪浜ならではの空間と料理でおもてなしをさせていただいた。



本堂前のコンサート会場。マンションが林立する足元に伝統的な街並みが息づいている＝福岡市西区姪の浜5丁目

福岡市西区姪の浜の旧唐津街道（小倉―唐津）沿いの住民らでつくる実行委員会が10月3日午後7時から、地区で最も古い寺院、興徳寺で「灯明コンサート」を開く。宿場町でありながら、商人町、漁師町といくつもの顔をもっていた姪の浜の、寺町としての側面を、地区内外の人に知ってもらおうと企画した。

姪の浜 古寺で来月コンサート

灯明空間 響く音色

寺町のよさ 有志PR

定員200人。参加費1500円。申し込みは、住所、氏名、年齢、電話番号を書いたはがき（〒819-0013 福岡市西区愛宕浜2-3の2の601）またはメール（otini-hirasa@iwk.dti.ne.jp）、ファクス（092-8882-3883）で大塚さん（090-7992-97758）まで。

コンサート会場に計400の灯明を置く。好天なら大木のクスノキの下で、雨がひどければ本堂で演奏を聴いてもらう。約30人からなる実行委はこの2年ほど、江戸期以前のさまざまな面影を残す姪の浜の魅力を知ってもらおうと、白壁の町屋、寺の長廊に沿った迷路のような路地でのウォークラリーや、町屋内の見学ツアーなどを企画してきた。

その一人で市役所勤務の大塚政徳さん（51）によると、地区内には、主だった寺が八つ、10を越す神社がある。1260年創建の興徳寺は、7千坪を越す境内にクスノキやカシがうっそうと茂る。「興徳寺を抜きに寺町の浜は語れない。お寺独特の空間でしか味わえない音楽を聴いてほしい」と。

境内が外部のイベントに使われるのは初めて。提供を快諾した福山正文住職（67）は「観光寺院ではありませんが、地元の方々が懸命に頑張っておられるので、協力しようと考えました」と話す。

読売新聞 福岡西かわらばん

姪浜大好き落書き消し隊

児童8人 寺でペンキ塗り

「昔からある場所大事にしたい」

福岡市西区の古刹、興徳寺で、児童8人がペンキ塗り作業を行いました。児童らは、寺の境内に広がる古民家の外壁に、落書きを消す作業を行いました。児童らは、寺の境内に広がる古民家の外壁に、落書きを消す作業を行いました。児童らは、寺の境内に広がる古民家の外壁に、落書きを消す作業を行いました。

19 読売新聞 福岡 2014年11月21日(金) 毎日新聞

古い町並み 地域の財産に

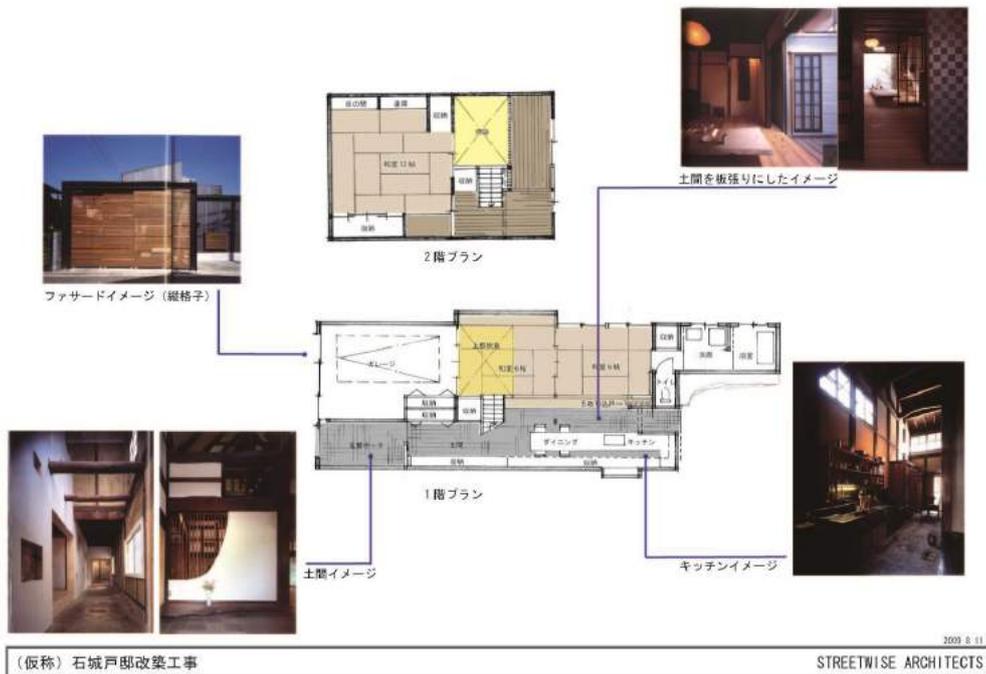
昔ながら生かして 活性化活動

福岡 姪浜 町家や神社仏閣残る「唐津街道」

福岡市西区の古民家並み「唐津街道」が、地域の財産として大切に守られ、活性化活動が進められている。地元住民らによる「落書き消し隊」の活動や、町家の再生などが注目されている。

地域づくり活動において、マスコミの力を借りることは重要であり、イベントや受賞の広報にあたっては「マスコミに記事にもらえる内容」を常に意識して活動を進めてきた。一生懸命活動をして、地域の方々に協議会の活動を知ってもらえなければ、何の意味もないし、何もしないのと同じことである。また、マスコミを通じた地域への情報発信は、地域内外へのPR効果も高く、地域の方々の地域への誇りや愛着の醸成につながっていったと確信している。

(14) 町家再生の実践



これは、町家改修に当たっての相談やアドバイスをし、住まい方や町並み形成への配慮について提案してきたものである。改修にあたり、景観形成に十分配慮していただいた事例もある。その一方、空家状態であった町家の活用について打診し、内部まで調査させていただいた家もあったが、親族の反対で解体・建て替えられた家もある。また、各店舗の自主的な取り組みとして、古い町家や家屋が飲食店やカフェ、美容室などとして再生・活用される事例も増えてきている。これも今までの協議会活動の成果のひとつと言えるだろう。

(15) 灯明コンサート



多くの寺社があることも姪浜の大きな特徴であるが、地域の方々は意外とその歴史や魅力を知らない。灯明コンサートは、音楽だけでなく、普段味わうことのできない幻想的な雰囲気と魅力的な夜間景観を演出し、参加者に姪浜の魅力を伝えていくことを目的に行うものである。平成21年10月に第1回目を開催して以来、これまで5回実施してきた(興徳寺3回、姪浜住吉神社2回)。毎回180~250人が参加。姪浜ならではの空間と時間の中で、至福のひとときを過ごしていただいている。

(16) 旧町名表示板の設置



具体的に目に見える形でまちづくりを実践していくため、協議会でできることから取り組むことになった。その最初の事例が旧町名表示板の設置である。地域の方々に地域への誇りや愛着を感じていただきたいという思いから、昭和 30 年代の町名表示板を作成し、散策コース(景観回遊路)の主要な場所に設置している。これは、会員手作りのプレートであり、協議会オリジナルの事業である。外注するのではなく、会員が手作りで地域への想いを込めて作ることに大きな意義がある。

(17) まちづくり活動拠点（まちの案内所）の開設・運営



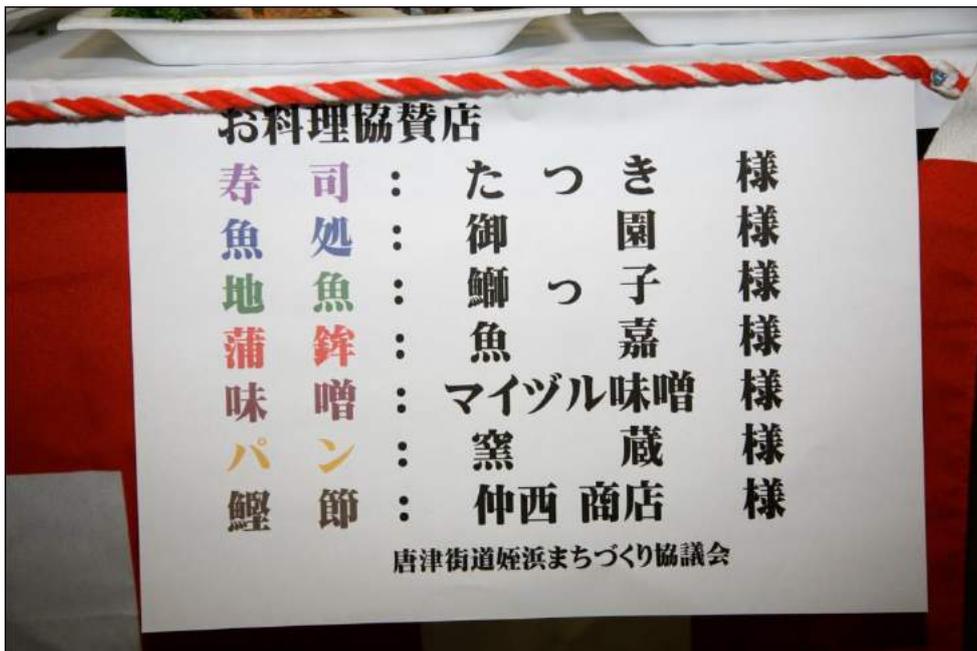
平成 22 年2月に、国の登録有形文化財であり、地域のシンボルとなっているマイヅル味噌の建物内に「まちの案内所」を開設した。これは活動を進める過程で、会議をするスペースや荷物を置くスペースが必要になったものであり、味噌貯蔵用の冷蔵庫が置かれていた 20 m²の部屋を、約3ヶ月かけて会員が手作業で壁塗りや床張り替えるなどを行った。ここでは、会議の他、周辺の見どころを紹介したまち歩きマップやかかわら版の配布、イベントや唐津街道に関する情報提供などを行ってきた。

(18) 姪浜の食材を使った料理でのおもてなし①



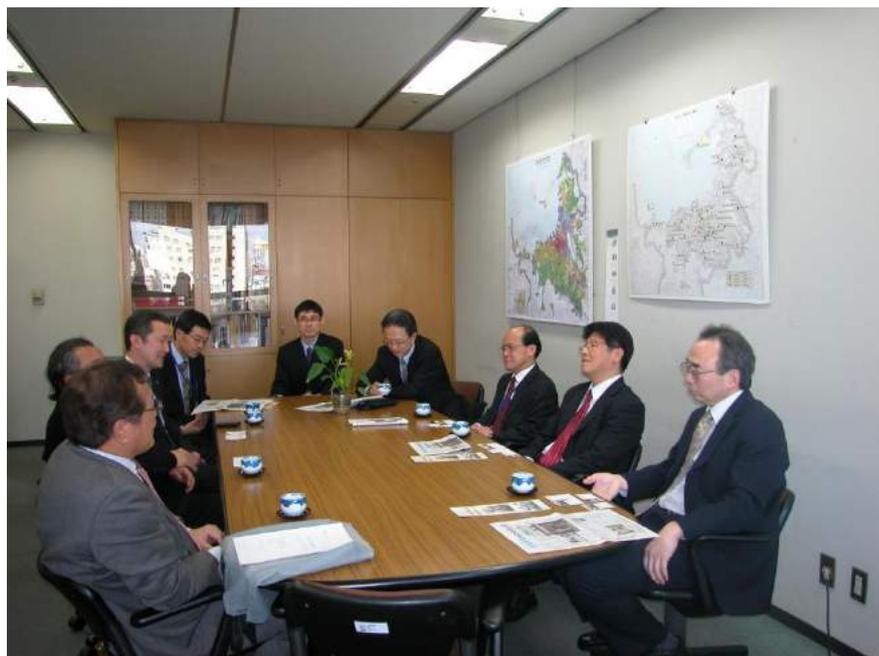
唐津街道サミットや全国町並みゼミなどの懇親会では、姪浜の食材(新鮮な魚、白魚、姪浜海苔など)を使った料理や、姪浜の名産品(魚嘉のかまぼこ、仲西商店の削り節、窯蔵のパンなど)を使った料理を提供し、参加者に大変喜ばれた。これは、肥塚副会長の提案によるもので、こだわりとおもてなしの気持ちを料理に込めたものである。こうした地道な取り組みが、姪浜ブランドの構築につながることを実感した。

(18) 姪浜の食材を使った料理でのおもてなし②



昼食をはさむまち歩きイベントの際に、姪浜の老舗の料理店に協力いただいて特製の姪浜弁当を作っていたり、地域との交流会で姪浜ブランド店の協力をいただき、参加者に提供させていただいたこともある。手間暇はかかり、スタッフは大変であったが、まちづくりにはこうしたこだわりが大切である。中心になって企画・実践していただいたのは肥塚副会長である。姪浜への強い思いを持った肥塚さんならではの企画であり、こうした会員の存在と地道な取り組みが地域内外への発信力につながっていったのである。

(19) 景観づくり地域団体の認定



博多部の御供所地区に続き、福岡市都市景観条例に基づく「景観づくり地域団体」に認定された（平成 22 年3月）。これは、これまでの景観まちづくりに寄与する協議会の活動を福岡市が高く評価し、認定したものである。わかりやすく言えば、協議会が景観形成に配慮したまちづくりを進めていくことを行政が認定できる制度であり、自他ともに「景観」をキーワードとしたまちづくりを進めていくことを地域内外に宣言するものである。筆者が在籍中は「姪浜景観づくりの手引き」と「姪浜景観まちづくり宣言」を策定したが、今後は各会員のスキルアップとともに、地域の方々をいかに巻き込んでいくかが課題である。

(20) 全国区の助成金へのチャレンジ

活動概要	
登録NO	2-59
市町村名	福岡県 唐津市
団体名	唐津街道姪浜まちづくり協議会
活動名	歴史的環境を活かした「住んでよし、訪れてよし」の町並み・まちづくり推進事業

1. 活動地区の概要

唐津街道沿いの旧唐津町界隈(旧唐津地区)には、現在も中世、近世の歴史町並みの中に唐津、福岡市内でも有数の歴史的環境を有している。一方、地区の最西部には唐津のアトレットモール、コトハーパー、池津、南浜公園等が集中しており、市の内外から多くの人々が訪れている。しかし、旧唐津地区の歴史的な魅力は地域内外ともあまり知られておらず、唐津を訪れる人が旧唐津地区に立ち寄ることはほとんどなく、新旧の地域空間は旧唐津地区の活性化や居住環境の向上に活かされていない。



2. 活動内容

(1) 活動拠点(地域の魅力発信拠点、まちの案内所)の運営

・空母有形文化財の博物館に開設した協議会の拠点が、まちづくり活動やまちづくりの情報発信拠、まち案内の拠点となるよう運営した。



(2) まちづくり活動の広場

・まちづくり活動を広く地域住民や観光客に発信することを目的とした「まちづくり互版」を2回発行した。

(3) 地域の魅力資源調査及びその成果を活用したマップ等による情報発信

・従来の「歴史観光マップ」の他に、身近にあっても目撃しにくい見逃している歴史的遺産や重要遺産、生活の軌跡、旧町名の由来、臨海部等の周辺エリアの魅力資源などを調査し、それを基に「まち歩きマップ(まち歩き調査マップ、広域回遊マップ)」を作成し、地域内外に地域の魅力を情報発信した。また、これらの調査結果に「まち歩きマップ(地域の魅力資源集)」を作成した。



(まち歩き互版 新刊号)

(まち歩きマップ)

(4) 景観まちづくりと地域活性化計画の作成

・地域住民を対象としたワークショップを繰り返し実施し、「唐津固有の歴史的環境を活かした町並みづくりと地域の賑わい形成」に向けた「景観まちづくりと地域活性化計画」を作成した。



■「景観まちづくりと地域活性化計画」の骨子

- ◆広域回遊ネットワークづくり
- ◆唐津のまちの個性の再構築(町並み形成)
- ◆商店街の賑わいづくり
- ◆唐津ブランドづくり
- ◆地域を知る集・集會づくり
- ◆環境に優しいまちづくり

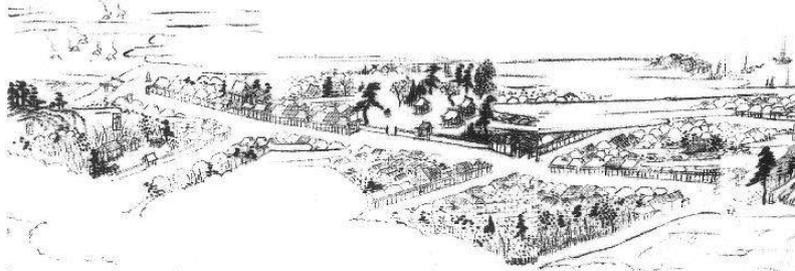
3. 活動の際に悩んだ点

・活動拠点の運営については、賛助体制が整っておらず、協議会会員が不在時には家主であるマイブル借主のオーナーに対応してもらうことになり、今後の課題と考えている。

4. 活動の際に工夫した点

・上記①-④の活動は、相互にリンクしており、より効果的なものとなるよう関連付けながら活動を行った。
 ・「景観まちづくりと地域活性化計画」作成にあたっては、当該地域ならではの実現可能なメニューを盛り込むとともに、平成23年度以降の事業展開を見据えながら計画作成を行った。
 ・景観ガイドツアー、みそ蔵コンサート等の助成対象以外の事業については、まちづくり互版でイベント紹介を行うことで、より効果的に広報活動を行うことができた。

みそ蔵を再び地域のシンボルに! ～姪浜の歴史的・景観的シンボル再生活用プロジェクト～



江戸時代の姪浜と唐津街道(筑前名所図會)

2014年7月
唐津街道姪浜まちづくり協議会

全国区の助成金にも果敢にチャレンジし、まちづくり活動を一層軌道に乗せることができた。筆者は協議会活動全体を見渡し、どの時期にどのような活動を進めていくのかを的確に把握し、それに応じた適切な助成金獲得を常に視野に入れていた。助成金を何に使うのではなく、数ある助成金の中から、協議会の活動状況に応じた助成金を選択し、チャレンジしていくことが大切であり、筆者は常にそれを意識していた。筆者が在籍中は7つの全国区の助成金に採択されたが、打率としては3割5分～4割程度と記憶している。

(21) 地域との交流会



アニバーサリー事業や受賞記念祝賀会では、日頃から協議会の活動にご支援・ご協力いただいている方々をお招きし、交流会を実施してきた。この中では、協議会の活動状況の報告や姪浜在住の演奏家によるミニコンサートを組み込み、交流を深めた。交流会は単なる懇親会ではない。「景観づくり計画」の報告会や「姪浜町家」認定プレート贈呈式などを組み込むことで、地域の方々に協議会の活動状況を伝えることができた。また、地元の音楽家に演奏していただくことで、地域としての一体感も演出することができた。

(22) 九州大学との連携（都市・建築ワークショップ等）



これは、九州大学の大学院生や建築学科3年生を対象にしたワークショップである。「今の学生は社会との接点が少なく、何でもできると思込んでいる」ということで、地域に出かけ、実際にまちづくり団体がどのような取り組みをしているのかを学ぶため、企画しているとのことである。一人でも多くの学生に、姪浜というまちに関心を持っていただけたらと思う。社会人になってからも、それぞれの地域のためにまちづくり活動に尽力している人々がいることを認識していただくとともに、こうしたフィールドワークの体験を今後の仕事に活かしてほしいと思う。

(23) 様々な場面での姪浜の PR



様々な賞を受賞する中で、国や自治体などからの依頼による視察研修を受け入れてきた。こうした場では、それぞれの時期の地域課題に対応した目標を立て、具体的な活動を粘り強く実践してきたことを PR させていただいた。町並み形成という点ではまだ成果は出ていないが、地道で多彩な活動は他の自治体や関係者の皆さま方にも大いに参考にしていただけたことと思う。こうした地道な PR は、いろいろな地域のまちづくり団体からの視察の増加につながっていった。

(24) 視察受入&意見交換



様々な賞を受賞する中で、他の地域のまちづくり団体からの視察研修も増えてきた。多彩な活動をPRするとともに、姪浜の見どころを案内させていただいた。活動を始めた頃はこちらが視察に行くことが多かったが、姪浜をフィールドにこうした視察研修を実施していただくことをとても光栄に思う。他の団体の取り組みについて、むしろ筆者らが見習うことの方がまだまだ多いと思う。協議会にとって、受賞はあくまで通過点であり、謙虚な姿勢でさらに活動を推進していく必要がある。

(25) かわら版の発行



かわら版は、姪浜の魅力やまちづくり活動を地域の方々に広く発信することを目的としている。協議会活動を主体に、イベント情報の提供の他、「姪浜・まちかど遺産ピクニック」「まちなみ今昔」「トピック」「事務局長通信」などを掲載した(A3版、両面カラー)。姪北校区や姪浜校区での回覧板での広報の他、協議会案内所、地域内の主要なお店、近隣の5公民館、西区役所、福岡市情報プラザなどで配布した。地域内外の評判も上々であり、協議会の活動を広くPRする絶好の機会となっていた。筆者が協議会に在籍中、編集長として創刊号～第9号、号外(1回)の計10回発行した。

(26) まちづくり計画策定ワークショップ



新旧の多彩な「よかところ」を姪浜の個性として活かすことができるような「まちづくり・町並み景観づくり」を地域の方々とともに進めていくため、まずは、まちづくりの共有指針となるまちづくり計画策定に向けて、地域住民を対象としたワークショップを行った。テーマは、「地域固有の歴史的環境を活かした町並みづくり」「歴史的魅力を活かしつつ、臨海部の集客施設との連携をも考慮した商店街の賑わい形成」などであるが、具体的でわかりやすい課題を出し合いながら、楽しく取り組むことで、参加者に姪浜のまちづくりに関心を持っていただいた。

(27) 「元気！姪浜計画」の策定



ワークショップやアンケート調査などを踏まえ、「元気！姪浜計画」を策定した。これは、地域による、地域のためのまちづくり計画であり、短期、中期、長期ごとに、具体的に何をしていくかの方向性を示したものである。協議会では、地元の人にとっては「住みやすさ・暮らしやすさ」のあるまち、訪れる人にとっては「楽しさ」のあるまちの実現を目標として、新旧の多彩な「よかとこ」を姪浜の個性として活かすことができるような「まちづくり・町並み景観づくり」を地域の皆さまとともに進めていきたいと考えている。「元気！姪浜計画」は、こうした想いを込めて策定したもので、地域のまちづくりの共有指針となるものと考えている。今後、具体的な実践活動に取り組んでいく必要がある。

(28) 女性部会「はまこみち」の発足・活動



女性部会「はまこみち」は、まちづくり講演会の講師である高山美佳氏(地域デザイナー)の「地域の活性化は、女性の口コミで大きく変化していく」という言葉に感銘を受け、女性4人で立ち上げたものである。「演劇ワークショップ」「はまこみちカフェ」「姪浜漁協の協力による魚料理教室」「秋のコンサートIN 姪浜住吉神社(津軽三味線コンサート)」など、女性ならではの視点を活かした地道な活動を精力的に展開してきた。しかし、男性会員とのコミュニケーション不足などにより、女性部会としては2年程で解散し、新たな組織「姪浜商店街の女将さんを応援する会あこめっこ」を立ち上げ、活動を進めている。

(30) 「姪浜ブランド」のPR



「姪浜ブランド」に認定するだけでなく、協議会としても機会を捉えて広くPRすることで、お店だけでなく、地域にとっても宣伝効果は高いと考えている(Win-Win-Winの関係)。協議会のイベントだけでなく、唐津街道サミットの活動の一環としても西新商店街や西新プラリバで販売活動をし、PRさせていただいたこともある。また、マスコミ取材においても、姪浜ブランド店や商品を率先して紹介している。こうした活動により、姪浜ブランド店との信頼関係を強くし、絆を構築できたと確信している。

(31) 景観づくり委員会



「元気！姪浜計画」の主要な基本方針のひとつである「姪浜のまちの個性の再構築（住まいづくり・町並み景観づくり）」の実現に向けて、地元関係者、関係団体、九大生、専門家、行政職員などで構成する「唐津街道姪浜景観づくり委員会」を立ち上げ、景観づくり計画の検討を進めていった。具体的には、ワークショップ形式を取り入れながら、各委員から町並み形成や地域活性化に向けた多彩なアイデアをいただきながら段階的に検討を重ねた。

(32) 「景観づくり計画」の策定

姪浜景観づくり計画



平成 24 年 6 月
 姪浜景観づくり委員会
 唐津街道姪浜まちづくり協議会

地域の個性が息づく路地

●キーワード：「家柄」が生まれるような路地に育てる。
 ・路地にはたくさんの路地があります。寺社の路地、宿屋の路地、数代前の家柄など、総称それぞれが持つ異なる特徴を活かした景観づくりを提案すれば、歴史のまことに一層の魅力が加わります。「家が生まれる路地」や「回遊したくなる路地」を育てていきましょう。

■事例：まちの歴史を感じさせる路地

★田：宿屋地区の事例

★住吉神社土蔵の路地 ★南光寺様の路地 ★光福寺様の路地

■事例：情緒やわくわく感のある路地

★日輪寺前の路地 最新商店街の路地（建物から突き出た看板が少なかったために広さが狭まっています）

■事例：花や緑が気持ちをなごませる路地

★姪浜通り陽の路地

＜参考＞景観づくり委員会委員の提案①
 ●景観づくりについて
 ○みんなが少しでも景観を良くするつもり
 ○景観に対する勉強会の開催の経費をゆとりなく
 ○景観のまちづくり委員会にディスカッションする場
 ○景観のまちづくり委員会に景観のまちづくりの事例の集約の必要
 ○お定の場所で行なわれるまちづくりの勉強会
 ○お定の場所で行なわれるまちづくりの勉強会
 ○お定の場所で行なわれるまちづくりの勉強会



景観づくり委員会での議論を踏まえ、平成 24 年6月に「景観づくり計画ステップ1～景観づくりの考え方と景観よかこと事例集～」を策定。その後も議論を重ね、26 年3月に「景観づくり計画ステップ2」を策定した。ステップ2では、姪浜固有の地域資源を活かした景観づくりを浸透させ展開していくため、「景観づくりと並行して進めるべき実践活動」や「景観づくり推進組織」についても提案している。

(33) 「姪浜町家」の策定



姪浜には、江戸時代から昭和初期にかけて建てられた約 100 軒の町家が残っているが、老朽化や後継者不足などの理由で取り壊される家が増えている中で、当協議会が独自に「姪浜町家」に認定することで、価値を再認識していただくきっかけになればと考え、こうした取り組みを始めた。選定にあたっては、当協議会のメンバーが平成 23 年秋から現地調査や所有者へのヒアリングを行い、保存状態や町並みへの貢献度などを総合的に判断し、姪浜町家として認定した。認定した町家の所有者には、当協議会から手作りの認定プレートを贈呈させていただいた。筆者が協議会に在籍中 26 軒の町家を認定した。

(34) ディスカバー姪浜展を主体としたウィークリー事業①



これは、みそ蔵をメイン会場とした一週間単位の事業であり、姪浜に関する絵画や写真などを展示した「ディスカバー姪浜展」と、「みそ蔵コンサート」「姪浜シネマ」「景観歴史発掘ガイドツアー」などを組み合わせたものである。姪浜の多彩な魅力を知っていただけたことと思う。この他、講演会やワークショップなど様々な組み合わせにも取り組んできた。

(34) ディスカバー姪浜展を主体としたウィークリー事業②



これは、みそ蔵をメイン会場とした一週間単位の事業であり、姪浜に関する絵画や写真などを展示した「ディスカバー姪浜展」と、「みそ蔵コンサート」「姪浜シネマ」「景観歴史発掘ガイドツアー」などを組み合わせたものである。姪浜の多彩な魅力を知っていただけたことと思う。この他、講演会やワークショップなど様々な組み合わせにも取り組んできた。

(35) 町家活用イベント（姪浜シネマ、町家コンサート）



これは、みそ蔵以外の歴史的建造物の活用の可能性を探るため、伝統的町家で映画の鑑賞会やコンサートを企画・実施したものである。姪浜ならではの魅力を発信していくためには、公民館などではなく、姪浜ならではの場所にこだわる必要がある。今後は、空家となっている町家の活用の可能性も検討する必要がある。

(36) 着物で唐津街道の町並みをそぞろ歩き



姪浜らしさにこだわった事業にチャレンジしていく一環として、「着物で唐津街道の町並みをそぞろ歩き」を定期的 to 実施した。これは、唐津街道の趣のある町並みを着物で散策しながら、まちの歴史や景観を学び、伝統文化に触れてもらうものである。春は光福寺や万正寺、観音寺の満開の桜に、秋は興徳寺や住吉神社の紅葉に参加者に大変喜んでいただいた。沿道の方々も美しい着物姿に魅了された様子で、「着物の似合うまち・姪浜」をアピールできた。

(37) まちなみネットワーク活動



平成 24 年度に「全国町並みゼミ福岡大会」が開催されたことを契機として、福岡県内で町並みなどの地域遺産の保存継承に取り組む団体が「まちなみネットワークふくおか」を組織し、平成 25 年度から持ち回りで「まちなみフォーラム」を開催している。姪浜で第1回目を開催、その後も大川（小保・榎津）、内野宿、津屋崎で開催している。地域遺産を活かしたまちづくりの方向性や、その戦略と実践方策について考え、姪浜の景観づくりのヒントもたくさんいただき、今後役に立てていきたいと思ったところである。

(38) 地域のシンボルであるみそ蔵の再生・継続的活用に向けた活動①



旧マイヅル味噌のみそ蔵は、姪浜の歴史的・景観的シンボルであり、地域のまちづくり・景観づくりに欠かせない重要な建物である。筆者らは、地域のシンボリックな空間を残し、何らかの形で活用していきたいと考え、所有者の協力を得て平成 25 年秋から定期的に特別公開させていただいた。また、公開に合わせ「姪浜展」「トークショー」「ワークショップ」「みそ蔵コンサート」などを開催し、建物の価値や後世に残していくことの意義、活用方法について、来場者と考えてきた。

(38) 地域のシンボルであるみそ蔵の再生・継続的活用に向けた活動②



旧マイヅル味噌のみそ蔵は、姪浜の歴史的・景観的シンボルであり、地域のまちづくり・景観づくりに欠かせない重要な建物である。筆者らは、地域のシンボリックな空間を残し、何らかの形で活用していきたいと考え、所有者の協力を得て平成 25 年秋から定期的に特別公開させていただいた。また、公開に合わせ「姪浜展」「トークショー」「ワークショップ」「みそ蔵コンサート」などを開催し、建物の価値や後世に残していくことの意義、活用方法について、来場者と考えてきた。

(39) 子どもたちを対象にした景観づくり普及活動①



次の世代を担う子どもたちにも姪浜の魅力を伝えていきたいと考え、子どもたちを対象にした事業にも取り組んできた。「子どもまちなみ探検隊」では、歴史ある寺社、昔ながらの町家、迷路のような路地、そして蒲鉾や削り節の試食というような姪浜ならではの内容に、参加した子どもたちは興味津々で大満足の様であった。まち歩き後に俳句を詠んでもらい、子どもたちの感性の高さに驚かされたこともある。また、景観回遊路に面した、落書きの酷かったお寺の塀を子どもたちに手伝ってもらい、きれいに修景(塗装)したこともある。

(39) 子どもたちを対象にした景観づくり普及活動②



次の世代を担う子どもたちにも姪浜の魅力伝えていきたいと考え、子どもたちを対象にした事業にも取り組んできた。「遊覧船&夏休み親子まちなみ探検隊」は、海や港との関わりの深い姪浜の魅力を再発見するガイドツアーである。魚市場の競りやクルーザーなどを見学した後、遊覧船に乗船し博多湾から福岡のまちなみを楽しもうというものである。猛暑の中であったが、約 20 名の親子が参加。世界 55 ヶ国から姪浜港を選んでいただき、ヨット生活を送っているヤップさんの双胴船にも乗船させていただき、子どもたちは大喜びの様子であった。



住民組織「姪浜まちづくり協」



福岡市西区姪浜地区の地域おこしグループ「唐津街道姪浜まちづくり協議会」が、NPO「都市計画家協会」（東京）が主催する全国大会で第1席の「日本まちづくり大賞」を受賞した。江戸時代、街道の宿場町として栄えた姪浜の歴史や街並みを今に伝える地道な活動が実を結んだ。

同協議会は2007年3月、地元住民らで結成。現在46人のメンバーが、街道

沿いに残る町家の保存や歴史散策ツアーのガイド、地域情報を盛り込んだ「かわら版」の発行などに取り組んでいる。

全国大会は今年5、6日、新潟県長岡市であった。応募した全国のNPOや住民グループなど14団体のうち、書類審査を通過した8団体が集まり、各団体の代表者がプレゼンテーションを行った。

審査は、大学の名誉教授や都市計画のコンサルタ

宿場町の歴史伝え日本

都市計画の
全国大会

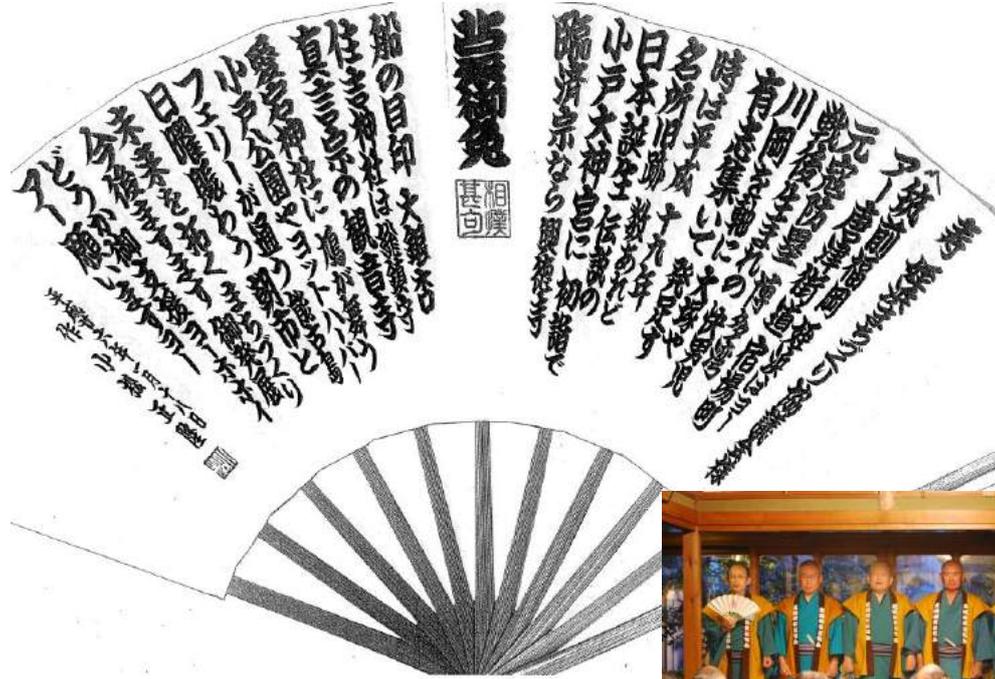
町家保存や散策ツアーガイド
多彩な取り組み 高評価

ントら8人。大会参加者ら約50人による一般投票もあり、審査の参考にした。一般投票でトップに立った同協議会は、審査員からも「活動が多彩で地道で着実」と高く評価され、日本一の座に輝いた。

プレゼンテーションをした同協議会事務局長の大塚政徳さん(55)は「地元を根を張った私たちの活動が全国的にも評価されて光栄。会長の川岡保さん(65)は「地域住民の協力があってこそ受賞につながった。これを糧に姪浜の魅力をさらに発信していきたい」と語った。(首藤厚之)

平成25年度～27年度に全国区の賞に果敢にチャレンジし、5つの賞を受賞した。これに伴い、マスコミからの取材も大幅に増えた。特に「NPO 都市計画家協会日本まちづくり大賞」や「都市景観大賞（国土交通大臣賞）」の受賞は全国へのPR効果も高く、いろいろな取材を受けたり、遠方から視察に来られる団体も出てきた。また、地域の団体や住民の皆さま方からも協議会の活動を評価していただけようになった。各種賞の受賞及びそれに伴うマスコミを通じた地域への情報発信は、地域の皆さま方の地域への誇りや愛着の醸成につながっていったと確信している。

(41) 地域からの贈り物



姪の浜史跡めぐりの歌

- 一 博多の駅をあとにして 姪の浜へいざ行かん
地下のトンネル走り行く 空港線の心地よき
- 二 唐津に向かう筑肥線 相互乗り入れ便利よく
高架のホームの姪の浜 行き交うバスも絶え間なし
- 三 白魚踊る室見川 河口に貝掘る人もあり
愛宕の山は木々青く 雨はかすむ叶ヶ岳
- 四 姪浜駅の北口に 立てば母校の内浜小
我も娘も時超えて 学びて遊ぶ楽しさよ
- 五 渡船場の岸あとにして フェリーに乗れば十分余
春は桜の能古の島 夏は涼しさ森の陰
- 六 コスモスの花の咲く頃は アイランドパークで楽しまん
集まる親子も数知れず 夕焼けの空も忘れぬ
- 七 権一雄の旧宅や 思索の森に展望台
立ちて東を眺めれば 海の中道 志賀の島
- 八 遠い故郷に妻や子を 残して来たる防人の
うたも哀しや万葉に 心を映す波の色
- 九 父は二十で遠泳し 能古の向かいの岸につく
小戸公園と今は呼ぶ 遊ぶ親子の数多し
- 十 神功皇后の凱旋を 今も語るか磯の風
小戸大神宮も祀られて 神代を偲ぶ御膳立

- 十一 袖ヶ浜を後にして 名柄の川に沿い行けば
鎌倉武士の昔より 建てる楚は興徳寺
- 十二 しっくい塗りの白壁や 町家作りの小格子の
奥に三毛猫昼寝して カラス飛んでも目もさめず
- 十三 街道に沿う水町に 仰ぐイチョウの天満宮
梅の香かおる境内に 祀るは菅原道真公
- 十四 その梅の実は七草の 粥とて今年々に
詣でる人にふるまって 今に伝わる鬼すべよ
- 十五 いかなる縁か室町の 昔に建てる照林寺
その御霊屋の奥深く 菅公の神体祀られて
- 十六 過ぎし昔の吉日に 舞鶴城より移せしと
み輿の裏に墨黒く 残せし人は誰ならん
- 十七 母を亡くして幾年ぞ 彼岸に参る菩提寺の
墓前に香をくゆらせて 祈るは君と子らのため
- 十八 九州霊場 法蔵院 春は甘茶の花まつり
秋は歩きの町めぐり 参拝男女四時絶えず
- 十九 銀杏の実の熟すころ 順光寺の横通り
三叉路に立つ庚申塔 ゆかり知る人今いずこ
- 二十 枕の草子の昔より 近くは志ん生の落部まで
庚申待ちの名を留めし 赤きお面は猿田彦

平成 25 年度に3つの栄えある賞をいただき、マスコミに大きく取り上げられたこともあり、地域の皆さま方から「姪の浜史跡めぐりの歌」を作っていただいたり、姪浜の名所旧跡及び三賞受賞に関する「相撲甚句」を作っていただいた。相撲甚句については、協議会のイベントでも2回披露していただき、出席された方々も大変感激されていた。こうした地域の方々からの贈り物は、「地域資源の保全・活用に向けた意識醸成と双方向のまちづくりへの展開」につながりつつあると感じた次第である。

(42) 景観まちづくり宣言

「姪浜景観まちづくり宣言～姪浜の宝を福岡市民の宝に！～」

姪浜のまちを眺めながらじっくりと歩いてみると、町並みのそこそこにたくさんの「よかところ」を発見することができます。歴史ある数々の寺社、古い町家、唐津街道、路地、祠、お堂、寺社や民家の花・緑、港の風景など数え上げると切りがありません。このように姪浜は「寺町」「宿場町」「港町（漁師町、廻船町）」の面影を今に伝える全国的にも珍しいまちです。

私たちは、地元の人たちにとっては「住みやすさ・暮らしやすさ」のあるまち、訪れる人たちにとっては「楽しさ」のあるまちの実現を目標として、このような多彩な「よかところ」を姪浜の個性として活かすことができるような「まちづくり・町並み景観づくり」を地域の皆さま方とともに具体的に実践していくため、ここに「姪浜景観まちづくり宣言」を行います。

『姪浜の宝を福岡市民の宝に！』の実現に向けて、地域の総力を結集して取り組んでいきましょう。

○姪浜ならではの多彩な歴史や文化を活かした景観づくりを進めよう

興徳寺や住吉神社に代表される寺社、江戸時代から昭和時代にかけての伝統的な町家、唐津街道の宿場の名残を感じさせる町並みや道の形、海辺のまち独特の路地のネットワーク、祠、お堂、寺社の豊かな緑、港の風景などは、姪浜固有の宝（魅力資源）です。これらを最大限に活用した景観づくりを地域協働で進めていきましょう。

○地域の貴重な財産である町家を現代的視点で再評価し、積極的に活用しよう

町家は、地域の長い歴史の中で生み出された建築様式です。「寒い」「暗い」「暮らしにくい」ということをよく聞きますが、もともとプライバシーや採光、通風の確保など生活の知恵が詰まった家です。最近では、快適な暮らし方が提案された事例やレストランなどとして再生された事例も多く見ることができます。こうした町家の特性を現代的視点で再評価し、住居や店舗として積極的に活用していきましょう。私たちも町家を保全・再生・活用するための体制づくりを進めていきます。

○新しい建物や駐車場も町並みの向上に貢献するような景観づくりの工夫をしよう

様々な事情で古い町家が解体され、その後はワンルーム形式のマンションやアパートが建ったり、駐車場になったりしています。新しい建物や駐車場も町並みの連続性や色彩、緑化などに配慮し、地域の町並み形成に積極的に参加していきましょう。

○景観づくりを住みやすさ・暮らしやすさや商店街の賑わい創出につなげよう

「何のための景観づくりか？」「だれのための景観づくりか？」ということをよく耳にします。姪浜の景観づくりは外観を整えたり、観光化することが主な目的ではありません。私たちは、姪浜ならではの魅力資源を活かした景観づくりの取り組みにより、「地域の皆さま方が歴史ある姪浜に暮らし、ここで商売することに誇りと愛着を持ち続けてほしい」と考えています。そして、街道や路地を活かした地域コミュニティと会話が生まれる対面型の商店街を再生し、高齢者や子どもたちの姿が溢れるまちにしていきましょう。

○子どもたちに誇りをもって手渡すことのできる景観づくりをしよう

姪浜には多くの宝があります。しかし、まちの宝や伝統はそのまま放っておくと錆びたり朽ちたりして、最後には消滅してしまいます。まちの宝や伝統に磨きをかけて次の世代にバトンタッチしていきましょう。また、子どもたちといっしょに姪浜を歩いてまちの姿をともに観察し、姪浜の宝や物語を伝えるなど、子どもたちが姪浜に関心や誇りを持つための入口をつくってあげましょう。

平成26年3月14日

唐津街道姪浜まちづくり協議会、唐津街道姪浜景観づくり委員会

景観づくり計画が示す姪浜の景観づくりの方向性をわかりやすく示し、地域の皆さま方と共有するため、「姪浜景観まちづくり宣言～姪浜の宝を福岡市民の宝に！～」を策定した。この宣言を踏まえ、地域の関係団体や住民の方々とのさらなる協力と幅広い参加をいただきながら、より詳細な計画を策定するとともに、具体的な景観づくりを実践していくこととしたが、まだ道半ばである。地域の方々を中心とした景観づくりの取り組みはこれからである。

(44) 海を意識したプロジェクト（遊覧船等）



各種イベントの実施に当たっては、常に「姪浜らしさ」にこだわり、チャレンジしてきた。その代表的なものが、「遊覧船で巡る福岡の歴史とまちなみ」であり、従来のまち歩きに加え、博多湾から姪浜周辺を眺め、歴史解説を行うことで、海との関わりが深い姪浜の歴史をより知っていただくことができた。また、「遊覧船&夏休み親子まちなみ探検隊」や「遊覧船から見る福岡のまちなみと花火大会」も実施し、参加した皆さま方に大変喜んでいただいた。しかし、遊覧船の運航が中止となり、新たな取り組みにチャレンジしていく必要がある。

(45) 「TEAM 姪浜ネクスト」の推進



次のステージに向けた姪浜のまちづくりを地域の方々といっしょに考えていくため、「姪浜ネクスト」の推進に向けて動き出した。これは、福岡市が推進する「福岡ネクスト」の姪浜版で、みんなの想いをひとつにして、姪浜の多彩な「よかところ」を活かしたまちづくりの実現に向けて取り組もうとするものである。3回の準備会を行い、28年3月に「姪浜ネクスト・まちづくり行動委員会」として発足した。姪浜を取り巻く環境の変化に対応していくためには、地域内のいろいろな関係団体と連携して取り組んでいく必要がある。

(46) win-win-win-win 方式による、まち歩きマップの作成・発行



まち歩きマップの改訂に当たり、まちづくり活動の継続性及び「来訪者」「店舗」「姪浜地域」「協議会」の4者の Win-Win-Win-Win の関係構築を目指し、各店舗の協賛を得ながら取り組んでいくこととした。

- ◆来 訪 者……姪浜の魅力を楽しむことができる。
- ◆店 舗……来訪者や地域の方々にお店の情報を伝えることができる。
- ◆姪浜地域……姪浜の魅力を地域内外に発信できる。
- ◆協 議 会……継続的なまちづくり活動に必要な財源を確保できる。

(47) ポストみそ蔵としての「まち旅プロジェクト計画」の策定

姪浜まち旅プロジェクト計画

- 【まち旅を進めていく背景】……………1
- 【まち旅プロジェクトの実施に向けたモデル的試行】……………3
- 【まち旅プロジェクト推進のための情報発信ツールの整備】……………6
 - 1 着地型観光まち歩きマップの作成・印刷
 - 2 まちの案内所の整備
- 【姪浜まち旅プロジェクト計画】……………7
 - 1 活かすべき多様な魅力資源
 - 2 今後考えられるプログラム
 - 3 今後の課題
 - 4 実施に向けて



2016年3月
鹿津街道経済まちづくり協議会

【まち旅プロジェクト推進のための情報発信ツールの整備】

- 1 着地型観光まち歩きマップの作成・印刷
 - 参加者の反応やワークショップ、関係団体のヒアリング等を踏まえ、着地型観光まち歩きマップを作成・印刷した。
 - ・経路の見どころ紹介（歴史、まちのみ、食、祭り、お薦めのお店等）
 - ・マップ的なまち歩きコース 等

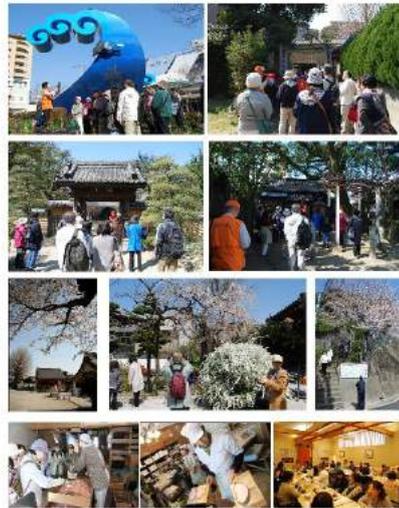


- 2 まちの案内所の整備
 - 平成27年12月に空き店舗を活用して開設した案内所は、地域の情報発信、コミュニティの場となるよう運営するとともに、ここを拠点として観光ならではの多様な魅力資源を活かしたまちづくり活動を実施していく。



-6-

- (5) 白うきぎ伝説と名の通り名所巡り＆鹿高ブランド産物巡り（8月）
 - 白うき歴史とこ案内人のガイドによるガイドツアー。祭所に古くから伝わる「白うきぎ伝説（真徳寺園前）」「武内首領伝説（真徳寺神社園前）」「探検家伝説（鎌倉園前が実家の光景に似て探検を題材とした場所。日本の探検の象徴）」に関する場所や、鹿高の伝説の名所（地蔵堂、住吉神社、方正寺等）、鹿高ブランド店（老舗の折り鶴店、海苔店、パン屋、料理店）を巡り、45名参加（一般市民、関係者）。



-5-

(3) 多様なイベント

- 歴史教育と桜の名所巡りツアー（春）
- 歴史教育と紅葉巡りツアー（秋）
- 着物でまほろ歩き（春、秋）
- 遊覧船から見る花火大会（夏）



(4) 講座

- 会社講話（住職や官前の講師と城内敷内敷）



(5) コンサート

- 灯明コンサート（真徳寺、住吉神社）
- 町家コンサート（番住邸、若狭邸）
- 町家コンサート高松成ブランド科巻（鹿園）



-9-

『みそ蔵に代わる地域のシンボルとなる新たな魅力スポットや姪浜らしさにこだわった多彩な事業の発掘・発信』という課題を踏まえ、姪浜のまちづくりの次のステージ「姪浜ネクスト」の一環として、地域内の各団体と協働で、姪浜の多彩なよかところを再発掘・活用する「姪浜まち旅プロジェクト計画」に取り組んできた。これは、姪浜の魅力を地域内外に発信し、身の丈にあった観光スタイル(着地型観光)の定着を目指していくとともに、コミュニティ交流や商店街活性化、地域に対する誇りや愛着の醸成につなげていくものである。

(48) 空き店舗を活用した新案内所の開設



平成27年12月に空き店舗を活用して開設した新案内所を、地域の情報発信、コミュニティの場となるよう運営するとともに、空き店舗活用のモデルとしてPRし、地域内への空き店舗活用の波及を目指していくものである。また、ここを拠点として姪浜ならではの多彩な魅力資源を活かしたまちづくり活動を実践していくものである。そのため、地域内の関係団体等と協働・連携して「姪浜ネクスト・まちづくり行動委員会」を立ち上げ、具体的なまちづくり実践計画書を策定し、モデル事業を実施していくこととした。

進行形！景観まちづくり ～歴史的資源を活かした町並みづくりと賑わいづくり～

唐津街道姪浜まちづくり協議会
事務局長 大塚政徳

姪浜と私

平成 17 年 3 月の福岡県西方沖地震、それが私の人生の大きな転機となりました。私の住む姪浜でも多くの町家や寺社が被害を受けました。被害を受けて改めて気付くというのは残念ですが、しかし、「姪浜にはこんなに素晴らしい歴史的資源が残っていたのか。まだ遅くはない。歴史的な環境を活かしたまちづくりを進める上で、これが最後に最後のチャンスだ。」と前向きに考え、地域の関係者に声をかけ、2 年後にまちづくり協議会を立ち上げました。私が 49 歳の時です。

それまで福岡市職員として長く景観行政に携わっていながら、自分が住む地域のことにはあまり関心がありませんでした。それからは今までの 20 年間を取り戻すかのように『姪浜の宝を福岡市民の宝に！』を目標に精力的に活動を続け、地域から感謝状もいただきました。

30 歳代後半までは、職場でも「セブンイレブン（朝 7 時から夜 11 時まで）」と言われるぐらいに働きましたが、今後は、はやりの二刀流ではありませんが、地域への恩返しを込めて、「人生は二刀流、二毛作」をテーマに息長く、そして仲間とともに楽しく地域活動に関わっていきたいと思います。

本稿で紹介するのは、福岡市職員でもある私が景観行政の知識と経験を活かし、業務の枠を超えて地域の景観づくりに取り組んでいる事例です。まちづくり事例としてだけでなく、読者の皆さま方の今後の役所生活の参考にもなれば幸いです。

宝のまち・姪浜～姪浜の歴史と魅力～

姪浜は、人口 150 万人都市・福岡市の西区の中心的地域です。地下鉄の終点駅なので、名前を聞かれたことがあるかもしれません。ややもすると通り過ぎてしまいそうな姪浜の町並みですが、じっくりと歩いてみると、町並みのそこそこにたくさんの「よかところ」を発見することができます。その中には私たちの先人たちから受け継いできたものもあり、また、その上に新たに追加されたもの、生み出されたものもあります。

先人たちから受け継いできたものの代表は、日本誕生の神話や神功皇后伝説、奈良時代や鎌倉時代からの歴史を持つ神社やお寺の数々、元寇防塁、小戸から生の松原にかけての白砂青松、江戸時代に栄えた唐津街道の町並み、港の風景などたくさんあります。一方、姪浜駅周辺や海沿いの現代的な商業施設や高層マンションなどは、姪浜の環境の良さや便利さが生み出した新たな風景です。

このように姪浜は新しいものと古いものが共存するまちですが、区画整理によって新しく生まれ変わった姪浜駅周辺と、海辺のマリノアシティの間であって、ぽつんと取り残されたように歴史的な環境が残っている地域があります。ここが私たちの主な活動

地域で、宿場町、商人町、漁師町、寺町の4つの顔を備えた全国的にも珍しいまちです。その中央を東西に走る唐津街道を中心に、数多くの寺社や古い町家、路地などが残り、今でも街道の名残を感じさせる町並みが継承されています（写真1）。



写真1：街道の名残を感じさせる姪浜の町並み

活動のきっかけとねらい、協議会の体制

姪浜では、平成17年の福岡県西方沖地震の影響や都市化の進展等による町家の減少、マンションや駐車場の増加等により、地域固有の歴史的景観が次第に失われつつあります。このような状況の中で、歴史的な環境を活かしたまちづくりを進める上で今が正念場であると考え、危機感を持って立ち上がった私を含む福岡市職員が中心となって、平成19年3月に「唐津街道姪浜まちづくり協議会」を立ち上げました。

当初は地域外のメンバーを中心に十数名のメンバーでスタートしましたが、今では協力会員を含め46名がメンバーとなっており、建築士、コンサルタント、地方史研究家、写真家、大学生、地域住民等の多様な構成が特徴です。年齢的には40～60歳代の男性が中心ですが、なかには、仕事や家庭の都合で一度姪浜を離れた人や定年後に姪浜に戻ってきた人が、われわれの活動に刺激を受けて活動に関わりだした例もあります。こうしたメンバーが「ばか者、よそ者、若者」の視点を大切にして、『姪浜の宝を福岡市民の宝に！』を目標に、姪浜ならではの多彩な魅力資源を活かした地域協働のまちづくりを精力的に推進しています。

ちなみに、立ち上げ当初の中心メンバーであった市役所職員のうち、現在まで続いているのは私だけです（途中から参加しているメンバーには市役所職員が2名います）。歴史や町並みに興味があるだけでは目標を持ち続けるのが難しく、また、何かメリットを感じられないと地域活動は続かないのかな、と思っています。

唐津街道姪浜まちづくり協議会の活動内容

協議会は平成19年の立ち上げ以降、以下のようにステップアップしながら活動を展

開しています。

◆ 1st ステージ（主に平成 19 年度～）

『地域の魅力の再認識と地域内外への発信』を目標に、「まち歩きマップや瓦版の発行」「まちづくり活動拠点の設置」等による姪浜の見どころ・活動の情報提供や、「景観歴史発掘ガイドツアー」「国の登録有形文化財でのみそ蔵コンサート」「歴史ある寺社での灯明コンサート」等の多彩な町並みイベントを実施しています。

◆ 2nd ステージ（主に平成 22 年度～）

『地域協働のまちづくり計画の策定』を目標に、住民参加のワークショップも取り入れながら「元気！姪浜計画や景観づくり計画の策定」を行っています。また、『景観まちづくりの実践と姪浜ブランドの構築』を目標に、「町家再生の実践」「旧町名表示板の設置」「姪浜ブランドや姪浜町家の認定」等の具体的な活動を展開し、目に見える形でまちづくりの効果を伝えています。

最近では、「子どもまちなみ探検隊」「子ども落書き消し隊（写真 2）」等の次の世代を担う子どもたちを対象にした景観教育にも取り組んでいます。

◆ 3rd ステージ（平成 26 年度～）

『国の登録文化財のみそ蔵を中心とした姪浜のまちなみの個性の再構築』を目標に、「景観づくりの手引き」を発行し地域への普及活動を行うとともに、平成 25 年末に味噌の製造場としての約 1 世紀の役割を終えて閉店した旧マイヅル味噌のみそ蔵（姪浜の歴史的・景観的シンボル）の再生・継続的活用に向けた活動を展開中です。



写真 2：次代の子どもたちを育てる景観教育

取り組みのポイント～人を活かす、資源を活かす～

このようにまちづくりの各段階に対応した多彩な活動を、協議会に参加している地域内外の人々の多様なノウハウ・スキルをフルに活用しながら、また関係団体、九州大学、行政、NPO 等と協働で進めています。私も、福岡市職員として培った専門性と企画力、人的ネットワーク等を存分に活用し、会の事務局長として力を発揮しています。特に公

務員が長じるスキルである「各段階の課題に対応して段階的・長期的視点で取り組むこと」「職業・性格・意見の異なる十人十色の会員をまとめること」はまちづくりの現場で活かされています。

また、全国どこに行っても同じような町並みの形成が進む中で、「何これ！」と思うような地域に埋もれている身近な魅力資源を掘り起こすことが、姪浜ならではのまちづくり・景観づくりにつながると考えており、景観行政の経験を存分に発揮できる場面もあります。

地域内外からの反応・反響

こうした活動による地域住民の反応ですが、「地域への誇りや愛着の創出」「活動の広がり」「地域の歴史・文化・暮らしを踏まえた、まちづくりや景観づくりの方向性の共有」「地域資源の保全・活用に向けた意識醸成」「双方向のまちづくりへの展開」につながっています。それを裏付けるものとして、例えば、地域住民から姪浜の魅力を「相撲甚句」や「史跡巡りの歌」にさせていただいたり、また、古民家の再生事例や自主的に景観形成に配慮した建築物等の事例が着実に増えています（写真3）。

一方、対外的な反響ですが、全国的な賞をいくつも受賞することで、「姪浜の魅力の全国へのPR」にもつながっており、視察や研修のフィールドとして姪浜を選んでいただくことも多くなりました。今後は、「身近な魅力資源を活かしたまちづくりの他地域への波及効果」も大いに期待できると考えています。



写真3：自主的に景観に配慮した建築物も

自治体職員よ、地域に出よう！スキルを活かそう！

私はこの活動に業務として関わっているわけではありませんが、地域の皆さま方に喜んでいただき、地域から感謝状までいただけるのはこの上なく公務員冥利に尽きます。

私のような一職員が地域に飛び出すだけでも地域は大きく変わります。読者の皆さま方も仕事や家庭の事情もあると思いますが、それぞれの経験を活かして地域づくりに関

わることで地域力は大きく向上しますし、それを自分自身にフィードバックすることで公務員生活や定年後の生活にも役立つと確信しています。

今後の展望

姪浜では、まちづくりの進展の一方で、いろいろな課題も出てきていますが、課題に取り組むことがまちづくりの楽しさでもあります。

今後も『姪浜の宝を福岡市民の宝に!』を目標に、地元の人にとっては「住みやすさ・暮らしやすさ」のあるまち、訪れる人にとっては「楽しさ」のあるまちの実現を目標として、新旧の多彩な「よかところ」を姪浜の個性として活かすことができるような「まちづくり・町並み景観づくり」を地域、九州大学、福岡市等と協働で進めていきます。そして、子どもたちに誇りをもって手渡すことのできる景観づくりにつなげていきたいと考えています。

今後の活動予定

- ① 景観形成のルール化（景観条例に基づく景観協定の締結等）
- ② 歴史的な環境を活かした景観づくりの実践（町家再生事業等）
- ③ 地域づくり資源（姪浜の歴史や景観的魅力）の物語化
- ④ こだわりとおもてなしの町並みイベントの継続・充実
- ⑤ 商店街や地域コミュニティ活性化に向けた活動（空き家活用事業等）
- ⑥ 身の丈に合った観光スタイルの定着（多彩な魅力資源の活用、地域の暮らしや人との出会い）

（月刊「地方自治職員研修」2015年1月号）

地域の誇り&まちなみ育てプロジェクト ～姪浜の宝を福岡市民の宝に！～

唐津街道姪浜まちづくり協議会
事務局長 大塚政徳

宝のまち・姪浜～姪浜の歴史と魅力～

姪浜めいのはまは、福岡市西区の中心的地域です。地下鉄の終点駅なので、名前を聞かれたことがあるかもしれません。ややもすると通り過ぎてしまいそうな姪浜の町並みですが、じっくりと歩いてみると、町並みのそこそこに新旧の多彩な「よかとこ」を発見することができます。

先人たちから受け継いできたものの代表は、日本誕生の神話や神功皇后伝説、奈良時代や鎌倉時代からの歴史を持つ神社やお寺の数々、元寇防塁、小戸から生の松原にかけての白砂青松、江戸時代に栄えた唐津街道の町並み、港の風景などたくさんあります。一方、姪浜駅周辺や海沿いの現代的な商業施設や高層マンションなどは、姪浜の環境のよさや便利さが生みだした新たな風景です。

このように姪浜は新しいものと古いものが共存するまちですが、その魅力が地域住民にほとんど認識されていませんでした。また、平成 17(2005)年の福岡県西方沖地震の影響や都市化の進展による町家の減少、マンションや駐車場の増加などにより、地域固有の歴史的景観が失われつつあります。

このような状況の中で、歴史的な環境を活かしたまちづくりを進める上で今が正念場であると考え、危機感を持って立ち上がったよそ者の建築士が中心となって、平成 19 年 3 月に「唐津街道姪浜まちづくり協議会」を立ち上げました。当初は 10 名程度のメンバーでスタートしましたが、今では協力会員を含め 46 名のメンバーで「ばか者、よそ者、若者」の視点を大切にして、『姪浜の宝を福岡市民の宝に！』を目標に、姪浜ならではの多彩な魅力資源を活かした地域協働のまちづくりを精力的に推進しています。

継続的で多彩な活動内容

協議会は平成 19 年の立ち上げ以降、ステップアップしながら活動を展開しています。

◆ 1st ステージ（主に平成 19 年度～）

「地域の魅力の再認識と地域内外への発信」を目標に、まち歩きマップや瓦版の発行、まちづくり活動拠点の設置等による姪浜の見どころ・活動の情報提供や、景観歴史発掘ガイドツアー、国の登録有形文化財でのみそ蔵コンサート、歴史ある寺社での灯明コンサートなどの多彩な町並みイベントを実施しています（写真 1）。

◆ 2nd ステージ（主に平成 22 年度～）

「地域協働のまちづくり計画の策定」を目標に、住民参加のワークショップも取り入れながら「元気！姪浜計画や景観づくり計画の策定」を行っています。また、「景観まちづくりの実践と姪浜ブランドの構築」を目標に、町家再生の実践、旧町名表示板の設置、姪浜ブランドや姪浜町家の認定（写真 2）などの活動を展開し、目に見える形でまちづくりの効果を伝えています。

最近では、子どもまちなみ探検隊、子ども落書き消し隊など次の世代を担う子どもたちを対象にした景観教育にも取り組んでいます（写真3）。



写真1 みそ蔵コンサート



写真2 姪浜町家の認定



写真3 子ども落書き消し隊

◆ 3rd ステージ（平成 26 年度～）

「国の登録文化財のみそ蔵を中心とした姪浜のまちなみの個性の再構築」を目標に、「景観づくりの手引き」を発行し地域への普及活動を行うとともに（写真4）、平成 25 年末に味噌の製造場としての約 1 世紀の役割を終えて閉店した旧マイヅル味噌のみそ蔵（姪浜の歴史的・景観的シンボル）の再生・継続的活用に向けた活動を展開中です（写真5）。

このように、まちづくりの各段階に応じた多彩な活動を牽引しているのが、私をはじめとした数名の建築士です。全国どこに行っても同じような町並みの形成が進む中で、地域に埋もれている身近な魅力資源を掘り起こすことが、姪浜ならではのまちづくり・

景観づくりにつながると考えており、建築士としての専門性を存分に発揮できる場面です。「それぞれの地域の歴史や空間特性をしっかりと把握し、ここでしかできないことを形にしていく」、このこだわりが建築に携わる者としての原点であり、私たち建築士の使命だと思います。

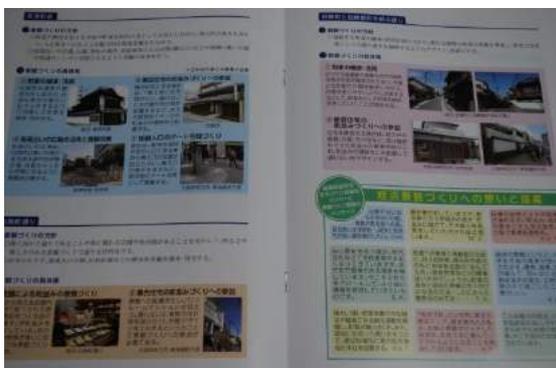


写真4 景観づくりの手引き発行



写真5 登録文化財みそ蔵特別公開

地域内外からの反応・反響

こうした活動による地域住民の反応ですが、たとえば、姪浜の魅力を相撲甚句や史跡巡りの歌にさせていただいたり、また、古民家の再生や自主的に景観形成に配慮した建築物の事例が着実に増えています（写真6）。これは、地域への誇りや愛着の創出、地域の歴史・文化・暮らしを踏まえたまちづくりや景観づくりの方向性の共有、地域資源の保全・活用に向けた意識醸成、双方向のまちづくりへの展開につながっている証だと考えています。



写真6 自主的に景観に配慮した町家

一方、対外的な反響ですが、全国的な賞をいくつも受賞することで、姪浜の魅力の全国へのPRにもつながっており、視察や研修のフィールドとして姪浜を選んでいただくことも多くなりました。今後は、身近な魅力資源を活かしたまちづくりの他地域への波及効果も大いに期待できると考えています。

私はこの活動に建築士や福岡市職員の業務として関わっているわけではありませんが、地域の皆さま方に喜んでいただき、地域から感謝状までいただけるのはこの上なく建築士や公務員冥利に尽きます。

私のような一建築士や一公務員が地域に飛び出すだけでも地域は大きく変わります。建築士として様々な形で建築に向き合っている読者の皆さま方も、それぞれの経験を活かして地域づくりに関わることで地域力は大きく向上し、それを自分自身にフィードバックすることで今後の業務や定年後の生活にも役立つと確信しています。

今後の展望

姪浜では、まちづくりの進展の一方で、いろいろな課題も出てきていますが、課題に取り組むことがまちづくりの楽しさでもあります。

今後も『姪浜の宝を福岡市民の宝に！』を目標に、地元の人にとっては「住みやすさ・暮らしやすさ」のあるまち、訪れる人にとっては「楽しさ」のあるまちの実現を目標として、新旧の多彩な「よかところ」を姪浜の個性として活かすことができるような「まちづくり・町並み景観づくり」を地域、九州大学、福岡市等と協働で進めていきます。そして、子どもたちに誇りをもって手渡すことのできる景観づくりにつなげていきたいと考えています。

姪浜流まちづくりに向けて

- ① 景観形成のルール化（景観条例に基づく景観協定の締結等）
- ② 歴史的な環境を活かした景観づくりの実践（町家再生事業等）
- ③ 地域づくり資源（姪浜の歴史や景観的魅力）の物語化
- ④ こだわりとおもてなしの町並みイベントの継続・充実
- ⑤ 商店街や地域コミュニティ活性化に向けた活動（空き家活用事業等）
- ⑥ 身の丈に合った観光スタイルの定着（多彩な魅力資源の活用、地域の暮らしや人との出会い）

大塚政徳（おおつか まさのり）

1958年福岡県生まれ。熊本大学工学部建築学科卒業。(株)鴻池組を経て、1986年福岡市役所入庁。都市景観行政に長く携わる。

（日本建築士会連合会 会誌「建築士」2015年3月号。

同会主催 第8回まちづくり賞「まちづくり優秀賞」受賞）

内陸部のまち・横手市増田と海辺のまち・福岡市姪浜 ～日本海を隔てて 1100 km離れた地域の新たな交流の芽生え～

増田の内蔵との出会い

平成 25 年 8 月 30 日、公務員の傍ら、福岡市姪浜で地域活動のリーダーをしている私は秋田県横手市増田にいました。仕事で出張した時の最後の視察地が増田でした。観光物産センター「蔵の駅」で説明を受け、中の蔵を見せていただきましたが、雪国ならではの独特の構法と重厚な造りに圧倒されました。視察はその蔵の見学と 10 分程度の町並み散策だけでしたが、もう少し居残って見てみたいと思い、視察のバスが他のメンバーを乗せ秋田駅に向かう中、私は帰りの飛行機の時間が許す限り、他の蔵を見ることにしました。



増田の内蔵

増田は江戸末期～昭和初期に、宮城県と秋田県を結ぶ交通の要所として発展し、葉タバコや蚕糸の生産などで商人文化が栄えました。特に明治時代になると、銀行事業や電力事業などの成功により商業活動が加速度的に活発化しました。当時の商人たちが、成功の証しとして主屋の奥に蔵を造ったのが、「内蔵」の始まりとされています。内蔵は、蔵を豪雪から守るため、全体を「鞘」と呼ばれる上屋建物ですっぽり覆った土蔵ですが、増田の内蔵は主屋の奥に建っており、道路からは見えず、ひっそりと佇んでいるのが特徴です。

また、内蔵が造られるようになった背景として、増田で数回の大火があったそうですが、その後は幸いなことに大火がないことも、多くの内蔵が残っている要因として挙げられます。

増田の町並みと内蔵見学

あいにくの小雨の降る天気の中、歴史的な町並みを 1 時間ほどかけてゆっくり散策しました。町割りは間口が 5～7 間（9～12.6m）、奥行きが 50～100 間（90～180m）と極端な短冊型となっており、その上に町家建築が建ち並び、伝統的な町並みが形成されています。道路側からは、2 階の正面に梁首（はりくび）と呼ばれる梁組を見せてい

るのが特徴で、職人技術の粋（すい）を垣間見ることができます。明治前期から戦前にかけて建てられた短冊型の主屋が軒を連ねる景観は、当時の情緒を現在に留めており、主屋・内蔵・外蔵を「トオリ」と呼ばれる土間で結ぶ商家町家の特徴は、この地方独特のものとなっています。平成 25 年内に国の重要伝統的建造物群保存地区の選定が予定されているとのことですが、今後の町並み整備が大いに期待されます。



その後、公開している 5 軒の蔵を見せていただきました。どの蔵も、外観からはその存在が想像もできないほど、立派なものでした。まさに「内蔵」そのものです。そのうちの 3 軒を紹介します。

最初の蔵は、明治 11 年（1878 年）に建築された 100 m²以上もある内蔵で、大きな梁とそれを受けるヒバの通し柱が重厚感を演出しています。また、左右対称の幅広の床の間や通風を考えた市松模様の障子が印象的でした。柱と柱の間の壁は、漆喰仕上げですが、石のように磨かれており、左官職人の技術の高さに感嘆せざるを得ませんでした。



2 軒目の蔵は、通りの延焼を防ぐために建物全体が蔵造りの建物となっています。1

階の蔵は、明治元年（1868年）に建てられたもので150㎡以上もあり、現在も生活空間として使われています。また、2階は全体が座敷となっており、防火の願いを込め施された火止唐草の鰻絵が見事です。



3軒目の蔵は、昭和初期に建てられたもので、輝きを放つ黒漆喰の土扉の蛇腹も5段と数も多く、立派な構えを見せています。また、扉を飾る鞘と左官技術は芸術の域に達しており、見事のひとことに尽きます。まだ工作機械がない時代に腕一本で造り上げた大工・左官職人の卓越した技量を堪能できる蔵です。



福岡市・姪浜の蔵と町並み

一方、私が暮らし、まちづくり活動を実践している福岡市の姪浜にも、時代時代の状況に応じて様々な使い方をされてきた蔵があります。築180年以上になる江戸時代後期の建物で、戦前までは酒蔵、戦時中は飛行機の部品工場、戦後は味噌の製造・販売、現在はパンの製造・販売及びまちの案内所（地域のまちづくり活動の拠点）として使われ、今でもオーナーが住み続けておられます。また、時にはコンサートや講演会、展示

会等のイベント会場になるなど、地域のシンボリック空間となっています。増田の内蔵とは造られた背景、歴史、構造はかなり異なりますが、「蔵」の持つ不思議な縁を感じました。



さて、ここで、姪浜について少し紹介させていただきます。

姪浜は、古代より大陸からの歴史と文化が息づき、歴史的環境が形成されたまちで、「宿場町」「漁師町」「廻船町」「寺町」の多様な性格を有しています。何も意識しないといつの間にか通り過ぎてしまいそうな地域ですが、じっくりと歩いてみると、日本誕生の神話や神功皇后伝説、奈良時代や鎌倉時代からの歴史を持つ神社やお寺の数々、元寇防塁、小戸から生の松原にかけての白砂青松、江戸時代に栄えた唐津街道の町並み、港の風景などたくさんの「よかところ」を発見することができます。一方、都市化の進展や2005年の福岡県西方沖地震の影響、商店や家の後継者不足等により伝統的な町家が次第に減少し、地域固有の歴史的景観が失われつつあるのが現状です。

このような状況の中で、私たちは『姪浜の宝を福岡市民の宝に!』を目標に、地元の人たちにとっては「住みやすさ・暮らしやすさ」のあるまち、訪れる人たちにとっては「楽しさ」のあるまちの実現を目標として、多様な「よかところ」を姪浜の個性として活かすことができるような「まちづくり・町並み景観づくり」を地域協働で進めています。

そうなんです。私が増田に居残ったのは、何を隠そう、地域づくりや景観づくりの参考にするためだったのです。

各家のオーナーとの出会い（増田から学ぶこと）

話を増田に戻しましょう。

私は、どの家も、高齢のオーナーの皆さんが地域や我が家への誇りと愛着を持って説明されている姿に深い感銘を受けました。プライベートな空間はなかなか一般には公開しにくいものですが、それだけ自分の住まい、そして増田の蔵に誇りを持っているのだと思います。それぞれは小さな取り組みですが、これが町ぐるみになることで地域のイベントとしてしっかり定着し、地域の活性化に寄与しているのだと思います。

そして何よりも、案内される皆さんが生き生きとしているではありませんか。まちづくりには「よそ者、ばか者、若者」が必要といわれますが、若い人だけで行うものでもありません。日本全体が超高齢社会に入っている現在では、高齢者が地域に出て、生き生きと生活していくことが極めて重要です。内蔵のまち・増田は自らの蔵を公開することで、皆さんが生き生きと暮らし、来訪者をおもてなしされています。「観光」「地域の活性化」「生き甲斐」「高齢者の社会参加」等々、増田には町並みや内蔵だけでなく、これからの日本の社会の手本となる宝がいっぱいあります。



また、全国の町並み保存地区が後継者不足に悩まされているように、増田にも同じ課題があります。オーナーの皆さんに話を聞くと、多くの方は東京で仕事をし、定年を機会に故郷に帰り、家を守っているという状況のようです。「子どもたちが定年になって増田に帰ってくる。その間は自分たちがこの家を守る。」というような繰り返しで町並みやコミュニティが維持・継承されていくという考え方は、超高齢社会では十分に考えられることです。町並み保存に限らず、定年後に地域づくりに関わっていく姿勢はぜひ見習いたいと思います。

そして、最後のお礼の挨拶の際に、私が福岡市の姪浜から来たことを伝えると、皆さん「こんな田舎まで本当によく来てくださいましたね。感激いたします。」と大変恐縮されていました。九州から秋田に来て、武家屋敷や枝垂れ桜で知られる角館には寄っても横手、そしてさらにその奥の増田にまで町並みや内蔵を見に来る人は少ないと思います。

しかし、私は初めて増田に来て、伝統的な町並み、芸術的な内蔵の数々、生き生きと暮らす高齢者の皆さま方から多くのヒントを得ました。また、「観光客が大挙して押し寄せ、お土産を買って帰る」というような観光スタイルではなく、「頑張っている面白い地域を訪れ、そこで暮らしている方々から多くのことを学ぶ」「その地域でしか食べられない物を食べる」「その地域でしか手に入らないものを買って帰る」というような観光スタイルこそが姪浜でも目指しているものであり、とても参考になりました。こうした地に足のついた取り組みこそが、長期的な地域づくりにつながっていくのだと確信しました。

北前船で関係する増田と姪浜

ある蔵で説明を受けている中で、増田は北前船とも関わりがあることを知りました。なぜ、内陸部の増田が北前船と関係あるのか、詳しく話を聞いてみました。

昔、北前船が秋田の港に寄港し様々な物資を降ろしました。増田は雄物川支流の成瀬川と皆瀬川の合流に位置し、秋田の港に着いた物資は、これらの川を使って増田にも運ばれたそうです。当時は食品保存が未熟なため、新鮮な魚は横手のような内陸部には流通が困難でした。しかも秋田は冬が長いので、食品を加工し保存食として冬を越しました。そこで当時の人々は保存食をより美味しく、来客にもてなしたいという思いから、昆布に代表される保存食の加工技術に磨きがかかったということです。

姪浜も江戸時代には廻船業で栄え、五ヶ浦廻船や北前船とも関わりがあります。製塩業や漁業で栄え、藩米を廻送する千石船で賑わったほか、全盛期には江戸、大阪はもちろん東北、北海道にまで船足を伸ばし、江戸幕府や他藩の米、民間の材木、海産物の物流をも担いました。海辺のまち・姪浜と内陸部のまち・増田は 1100 kmも離れており、一見関わりがないように見えますが、「姪浜の塩や海産物が増田で消費されていたかもしれない」「増田の昆布を姪浜の人も食べていたかもしれない」など、何らかの交流があったことを想像すると、とてもわくわくしてきます。

今後の交流に向けて（増田の皆さんへのメッセージ）

急遽決断した4時間足らずの増田滞在でしたが、とても有意義な時間でした。「蔵」や「北前船」が取り持つ縁、これは決して偶然ではないと思います。私を増田に引き寄せたもの、それは「増田にはこれからの日本の社会、そして姪浜の地域づくりを考えるヒントがたくさんある」ということを私に伝えたかったのではないのでしょうか。こうし

た縁を大切にし、日本海を隔てて遠く 1100 km も離れた増田と姪浜で「地域づくり」や「町並み」「観光」をテーマに新たな交流が生まれればいいなと感じています。

最後になりますが、丁寧に説明していただいた増田の皆さん、本当にありがとうございました。福岡市の姪浜から厚くお礼申し上げます。これを機会に「日本海を隔てた広域交流」を始めましょう。

(2013 年 第 9 回 JTB 交流文化賞応募作品)

熊本地震と私 ～オオクワガタから始まった旅は復興へと向かう旅へ～

熊本地震と虫の知らせ

私にとって、平成 28 年 4 月 14 日と 16 日の熊本地震は大きな衝撃だった。私は、平成 12 年の夏から毎年のように訪問している南阿蘇のペンション「ふらいんぐジープ」に、5 月 3 日の宿泊の予約を入れていた。しかし、用件が入り、4 月 14 日の午後 9 時過ぎにキャンセルの電話を入れた。これが虫の知らせだったのだろうか、熊本で震度 7 の大地震（前震）が発生したのは、その約 20 分後である。私が住む福岡市西区でも震度 3 の揺れを観測した。

また、16 日未明に震度 7 の本震が発生し、甚大な被害をもたらした。震度 7 の大地震が短期間に連続して起こることは、我々の想定を超えるものである。翌日のテレビでは、阿蘇大橋が崩落したり、熊本城や阿蘇神社が大きな被害を受けた映像が流される。信じられない光景であった。

私の頭をよぎったのは、ふらいんぐジープやご家族は大丈夫なのかということであった。電話をしたが、つながらなかった。すぐ近くにある住宅団地や別荘地は、地震による土砂災害で大きな被害を受けており、不安が広がった。無事であることを、ただひたすら祈るばかりであった。



熊本地震で大きな被害を受けた熊本城

実は、私は家内といっしょに、熊本地震の少し前の 3 月 20 日～21 日と 4 月 2 日に、熊本に旅行に出かけた。3 月は山鹿の八千代座、さくら湯などに寄った後、阿蘇大橋を渡り、ふらいんぐジープに泊まった。翌日は、阿蘇神社や落ちない巨石で有名なパワースポット「免の石」などを見学した。4 月は熊本城の桜や南阿蘇の一心行の桜などを巡る日帰りのバスツアーで、ここでも阿蘇大橋を渡った。2 回の熊本旅行で阿蘇大橋を合わせて 4 回渡ったことになる。

しかし、阿蘇大橋を渡る時に、私には少し不安がよぎっていた。阿蘇大橋の西側にある山が、野焼きの関係かどうか分からないが、はげ山のようになっており、「土砂崩れが起きたら怖い。」と感じていた。熊本地震でこれが的中し、現実のものとなってしまった。今思えば、これが最初の虫の知らせだったのかもしれない。

また、熊本城、阿蘇神社、免の石など訪問した先々の場所が大きな被害を受け、様変わりしてしまった。大学時代を熊本で過ごした私のショックは計り知れない。そして、建築物の耐震化の仕事にも従事している私にとっては、『大学時代にお世話になった熊本への恩返しをしよう。建築物の耐震化は重要な仕事である。』と私に伝えているようであった。



熊本地震で大きな被害を受けた阿蘇神社

オオクワガタが取り持つペンションとの縁

さて、ふらいんぐジープの話に戻ろう。私がここを最初に訪問したのは、平成12年の夏である。家内の友人の紹介によるものであり、ふらいんぐジープが実施していたカブトムシツアーに憧れて訪れたものである。当時5歳の長男が昆虫好きで、喜んでくれると思ったからである。

夕食後の午後8時半頃に出発し、クヌギの木や町役場の明かりに集まってくるカブトムシやクワガタを捕まえた。長男や他の子どもたちが喜んだのは言うまでもない。私も童心に返り、久しぶりのカブトムシツアーを楽しんだ。ペンションに戻ってからは、捕まえたカブトムシやクワガタを選ぶドラフト会議である。オーナーの進行で楽しく進んでいく。子どもたちの歓声がペンション内に響き渡った。

そして、ふらいんぐジープとのつながりを深くしたのは、帰り際にお土産としていただいた菌糸ビンに入ったオオクワガタの幼虫である。翌年の6月にメスの成虫として羽化した。ちょうど同じ時期に、私の住むマンションの知り合いから羽化したばかりのオスの成虫をいただき、ペアとして飼うことになる。

羽化したばかりのオオクワガタも人間で言えばまだ子どもであり、最初の交尾・産卵は翌年の夏であった。予め埋め込んだクヌギの朽ち木から、卵から孵化したばかりの幼虫を取り出した。15匹ほどいただろうか。これを1匹ずつ菌糸ビンに入れて育てる。そして、平成15年の夏に成虫として羽化した。ふらいんぐジープのオーナーから幼虫をもらって3年が経っていた。



羽化したばかりのオオクワガタ（上がメス、下がオス）

それ以来、世代交代を繰り返しながら多くのオオクワガタを育ててきた。平成26年に飼育をやめるまで200匹近くを羽化させた。ふらいんぐジープには毎年のように訪問していたが、カブトムシの季節である夏に行けない年が3回ほどあった。その時は、ペンションに毎年4～5ペアを送り、宿泊の子どもたちへのプレゼントとして使っていた。大変喜んでいただいたそうだ。たった1匹のオオクワガタの幼虫は、多くの成虫を生み出し、子どもたちの喜びにつながり、ペンションとの絆も深めていった。

ペンション再開とオーナーとの再会

地震後の話に戻ろう。熊本地震発生から40日ほど経った5月27日にペンションのホームページが更新されていた。そこには、ご家族は無事で、7月9日からペンションを再開されるという嬉しいメッセージが掲載されていた。私も安心して、ペンションに電話し、無事であったこと、そしてペンションが再開されることを喜び合った。

それから、私が長男を連れてペンションを訪れたのは、地震から4ヶ月ほど経過した8月15日である。私は建築関係の仕事に従事、長男も建築や都市計画を学ぶ学生であり、ペンションに来る途中、益城町や南阿蘇村の被災現場も見てきた。多くの家屋が倒壊するなど想像以上の被害状況である。道路も至る所で閉鎖されており、なかなかペンションに辿り着かない。よく通り慣れた道に出たと思ったら、そこは何と阿蘇大橋の崩

落現場ではないか。すさまじい光景であった。3月と4月に阿蘇大橋を渡る時に、悪い予感がしていた場所である。迂回してようやくペンションに到着し、ご家族との再会とペンションの再開を喜び合う。本当に無事でよかった。



阿蘇大橋の崩落現場

その日の夕食時や夜のケーキタイム時に、オーナーやご家族の地震での苦労話をお聴きし、考えさせられるものがあった。ご家族は地震後、2週間ほど高千穂に避難し、ペンションに戻ってから車中泊を経験したという。電気も水道も来ない中、一時はペンション経営をやめようかと思った時期もあったらしいが、地震後に今までペンションを訪問した方など約300人から心配と激励のメッセージをいただき、それがペンション再開への後押しになったという。中には、大牟田から毎日、ボランティアとして家の片付けなどの手伝いに来てくれた方もいたそうだ。これもオーナーやご家族の人柄に惹かれてのことであろう。

ふらいんぐジープでは、家具などが倒れたりする被害はあったが、幸いなことに建物の被害は少なかったとのことである。周辺では多くの建物が倒壊したり、土砂災害の被害を受けている中、本当に不幸中の幸いではなかったのだろうか。同じペンション村にあるペンションも比較的被害は少なかったようであるが、電気や水の問題、道路の閉鎖、オーナーの高齢化などもあり、ペンション経営を諦めたところもあると聞いた。

そんな中、約3ヶ月振りの再開である。周りがまだ宿泊客を受け入れる体制が整っていない中での勇気ある決断だったと思う。「夜の明けない朝はない。今できることをしたらいい。」というオーナーの前向きな気持ちがそうさせたのであろう。このペンション村には15軒のペンションがあるが、ふらいんぐジープが最初に再開。その後、少しずつ再開するところが出てきているとのことである。オーナーの思いが次第に周辺に広がりつつある。



ペンション「ふらいんぐジープ」のオーナーとの会話

また、オーナーとの会話で得たものがある。オーナーは、「この30年間、ずっと働き続けてきた。今回の3ヶ月間の休みを充電期間として捉え、立ち止まって考えてみた。今までを振り返るいい機会であった。」「自分は現在58歳であり、いつまでペンション経営を続けられるかわからないが、皆さんの思いを受けてできるだけ長く続けていきたい。」と話していた。熊本地震を乗り越えての大変前向きな考え方である。

ペンション開設30周年となる今年の秋には、外壁の塗り替えや屋根の葺き替えなどのリフォームを考えているという。「大地震というピンチ」を「今後のことを考えるチャンス」と捉え、常に前を向いて取り組んでいくことを応援したい。そして、私は「オオクワガタから始まる縁」を「熊本地震からの復興へと向かう縁」に変えて、今まで以上にオーナーやご家族との交流を深めていきたいと思う。

復興へと向かう旅

ふらいんぐジープのオーナーは、「被害を受けている今の熊本の状況をしっかり目に焼き付けておいてほしい。」とも話していた。宿泊した翌日は、被害の大きかった阿蘇神社にも行ってみた。建物は大きく倒れたままである。5ヶ月前とは違う光景が広がっていた。胸が痛む。

私は熊本地震後、大学時代の思い出の多い熊本のことを気にかかり、積極的に熊本に出かけている。6月には熊本城、7月には三角西港、8月上旬には天草を訪問。そして、今回は益城町や南阿蘇村、阿蘇市などを訪問した。その中でも、熊本城、阿蘇神社、阿蘇大橋の被害は痛ましい。主要な観光地を結ぶ道路も閉鎖されている。観光客も激減している。

しかし、これを現実と受け止め、未来に向けて、今こそ観光や交流のあり方を考えてみたらどうだろうか。これから長い時間をかけて熊本が復興されていく中で、その過程を見に訪問することも素晴らしい交流ではないだろうか。熊本城の復興には20年かか

ると言われている。これを見届けようではないか。私は現在 58 歳であり、熊本城が復興される頃には 80 歳近くになっている。今後は、熊本城の復興を見届けることを目標に生きていきたいと思う。阿蘇神社の再建にも長い時間を要すると思われるが、その過程も見届けたい。



熊本地震前の熊本城（上）と阿蘇神社（下）

折しも 8 月上旬に、熊本地震前に制作された映画「うつくしいひと」の上映会が福岡市内であった。熊本城、夏目漱石旧居、江津湖、菊池溪谷、草千里、通潤橋といった熊本の名所の地震前の姿が映し出された。こうした名所が、また元の姿に戻るよう願ってやまない。そして、復興の過程を定期的に見に行くことを今後の楽しみにしていきたい。

また、建築や耐震の仕事に加え、精力的に地域のまちづくり活動を推進してきた私にも、熊本の復興に何か役立てることがあるかもしれない。定年を前にして、新たな生きがいと楽しみが増えたような気がする。ふらいんぐジープのオーナーと同じように、私も前向きに考えることにした。

「南阿蘇のペンション」「オオクワガタ」「熊本地震」というキーワードは、一見すると全くつながらない。しかし、私の中では切っても切れない縁として一貫してつながっている。そして、それは「熊本地震からの復興と観光交流」というテーマにつながっていくことになるのであろう。今後も大地震から復興していく熊本の姿と、南阿蘇のペンション「ふらいんぐジープ」との交流を楽しみに、確実に熊本に出かける機会が増えそうである。私の復興へと向かう旅も始まる。

(2016年 第12回 JTB 交流文化賞応募作品)